
続こんぺいとう

大平麻由理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続こんぺいとう

【Nコード】

N0342D

【作者名】

大平麻由理

【あらすじ】

大学生になつた幼馴染の柊と遥は念願叶って一緒に暮らし始めるが、親の無慈悲な突撃訪問で全てがばれてしまう。老舗の跡取り息子と田舎の一人娘の未来は前途多難の様相。思いも寄らない遥のモデルデビューに浮気騒動。拳句二人の心は離れ離れになってしまう。おまけに遥の天敵ともいふべき恋のライバル大河内大輔の再登場に、柊の心は大きく揺れて……。物語はいよいよクライマックスへ。現在、大幅改稿中につき、後半部分も順次更新予定です。

1・ロラン（前書き）

【初めてお越しいただいた読者様へ】

続こんぺいとうにお越しいただきありがとうございます。

こちらは、続編になります。柊と遥の青春の始まり、こんぺいと
う本編よりお読み下さい。

続こんぺいとう目次の下方に、こんぺいとうへのリンクがあります。
す。

【以前からお読みいただいている読者様へ】

ただいま、全話改稿中です。

大筋では変更はありませんが、サブタイトル及び内容の区切り等、
各所に変更箇所があります。

小さなエピソードが新たに加わった箇所もあります。

終盤に新エピソードが加わる予定です。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

ただいまの本文の文字サイズは小に設定されています。

右上にあります、大、中、小で、文字のサイズを変えることが
出来ます。

お好みのサイズでお読み下さい。

1・ロラン

今日の夕方五時に提出締め切りが迫っている近代日本文学史のレポートは、結局最後まで書けなかった。

明治時代の文豪の名が中途半端な位置で途切れたまま、レポート用紙のまん中あたりに鎮座している。

そもそもタベ、テレビをつけたのがいけなかったのだ。

高校時代にわざわざ映画館に足を運んで観たものなのに、解説者の力説に誘われるように、ずるずるとそのまま画面に釘付けになってしまった。

そしていつの間にも眠ってしまったのだろうか。気付いたら朝。

ほんのちよっぴりうたた寝しただけだと思っていたのに、何時間も経っている。

こぼれんばかりの朝日が淡いクリーム色の小花模様のカーテンを通過して、無情にもこたつに突っ伏しているわたしの背中に、極上のカシミアのストールのごとく柔らかくふんわりと降り注いでいた。

年中出しっぱなしの勉強机代わりのこたつは、四月だというのに、まだ正方形の布団をまとったままだった。

身を傾けて洗面所の鏡を覗き込む。

どうしようもないほどぼさぼさの髪を手櫛でなでつけるように整え、マスカラひと塗りと無色透明のグロスでメイクは完了。

生成りのチノパンツとグリーンのTシャツ、あとは白いパーカーを羽織っただけというありきたりの格好で、アパートを出た。

電車を降りて駅から大学までは、歩けば二十分。

バスに乗ればもっと早くキャンパスに着く。

だが、常時資金不足のわたしには、バスは縁のない乗り物だった。

親に住んでいるアパートの家賃と学費を払ってもらっている上に、生活費の仕送りまで頼むのは無謀と言っもの。

家庭教師とファストフードの店員のアルバイトで、食費その他もろもろをなんとか捻出している。

もちろん光熱費もそこから支払わなければならない。

いつもぎりぎりの生活を強いられているというわけだ。

けれどそんな日々の中で、ひとつだけ自分に許していることがある。

それは駅から大学までの道の途中にひっそりと店を構えている喫茶店ロランで、ゆっくり紅茶を飲むことだ。

サーバーごと運ばれてくるので、たっぷり二杯は飲める。

しかし、しかしだ。

紅茶だけで五百円という価格は、はっきり言って、大学生のわたしには身の程知らずなのかもしれない。

おまけに今風のカフェに比べるとレトロな感じで、ランチメニューも少なく、サンドイッチとピラフくらいしか選べないのも正直不便だったりする。

そのせいか学生の客はほとんど見かけることはなく、いつも店内は静かで落ち着いている。

本を読む人、何かをノートに書きとめる人、ただただ、携帯を操作している人……。

ゆっくりとした時が流れるこの隠れ家を、最近とても気に入っているのだ。

月曜の午前中と木曜の昼過ぎは、誰にも邪魔されず、ひとりで紅茶を飲みながら過ごすびがささやかな幸せタイムになりつつある。

今日はレポートを仕上げるためにロランの重い木の扉を開けた。

ちよつと奥まったところにあるお気に入りの席は、わたしが今日来るのを待ち構えていてくれたかのように、温かく迎えてくれる。

複雑な織り模様のレースのカフェカーテンが掛かっている出窓から、時折見える学生の姿を目で追いながら、注文した紅茶が来るのを待った。

大学生活も二年目になる。

でもまだ、キャンパスライフというものには慣れないままだ。

つい先日、今年度の新入生に馴れ馴れしく声をかけられたことがあった。

一年だと勘違いされたのだ。

おまけに同じ高校からこの大学に進学した人は少ないのもあって、大学内での知り合いは片手の指で足りるくらいしかない。

バイトに精を出すあまり、結局サークルにも所属しそびれたわたしは、いつまでたってもよそ者のまんまだ。

でも、昔から連れ立ってトイレに行くような、女子高生らしいふるまいが苦手だったのもあって、こんなおひとりさまも、別段苦痛ではない。

かえって気楽に感じるのは、この際非常にありがたい。

五分ほどすると注文したアッサムティーが砂時計と共にテーブルに運ばれてきた。

「お待ちせいたしました。砂時計が終了しましたらレバーを引き上げて下さい」

急須のようなぷっくりとした形の透明なガラス製のサーバーとカップが、テーブルの上に並べられる。

かわいらしい砂時計も一緒だ。

最後の砂粒が落ちるのを見届けて、茶葉の入った容器がくつついたサーバーを引き上げ、横に倒す。

何ともいえない深い色をしたアッサムティーを、英国製のティーカップの中に注ぐと、ゆらゆらと小さな波を立て、やがてそのまま静まっていた。

このティーカップは見覚えがある。

実家の隣に住んでいる綾子おばさんのお気に入りのカップと同じシリーズの物だ。

おばさんの誕生日のたびに旦那さんである俊介おじさんが、一客ずつプレゼントしていたものと同じ柄だった。

おばさんの家のカップボードには、ティーポットやミルクピッチャー、シュガーポットも、すべて同じシリーズで並んでいた。

わたしが東京に出てくる直前に、一度だけこのカップで紅茶を淹れてくれたことがある。

ようやくわたしも大人として認められたのかなと嬉しくなったあの時を、ふと思い出した。

ついさつき書き始めたばかりのレポートのペンを置き、しばらくカ
ップの中に見入っていた。

パソコンで打ち込んでプリントアウトしたレポートが奨励されるよ
うになったこの頃だが、わたしはまだ自分専用のパソコンを持って
いない。

実家には父が使っていた古い形があるにはあるけど、反応速度が
遅く、おまけによくフリーズするのでそのままにしてある。

だからと言って、新たにノートパソコンを買うゆとりはどこにもな
いわけで。

バイト代を少しずつ積み立てているけど、そう簡単に貯^たまるもの
もない。

冬休みに自動車の運転免許を取るためにすべて使ってしまったのだ。

大学内のパソコンも、いつも大勢の学生が順番待ちで、思うように
ならない。

このまま自分、手書きのレポートで我慢しなければならぬだろう。

大学の中で唯一の親友であり、そして恋人でもある遙は、自分のパ
ソコンと一緒に使えばいいと言ってくれる。

しかし同じ大学に通っているとはいえ、学部が違う彼とはキャンパ
スが離れているため、住んでいるところも微妙に距離があるのだ。

わたしの住んでるアパートから遥のマンションまでは、電車と徒歩で三十分くらいかかる。

その度ごとに遥のところに通うのも手間なので、彼の親切心には感謝しながらも、結局いつも手書きのままレポートを仕上げている状況は変わらない。

ところが……だ。二年に進級したばかりのつい先日、遥がとんでもないことを言い出したのだ。

二人で一緒に住もう、と。

そんなことができるのなら、とっくの昔にやっている。

一緒に住むということがどういふことなのか、彼は本当にわかっているのだろうか。

「俺と一緒に住めば、おまえのアパートの家賃が浮いてバイトも減らせるだろ？ それに食費も節約できるし、一石二鳥だと思うけどな」

涼しい顔をして、こんな風に言っただけの遥は、やっぱり何も分かっていないんじゃないかと思う。

遥の言い分がわからない訳ではない。

彼も登録制の派遣アルバイトをしているので、二人分の収入を合わせれば生活資金はまとまった金額になるし、節約につながるとい

理屈は間違っではない。

「もしかしておまえ……。親に遠慮してるのか？ だとしたら気にするな。今更あいつら、もう何も言わないよ。このまえ、おまえのお袋さんがこつちに来てたとき、俺に向かって何て言ったと思う？ ひとり娘に見知らぬ街で一人暮らしをさせて、急に上京してみれば、部屋に男の気配……」

わざとおどろおどろしい声を出して、わたしに同調させようという魂胆が見え見えの手法だったが。

「……なんてことにならないよう、はる君、お願いだから、柎のことよろしく頼むわね、って言われたんだぞ。それって、暗に俺たちに同棲を勧めてるようにも聞こえたんだけど。な、そうだろ？」

などと平気な顔をしてのたまうのだ。

確かにうちの親は遙のことを誰よりも信頼している。

実の娘より親戚の息子の方が大事なの？ とグレたくなるくらいに。

問題はうちの両親ではなく、遙の両親の方にある。

おじさんもおばさんも、わたしが小さい頃から自分の子供と分け隔てなく、目いっぱいかわいがってくれた。

つまり身内としては最大限の情を示してくれるのだけれど、遙の将来の伴侶としては対象外なのは明らかだ。

おばさんは今でも遙を実家の和菓子屋の跡取りにすることをあきら

めていない。

わたしが彼の元に嫁ぐということは、すなわち、和菓子屋の女将になるということでもある。

そうなるとわたしは実家の蔵城を捨てなければならない。

代々続いてきた蔵城家が、ついに途絶えてしまうことになる。

おばあちゃんが苦慮していることが現実のものになってしまつのだ。

そして家のことより何より、両親を村に残したままずっと東京暮らしをするなんて、わたしには到底絶えられない。

今だって時々ホームシックに罹るし、電話で父さんのカラ元気な声を聞くと、胸が締め付けられそうに苦しくなるのだから。

大学の合格が決まつて、アパート探しをしている時にとどめを刺されたこともあつた。

母さんと綾子おばさんと遥とわたしの四人で上京した時だった。

綾子おばさんは、何もアパートなんか探さなくたつて、二人ともうちの実家に居候すればいいのよ、と実家暮らしをしきりに勧められた。

部屋はたくさん余つてるし食事の心配もいらない。

何よりもわたしが女の子だから、一人暮らしは良くないの一本やり

だった。

おばさんは、なかなかわたしたちの一人暮らしを認めてくれなかった。

今になって思えば、わたしたちが一人暮らしをすると、二人に良からぬ関係が芽生えるのでは……とすでに疑われていたのだろう。

そうなっってからでは手遅れだ。

おばさんは口にこそ出さないけれど、薄々わたしたちのよからぬ未来を予感していたんだと思う。

遥は。あれだけ頭の回転が良くて何事にもぬかりなく対応しているように見えるのに、時として恐ろしいまでに大胆になる。

母親たちが居る時でも、ふとした拍子にわたしの肩を抱いたり、手をつないだりするのだ。

遥がわたしのそばに近寄って、耳元で内緒話のように話したのを綾子おばさんに目撃された時、あらあらいつまでたっても仲よしだわね、なんて言いながらも、その目は笑ってなかったのを知っている。

綾子おばさんがそこまで言うてくれるのなら、実家の居候話に甘えさせてもらおうかなと心が動き始めた時、遥がすかさずその案に猛反対した。

綾子おばさんの実家になんか住もうものなら、何もかも監視され、学生生活に制約がかかるし、結局そのまま店にかかわっていくこと

になる、という理由だった。

今になれば、あの時遙が反対してくれて良かったと、心からそう思う。

一人暮らしも慣れれば、そんなに怖い物でもないし、何より誰にも干渉されず、自由気ままにやっていけるのがこんなに心地いいなんて、それまでは知る由もなかったのだから。

それと……。

誰の目をはばかりことなく遙とお互いの部屋を行き来できるのは、最高の副産物だったと言えるだろう。

この一年間で、少しは恋人同士らしくなったのかもかもしれない。

2・返事いただけるまで、帰れませんから

レポート用紙と本やコピーした資料をテーブルの脇に寄せる。

そして、カップを手に取り顔に近付け、すうつと香りを吸い込んだ。なんていい香りなんだろう。幸福感に満たされ、思わず目を閉じてしまった。

ひと口、そしてまたひと口。ゆっくりと口に含む。

家に常備してあるティーパックではこの色合いと香りが出ない。かと言って、紅茶専門店が高価な茶葉を買う勇気もなく。

プロの淹れてくれる紅茶ならではの味わいを、ゆっくりと楽しむ至極の空間を楽しむひと時。

えもいわれぬ充足感に満たされ、はあーっと感嘆のため息を漏らした時だった。

わたしのテーブルの後方で、店のドアベルがチリンチリンと透明感のある音を鳴らし、続いて店員のいらっしやいませという声が辺りに控えめに響いた。

誰かが入って来たようだ。客の近づく気配を背中に感じながら、手に持ったカップをそっとソーサーに戻した。

その人は、わたしの横をすっと通り過ぎると、右斜め前にある席に素早く腰を降ろした。

あたりにはどこかなつかしいような柑橘系のフレグランスが漂い、
今飲んだばかりのアッサムと香りのハーモニーを奏でる。

こちらに背をむけるように座ったその人に、なぜか次第に目を奪わ
れていった。

背丈はちょうど遙と同じくらいだろうか？

彼も最近になってようやく伸びるのが止まったようだが、百八十セ
ンチはとうに越えている。

昔約束した町内見せびらかしデートは結局実現しないままだが、電
球の取替えや、戸棚の奥の物を取ってもらった時に、よく世話になっ
ている。

俺はおまえの脚立代わりか！ というのが彼の昨今の口癖だったり
する。

斜め前のその人はグレーのニット帽を深めにかぶり、通路に組んだ
長い足を投げ出している。

残念ながら顔は全く見えない。

ジーンズに黒っぽいブルゾンを着ている、ただそれだけの格好なの
だけれど、妙に身に馴染んでいて、ファッションに疎いわたしの眼
にも、それは周りのほかの客と一線を記しているのがはっきりとわ
かった。

おっといけない。わたしとしたことが、何を見ているのだろう。

遥という決まった人がいるにもかかわらず、別の人に目を奪われるだなんて。

ニット帽の人からあわてて目を逸らし、再びカップを手に取る。

少し冷めてしまったアッサムティーを、マナー違反覚悟でいっきに飲み干した。

携帯を取り出し、いそいそとメールを打ち始める。送信先はもちろん遥だ。

今何してる？

今日は休講だつて言ってたよね？

ねえ、聞いて聞いて！

今、遥によく似た人を見つけたの。

顔はよくわかんないけど、後ろ姿、遥にそっくりなんだよ。

でもね、遥との違いはファッションセンス抜群なこと。

めっちゃかっこいいんだから！

その人が着てる服、遥にもきつと似合うと思うよ。

今度一緒に買いに行こうね。

顔文字や絵文字は彼が嫌がるので極力使わない。

文面をシンプルに整えるとそのまま送信ボタンを押した。

大学に入ってから、いやいやながらも携帯を持ってくれた遙に、こ
うやって頻繁にメールをするのだけど、即返事が返ってきたためし
がない。

今回も期待はしていなかったけど、どうしても斜め前の人物につい
て、彼に知らせたい心境にかられたのだ。

程なくしてそのニット帽の人がジーンズのポケットに手を入れ、何
かを取り出すのが見えた。

携帯だ。

濃いブルーメタリックのそれは、あろうことが、遥のと同じ機種の
物。

なんとという偶然。そこまで一緒だなんて！ 見かけが似ていると、
趣味嗜好まで似てしまうのだろうか……と思ったその瞬間だった。

深くかぶったニット帽からちらりとのぞいた横顔が目飛び込んで
きた。

う、うそ……。

は、る、か？ 遥なの？

大声で叫びそうになるのをどうにか抑えて立ち上がり、斜め前方の、遙らしき人物の座席に向おうとしたのだが……。

「堂野さんお待ちせ！ 階英出版の牧田さんも連れてきました！」

これぞまさしく業界風とでもいうのだろうか。

ジーンズに黄色っぽいブレザー風のジャケットを着た黒ぶちメガネの三十代くらいの男性と、牧田さんと紹介されていた二十代後半くらいのまさしくキャリアウーマンとおぼしき二人が、瞬く間に遙の向かいに座ったのだ。

意外にもタバコを吸わないのか、黒ぶちメガネのその人は、目の前の灰皿をひよいと一本指で脇に寄せる。

注文を取りに来た店員にコーヒー三つと言いながら、指を三歳の形にして何度も念を押す。

三つ、三つねと。

見かけと異なるかわいらしいしぐさに、思わず目が点になった。

それにしても。

どうして遙がここにいるの？

今まで目にしたことのない服装で、大人二人を前に対等に渡り合うつもりだろうか。

まるで狐につままれたようだ。

夢か幻か。目の前の光景を、食い入るように眺める。

すぐにでも真相を確かめたくて、遥のところに行つて聞いただけのだけれど。

でも今ここでわたしがあの人たちの前にしゃしゃり出るのは、得策ではないような気がする。

結局遥はメールを見ることもなく、そのままポケットに携帯をしまいいこんだ。

あまりジロジロと彼らを見ていたら、黒ぶちメガネとキャリアウーマンに怪しまれる。

わたしは意識のアンテナだけをしっかりと斜め前方に向けて、全く進まないレポートを書くフリをしながら、偵察にひたすら没頭した。

「堂野さん、今日は無理言つてすみません。いやねえ、もう本当にこの前のお宅のお店のポスターやホームページに問い合わせが殺到しちゃって……。うちとしても嬉しい限りで、なんとか階英出版さんのこの仕事も引き受けてもらえないかと、そう思いましたね」

黒ぶちメガネが額の汗を拭きながら、何やら聞き捨てならないことをべらべらしゃべっている。

別の仕事を依頼しているような流れだ。

すると黙って聞いていた遙が、次第に不機嫌なオーラをその背中にまとい始めているのがわかった。

しきりに足を組み替え、テーブルの上の指が小刻みに動く。

「ね？ どうです？ あなたの可能性にかけてみたいんですよ。堂野さん、お願いしますよ」

「無理です」

黒ぶちメガネとキャリアウーマンが同時に落胆の表情に変わる。

「そこを、なんとか。ね、堂野さん。無理だなんておっしゃらずに！」

黒ぶちメガネはひるまなかった。

そこまで芯が通っているようにも見えない緩い感じのキャラからは、とても想像できない反撃だった。

「だから、無理なんです。前にも言いましたけど、俺、そういう仕事をするつもりはないんで。ポスターの件ですが、あれは不可抗力ですよ。身内のために恥を忍んでやったまでのことです。ということとで、今から劇団の打ち合わせがあるんで、今日はこれで。失礼します」

遙が立ち上がろうとするのを、あわてて黒ぶちメガネが阻止する。

遙の肩に手を載せ、まあまあとだめるようにして、席に押し戻した。

「堂野さん、待ってくださいよ。何もどこかのプロダクションに所属して本格的に、ってなわけでもないんで。今回だけ。一回だけでいいんですから。こちらの階英出版さんのファッション誌の読者モデルということで、なんとかお願いしますよ」

ずり落ちる黒ぶちメガネを何度も持ち上げ、遥を説得し続ける。

黒ぶちメガネの奥にひそむ目が真剣味を帯びてきているのに、遥も気付いたのだろうか。

強引にそこから立ち去ろうとしていた気迫が徐々に薄れ、再び椅子に深く腰を沈め座り込んだ。

「とにかく堂野さん。一度やってみてください。大学生活には支障のないように配慮するつもりですから。牧田さん、君も堂野さんにお願ひして!」

黒ぶちメガネが隣に座るキャリアウーマンにけしかける。

「堂野さん! ぜひぜひ、私からもお願いします。あなたからお返事頂けるまで、私たち、社の方に帰れませんから。ほんとに今回一度だけでいいんです。お願いします!」

今度はキャリアウーマンまでもがテーブルにおでこが付きそうなくらい頭を下げて、懇願態勢に入った。

これはもしかして、遥が前に言っていた、あのことだろうか?

そうなのだ。遙は今、ちょっとだけ時の人だったりする。

信じられないかもしれないけど。

有名人の仲間入りをしてしまったのだ。

2 ・返事いただけるまで、帰れませんから（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

最近ではジーンズのことをデニムと呼ぶのが浸透してきているようですが、7年前の設定なので、ジーンズで統一しますね。ご了承下さい。

3・もしかして、素人さん？

読者モデル……。

やっぱりあの話、本当だったんだ。

お店というのは、遥の祖父母が経営している朝日万葉堂という和菓子屋のことだ。

昨年の暮れに、伝統菓子協会の主催で、全国の協会加盟店の売上と知名度を上げるためのプロジェクトの一環として、ホームページを作ることにした。

それぞれの加盟店が工夫を凝らしページを飾る。

たまたまその中で使われた朝日万葉堂の写真が協会のイメージポスターとして選ばれ、全国の加盟店にくまなく配布された。

ひよんなことから、遥がポスターのモデルを引き受けたのを皮切りに、話がどんどんエスカレートして、騒ぎが大きくなってしまった……というわけだ。

もちろん遥はモデルをホイホイと気安く引き受けたわけではない。

朝日万葉堂の店頭での撮影が決まった時、ホームページやマスコミを使っての宣伝など全く馴染みのない彼の祖父が、遥と一緒にいて欲しいと頼んだのがそもそものことの始まりだった。

当初の予定では、店舗のユニホームでもある和服を着た店員が、商品を手に乗せて微笑んでいるところを写すはずだった。

けれど、おじいさんのそばでいろいろと手助けする遙がカメラマンの目に止まるや否や、とんでもない方向に事態が勝手に進み始めてしまったのだ。

あれは、去年の十月の終わり頃だった。

秋の紅葉をイメージした和菓子が店頭に並び、店内にも、もみじの枝が形よく花器に生けられていた。

遙はサークルの先輩に事情を話し休みをもらい、ほとんど顔を出すこともなかった店の暖簾をしぶしぶくぐった。

遙がどうしても言うので、わたしも店まで一緒について行った。

するとどうだろう。彼の姿を見るや否やおじいさんもおばあさんも大喜びで、自分達よりもずっと身体の大きい孫に向って、抱きしめんばかりの大騒動だったことは記憶に新しい。

遙の母親である綾子おばさんは、この人たちの一人娘だ。

つまり孫は、遙と妹の希美香、弟の卓のくすの三人だけということになる。

とりわけ、初めての孫である遙がかわいくて仕方ないのだろう。

おじいさんの顔は始終ゆるみっぱなしだった。

撮影の間はもちろんのこと、どんな時でも、おじいさんは遙のそばにくっついて離れない。

「なあ、遙。ホームページとやらは、どうやったら見れるんだい？」などと真顔で訊ねられた時には、さすがに遙も困惑の表情を隠し切れないようだった。

携帯とトランシーバーの違いすらいまだ理解できないおじいさんは、事務所にあるパソコンでホームページを見るんだと説明しても、不思議そうに首を捻るばかりだった。

「それは、わしみみたいな年寄りでも使えるのか？ そんなもので、本当に日本中の人が見てくれるのか？ それより、新聞広告の方が、ずっとわかりやすいと思うけどな」

残念ながら、遙の噛み砕いた説明も一向に実を結ぶ気配を見せなかった。

インターネットの意味をなかなか理解しないおじいさんに、懇切丁寧に答える遙は、次第に面倒くさそうに不機嫌な様子を募らせていく。

なのに、おじいさんはどんどん機嫌がよくなっていく。

遙のふて腐れた態度など、もうとつくに慣れているのか、それすらもかわいいとも言つように目を細めて孫を見上げている。

「おまえに来てもらって、本当によかったよ。わしらだけでは、何のことかさっぱりわからんしな。それにしても、すごい世の中にな

ったものだ。ホームページか、そうか、そうか……」

撮影の準備をよそに、おじいさんはすっかり遙に依存している。

そんなやりとりを見ていたカメラマンが、ここぞとばかりに遙に声を掛けてきたのだ。

「その君、ちょっといいかい？　もしかして、どこかのプロダクションに所属してる？」

遙を見上げながら、カメラマンが訊ねる。

「へ？　プロダクション？」

なんのことだかさっぱりわからない遙は、ますますだるそうに顔をしかめ、怪訝そうにカメラマンを睨み返した。

「えっ！　もしかして、素人さん？」

カメラマンがなぜか素っ頓狂な声を出して、大げさに驚いてみせた。

「俺、この人の孫ですが……。じいさんに頼まれて撮影に立ち会っているだけですけど」

横にいる社長である彼のおじいさんと遙を見比べながら、納得したようにカメラマンがうなづく。

「ほーっ！　ということとは、こちらの跡取りさんですか？　それはそれは！　ということとは……。素人さんなら事務所を通さなくてもいいし、話は早いよ」

「どづいづことですか？」

話が見えない遙は、よりいっそう不機嫌さをつのらせる。

「いやいや、どうもこうもないんだけどね。それにしてもカッコいいなあ、君。ちょっとここに立ってみて……」

その時、のんきに新作の和菓子を食べながら高みの見物をしていたわたしも、急な話の展開に何度あんこがのどにつまりそうになったことだろう。

柔らかい橙色の求肥にくるまれたこしあん入りのお菓子だったのだけれど、その瞬間、どんな味だったのかすっかり忘れてしまうほどの衝撃だった。

当日たまたま着ていた、古びた感じのする穴の開いたダメージジーンズに、洗いざらしのシャツのままカメラの前に立たされた遙は、カメラマンとそのアシスタントに乞われるままいつの間にかポーズを取らされていた。

ただ棒立ちになるだけの遙に、あれこれカメラマンの注文が飛ぶ。

雑誌の中でお目にかかれないような、決めポーズまで要求されて、面食らっている遙が少しかわいそうになったほどだ。

そのうち店の中だけでは飽き足りず、街中にまで出ていくつかのショットを撮られたのだ。

今まで何度頼まれても、店のアルバイトも工場の手伝いも断り、何

一つ朝日万葉堂の仕事にかかわってこなかった遙が、店の宣伝のためモデルをやっている。

二つ返事で孫をにわかモデルとしてカメラマンに差し出したおじいさんは、にこにこことさも満足そうに撮影を眺めていた。

喜んでいるおじいさんを前に、遙も事を荒立てるわけにはいかなかったのだろう。

そのまま成り行きに身を任せ、何百回というシャッター音を聞く羽目に陥ってしまったのだ。

そして出来上がった写真は、言葉にならないほど心を打つものに仕上がっていた。

カレンダーサイズの大きなポスターとホームページのトップに使われたその写真が、その後の遙の運命を大きく変えるきっかけになってしまうなどと、その時誰が予測しただろうか。

弾みとはいえ、安易に協会のモデルを引き受けたことに、遙はひどく後悔していたのだった。

4・商談成立

雨上がりの午後、ポスターの写真撮影があった。

店の前の道がちょうどいい感じにぬれていて、そこはまるで古都の路地裏を思わせるような静寂感に、しっとりと包まれていた。

遙が路上でたたずみ、空を見上げている……。

ただそれだけのとてもシンプルな構図だ。他に誰もいない。

その上、どこにも和菓子の写真は出てこないし、店の名前はもちろん、和菓子協会とわかるコピーすらない。

ポスターの左下の片隅にホームページのアドレスがひっそりと書かれているだけだ。

旅先のワンショットとでも思わせるような、ややノスタルジックな写真がそこにあるだけなのに、店内の接客スペースに貼ると、誰もが視線を奪われ、思わず見入ってしまうようなポスターに仕上がっていたのだ。

カメラが引き気味に遠景ごと遙を撮影しているので、顔ははっきりとわからない。

ところがその右隅に、小さめではあるものの、映画のポスターのようにきちんと彼の顔のアップが貼り付けられている。

誰が見てもそれが遙だとわかるくらいに鮮明に写し出されていた。

そこにいるのは間違いなくいつもの彼なのだけれど、被写体としての遙は、まぎれもなく見る人の心を捉えて離さないほどに、印象深くポスターの中に存在していた。

カメラマンが言うところのこの作品のコンセプトは、今どきの若者と和菓子のミスマッチなコラボレーション……なんだそうだ。

全く意味不明な能書きをくどくどと聞かされ、結局理解できないままだったけれど、それが今になって大反響を巻き起こし、正直なところ、遙もわたしも実家の家族達もみんな面食らっていたのだった。ワイドショーで取り上げられたこともあって、店の売上は倍増し、遙が街を歩いていて声を掛けられたのも二度や三度ではない。

そうだった。ファッション誌のモデルの仕事を依頼されて、断るのに困っているというのを、春休みに聞いたことがあったのだ。

あまりにも普段の実生活にかけ離れた内容だったので、いつの間にか立ち消えになったのだろうなんて思っていたのに。なんてことだろう。

どうせ冗談に決まっていると軽い気持でいたわたしは、いいアルバイトになるからために一回だけやってみれば、などと適当に調子よく言っていたのを思い出す。

これは結構、深刻な事態なのかもしれない。

何度も頭を下げて、真剣に頼み込む遙の前に座る二人。そしてなか

なか首を縦に振らない遥。

両者、互いに譲らずという関係を維持しながら、時間だけが過ぎていく。

「堂野さん。どうかお願いします。このとおりです」

相手はなかなかしぶとい。あの強情でふてぶてしい遥を前に、全く怯む様子を見せない。

「こんなこと、あなたに言っても仕方ないのですが……。最近の出版業界は大変厳しいものがあります。ネットの普及にもその一因があると思いますが、なんとと言っても、読者のニーズがさまざまなエリアに広がって、多種多様化を求められているんです。既存の有名モデルだけでは、読者はもう納得しないんです。自分達により近い存在。それでいて夢を持たせてくれるような、新しい人物の出現を渴望しているんです。自分達の身近に、いそいでいない、そんなモデルを、この業界は常に読者の皆様に提案し、広報しているわけです。で、堂野さんのようなタイプは、今時、逆に珍しいんじゃないかと思っています。作りこまれていない自然な姿がいいんです。それでいて知名度もある。即戦力として、是非とも私どもの出版社の力になって欲しいんです。今回、一回だけでいいんです。起爆剤として、あなたのそのほとばしるエネルギーをわけていただきたいんです」

遥の上半身がかすかに揺れたように見えた。

ついに相手の力説が遥の心を動かしたのだろうか。あれほどまでに頑なだった彼の態度が一瞬和らいだように感じたのは絶対に間違っ
てはいないだろう。

「ん……。困ったな。でも、そこまでおっしゃるのなら……」

とうとう遥の鋼鉄の砦が崩れ始めた。

「堂野さん、お願いします。そこをなんとか!」

「……わかりました。あなたたちには、負けましたよ。ほんとうに一回だけですよ。それでもいいのなら」

「ど、ど、堂野さんっ! いいです。いいに決まっています!」

黒ぶちメガネが身を乗り出し、もう逃がさないぞばかりにテープルの上の遥の手をがっしりとつかみ、握り締めた。

そして強引に握手に持っていく。まさしく両国の調印が締結された瞬間だった。

「それと、俺、今ちょっと忙しいんで、そちらのスケジュールに合せられないかもしれませんけど。それでもいいのなら……」

遥はすぐに黒ぶちメガネから手を離し、再びけん制モードに入った。

「あ……。す、すみません。失礼しました」

自分のハイテンションな行動に気付いたのか、黒ぶちメガネがあわてて腰を下ろし、またもや鎧をまもってしまった遥に、いとも簡単に頭を下げるのだ。

その人は、あきらかに遥よりずっと年上であるにもかかわらず……。

そしてすぐにさっきまでのテンションを復活させると、今度は笑顔
攻撃で遙に詰め寄る。

「堂野さん、本当にありがとうございます！ ええ、もちろん今回
一回だけですので！ こちらも、なるべく堂野さんのスケジュール
に合わせて撮影日程を組みますので、ご迷惑はおかけしないつもりで
す。明日かあさつてのご都合のいい時間帯に改めて企画書を持って
参りますので、もう一度打ち合わせをお願いしてもよろしいでしょ
うか。それと未成年ということなので、契約書にお身内の方のサイ
ンも頼んで頂きたいのですが」

その瞬間、遙の肩がピクツと上がったように見えた。

「そうですか……。ご存知のように、親とは離れて暮らしてるんで、
すぐにはサインをもらえないですけど」

仕事を断る最良なきっかけを見つけたのだろう。遙は余裕綽々とば
かりに、相手の出方を伺っている。

郵送するにしても、手元に戻るまでに三日以上はかかるだろう。そ
れに遙の両親がすんなりモデルの仕事を認めるかどうかもわからな
い。

契約締結までに時間稼ぎができるのは、今の遙にとって、願ったり
叶ったりなのだろう。

「それなら大丈夫ですよ。おじいさまが朝日万葉堂の社長さんでい
らっしゃるので、ご両親に了解を取っていただいて、社長さんにサ
インを頂ければ、こちらとしてはOKです」

ああ言えばこう言うとはまさにこのことでは。

うまくまるめ込まれた気がしないでもないけど、すでに商談成立と
いうことなのだろう。

晴れ晴れとした表情の黒ぶちメガネが素早く伝票を手にして、ここ
は私が……と財布をだそうとする遙を軽く制止した。

本日の話し合いは終了したようだ。店を出ようとした三人が同時に
立ち上がる。

たまたま顔を上げてしまったわたしと、くるりと向きを変えた遙の
視線が重なった。

わたしの姿を捉えた遙の目が、ありえない程に大きく見開かれる。

「ひ、ひいらぎ！　なんでおまえ、ここに居るんだ？」

突然のことにびっくりしたわたしは、条件反射のようにその場に立
ち上がり、直立不動になる。

遙ときたら、本当に今の今まで、わたしがここに居ることに気づい
ていなかったようだ。

続いて、こいつ誰？　みたいな怪訝そうな目で、黒ぶちメガネとキ
ヤリアウーマンにおもいつきり睨まれた。

目のやり場に困ったわたしは、咄嗟に俯く。

わたしの向いに席を移動した遙に対して、本日はどうもと会釈しながら帰っていく二人に、居心地の悪さを覚えながらも深々と頭を下げるしかなかった。

二人が店を出たのを見届け、力が抜けたように椅子に座ると同時に、帽子をぬいだ遙が髪が乱れているのも気に止めず、突如まくし立てる。

「おまえ、ここに居るなら居るって、さっさと見えよ！」

彼が不愉快なのはわかる……。でも、だからと言って、八つ当たりだなんて。いくらなんでもひどすぎる。

「だって、初めのうちは、わたしだって、そこにいるのが遙だなんて、ぜんぜん気付かなかったんだから。そんなに怒らなくてもいいでしょ？」

わたしは頬を膨らませて、ぷいと顔をそむけた。

「はあ？ 俺が困っているのをわかってて、おまえは知らんぷりしてるんだものな。そんなに冷たい奴だとは思わなかったよ」

「冷たいだなんて、ひどい。ちらつと横顔が見えて、遙だってわかった時、声をかけようとしたんだよ」

「へえ、それで？」

「でもあの二人が、あつと言う間にずかかずかとやって来て、わたしの出る幕なんてどこにもなかった。ね？ しょうがないでしょ？」

……なんかああいう人達、苦手だよ」

「俺だって、苦手だよ。今の話聞いてたんだろ？ おまえも一緒に反対してくれたら、あいつらも早々にあきらめたかもしれないのに……。はあ……。雑誌の読者モデルかなんか知らねーけど、うっとおしいよな。ああ、めんどくせえ」

遥お得意のめんどくせえが、いつもよりいつそう重くせつなく響く。本当に嫌で嫌でたまらないのだろう。きれいに整った顔をそこまで歪めてしまっくらいに……。

腰を前にずらすように椅子に座った遥は、背もたれに頭が付くくらいまで下がって、ため息を連発していた。

悔しいほどに長い足がこつちにまで侵入して来て、わたしのお気に入りのスニーカーをぐいっと押しのける。

負けずに押し返してやった。

「めんどくさいわりにその服装。いったいどうしたのよ！ どう見たってモデル並だよ。随分気合が入ってるように見えたけど？ そのジーンズも初めて見るし。それに、そんなおしゃれで高そうなジャケット。いつの間にか買ったの？」

おまけにさっきは帽子まで深めにかぶって、まるでタレント気取りだった。

わたしの知らない遥がそこにいるようで、正直おもしろくなかった。

「これか？ ジーンズは是定先輩のお下がりで、ジャケットは本田先輩に借りた。このあと昼からちょっと人に会うんでね……。相手

はあの劇団の今後を左右するような大物だから、服装にも気を使うんだ」

是定先輩は遥と同じ学生マンションにいる後輩思いの優しい人だ。わたし達と郷里が近いのもあっていろいろと良く面倒を見てくれる。

劇団の代表も務めていて、人望もあるので遥が惚れ込むのもわかる気がする。

問題は本田先輩。何を考えているのかさっぱりわからない上に、時々ぶつり連絡がとれたと思ったら、テレビでドラマの通行人とかの端役でみかけたりするサークルきつての風来坊。

他の団員の人たちも少し距離をおいているみたいだが、そんな気ままな人でも堂々と団員として存在できるところが、このサークルの最大の謎でもある。

あまり深入りしたくない人物には違いない。その先輩が何を思って遥にこんなブランド物のジャケットを貸すのか……。

そんな人からわざわざ借りなくても、いつもの自分の服でいいのにと思ってしまう。

「そんなに重要な人に会うんなら、スーツとかの方がいいんじゃないの？」

入学式の時の紺の三つボタンのスーツが似合っていたのを思い出す。

「はあ？ この世界で劇団員がスーツ着てウロウロなんてしてみる。それこそ、空気よめねえ奴って笑われるのがオチさ。就活してるん

じゃないんだぞ。先輩が相手の好みとかも熟知してて、アドバイスしてくれたからこんな格好になったってわけだよ」

そんなものなのかな……。東京での学生生活は、とにかく今まで正しいと思っていた常識を、ことごとく覆してくれる。

「その帽子も？」

「これは違うよ……。おまえも知ってるだろ？ 最近ちょっと声とか掛けられるからな。できれば顔中覆面でもして歩きたいくらいだけど、そもいかないし、これで顔半分隠してる……。なんで俺がこんなことしなくちゃいけないのか、ほんとに情けないよ。それもこれも、じいさんに少しばかり温情を示したばかりに……」

こんな目に遭って、ああ腹減った、何か食いたい……。とサンドイッチを注文した遥は、わたしに一切れも分けてくれずに、その上、すっかり冷えてしまったけれど、それでも大事なわたしの二杯目の紅茶まで奪い取られてしまった。

今夜は忙しくなりそうなのでメールもできないかも、じゃあなと言っつてそそくさと会計を済ませ、店から慌しく去って行く。

忙しくなくてもメールなんてくれなくせに……。とそこまで出かかった言葉をゴクンと呑み込むと、以前から渡されていた遥のマンシヨンの鍵をカバンから取り出して、手の平に載せてみた。

今夜、遥の部屋に、行ってみようかな……。

そう思ったとたん、わたしの心臓が小さくトクツと鳴った。

5・こんなに好きなのに

彼と同じ大学に在籍しながら、偶然でしか会えないだなんて、もう世も末なのかもしれない。

仮にも結婚の約束までした恋人同士だというのに、この心もとなさはなんだろう。

彼も同じ思いを抱いてくれているのだろうか？

だからこそ、一緒に住もうと言ってくれたのだと信じたい。

大学に入ったばかりの頃は、毎晩のようにわたしのアパートで一緒に食事をして、ビデオを見て。

将来の夢を語り合ったりもした。

子どもは絶対に欲しくて、キャンプにも連れて行きたいなど目を輝かせていた。

わざわざキャンプに行かなくても、うちの裏山で遊べば十分だよと言っても、遥は聞く耳を持たない。

そう簡単には足を運べないような秘境に行っこそ、キャンプの醍醐味が味わえるんだ、などと自論を展開する。

子どもを遊ばせるためというよりも、遥自身が楽しみたいのがありありとわかるくらい、意気揚々と暑く語っていた。

けれど、そんな幸せな日々だったのも去年の夏までのこと。

徐々に遥のサークル活動が忙しくなり、それに合わせるようにしてわたしのバイトもシフトを増やした。

まるでいたちごっこのようにすれ違い生活に拍車が掛かる。

おまけに、ポスターデビューしてからの遥は、ますますわたしから遠ざかっていくようで、もう手の届かない違う世界の人になってしまったようにすら感じていた。

今夜、彼の部屋に行こうと決めたのなら。これしきのレポートで足踏みしてるわけにはいかない。

目と手はもちろん脳内もフル回転して、自分でも驚くくらいのスピードでレポートを仕上げ、大学に向った。

遥は大学入学後、すぐに学内の演劇サークルに入った。

もともと役者としてスカウトされたのだが、将来の仕事はマスコミ関連志望というのも手伝って、演劇サークルへの拒絶は全くなかった。

役者ではなく演出をさせてもらえるならばと、あっさり入団して、今に至る。

まだ新米の遥が本格的に演出させてもらえることはほとんどなくて、ジーンズを譲ってくれた是定先輩につきっきりで指導を受け、修行中の身だ。

使い走りや大道具などの裏方、チケットの集計なども遥の肩にのしかかってくる。

一人が何役もこなすのは、貧乏学生サークルの暗黙の掟らしい。

理不尽なほどの忙しさも、遥にとっては全く苦ではないと言う。

何度か遥にくつついてサークルに参加してみたけれど、先輩に気を遣いながら奔走している彼を見ているのが辛くなり、いつの間にか劇団とも疎遠になってしまった。

遥はわたしのことを、おもしろい文を書くやつだと言って団員に紹介していたので、時々同じ学部のひとつ年上の里中先輩から、脚本を書いてみる気はない？ と入団の誘いを受けてはいた。

里中先輩は、チケットを売り出したら即売というメジャーなプロの劇団からも誘いがくるほど、演技にも定評のある女優志望のとてもきれいな人。

でもわたしはバイトを理由に、ずっと里中先輩の誘いを断り続けている。

劇団を優先すると、バイトとの両立は難しくなる。

すると、たちまち日々の生活が苦しくなるし、学校自体も続けられなくなってしまうからだ。

書くことを活かせる場としては大いに魅力を感じているのだけど、学業との両立もかなり大変そうだし、そもそも、あまり華やかな世

界は苦手だと思つこの性格が二の足を踏ませるのだ。

高校時代の学業成績がずば抜けてよかつた遥は、その蓄えが功を奏したのか、どんなに忙しくても単位を落とすことはなく、成績もAがいつぱい並ぶほどの優秀さを見せつけてくれている。

片や、レポートをきちんと提出して、必死に勉強してテストに望むわたしの成績は、なぜか見るも無残な結果で、語学以外はほとんどC。落とした単位も二つある。

背伸びをして入った大学は、高校のように簡単にはいかない。

一緒に講義を受けている学生たち全員が、遥のように優秀な人に見えてしまう、というか、実際問題かなり優秀な人ばかりだ。

教授の投げかけた理解不能な質問に、間髪いれずに正答を述べる仲間が神のように見えるのにも、もう慣れた。

遥は今夜、何時ごろに帰ってくるのだろう。

午後の講義も上の空で過ごし、夕方五時から引き受けている近所の小学生相手の家庭教師のアルバイトを七時に終わらせると、電車に飛び乗って遥のマンションに向つた。

両手にスーパーの袋。今晚の夕飯の材料だ。

食べるのは二人だけなのに、あれもこれもと、気付けばかごが山盛りになつてしまった。

調味料だって、遙がすべて揃えて持っているとは限らない。

それに……。朝食の材料も買ってしまった。

鮭の切り身に海苔に卵。乾燥わかめも買った。

これは遙に知られると恥ずかしいので、わたしが家で食べるものだとでも言っておこう。

遙の部屋に泊まる気満々だなんて、思われたくないしね。

でも、さっきからにやけてしまうのはなぜだろう。ネギの先っぼうが飛び出したスーパールの袋を持つ自分が、ちょっぴり誇らしく思えるのだ。

今までにも何度も訪れた彼のマンションは、わたしのアパートよりは少し築年数が新しい。

遙もわたしと同じで、親の負担をなるべく軽くするため、六畳に満たないワンルームで、小さなユニットバスが辛うじて付いているだけのシンプルなここを選んだ。

けれども、夜にわたしからここを訪ねるのは初めての経験。

わたし達は一応、付き合いの長さだけは誰にも負けない自信があるけど、男と女としての関係はまだまだで自慢できるようなものはない。

一度、一線を越えそうになった時、わたしが頑なに拒んでからは、

彼もそれ以上は求めてこなくなった。

だからと言って、彼が嫌いなわけでも、憎いわけでも、はたまた、怖いわけでもない。

彼とのとろけるような口づけの先にあるものを、おぼろげに想像することだってある。

それに、胸が張り裂けそうなほど遙が恋しくなり、彼を思って一晩泣き明かしたことも経験済みだ。

最近あまり会えないからだろうか。突然声が聞きたくなくて、深夜に携帯を握り締め、思い留めた夜もあった。

声を聞くと、きっとまた泣いてしまう。

すると遙はすぐにでもわたしのところに来てくれるだろう。

でもわたしは……。

また前のように遙を拒んでしまうかもしれないのだ。

こんなに好きなのに。遙のことが好きで好きでたまらないのに、次の一歩が踏み出せない。

両親や遙の家族にも内緒にしたままこっそりと付き合っていることが、心の重荷になっているのだろうか。

それとも、いつの日か遙が、わたしのもとから離れて行くのではないかと、ありもしない未来を想像して不安を抱いているからだろうか。

でも……。

今夜なら、そんな臆病な自分から抜け出すことができそうだ。

何も考えずに遥の胸に飛び込んでしまえば、何かが変わるのかもしれない。

わたしは遥のマンションを見上げながら、手の中にある彼の部屋の鍵を、もう一度きつく握り締めた。

6・帰るなんて言うなよ

このマンションの五階に遙の住んでいる部屋がある。同じ間取りの部屋が、縦も横も均等な区分割でずらっと並んでいるのだ。

堂野、とマジックペンで書かれただけの簡易なプラスチックの表札を確認して、鍵を開けて中に入った。

ずっと窓を閉め切っていたせいか、たちまちムツとした空気に取り囲まれる。

電灯のスイッチは、確か、玄関の左側にあつたはずだ。

暗がりの中、手探りでごそごそと見つけ出し、パチッと明かりを点けた。

玄関の真上と、たった一つの部屋の明かりが連動して点く。

玄関から、ひと目で部屋中が見渡せる。やっぱり遙はまだ帰っていないかつた。

真っ直ぐに部屋を横切り、半畳程の狭いベランダに干してあるTシャツと靴下を取り入れた。

少し重い夜風が、部屋の中に流れ込む。しばらくの間、サッシを開けたままにしておこう。

彼が今朝まで着ていたのだろうか。ベッドの上に、ハーフパンツが脱いだ形のままそこに置き去りにされていた。

フローリングの床にはDVDや舞台関連のタウン誌、そしてなにやら難しそうな経済の分厚い本が、あちこちに散らばっている。

遙のノートパソコンは最新型で、DVDも見れる優れものだ。

一緒に住めば、うちにあるビデオデッキとも、もうお別れなのかもしれない。

いつも小綺麗にしているのに、どうしたのだろう。今朝はよほどあわてて出て行ったのかな？

小さなキッチンのシンクには、グラスや茶碗が使ったまま洗いもせず放置されていた。

炊飯器のご飯も空っぽだ。

小型の冷蔵庫も空っぽ。ミネラルウォーターが一本だけ、ごろんと場所がっていた。

スーパーに寄って来て本当によかった。

手早く食器を洗い物を終えると、まず炊飯器に米を二合だけセツトする。

おばあちゃんの家で、皆が集まってご飯を食べる時は、いつも一升くらい炊いていた。

それに比べれば、とても少ない。

二人だけだと、二合でも余ってしまう。

次に鍋物の材料の野菜を洗って切り、ザルに盛り付けた。

今夜は遥の好物の寄せ鍋だ。おばあちゃん特製の肉団子が大好きだった彼のために、鶏ひき肉に秘伝の調味料とネギやしょうがを混ぜ込んで、よくこねて冷蔵庫に入れた。

床に散らかっている物を片付け、折りたたみ式のミニテーブルを広げる。

シンク下からカセットコンロを取り出し、これまたおばあちゃん秘伝のスープを入れた鍋を載せ、ふたをした。

よし。これで準備完了！あとは、遥が帰ってくるのを待つだけ。

彼氏に鍵を渡された彼女は、皆、こんな風にしてるのかな？

単身赴任の夫宅に週末に訪れる世話焼き女房……つてのにも、あてはまるかも。

なんだか新婚ごっこのような感じがして、思いのほかこの状況を楽しんでる自分がある。

彼が今夜また、一緒に住もうと言ってくれたならば、今度は間違はなく、うんと返事をするだろう。

もう絶対に迷ったりしない。そして彼を拒んだりもしない。
遙と共に生きていこうと決めたのだから……。

時計を見るともう十時だ。テレビをつけても、初回を見逃した連続ドラマはなんとなく見る気がしない。だからといって、報道番組という気分でもない。

ほんとうに遅い。遙ったら、いったいどこで何をしてるのやら……。

あれだけ気合の入った服装で出かけたくらいなもの、かなり込み入った内容の話し合いでもあるのだろう。

メールしたって、どうせ繋がらないに決まっている。電源をオフにしているのは、いつものことだから。

それに、わたしがここに来てることも彼は知らない。

今夜帰ってこなかったとしても、それは仕方のないこと。遙に罪は無い。

わたしは泊まる覚悟で来てるので、何時まででも待つつもりだ。

お腹もすいたけど、我慢我慢。だからお願い。早く。少しでも早く、わたしの元に帰ってきて……。

玄関のドアの向こうでガサガサと音がする。人の気配だ。

わたしはぼんやりとした意識のまま目を開け、上半身を起こして身構えた。

あろうことが、いつの間にかベッドにもたれて、うたた寝をしてしまったのだ。時刻は深夜の一時。

遙が帰ってきたのだろうか？

わたしは、ふらつきながらもなんとか立ち上がり、鍵を中から開錠しようと、サムターンに手を掛けた。

するとほぼ同時に外側から鍵が差し込まれた音がして、ドアがガチャツと開く。

「ひ、ひいらぎっ……」

まぎれもなく。そこに立っているのは遥だった。ずっと待ち焦がれていたわたしの愛する人だ。

「遥、お帰り。へへへ。わたし、勝手に来ちゃった。びっくりした？」

でも笑顔もそこまで。わたしは自分の目を疑った。

もう一人別の人が、遥の肩にしなだれかかるようにして立っている……。

誰……？

女の人？

長い髪が顔に覆いかぶさり、よく見えない。

その人が、手で髪をかき上げた瞬間、きれいな横顔のラインがくつきりと浮かび上がる。

わたしは、はあーっと大きく息を吸い込んだ。

そこにいたのは、演劇サークルの里中先輩だったのだ。

三人で玄関で向き合ったまま、しばらくそこに立ちすくんでいた。「来てたんだ……」

ようやく遥が、わたしをまじまじと見て、つぶやくように言った。

「う、うん……。やっぱり帰ってくるの、遅かったんだね。こんなところに立ってないで、早く部屋に入って。里中……せんぱいも」

かなり酔っているように見える彼女も、ようやくわたしがいるのに気付いたのか、遥にからめていた腕をほどき、ごめんなさいと言って俯うつむいたまま中に入ってきた。

明るめのブラウンに染められたロングのウェーブヘアが、すれ違いざまにわたしの頬に少し触れた。

一瞬、とてもいい香りがした。大人の女性の香りだ。

なんだかわけもなく、泣きたくなった。

床に腰を下ろした二人を見届けるようにして、カセットコンロと鍋をテーブルから降ろし、インスタントコーヒーを手早く入れて、二人の前に置いた。

どうしたんだろう……。恋人が別の女性を夜中に連れ込んでいるというのに、わたしったら、意外と平気なんだ。

黙って片膝を立てて座っている遙が、時折こちらを見る。

彼が里中先輩を部屋に連れ帰ってきたのは、まぎれもない事実だ。それが何を物語っているかは、いくら鈍感なわたしでもわかる。

二人はあれから何も言わない。言い訳くらいしてくれてもいいのに。

最終電車に間に合わなかったとか、あるいは先輩の体調が悪くなったとか……。

何でもいいから言ってよ。黙ってないで、何か言って。

里中先輩がおもむろに顔を上げる。そしてゆっくりと口を開いた。「蔵城さん。こんな時間におじゃまして……ごめんなさい」

充血した目をわたしに真っ直ぐ向けて、ありったけの気力を振り絞って話そうとしているのがひしひしと伝わってくる。

でも、長くは続かない。すぐにまた俯き加減になる。

やけに赤みを帯びて、まるで誘うように濡れてきらめく形のいい唇を小さく動かしたかと思うと、吐息混じりのかすかな声がようやくわたしの耳に届くのだ。

「ちよつといろいろあつて、ハルに、お世話になつちやった……」

今は何を言っても言い訳にしかないから。とにかく……「ごめんなさいね。あなたたちのこと、知らなかったわけじゃないの。なのにこんな夜中にここまでついてきちゃうなんて、あたし、どうかした。……帰る。あたし、もう帰るわ」

「先輩！」

立ち上がったとたんにバランスを崩し倒れそうになった里中先輩を、遙が抱きかかえるようにして支えた。

テーブルの上のコーヒーが、たぶんと揺れてこぼれ、褐色の小さな池を作る。

「ハル、もういいの。お願い……。タクシー、呼んでくれる？」

遙の腕をすり抜けて崩れ落ち、床の上に倒れた里中先輩は、そのまま動かなくなってしまった。

身体が小さく上下して、呼吸をしている。どうやら眠ったようだ。四月の下旬といっても床の上はまだ冷える。

遙とわたしとで先輩を抱き起こし、どうにかベッドに寝かせることが出来た。

ベッドの下に座り、目を閉じている先輩の青白い顔をそっと窺い見た。

何があったのかは知らないが、先輩は遙を頼ってここまでついて来たのは間違いようのない真実。

そして遙は、それを受け入れているように見える。

あんなにべったりと寄り添う先輩を抱きかかえるようにして、玄関先に立っていたのだ。

それって。

この二人はもしかして……。

付き合ってるの？

いつの間に？

だとしたら……。

わたしがこんなところにいるのはおかしい。

遙の心は、すでにわたしではなく、この人に向いているのだから。ここから出て行くのは先輩ではなくて、わたしの方なのかもしれない。

わたしはカバンを手にして、立ち上がった。

「突然来ちゃってごめん。一緒にお鍋でも食べようと思ったんだけど……。遙の都合も考えずに黙って押し掛けて……。わたしって、

なんでこんなにタイミングが悪いんだろう。先輩、なんだか、すごく酔ってるし。遙のこと、頼ってるみたいだから……。わたし、帰るね」

出来るだけ明るくそう言った。

以前、あふれんばかりの愛情を注いでくれた遙を冷たく拒んだのは、このわたしだ。

それが彼の気持をひどく傷つけてしまったことも理解している。

彼のすべてを受け入れる人が、先輩だと言うのなら。

ここは、わたしが身を引くべきだろう。

「柊、ごめん……」

遙がわたしの腕をつかみ、謝る。

「おまえが来てくれてるなんて、思いもしなかったから。でも、帰るなんて言うなよ。先輩が起きたらタクシー呼んで帰すから。おまえはここに居てくれ。頼む！」

わたしは、反射的に彼の手を振りほどいていた。

先輩に触れたその手で、わたしを触って欲しくなかった。

「と、泊まる用意もしてないし……。大通りに出ればタクシーに乗れる。遙、お願い！先輩のこと、見てあげて……」

「ひいらぎっ！」

遙が呼び止めるのも聞かず、玄関でスニーカーを履こうと腰をかめた時だった。

「ハル……。どこ？ハル。行かないで……。一人に……。しないで」
里中先輩の甘えたような、そしてすぎるような細い声が、わたしの背後で繰り返し聞こえる。

もう迷わなかった。それでも尚、引き止めようとする遙の手を乱暴に振り切ると、わたしは彼のマンションを飛び出し、大通りに向かって、ただひたすら走り続けた。

7・友の怒り

大通りに出て、タクシーに乗り、アパートの住所を告げて……。憶えているのはそこまで。そのあとどうやって家まで帰ってきたのか、シャワーは済んだのか。

はたまた、ちゃんと着替えたのか、どうやって布団に入ったのか……。何も記憶にない。

ただ、泣いて泣いて、気付いたらとつくに日が昇って、明るくなって、すでに昼過ぎだった……。ということだけは、なんとなく認識できる。

初めて、大学の講義をさぼった。
ハンバーガーショップのバイトはどうしよう……。

迷いながらも、やはり店長に欠勤を伝えようと、携帯を手にした。電源をオンにしたとたん、受信を知らせるメロディーがポロンと鳴り、画面に着信メールがずらりと並ぶ。

十一件も蓄えられたメール。全部遥からだった。
やっぱり、あれは本当だったんだ……。

夕べの出来事がもう一度鮮やかにわたしの脳裏によみがえる。
遥にすぎるように立っていた先輩の横顔が。

ハル、ハルと、彼を呼ぶなまめかしい声が……。

とてもじゃないけど、今、彼のメールを読める気分なんかじゃない。
い。

それに、今更……。言い訳なんて、聞きたくない。

遥からこんな立って続けにメールが来たのは生まれて初めてだというのに、悲しみに埋め尽くされた今のわたしでは、彼の弁明など到底受け止められそうにないからだ。

店長に電話をした後、再び携帯の電源を切って、テーブルに投げ

出した。

さて、これからどうしよう……。

このままここにいたら遙がやって来るかもしれない。

ごめん、あれには訳があつて……とか言い出すのだろうか。

あれだけ衝撃的な場面を見せつけておきながら、どんな言い訳をするというの？

あんなにべつたり先輩と寄り添い、まるで恋人同士のように部屋に帰って来た遙に、全く下心がなかったと言いつけるのだろうか。

わたしが恐れていたのは、きつとこのことだったのだ。

相手が先輩であれ、他の誰であれ、いずれこうなることを薄々予感していたわたしは、彼を遠ざけることで、自分を守っていたのかもしれない。

遙は何も言わないが、高校時代も幾人もの女性に言い寄られていたのを知っている。

遙がわたしの名前を出して付き合っている人がいるからと交際の申し込みを断った時、その相手の取り巻きから、これみよがしの嫌がらせを受けたこともある。

でも不思議と怖くなかつたし、遙への気持が揺らぐこともなかつた。

あの頃は、まさか将来こんなことが起こるなんて、想像すらしていなかつたからかもしれない。

このまま、いつしか時が過ぎ去って、わたし達の関係は自然消滅するのだろうか。

こうなった場合、親たちにわたしと遙の関係を知られてなくてよかったと思う。

これまでどおり、隣に住む親戚同士というスタンスを貫けばいいだけだ。

わたしと遙が付き合っているというのを知っている人は、いった

いどれくらいいるのだろう？

夕べの様子だと、少なくとも里中先輩は知っている。わたしに向かって、謝あやまっていたもの……。

友人にしても、同じ人を好きになった夢美にはまだ遙のことは言い出せないままで。

高校時代の親友、柳田沙代こと、やなっぺだけには全て打ち明けている。他の同級生も皆が知っているというわけではない。

つまり全容を知っているのは、やなっぺと、おばあちゃんだけ。

そして遙サイドでは、里中先輩と、サークルのメンバー。そして同級生の藤村だけだ。

結局、誰も知らないも同然の関係なのだから、傍目から見れば、わたしと遙が別れようがどうしようが、誰も痛くもかゆくもないというのが現実。

こんな状況になっても誰にも相談できないだなんて、本当にわたしって、今まで一体何をしてきたんだろうと情けない気持になる。

生まれた時からずっと一緒だった遙が、わたしの全てだった。

恋人で、親友で、遊び相手で……。彼との関係が壊れた時、一度にその全てを失ってしまうのだ。

そして、十五の秋の日に遙が言ってくれたプロポーズの言葉を、ずっと信じていたのに……。

嫌いな奴とは結婚しないし、多分これから先も他の誰とも付き合わないからって、言ってくれたじゃない。

なのに、なのに……。

結局裏切られたのは、わたしだったってことだよな。

こんなことなら、遙を好きにならなければよかった。

プロポーズなんて、受けなければよかった。

とにかく今夜はここを出て、どこかに身を寄せた方がいい。

今彼と顔を合わせても、冷静に話し合うことなんて出来るわけがない。

わたしは都内の大学に通っているやなっぺに、すぎるような思いで連絡を取ることにした。

「許せない！ 堂野の奴、いったい何考えてるの？ 柊、あんた、ちよつとやさつとで、アイツを許しちゃだめだよ！ しばらくここにいてもいいからさあ」

高校で出会った親友のやなっぺは、顔を真っ赤にして怒りを露わにする。

電話で今からそっちに行ってもいいとだけ言って、電車を乗り継いでやって来た親友の家で、わたしは彼女と向かい合っていた。

夕べあったことをあくまでも客観的に話した直後の彼女のリアクションだ。

やなっぺが親身になって、まるで自分のことのように怒ってくれたのが嬉しかった。

それだけで、胸につかえていたものがすーっと下りて、軽くなっただよな気がする。

高校時代、わたしがいろいろな理由で遙とのかつことをあまり大っぴらにできないでいるのを、無条件に理解してくれて、いつも真っ先に助け舟を出してくれていたやなっぺ。

遙とわたしとやなっぺと藤村の四人組でいつも一緒に行動していた高校時代。

なんかキラキラしてて、今までの人生で、一番輝いていた毎日だったように思う。

やなっぺは今、未来の自分の夢を実現させるため、美大でデザインの勉強をしている。

築二十年以上経つけれど、そうは見えないおしゃれな一戸建に住みながら、学生生活を満喫しているのだ。

有名な建築家が設計したというこの家は、自然素材をふんだんに使い、他に類を見ないほどの凝った作りで、やなっぺを含む三人の

美大生でシェアして住んでいるのだ。

都内なのに庭もあって、モダンな作りなのに、どこかなつかしい感じがする。

この家の特性を理解し、賛同してくれる人になら貸してもいいという大家さんのユニークな発案で、美大生三人の住まいとして特別に許されたのだという。

ほとぼりの冷めるまでの数日間、取りあえずわたしは、やなっぺに甘えることにした。

8・よっさんと沢木さん

その夜は歓迎パーティーが開かれた。

歓迎されているのは、なぜかこのわたし。ここにいる理由が理由なだけに初めは辞退したのだけど、やなっぺの同居人たちが、許してくれなかったのだ。

やや後ろめたくもあるのだけど、女四人の空間が新鮮で心地いい。こつという同居生活もありだなと、妙に納得してしまった。

さつきからヒリヒリと、背中に誰かの視線が突き刺さる。

一階の吹き抜けのリビングは、同居人みんなの社交の場となっていて、ここで食事をしたり、テレビを見たりするようだ。

で、わたしの背中に感じる冷たい視線の正体は……。

遥がモデルを務めた例の伝統和菓子協会のポスターだった。

初モデル騒動の渦中、話を聞きつけたやなっぺが、同居人に自分の友人を自慢したいからと、わたしのところに二枚あったうちの一枚を強奪するように持ち帰ってしまったのだ。

そこにいるはずのない遥の強烈な視線を背中に感じつつも、丸一日何も食べていなかったわたしは、やなっぺ特製たらこパスタで空腹を満たし、ようやく落ち着きを取り戻しつつあった。

「このカレシがねえ……。その女の先輩とは、なんでもないんちゃう？ きつと先輩にからまれて、逃げられへんかっただけやと思うで。心配いらんな！」

ポスターを見ながら関西弁でそう言ってくれるのは、よっさんと呼ばれている背の高い和風美人だ。

真っ黒のストレートの髪を肩の下まで垂らし、切れ長の目がどこか神秘的に見える。

油絵が専門で、裸婦のデッサンが得意なこの人は、ルノアールと

小磯良平をこよなく愛し、絵筆を握らない日はないという。

モデルと画伯の道ならぬ恋の修羅場も何度か目撃したと言つこの人。

そういえば、玄関に飾つてあつた、扉ほどの大きさのキャンバスに描かれていた横たわる半裸の女性像は、この人の作品だったのだろうか。

あまりにもリアルで、つい目を逸らしてしまうほど、迫力満点の絵だった。

よつたんは、恋愛のハウツーは誰よりも詳しく、デッサンで培つた人間観察力で、一瞬にして人物の深層まで見抜く力は相当な物である……とはやなつぺの弁だ。

彼女の発言は、かなり信憑性があると、これまたやなつぺが太鼓判を押してくれた。

確かに遙が以前から里中先輩と恋愛関係にあつたという可能性は、ほぼ零パーセントに近いと思う。

だって、先輩にはちゃんと彼氏がいると聞いていたから……。

でも、たとえそのような感情がなくなるとも、家に連れ帰るのは絶対に許せない。しかも深夜に……。

サークルでは彼がみんなからハルと呼ばれてかわいがられているのは知っていた。

だからと言つて、彼の部屋にまで入ってきて、すぎるような甘い声で寝言を発する先輩が、遙に対して特別な感情がないと言い切れるだろうか？

それに、あんなにきれいな人に甘えられて、遙も悪い気はしないに決まつてる。

あまりにもお似合いな二人に、わたしのよな田舎娘が入り込む余地など、どこにもないのだ。

「で、柀……。さつきから携帯鳴りっ放しだけど、ずっとあいつのこと、無視するの？」

「あ、う、うん。……次鳴ったら出るよ。でもここにいることは言

わないつもり。やなっぺ、そしてよったんさん、沢木さん。ご迷惑おかけしますが、あと二、三日でいいので、わたしをここにかくまってください……。お願いします。ごめんなさい……」

わたしは、みんなに向って頭を下げた。

これが身勝手なお願ひであることは百も承知だ。でも、あと少しだけ時間をもらえば、解決の糸口が見つかるような気がする。

「あーん、そおくんなことしないでえ……。早く顔上げてよおー。あたしもよったんも、やなっぺにはすんごくお世話になってんのお。ひいらぎちゃんはやなっぺのお友達なんだから、あたしたちのお友達でもあるわけ。だからさあ……」

これ以上のピカピカの黄色は見たことないだろうと思われくらゐ明るく染めた髪を、くるくるに巻いて両サイドに垂らし、一度に一瓶使ってしまったの？ っていうくらいどっさりマスカラの付いた重そうなまつげをゆつくりと上下させながら、沢木さんというオトメなかわいらしい人が、わたしを友達だと言ってくれる。

前にやなっぺから聞いていたこの沢木さん。なぜか沢木さんというのがあだ名で本名は別にきちんともあるらしい。

人は見かけによらないとはよく言ったもので、この一見今どきギヤルのような沢木さんは、実は日本画科のホープで、もうすでに大きな賞をいくつかとっているツワモノだったりするのだ。

「ほおくと、遙くんっていい男だわあ。モてるのも無理ないしい。けどさあ、男なんて星の数ほどいるんだし、また探せばいいよお。ねっ、ひいらぎちゃん！」

ねっ、て沢木さん……。あなたならいくらでもお相手を見つけれらるだろうけど、今まで十九年生きてきて、これといって浮いた話のなかったわたしには、結局のところ遙しかいない。

遙がモてるのは無理ないと言われると、余計に辛くなる。

彼女のブリブリした上目遣いに圧倒されながらも、わたしはなんとか意識を持ち直し、沢木さんに曖昧に微笑み、口をつぐんだ。

「ちよっと、沢木！ あんたと柊を一緒にしないの！ 柊はね、ず

つと堂野一筋なんだよ。中学生の時からずーっと！ だから今回のことはちよつとお灸を据える程度に奴を懲らしめて、なんとか二人を仲直りさせたいと思ってる。だから沢木も言い方に気をつけて！」

「は、は〜い。やなっぺったら、そんなに怒らないですよ。わかっただからさあ〜」

沢木さんが、瞬きを繰り返しながら、身体をくねらせる。

やなっぺ……。素敵なフォロー、ありがとう。

なんとか仲直りできるよう、わたしも精一杯努力してみるね。次はきつとわたしがやなっぺを助けるから……。

と言ってもこれだけはどうしようもない悲しい現実がある。

やなっぺは、遥の親友でわたしの幼なじみでもある藤村が好きだった。……いや多分、今でも好きはずだ。

高校の時彼女は、大胆にも藤村に何度も告白しては断られていた。彼女のさっぱりした性格のせいか、不思議と二人はその後もぎくしゃくすることなく、普段は仲良し四人組で楽しく過ごせていたと思う。

ところがある日突然、二人は付き合い始めたのだけど、たった一ヶ月で敢え無く破局してしまった。

というのも、藤村が初恋の相手の夢美に二度目の告白をしてダメだったあと、落ち込んでいる彼をやなっぺが慰めたのが付き合い始めた理由なのだけど、やはり夢美を忘れることのできない彼に、彼女の堪忍袋の緒が切れたというのが、破局の原因だったらしい。

実らぬ恋にけじめをつけるためにも故郷を離れ、東京で新しいスタートを切ったやなっぺ。

そして、将来まで誓い合った相手とのいざこざで、こつやってみんなを巻き込んで大騒ぎをしているわたし。

やなっぺが受けてきた心の傷に比べると、わたしの悩みなんて、とてもちよつぱけなことなのかもしれない。

自分の人間としての器の小ささに、いい加減、げんなりしてしま

う。

「なあなあ、柊さん。中学生の時からずっとこの人と付きおうてるんか？ それってえらい長い付き合いやな。そうや。あんたら倦怠期ちゃうか？ 長い付き合いの間にはいろんなことがあるしな……。柊さんも、もうちょっと、自分自身に気いつこた方がええんちゃうかな？ そんなありきたりな地味な格好したらんと、パーっと派手にいって見た方がええで」

「そうそう！ そうしな、柊。あいつもこっちに来てから目が肥えてきてるんじゃない？ よったんや沢木にアドバイスしてもらって、ここいらでちょっと変身してみるってのも一案だよな」

変身って……。ライダーシリーズでもあるまいし。

そういえば春休みに実家に帰った時、遙の弟の卓すくろが、ライダーキック！ なんて言いながら、わたしに戦いを挑んできたよね……。って、今、こんなこと思い出している場合ではないのだけど。

わたしは改めて、自分の身につけている衣服を、隅々まで眺め回してみた。

9・遥なんか大嫌い

「ねえ、柊。あんたは背もあるしパンツスタイルはよく似合っていて、とてもいいと思うんだけど。ただね、その地味なパーカー、なんかしなさいよ！　せめて色だけでも……」

さすがデザイン専攻だけあって、やなっぺの手厳しい的を得たダメだしが、グサリと胸に刺さる。

今日は服を選ぶどころじゃなかった。とにかく一分でも早くアパートを出て、遥から遠ざかりたかったのだから仕方ない。

「そうねえ。ひいらぎちゃんにはさあ、もっところ……。レモンイエローとかサーモンピンクみたいな、淡い色なんてどう？　あと、襟ぐりのおしゃれなニットにレーシーなインナーのぞかせたりい……。いいと思わない？」

まるで自分のことのように心配してくれている沢木さんが、具体的なアドバイスを示してくれる。

「あっ、そうだ！　ちよつと待ってえ〜」

沢木さんが突然立ち上がり、ギャザーがいつぱい寄ったフリフリピンクのスカート揺らしながら、テレビの横のマガジンラックを物色し始めた。

「これこれ！　ほら、このファッション誌のここお！」

彼女が指差した雑誌のモデルが着ているラインナップに目を向けると、確かにパンツスタイルにもフェミニンなトップが、かわいらしくなりすぎない程度に魅力的に着こなされていた。

「いいでしょう？　絶対、ひいらぎちゃんにも似合うってば〜。もしかして持つてる？　この雑誌い」

沢木さんが雑誌の表紙を見せてくれた。本屋さんで立ち読みしたことはあるけれど、買ったことはない。

「ううん、持ってないよ」

わたしは一瞬ためらいながらも、正直に首を横に振った。

「じゃーこれ、先月のだからあげる。ファクション・ユー。あたしの愛読書なお。いろいろ参考になると思うわよおー」

ファクション・ユー？ それって……。

昨日ロランで、遙が仕事の話をしていた出版社の雑誌じゃないだろうか。裏表紙の隅に階英出版ってちゃんと印刷してある。

「あ、あの……。この雑誌って、どれくらい人気があるの？」

遙がモデルを引き受けた雑誌かもしれないのだ。いったいどれくらいの読者の目に触れるのか、とても気になる。

ところが沢木さんは、わたしの質問になぜか完全に言葉を失ってしまったようだ。わたし、何か変なこと訊いたのかな？

「えーっと……。柊。この雑誌、知らないの？」

やなっぺが沢木さんの代わりに不思議そうにわたしを見て言った。「い、いや……。知らないわけじゃないけど、どれくらい人気あるのかなって、そう思ってた……」

人が恥を忍んで質問しているのに、よったんまであきれた表情で大きなため息までもらしている。

「ふうっ……。あんたほんまに女子大生か？ この雑誌が人気あるかどうかなんて訊くまでもないことやる？ うちのバイブルやで今、あんたが見てたモデルも、めちゃうくちゃ人気者なんや。CMにも出てるやる？」

「そうそう。いつも特集やってる男女学生の今どきファクションコーナーなんて、この雑誌の名物企画で、みいーんな目を光らせてるのよお。あたし好みのイケメン君もいっぱいいてくるしい……。このコーナーに載りたくて自分から写真送って売りこんでくる子が後を絶たないって噂よお。……ってあたしも送っただけどさ。全く音沙汰なしなんだもん。失礼しちゃう」

なんだか、胸騒ぎがしてきた。これって、本当に遙が引き受けた仕事の雑誌なんだろうか。

同じ出版社から別のが出てるかもしれないし。

わたしは念のため、もう一度質問してみることにした。

「もうひとつ訊いてもいい？ あのね、この階英出版ってところが、他にも同じようなファッション誌って、出てる？」

「ええ？ どうかなあ？ あたしは、これしか知らないけど」

沢木さんがかわいらしく首を傾げる。すると、よったんがその雑誌を手に取り、後の方のページをぺらぺらとめくって、うぐんと唸った。

「多分、ファッション誌は、これとジュニア用があるだけやと思うけど。それがどないかしたん？」

「やっぱり、これが遥の仕事の雑誌だったんだ。わたしはよったんに何て答えるべきか、言葉に詰まってしまった。」

「どうしたの？ ……柊？ あたしたち、なんか気に障ることも言った？ 調子に乗りすぎちゃったかなあ。ゴメン、柊。嫌なら、無理にあんたのスタイルを変えなくてもいいんだよ。柊は自分が思っている以上にかわいいんだからさ。今のままの自分に、もっと自信を持って。ね？」

「ち、違うんだよ、やなっぺ……。皆の意見はとても参考になったし、別に気にしてないんだけど。」

「わたしが言いたいののは、遥の仕事のことだ。」

「やなっぺ。実はさ……」

「わたしは勇気をふりしぼって、言ってみた。」

「遥がね、この雑誌の仕事をやることになったんだ」

「やなっぺは、きよとんとした顔でわたしを覗き込んだ。」

「雑誌の仕事？ 何それ。編集の手伝いとか？」

「えっ？ ち、ちがうよ。それが……」

「んもう。柊ったら……。もったいぶらないで早く言いなさいよ！」

「やなっぺが待ちきれないとでも言うように身を乗り出して、わたしの肩を揺すった。」

「やなっぺ。わかった、言うからそれ以上揺すらないで。あの……。モデルの仕事だって言うてた。読者モデルって……」

皆が顔を見合わせた後、三人同時に息を吸い込む。そして……。

「えええええっ！」

「ううそや〜ん！」

「マジい〜？」

三人の驚きの叫びが、いい具合にエコーを効かせながら、吹き抜けになったリビングに響き渡った。

すると、ちょうどその時、皆の声とほぼ同時にわたしの携帯が鳴った。

遙だ。

三人は示し合わせたかのように口に手を当てて、ピタッと黙り込んだ。待つてましたとばかりに、目だけをきよるきよるさせてわたしの動きを見ているのだ。

注目されているのが恥ずかしくて、皆の視線を避けるようにして斜め後ろを向いた。

一度大きく息を吸い込んでゆっくりと吐き出す。そして……。通話ボタンを押し、恐る恐る、携帯を耳にあてた。

繋がったはずなのに、遙の声はまだ聞こえてこない。

でも確かに遙は、この携帯の向こう側にいるのだ。わたしにはわかる。

『柊……』

わたしを呼ぶ声がした。遙の声だ。

『柊、聞こえるか？』

「……………」

間違いなくそれは遙の声なのに、返事をしようとするほどの言葉にならなくて、喉元で止まってしまふ。

『ひいらぎ？ いるんだろ？』

どうしたんだろ。たった一日、遙の声を聞かなかっただけなのに、涙がこぼれそうになる。

ひいらぎのきの音が少し上がり気味になってとても短い。遙が子

どもの頃から、いつもこうやってわたしを呼ぶのだ。

父さんとも、母さんとも違う。遥だけの呼び方。

それ以上呼んだら、きつと泣いてしまう。そんなことになったら、夕べのこと、怒れなくなってしまうんじゃない。

「あつ、う、うん……」

どうにか返事が出来た。まだ涙は、下瞼に堰き止められたままだ。『やっと電話に出てくれた……。夕べはごめんな。あのあとすぐに先輩を家に帰したよ』

遥のこんな声を聞くのは初めてかもしれない。優しくて、しつとりとした響きがする。

その声に嘘も偽りも感じられない。でも……。

「そ、そうなんだ……。先輩はよく来るの？ 遥のマンションに……」

ちゃんと訊くべきことは訊いておかなければだめだ。

『いいや。夕べが初めてだよ……。ちよつといろいろあつて、先輩を一人にできなかったから……』

何があつたか知らないけど、だからって部屋まで連れて帰ってもいいということにはならない。

もしわたしが、あの場にいなかったら、どうなつてたの？

そのまま先輩と二人きりだなんて、想像しただけでも、気分が悪くなる。

やっぱり許せない。何があつても、それだけは許せないよ。

「……そう」

今のわたしには、どこまでも冷たい返事しか出来ない。

『それよりおまえ、今どこにいるんだ？』

やっぱりそれを聞くんだ。そんなの言えるわけないじゃない。

さつきまで遥が恋しくて、声を聞いたとたん、胸がぎゅつと締め付けられるようだったけど、いつの間にか、それが怒りに変わっていく。

そんなに簡単に彼を許していいはずがない。

「えっ？ …… ちょっと、その……」
『ちよつと？ いったい、どこなんだ。もしかして実家か？ そつちに電話したら大騒ぎになるかもしれないから、まだかけてないけど……』

一瞬ドキつとしたけど、実家になんか電話されなくて良かった。わたしがいないなんてことを知ったら最後、それこそみんなで大騒ぎして、搜索願でも出しかねない。

遥。あなたの選択は正しかったってわけだね。

そこまでわたしのことを心配するのなら、どうしてあんなことしたの？ なんて女の人を部屋に連れて来たりなんかするの？ ひたすら彼を責めてしまいたいそうになるのを、やっとの思いで堪える。

「実家じゃないよ。でも……。どこにいるかは言えない……」

『実家じゃないって、いったいどこだよ！ じいさんのところも違うんだろ？ 教えてくれ。今からそこに迎えに行くから……』

そして会えば、夕べはごめん、もう二度としないから……とでも言っつて、謝るのだろうか。

一緒に住もうと言っつてくれたのを断ったから、別の女性に気持が傾いたの？ わたしが拒んだのがそんなにいけなかった？

「だから、今夜は来なくてもいいって、言っつてるの。今はあなたに会いたくない。……顔も見たくない」

『おまえの気持もわかる。でも、俺は……。どうしてもおまえに会いたくない。どんな手段を使っつても、そこに行く！』

「来ないで！ 絶対に教えないから！ 遥なんか、遥なんか……。大っきらいっ！」

こんなこと言っつつもりじゃなかったのに……。大嫌いだなんて、言っつつもりじゃなかった。

わたしは自分の出した声に半ば啞然としながら、電話を切っつて、おまけに電源もオフにした。

遥が謝っつてくれたからと言っつて、はいそうですかと簡単に済む問

題ではない。

あのあとすぐに先輩を家に帰したと言うけれど、あの泥酔状態で本当に先輩が帰ったなんて証拠はどこにもない。

わたしは携帯を握り締め、呼吸が静まるのを待った。

「……ねえ、柊？ 大丈夫？ 堂野……。なんて言ってた？」

やなつぺが遠慮がちに訊ねてくる。

「どこにいるのかって……。今から迎えに行くって言うから、断った。やなつぺ。よつたんさん。沢木さん。恥ずかしいところ見せちゃって、ごめんなさい」

わたしは冷静さを見失っていた自分を恥じた。

「そんなん、別にかまへん。でもな、でもな。何で断るひいらぎさん！ せっかくやから、迎えに来てもらええのにな。あああ、堂野君の顔を拝めるせっかくのチャンスやったのにな。ざんねんやわあ……」

「ほんと、ざんねん、ざんねん……。あたしも遙くんに会いたかったしい！」

よつたんも沢木さんも、さっきまであれほどずっとここにいたらしいなんて言ってくれたのに、もう態度が百八十度変わっている。

「あんたたち、そんなに堂野に会いたい？ ホントにしようがないなあ……。まあ今夜はダメだとしても、あいつに迎えに来てもらうってのはアリだね。柊のふんぎりがついたら、迎えに来てあげたしが言ってる。さあ、さあ。あいつのことなんか放っておいて、今夜は女四人で盛り上がるとすっか！」

「そうやな。ま、そのうち、堂野君に会えるってことで、今夜は辛抱するわ」

「そうね。あたしも我慢するう。さあ、乾杯しようよ」

見る間にテーブルの上に、様々なおつまみや、簡単なレシピのおかずが並ぶ。ちぐはぐな三人組みではあるけれど、チームワークの良さは天下一品だ。

リーダーシップを取るやなっぺだが、わたしは彼女のそんな男前なところが大好きなのだ。

こんなにもいい子なのに、藤村はいつたどこを見てるんだらうっていつも不思議に思う。

やなっぺが、缶チューハイを冷蔵庫に取りに行こうと立ち上がったとき、彼女のパンツのポケットにある携帯が、マナーモードのままブルブルと唸るようにあたりに響いた。

「……悪い。ちょっと、上に行つて話してくる」
発信元を確認したやなっぺが、わたしの方を向いて少し顔をしかめる。

そのまま携帯を耳に当てながら、二階に駆け上がつて行つた。わたしはやなっぺの表情を一目見て、電話の相手は遙であることがわかつた。

やなっぺが一階に戻つてきたのはその三十分後。何を話していたのだろう。

知りたくてたまらないのに、無関心を装つて、良く冷えた缶チューハイをやなっぺに差し出す。

「ありがと。ねえ、柎。今の電話のこと、訊かないんだね……」

やなっぺがプルトップに手を掛けながら、そう言つた。

「ええっ？ な、何のこと？」

わたしは、演技なんてこれっぽっちもやつたことなんかない。

ぎこちないしらはつくられた態度なんて、やなっぺにはすべてお見通しなのかもしれない。

やなっぺはフローリングの床に座り直し、仰々しく、えっへんと咳払いをした。

「じゃあ、今から言うのはあたしの独り言だからね。みんな適当に聞いてて……。お察しの通り、今の電話は堂野張本人だったよ。あいつさ、ここに柎がいるの、わかつてた」

やなっぺがちらつとこっちを見た。わたしは知らんフリをして、

キューブ状になった小さいチーズをつまむ。

「で……。本題なんだけど。夕べかなり理不尽なことが、彼の劇団に起こったらしい……。で、どうする？ 成り行き上、あたしが格より先にこのことを知ってしまったけど。あたしから話す？ それとも堂野に直接訊く？」

これはやなっぺの独り言のはずなのに、完全にわたしに返答を求めている。

そりゃあ、今すぐに知りたいよ。

でもこれでは、あまりにも変わり身が早すぎる。ついさっき、大嫌いだとわめいたばかりだもの。

今夜のわたしって、なんてカッコ悪いんだろ。

やなっぺが、どうするのと目で訴えている。わたしはあわてて、別にどっちでもいいよと強がってみせた。

「ただ、言い訳なら、あまり聞きたくないけど……」

今更、何を聞いたって言い訳にしか聞こえないだろうけど、どうせ知ることになるんだったら、やなっぺから聞いてしまってもいいことに構わない。

遙はわたしに歩み寄ろうとしてくれてたのに、わたしがそれを頭ごなしに断ったのだから、やなっぺが先に知ることになったのは不可抗力だ。

きつと遙も、やなっぺからわたしに伝わるのを望んでいるのだろう。

「まずあたしの見解ですけど……」

やなっぺが判事のように、かしこまって話し始めた。

「もしあたしが堂野の立場だったら、同じことをします。間違いない、先輩を家に連れて帰りますです。あーん、もう面倒くさい！ 普通に話すね。だって、先輩を一人にはできないもん。彼女さあ、一番信頼してた人……。つまり恋人だった人に、とんでもない打ちをされたんだ。おまけに、堂野も……」

やがてやなっぺの声が低くなり、怒りすら露わにし始めた。

10・怪我の功名

やなっぺが話してくれたことは、すぐには信じられないほどのひどい内容だった。

温厚で誰からも信頼されていたあの是定先輩が、皆を裏切っただなんて……。

昨日遥が言ってた大物との会合には、こんなからくりがあったのだ。

遥の部屋について来た里中先輩の彼氏というのは、なんと是定先輩だったのだ。

サークル内での恋愛はチームワークを乱す危険性があるということとで、あまり公言しないのが鉄則らしい。

遥も何も言わなかったし、今日までそのことは知らなかった。

サークルの代表も務める是定先輩は、わたし達と郷里も近く、いつもいろいろと気にかけてくれて、面倒見のいい人だった……はずだった。

昨日遥が穿いていた細身のビンテージ物のジーンズを譲ってくれた、その人だ。

是定先輩はサークルの顔でもあり、演出も手がけている劇団の要とも言える人物だ。

なら、その人がなぜあんなことを……？

自分の演出家としての将来を手に入れるために、彼女である里中先輩と後輩の遥を、無断で他の劇団に移籍させようとしたらしい。

自分が劇団を辞めた後、おまえたちを残して行くのが心配だから……ともっともらしい理由までつけて。

そして、遥が演出家希望なのを知っているにもかかわらず、最近の彼の人気を逆手にとって、俳優として他劇団に売り込みを掛けていたというのだ。

その見返りに、是定先輩一人だけ、今人気急上昇中でテレビや映

画にもひっぱりだこの俳優を多数抱えている劇団への移籍が決まっていただなんて。

おまけに今秋、遥の初の演出になる予定だった作品も、移籍先に持ち込む手はずになっていたらしい。

その橋渡しを請け負っていたのが、昨日遥が会うと言っていた大物と言われる人だ。

これで全て納得がいく。昨日の遥の素人離れした格好も、売り込みを想定しての是定先輩の演出だったというわけだ。

愛する人の手によって他の劇団に自分が売られていると気付いた時の里中先輩のショックは、想像を絶するものだったに違いない。

でも里中先輩は、恋人である是定先輩の将来を思えばと、その場で移籍を認めたといい。

ところが同席していた遥が、いち早く怪しい雲行きを察知して、本田先輩を呼んだことで話が急展開したらしい。

劇団内では浮いた存在で、あまり深入りしたくないと思わせるような一匹狼的存在の本田先輩が、この窮地を救うヒーローになるなんて、誰が想像しただろう。

世の中、本当に何が起るかわからない。人は見かけで判断してはいけないということ、身を持って学んだ。

もし、この理不尽な移籍が実行されていたら、サークル代表と看板女優、知名度アップ中の新進演出家のいない劇団は、つまり実質上解散状態になり、他の団員は見捨てられ消滅していくという構図が出来上がる。

本田先輩はそのからくりを暴き、未然に最悪の事態を防いでくれたのだ。

団員の引き抜きは別に珍しいことではないらしい。

この世界で生き残るためには、し烈な戦いを勝ち抜いていくだけの強い精神力が必要だということは、よくわかる。

だからと言って、このような汚い手を使うのは到底許されないこ

と。

自分の願望を叶えるために仲間を陥れるだなんて、卑劣極まりない行為だ。

普段何も言わない本田先輩が、怒りを露わにしてその夜の話し合いを中断させると、自分は是定と仲介役の大物と言う名の黒幕に話をつけるから、里中を頼む……とそう言って、遙に先輩を託したという。

思いつめたようにうな垂れる里中先輩を、到底一人その場に残しておくわけにもいかず、彼女を落ち着かせるためにもう一軒店に付き合ったあと、遙の家に彼女を連れ帰ったということらしい。

放っておくと、どこかから身を投げかねないほどに憔悴しきった里中先輩の様子を目の当たりにした遙は、家に連れ帰ることしかもはや手立てはなかったのだと、やなっぺが力説する。

わたしが出て行った後、遙の家にやって来た本田先輩に、彼女を連れ帰ってもらったということだ。

それ以降も遙は、他の団員と連絡を取ったり、本田先輩ともう一度会って今後のことを話し合ったりと、朝まで東奔西走していたため、わたしのところに行けなかったと、声を落としていたらしい。

遙は最後まで劇団のことを考え、本田先輩との約束を守り通しただけなのだ。

とんだ茶番に遙自身も巻き込まれていたというのに、恋人に裏切られ茫然自失になっている先輩を助けるべく手を差し伸べた彼に、落ち度はない。

わたしはこの時、ふと、ある二つの点と点が結びつくことに気付いた。

本田先輩は里中先輩のことが好きなのではないだろうか。そして遙はそれを知っているのだ。

もしかしたら、遙は何もかも知っていて、夕べの茶番に臨んだのかも知れない。

元来、風来坊の本田先輩が、まるですぐそばで待機していたかの

ように話し合いの場に現れたことからしても、それは証明できる。
遥と本田先輩はこうなることをすべて予測していて、身体を張って立ち向かったのだらうか……。

それにしても、本田先輩って、いったい何者？ 気になるけど、やっぱり近寄り難い存在であることには変わりない。

ああ、やっぱり遥に会いたい。

さっきまであんなに怒り心頭だったのに、もう彼が恋しくなっている。

今すぐ会ってわたしの早とちりを謝りたい。

神様、お願いです。できることなら、直ちに彼のところへ。今すぐ彼の元へ連れて行ってください。

祈ってみたところで、そんな身勝手な願いが叶うはずもなく、遥への想いだけがどんどん膨らんでいく。

「……というわけ。まあ、柊が誤解するのも無理ないけどね。だって、きちんと説明しなかった堂野も悪いよ。でもあいつ、さうとう落ち込んでるよ。さっきまで、あんたのアパートにいたみたい。ねえ、柊。いい加減、あいつと一緒に住んでもいいんじゃない？ そうすればこんな騒動も事前に防げるんだし。雑誌のモデルの仕事とかやったら、また騒がれて、変な女にストーカーされるかもしれないし。そばにいてやりなよ。ね、柊？」

やなっぺの提案に、よっさんと沢木さんも、そうだそうだとわたしに訴えかけるような目を向ける。

わたしも昨日は、やなっぺの言うように、これからはずっと遥のそばにしようかと決めてマンションに足を踏み入れたのだ。

遥の潔白が証明された今、もう何も迷うことはない。

わたしはやなっぺに向かって、そうするよと深く頷いた。

「あいつから離れちゃだめだよ。あんたたちは、高校の時から、二人でひとつなんだからさ」

二人でひとつだなんて……。わたしは親友にそんな風に見られて

いたのかと思うだけで、顔から火が出そうになるほど恥ずかしい気持ちになった。

「なあなあ。あんたら一緒に住むってことは、同棲するねんなあ？　まじめそうな顔して、ごっつい行動派やん。もしかして親も公認なん？」

よつたんがこそこそとばかりに目を輝かせて訊ねる。

確かに大学内で、あの人同棲してるんだってと噂を聞けば、すごいなあと単純に驚くだろう。

ところが、わたしがやろうとしていることは、その人と全く同じなのだ。

でも、わたしにとっての同棲は、そんなにたやすいことじゃない。いくら遙が相手であっても、未知の領域はとんでもなく不安で怖い。そんなに簡単に実行できるとも思っていない。

それに、親にだっていつかは知られてしまう。とんでもなくぶ厚くて険しい壁が、常にわたしたちの前に立ちふさがっているのだ。

「まだ親には遙と付き合ってることは言っていないんだ。内緒なの。わたしはよつたんにそう答えた。すると隣ですつと神妙に話を聞いていた沢木さんが突然顔をあげ、驚いた顔をして、パチパチと瞬きを繰り返した。

「内緒？　秘密なんだ。それって、なんだかドキドキしちゃうし。許されざる恋ってやつだよな？　それで？　それでどうするの？」

沢木さんだったら……。許されざる恋とか、そこまで大袈裟なものじゃないんだけど。

「遙の家族とは親戚同士だし、なかなか言い出しにくくて。それに、皆も知ってのとおり、遙は朝日万葉堂の跡取り息子だから、ひとりっ子のわたしとの縁談は、彼サイドではあまり喜ばしい話じゃないんだ……。」

「なんか難しいこと言ってるうっ。でも要は柊ちゃん、それって玉の輿じゃないのお〜？」

屈託のない笑顔を振りまきながら沢木さんがそんなことを言ってくれるけど、朝日万葉堂の彼の祖父母とは、ずっと親戚づきあいをしてきたわけだから、玉の輿っていう実感はまるでない。

「おい、沢木！ あんたはほんまに目出度い人間やなあ。柊さんがひとりっ子つてとが大いに重要なところなんや。つまり、その一見まじめそうで地味なお嬢さん。実はごっつい資産家の娘さんなんどちがうか？ 東京でお菓子売ってる場合やあらへんねん。もしかして、堂野君の方が逆玉つてこともありえるんちゃうかなあ。うちの言つてること、違てる？」

このよつたんという人。全く持って油断ならない。

物事の真髓をきっぱりと言い当てる。追い討ちをかけるようにやなっぺが話を続けた。

「当たり前。よつたんの言うとおり！ この子の肩に蔵成家代々のしがらみが全て押し掛かっているの。何度か家におじやまさせてもらったけど、家はでかい、庭もでかい。蔵成家の敷地は、五万分の一の地図にしっかり書き込めるくらい広い。昔でいうところの大地主の娘だよ。その広大な敷地を、柊のお父さんと堂野のおばあさんが引き継いで守っているんだよね？」

そ、そこまでおっしゃらなくても……。そ、そのとおりです。

ただ資産家といつても、うちの場合、有価証券とか金銀財宝がざくざくあるっていうのは違って、あるのは全て土地と山ばかり。

動産ではないので、お金が有り余っている資産家さんとは全くわけが違う。

その土地を生かし、アパートやマンションを経営して資産運用……なんてものも、ほとんどやっていない。

都市計画案を持ち込まれても、父さんは軽はずみな返事は一切しない。

その決意は、その辺にころがっている岩よりも、ずっと固いのだ。逆に現状を維持するために費用がかさみ、自由になるお金は全くないし、両親もわたしもかなり切り詰めた生活を強いられているの

は隠しようのない現実だ。

おまけに、この土地をすべてわたしが引き継いだ時には、相続税というのを払う必要があるらしい。

その時に、かなりの土地を手放さなくてはならないだろうと、つい最近、父さんが教えてくれたばかりだ。

そんなことも知らず、沢木さんが拍手までして喜んでいる。

「すんごーい！ 今度、ひいらぎちゃんの家遊びに行きたいな。よろしくっ」

「いつでもどうぞ。両親も、遙のおばあちゃんも、きっと喜ぶよ」
もちろん、社交辞令ではない。

部屋はいっぱい余っているし、遙のおばあちゃんは、人が訪れてくれるのを誰よりも楽しみにしている。

この人たちと話をしているうちに、すっかり穏やかな心を取り戻したわたしは、もう昨日のことなんて、全て忘れてしまったと思えるほど、気分が軽くなっていった。

ねえ、遙。どうやら、この騒動がきっかけで、わたしに新しい友達がいっしょに二人も増えたみたいだよ。

これぞまさしく、怪我の功名って言うんだらうね。

10・怪我の功名（後書き）

ネット小説ランキングPG12恋愛部門にて、昨日（2007年1月22日）、初めて1位になりました。
みなさま、本当にありがとうございました。

11・恋の遍歴

やなっぺの飲みっぷりは豪快だ。

胡坐をかいて、片手を腰にあて、ぐびぐびと喉を鳴らして缶チューハイを飲む。

もうハタチを迎えているのに、小柄で童顔なやなっぺは、つい数日前に居酒屋で未成年の疑いをかけられ、悔しい思いをしたと言っ
て嘆いていた。

よったんは騒がず焦らず淡々と、いつの間にかやなっぺを上回る勢いで飲んでいる。

アルコールは全くダメなわたしと、美容のためにアルコール断ちをしている沢木さんは、ジュースとミネラルウォーターで仲間に加わる。

宴もたけなわといったところだろうか。

すっかり初対面の二人と打ち解けたわたしは、いつの間にか、沢木さんの恋愛談義に聞き入っていた。

彼女は来るもの拒まずのタイプらしく、中一の時に初めて彼氏が出来てから先月まで、のべ十八人の男性と付き合った経験があるという。

嘘のような本当の話だ。今はフリーなんだけど……とがっかりした声を出し、彼氏募集中であることを何度もアピールしていた。

沢木さん曰く、一ヶ月以上彼氏がないのは、十二才の時以来初めてのことらしい。

世の中にはすごい人がいるものだと、ある意味尊敬の眼差しで沢木さんを眺める。

「で、ひいらぎちゃんは、堂野君で何人目？」

えくぼのできる、色白の沢木さんのため息混じりに見ていたら、突然そんな質問が降って来た。

つまり、今までに何人の人と付き合ったのかと訊かれているのだ。

答えるまでもないが、やっぱり言わなきゃだめなんだろうか。
沢木さんの十八分一。わたしは目を逸らしながら、遙だけだよと力なく言った。

「えええーっ！ ひ、ひいらぎちゃん、堂野君としか付き合
ったことないのお？ うっそー。信じらんない……」

沢木さんの驚きようは尋常じゃなかった。わたしって、そんなに
変わってるのかな？ ちよっとシヨックだ。

だって本当なんだもの。嘘をついても仕方ないし。
生きた化石とも言われかねない、この身持ちのよさ。

美人でもないし、男性に対して気の利いた言葉ひとつかけられな
いわたしの場合、次々と簡単に相手を見つつけられる技は残念ながら
持ち合わせていなかったってことだ。

どれだけ記憶を辿ってみても、華やかな話といえば、中学の時の
大河内くらいしか思い浮かばない。

それだって、告白されたわけじゃない。そうなる寸前で、部屋に
押し入ってきた遙に阻止され、大河内の気持を聞かないまま今に至
るのだ。

高校の時は、同級生と先輩の合計二人に付き合っ
て欲しいと言われたけど、もちろん遙がいるので断った。

あっ、そうなんだ……と信じられないくらいあっさりと引き下
った二人。

あの時、彼らが本気だったのかどうかは、今さら確かめようもな
い。

わたしの青春は、誰が何と言おうと、見事に遙一色なのだ。

大河内は、中学の同級生で、超イケメンの人気者だった。

彼とは中二の時に同じクラスになったのを機に、気の合う仲の
い友人として、学校でよく話をした相手だ。

その彼が今、東京に出てきている。

一浪して都内の公立大に入学したのだ。

先日バイトしているバーガーショップに、客として突然わたしの

前に姿を現した。

もちろんすぐに彼だとわかり、相変わらずのイケメンぶりに目の前がチカチカして、目のやり場に困ったのだけど。

向こうもわたしが店で働いていることは全く知らなかったようで、かなり驚いていた。

バイトが終わった後、待っていてくれた大河内と少しだけ話しをして、お互いの近況を伝え合ったあとすぐに別れた……なんてこともあった。

でもなぜか後ろめたくて、遥には黙ったままだ。

遥の大河内への確執は相当な物だったので、怖くて言えないというのが、本心だったりする。

大河内はこの春、わたしの行ってる大学も受けたらしいけど、不合格だったので公立大学の教育系の学部に入ったと言っていた。

何でも卒なくこなして、オールマイティーな大河内が不合格だなんて、全く信じられなかった。

もちろん難関な学部を狙っていたみたいなので、同じ大学と言っても、わたしとは比べようがないだけどね。

でも、違う大学で良かったと胸を撫で下ろしているわたしがいる。だって一緒の大学なんてことになっていたら、遥がわたしから一時たりとも目を離さなくなりそうだもの。

遥にかまってもらえるのは嬉しい反面、とんでもなく窮屈な生活をしいられるところだったのだ。

大河内には悪いけど、不合格でよかったと本当にそう思う。

わたしが遥一人としか付き合っただことがないという話で盛り上がっている、やなっぺが突然割り込んできて右手を挙げ、選手宣誓のまねを始めた。

「みなさん！ 終で驚いてはなりません！ あたしをお忘れではありませんか？ 今まで二十年。彼氏いない歴とも重なる二十年生きてまいりましたやなっぺであります！ 何を隠そう、今まで彼氏なんぞはいたためしがございませんっ！」

真つ赤な顔をして、熱弁を振るつやなっぺに、うそー！ ありえない！ と、沢木さんたちが叫ぶ。

やなっぺは男友達が結構多くて、いつも出かける相手は男性なのに、そういうえば本命が誰という話は聞いたことがない。

「あんだ、ホンマに誰とも付きおつてへんの？ 知らんかったわ。男友達はたくさんおるみたいやのに、意外やなあ。高校時代とかも誰もおらへんかったんか？」

よったんはやなっぺの方を向きながらも、視線だけはわたしを捉え、何かを訴えていた。

高校時代の同級生であるわたしに、やなっぺの過去を暴露せよと、無言の圧力をかけている目のようにも見える。

「こらこらよったん。柊に聞こうつたつて、ない袖は振れないからね。高校生の時だつて、誰もいないつて！ ないない！ 絶対にいないよ！」

やなっぺから先制攻撃されたわたしは、口をつぐむむしかない。

「あんたら、何か隠してるやる？ なあ、みんな言うてるやんか。うちかつて、奥さんのいてる人も含めて、四人と付きおつたつて教えたんやから。次はやなっぺ、あんだが言う番やで。さあ、言うてみ」

「だから、本当に何もなかったつてば」

「あんたはもうええ。酔つ払いは引つ込んどき。なあなあ、柊さん。遠慮せんでもええから、やなっぺのこと教えて。この子な、人のことばかりあれこれ世話焼くくせに、自分のこと、何も言わへんねん。絶対、何か胸に秘めてるやる？」

「ええ、まあ……」

よったんの言うことも当たっている。わたしはずっと高校時代のやなっぺを見ていたから、当時の恋愛模様もすべて知っているけれど……。

やなっぺの純粋な初恋の気持が無残にも打ち砕かれただなんて、やっぱり言えない。

わたしが板ばさみになつて困っているのを感じ取つたのか、やなつpegが、よつこらしよと座り直し、重い口を開いた。

「もう、ホント、よつたんには負けたよ。あたしの過去話なんて聞いたつて、ちつとも面白くないのに……。よつたんにも、沢木にも言つたことないけど。あたしは高校時代の初恋の人に、恋する心を全部奪われてしまったのであります。よつて、現在進行中の恋もなければ、今後も恋愛する予定もなしという、お先真つ暗な青春の日々なのです！」

酔っているのか、正気なのかわからないけれど、やなつpegは、はつきりとみんなの前でそう言つた。

藤村以上の男はなかなかいないと常々こぼしていたことは、やっぱり冗談なんかじゃなかつたんだ。

「へえー。やなつpegつて、意外と純情乙女だつたんだあ。てつきりあたしと同じで、男、とつかえひつかえやつてんのかと思つてたのにさあ。でも、その初恋の人つて、なんかあ、すつごく気になるうゝ。ねえねえ、ひいらぎちゃんつてば。知ってるんでしょ？ やなつpegの初恋の人。どんな人なの？ 教えてえ」

結局わたしが答えなきゃならないんだよね。

やなつpegが自分から言つたことだし、少しくらいなら藤村のことを言つてもかまわないかな。

わたしは、背が高くてやんちゃな藤村を思い浮かべ、沢木さんに話し始めた。

「あの……。背が高くて、スポーツマンで。とつてもユニークな人だよ」

やなつpegが安心したようにふつと小さくため息をついたのがわかつた。

わたしが何か余計なことを言つても思つたのだろうか。

大丈夫だよ。やなつpegが辛い思いをするようなことは何も言わないから、安心して。

「へえ、そうなんだ。意外とノーマルなんだね。で、その人、カツ

「コいいの？」

沢木さんはこういった話が大好きみたいだ。目を輝かせて、身を乗り出してくる。

でもカッコいいかと訊かれても、どう答えればいいのか。確かに、バスケットをしている彼はカッコよかったけど、遥の方がもっとカッコいい。

あつ。いけない。これだとのろけ話になってしまふ。客観的に見た藤村をイメージすればいいんだよね。

なら、えーっと。

「多分、その……。カッコいい人だと思うよ。いや、誤解しないでね。わたしとやなつぺの初恋の彼は幼なじみだから、あまりそういう目で見ることがなくて。性格はさっぱりしてて、頭も良くて、中学の体育教師目指して頑張ってる。本当はバスケのプロの選手になりたいみたいだけど、実現するのは難しそうだからって言った。あつ、この話は彼から直接聞いたわけじゃなくて、遥から聞いたんだ。彼と遥は一番の親友同士だからね。わたしもやなつぺをずっと応援してるんだけど……。うまくいってけると……。いいなって……」

わたしの話を最後まで聞いていたよつたんと沢木さんが、何かを悟ったのだろうか。あれつきり固く口を閉ざして、何も訊ねてこなかった。

やなつぺは、一ヶ月間だけ藤村と付き合っただけだけど、それはカウントされてないんだ。

やなつぺの一方通行だったからかもしれない。

藤村は今でも夢美のことが好きなんだろうか。

わたしの中学時代の親友だった夢美は、短期大学音楽部で声楽を学んでいる。

最近全く夢美と会っていないので断定はできないが、夢美が藤村になびくことはまずないだろうと思っている。

高校生の時、藤村から二度目の告白をされた夢美が、はつきりとそう言っていたから。

夢美とは正反対の性格のやなっぺだけど、藤村の心のどこか一部にでも入り込む余地はないのだろうか。

一途で友達想いなやなっぺ。芸術的なセンスも持ち合わせ、その才能は計り知れない。

少し誤解を招く恐れのある男性関係にさえ目をつぶれば、やなっぺこそ藤村にぴったり相手だと思っただけ。

飲んで食べて。しゃべり疲れたのか、だんだんみんなの元気がなくなってきた。時計を見ればもうすぐ深夜の零時だ。

眠いけれど、お世話になってるわたしがお礼の意味もこめて、後片付けを引き受けるべきだろうと決意する。

ここはわたしに任せてと言って、みんなは先に寝るように促した。「そんなあ、ひいらぎちゃんだけをお願いするなんてダメだよ。あたしも手伝う」

「そやそや。みんなでやったら、早く片付く。さあ、やなっぺも目開けて、働きゃ」

そう言っつて、よったんが船を漕ぎ出したやなっぺの背中をパンと威勢よく叩いた。

とろんとした目をこすりながら、やなっぺがよたよたと立ち上がる。

すると……。

玄関のチャイムが鳴ったのだ。

一気に覚醒したやなっぺを筆頭に、みんなで怪訝そうに顔を見合わせる。

静まり返ったりリビングに、もう一度チャイムが鳴り響いた。

よったんがすつと立ち上がり、リビングの壁に取り付けてあるインターホンの受話器を取る。

そして、ゆっくりとそれを耳にあて、外にいる誰かと話し始めた。

12・帰ろう、二人の場所へ

インターホン越しに外にいる人物を確認したよつたんは、口の端を少し持ち上げるようにしてニヤリとすると、わたしに向かつて玄関に行けと目配せをする。

わ、た、し？ 声を出さず、口の形だけでよつたんに訊ね返す。

どうということなのだろう。わたしが玄関まで出向く任務を仰せつかったのは、多分見間違いではなさそうだ。

「もしかして、堂野？」

すっかり酔いも醒めてしまったやなっぺの半信半疑の問いかけにも、よつたんは顔色ひとつ変えず、早く行けと手でわたしを追いやるジェスチャーを繰り返す。

こんな時刻に本当に遙が来るだろうか？ それに、仮にこの住所を知っていたとしても、真夜中に知らない家を探すのは大変なことだ。

まさかそんなこと、あるはずがない。

信じられない気持のまま玄関にたどり着いたわたしは、立て掛けである大きな絵の中で横たわる女性に、じっと見られているような不思議な感覚の中、大きく深呼吸をして、そつとドアを開けた。

「はるか……」

そこに立っていたのは、紛れもなく、わたしの遙だった。暗闇の中、真っ直ぐにわたしだけを見て、そこにいた。

「榕。やっぱりここだったんだ。……迎えに来たよ。今から駅に折り返せば終電に間に合う。柳田に礼を言って帰ろう」

髪には櫛が通ったあととはなく、服も昨夜のまま。あれから寝ていないのか、幾分瞼が腫れぼったく見える。

やだ。なんで遙が、ここにいるのだろう。

わたしは徐々に鼓動が早くなるのを感じていた。

そんなにわたしを見つめないで。ドキドキして胸が締め付けられて……。涙がこぼれそうになってしまっ

いつもよりずっと優しい目をした遙が、帰ろうと言って、そっと手を差し伸べてくれる。

「う、うん。わかった……」

わたしはこくりと頷き、なつかしいその手をそっと握り締めた。

そう言えば、こっやって遙の手を取ったのは、何日ぶりだろう。

いや、何週間ぶりかもしれない。

駅から、夜道を歩いてここまで来てくれたのだろうか。わたしの手を包み込む彼の手が、とても冷たく感じる。

それでも、握り締めるその手が愛おしくて、ずっとそのまま離したくなかった。

その時、背中の後ろ側で、ガタンと鈍い音がした。

びっくりしたわたしは、慌てて手を離し振り返る。すると……。

やなっぺを先頭に、沢木さん、よったんの順に三人が階段状に重なり合ってリビングのドアのすき間から顔を出し、息を潜めてこっちを見ていたのだ。

その様子に気付いた遙も、驚きのあまり口をぽかんと開けたまま、その場で棒立ちになっていた。

「も、も、もしかして、堂野君ですかあ？ きゃあああっ！ すてき〜い。ほ、ほんものおーっ！」

沢木さんがやなっぺにのしかかるようにして叫んだとたん、重みに耐えられなくなったやなっぺが押しつぶされて沈み、続いて後の二人もギヤーと言う悲鳴とともに、団子のようになって廊下に倒れ込んだ。

「え、えらい恥ずかしいところ見せてしもて、ごめんな。なあなあ、

堂野君とやら。そんなところに立つたらんと、まあ、上がりいな。うるさい人間ばかりで悪いけど、ゆっくりして行って。やなっぺの友達は、うちの友達や。遠慮せんと、さあさあ……」

「ひいらぎちゃんもなんとか言つてよ。堂野君、カチカチになつてるしい〜。せつかくだもん。すぐに帰るなんて言わないで……」
よつたんと沢木さんの迫力に押される形になつたわたしたちは、いつの間にかリビングに連行されていた。

帰るタイミングを失つたまま、まるで針のむしろに座らされていくような居たたまれない表情を浮かべて、遙がみんなの前で小さくなっている。

そして、おもむろに顔を上げ、やなっぺに向かってペコツと頭を下げた。

「柳田、悪かった。おまえに力になつてもらつたおかげで、柊もこうやって会えたし……」

「堂野つたら、ほんとうに人騒がせだよ。まあ理由が理由だから、今回は大目に見るとしても。今度柊を泣かせたら承知しないからね」「わかつてる。二度と同じ過ちは繰り返さないと誓う」

遙は首の後ろをぽりぽりと掻きながら、照れくさそうにやなっぺをちらちらと窺うようにして見ていた。

「そうそう、あそこにあんたの例のポスター貼つてあるんだけど。今日のお詫びのしるしに、サインでもして行ってよ。ここにいる、よつたんも沢木も、あんたのファンなんだったさ」

頬を赤く染め、うふふと笑いながら、沢木さんがもじもじしている。

突然目の前に貼られている自分のポスターを見せられて、目のやり場をなくした遙は、よつたんと沢木さんに申し訳なさそうに軽く会釈すると、大きな身体を小さくしてその場に縮こまってしまった。
「やなっぺ。あんたが厳しい事ばかりゆうから、堂野君、えらいちっちゃなつてるで。でもほんまに男前やなあ。ポスターよりほんまもんの方がずつとええわ。今度デッサンのモデル頼もつかなあ。」

ギリシヤ神話の石膏像並にきれいな横顔してはるやん。柊ちゃんは小さい時からこの顔見てたんやもんな。そら、その辺の男見ても、ときめかへんはずや」

よったんが、両手の人差し指と親指で四角い枠を作り、その中から遙を覗き見て、もうすでにデッサンのアングルを構築し始めているようだ。

「ほんとほんと、ステキい。堂野君つて着物とかも似合いそーだよね。今、花火をモチーフに構想ねつてるところだからあ、そのモデルになつてくれないかなあ。そうすれば、夏の日本画展も、これでいただきなんだけどお！」

なんかそれぞれに盛り上がっているみたいだけど、わたしたち、いつになったら帰らせてもらえるんでしょうか。

時間がどんどん過ぎてゆき、この家の三人のテンションとは裏腹に、わたしと遙の気力は下降の一途だ。

「こら！ よったんに沢木！ 自分の都合ばかり言うな！ 堂野、ごめん……。こいつら何かというと、すぐ、自分の作品に結び付けようとするんだから。ところでお二人さん。この後、どうする？ もう終電、間に合わないけど？」

やなっぺがいたずらっぽ目わたしと遙を交互に睨む。

「なら、タクシーで」

遙が、ジーンズのポケットを探りながらそう言った。

ここからわたしのアパートまでだと、いったいいくらになるのだろうか。

東京の地理にはまだあまり詳しくないが、きっと一万円近くになると思う。遙のマンションはそれよりももっと遠いのだ。

サークルを優先するため、わたしよりバイトをセーブしている遙に、そんな余裕があるはずもなく。

「学生の分際でタクシーとか、無理言ってるんじゃないわよ。へへ……。しょうがないなあ。今夜はここに泊まって明日帰ればいいよ。あたしはこのリビングに寝るから、柊と堂野はあたしの部屋

を使つて」

「あつ、いや。そういうわけにはいかないよ……」

財布を覗き込んだ遙は、あーと弱々しい声を漏らし、もう一度顔を上げ、やなっぺに向かつて言った。

「じゃあ、ごめん。今夜だけ、世話になるよ」

わたしは、よつたんと沢木さんにも、ごめんねと謝つた。もちろん二人とも、今夜だけといわず、明日もあさつてもずっと大歓迎だと言つてくれた。

「柳田。俺はここでも廊下でも、どこでもいいよ。これ以上みんなに迷惑かけられないし。おまえの部屋で柵を預かつてくれればそれでいい」

遙の言う通りだと思う。わたしもリビングで寝てもいい。ところがやなっぺが何やら剣幕の様子なのだ。

「何言つてるのよ。あんたたちは、もう充分迷惑かけてんだから、ごちゃごちゃ言わないであたしの言うとおりにしなよ！ 二人とも積もる話もあるだろうしさ。ここだと、話し声も何もかも筒抜けだよ？ その方が、ずっと迷惑だからね」

鼻息も荒く、いつきにまくし立てる。

「あ、ああ。そうだな。わかった、そうするよ。ありがとな、柳田……」

日頃の威勢のよさはどこへやら。やなっぺにかかると、遙もタジタジだ。

結局、わたしと遙は今夜ここに泊まらせてもらうことになった。

一組しか客用布団がないからと意味ありげにニヤつくやなっぺ。

余分な布団なんてあたしのところもない、うちも持ってへんとあれだけ親切だった沢木さんとよつたんまでもが知らん振りして、それぞれに部屋に立ち去つて行った。

も、もしかしてわたしたち。三人に嵌められた？

まさか、まだ遙とはそんな関係じゃないとは言えず、たった一組の布団が敷いてあるだけのやなっぺの部屋に当然のごとく押し込められ、気まずい雰囲気のまま、布団をはさんで遙と向かい合ってた。聞いてくれた？」

「……夕べはほんとに悪かった。俺も軽率だったよ。柳田から、話聞いてくれた？」

沈黙を先に破ったのは遙だった。

「うん。聞いた」

「そうか……。俺も夕べはいっぱいばいばいで、おまえの気持も考えず。……あんなことになって、ごめん」

正座したままの遙が、わたしの目を見て言った。

「わたしも、もっと遙のことを信じてあげれば良かった。なんか、気が動転しちゃって、悪いようにしか考えられなくて……。電話にも出なくて、ごめんね」

「ああ。あれは正直キツかった。マジでおまえを傷つけてしまったと思った。このままおまえと別れるなんてことになったら、俺、是定先輩を一生恨んでやるって、そう思った。もうこんなことは二度とごめん」

「里中先輩は？ あれからどうなったの？」

「サークルの女性団員にずっと付いてもらってる。まだ、感情が安定してないらしい」

「そう……」

「なあ、柊」

遙が布団を乗り越えて、わたしの膝の上の手に彼の手を重ねてきた。

「前も言ったけど……。この先俺達、一緒に暮らした方がいいと思うんだけど。そうすれば、朝晩だけでも顔を合わせられる。もうこれ以上、おまえと離れているのは無理なんだ」

「う、うん。そうだね。わたしもそうしたいと思ってた。遙の言うとおりにする。一緒に暮らそ」

「ほんとに？ いいんだな？ 後になつて後悔するなよ」

「後悔なんてしないよ。遥とずっと一緒にいる」

「柊、ありがとう……。なあ、俺達つてさ、東京に出て来るまでは生まれてからずっと同じところに住んで、同じ空気吸いながら生きてきたんだよな。なのに、今、別々のところで暮らしてるほうが不自然なんだと思う。親にばれた時はきちんとケジメはつけるつもりだ。だから何も心配しなくていいから……」

遥の手がわたしの髪を優しく撫でてくれた。

絶対、あなたから離れない。何があつても遥のそばにいる。

わたしの心は、もう二度と揺らぐことはなかった。

久しぶりに遥の腕に抱きしめられて、わたしの気持ちは本来居るべきところにすとんと落ちたような安堵を覚える。

何度も何度も唇を寄せ合い、さつきから次々と零れ落ちるわたしの涙の味がするキスは、まだまだ当分終わりそうにない。

でもここはやなつぺの部屋だ。それ以上は……またこの次。

幸せいっぱいなわたしとは対極にあつたらしい遥は、この時の史上最悪な理性との戦いを、後日苦しそうに語ってくれた。

そんなこと言つたつて。わたしは何も……知らないんだもの。

わたしは遥の腕の中で、いつしか深い眠りに落ちていった。

12・帰ろう、二人の場所へ（後書き）

登場人物が多く大変読み辛かったと思います。

簡単に人物紹介をしておきますので、参考になさって下さい。

里中先輩　遥の所属する演劇サークルの1年先輩。美人で、人気のある女優。

是定先輩　同じく演劇サークルの1年先輩。演出家で人望も厚く、柘と遥も何かと世話になっている。

本田先輩　同じく演劇サークルの1年先輩で、1匹狼的存在。なぜか遥が信頼を寄せている感じである。

やなっぺ、よつたん、沢木　美大生3人組。人情にあふれた若者。

13 薔薇色の日々

薔薇色の人生なんて、本当にあるのだろうか。

その響きはどこか嘘っぽくて、誰かが勝手に美化して言っているだけ……と思っていた。つい最近までは。

小鳥のさえずりが耳に心地よく響く、梅雨の晴れ間の午前。

路地の奥から漂ってくる、おいしそうな焼き立てのパンの香りで、こんなにも幸せな気分になれるだなんて。

コンビニのアルバイトの店員さんにお釣りをもらったあと、わたしの方からどうもありがとうと言ってにっこり笑顔まで返してしまふ。

あと一步のところまでドアが閉まってしまい、八分後の電車に乗ることになって、ちっともイライラしない。

学食のスパゲティーセットのサラダにトマトが付け忘れられていても、まあいいかと許してしまう。

雨が降り続いても気にならない。洗濯物なんて、そのうち乾くんだし……なんてのん気なこと言ってる。

いったいどうなってしまったのだろう。自分でもおかしくなってくすつと笑ってしまった。

街を歩けばいろいろな人とすれ違う。

学生に主婦やサラリーマン。OLに熟年の夫婦に若いカップルも。みんなわたしと同じ気持ちなんだろうか？

こんなにも幸せな気分を味わっているのに、まるで何も感じていないかのように、すました顔をして日常生活を送っているの？

そんな心の中の喜びなんて、微塵も表に出さないうち世の中を生きている人たちを、尊敬の眼差しで見ってしまう。

遥と暮らし始めてもうすぐ二ヶ月になる。

今まで幸せだと感じていたのはいったい何だったのだろうか。

わたしとしたことが、あまりにも幸せの本当の意味を知らなかったのではないだろうか。

遥と恋人同士になった時や大学に合格した喜びよりも、今感じている幸福感は何物にも勝る。

果たして、こんなに幸せでいいのだろうか。はたまた、夢を見ているのではないかと、何度も自分の頬をつねってみたりもした。

こんな状況に未だに慣れないでいるわたしは、ふと不安になることもある。

遥の学生マンションを引き払う時など、まさに、生きた心地がしなかった。

彼の親がマンションの賃貸契約の保証人になっている都合上、遥がマンションを出ることは、時間の問題で実家にも知らされるだろうと覚悟はしていた。

引越しの理由や次に住む場所を知るのは、親としては当然の権利だ。

わたしと暮らすなんてことは、無論言えやしない。もう少し大学に近くて便利なところが見つかるまで、友達の家に身を寄せるなどと適当に言い訳をする遥を横目で見ながら、わたしの背筋が凍りついたのは言うまでもない。

彼の劇団サークルの仲間うちでは、友達の所に転がり込むのは日常茶飯のことで、すぐにももってもらいアリバイを作れるから心配ないと自信満々にのたまう。

学生課には祖父母宅を自宅として届けているので、宿無しでも全く問題ないと実にあっけらかんとしているのだ。

遥の母親である綾子おばさんからわたしに電話があったのも、ちよつとこの頃だった。

遥が大学にちゃんと行ってるのか、はたまた良からぬ友達にそそ

のかされてるのではないかとかなり心配しているようで、何か変わったことがあったら、遙に内緒ですぐに知らせて欲しいとまで言われた。

何かあったら……。

もつすでにその何かがあったのだけれど、わたしと一緒に暮しているから大丈夫だよとは、さすがに口が裂けても言えなかった。

後ろめたさで、冷や汗がたらりと数滴こめかみを伝ったのが、まだまだ記憶に新しい。

遙がわたしのアパートに腰を落ち着けてからは、まるで新婚生活ごっこのような日々だけれど、わたし達には今まで積み重ねてきた長い歴史がある。

お互いの食べ物の好みも、家でくつろいでいる時の一番だらしない姿も、もちろんわたしのスッピンの顔も全て知っての上での同居だ。今更取り繕うことなど何もない。

こんなに気楽な同居相手は、世界中のどこを探しても見つからないだろうと思うほど、遙との暮らしは良好だ。

先週から読者モデルの仕事も始まり、劇団と仕事、そして学校と目まぐるしい日々を送っている。

にもかかわらず、夜になれば必ず遙と一緒に過ごせるので、この決断は間違っていないかったと断言できる。

今日も遙は、仕事で遅くなる。

わたしは買い物のおと夕食の準備を手早く済ませると、次の講義でテキストになっている宇治拾遺物語を予習することにした。

高校でも古文の授業で少しは習っているのだけど、大学では進み方が半端なく速く、内容の掘り下げ方も深い。

それに、今昔物語など他の物語との比較も行なわれるので、目を通さなくてはいけない資料が山積み状態になっているのだ。

事前の予習なしでは到底講義は理解不能なので、結構こつやっつて勉強にとられる時間も多い。

遊びとバイトばかりで、のん気な大学生が羨ましいと世間の人か

ら言われるけど、実は意外にもしつかりと勉強しているのだ。

電子辞書と古語辞典を駆使して必死にノートに現代和訳をしてゆくと、それなりに話の全容がつかめてくる。

現代語訳の本もたくさん出回っているけれど、こうやって自分でひとつひとつ確かめながら解読するのがなかなかいい。

編み物の目が積み重なってセーターが仕上がっていくのと同じで、文章を紐解いていく過程が楽しくて、最後まで訳せた時の喜びは登山で山頂まで上りきった時の達成感にも似ている気がするのだ。

語学も同じだ。英語の勉強にも通じるものがある、わたしは根っからこういつた種の学問に向いているのだと思う。

いつの間にか夜の十一時を過ぎてしまった。遙はどうしているのだろう。まだ帰ってこない。

メールで帰るのが遅くなるとは知らされていても、顔を見るまではそわそわと落ち着かない。

玄関のチャイムが鳴ったのはそれから三十分ほど経ったところだった。

わたしは台所の椅子の位置からほんの四、五歩ほどのところにある玄関に駆け寄り、ドアを開けた。

「ほれ、おみやげ。おまえの好きな肉まん。階英出版の牧田さんからの差し入れだ」

まるで飲んで帰ってきたどこかの父親が、出迎えた家族にみやげの包みを差し出すような光景が、玄関先で繰り広げられている。

玄関のドアが閉まると同時に、遙の唇がわたしの右頬を捉えた。そして彼の腕に抱きとめられる。

「……柎、ただいま」

たった半日離れていただけなのに、耳元をかすめる彼の声に胸が震える。待ち焦がれた遙が、やっと帰ってきたのだ。

撮影のあった日の遙は、まるで別人のようだ。いつものボサボサ頭と違って、ワックスが効いているのか形よくまとまっている。

眉も整えられて、目元がきりりと引き締まり、視線が絡むだけで

心臓が飛び跳ねそうになる。

わたしは遙に気付かれないように時おり彼の横顔を見て、こっそりと胸をときめかせていた……つもりだったけど。

「ばーか。何見てるんだ。腹減った、メシにしようぜ。おまえもまだなんだろう？」

「う、うん」

こんなに近くにいて盗み見なんかできるわけがないのだ。わたしは小さく舌を出して、えへへと笑ってごまかした。

「じゃあ、先にシャワー浴びてくる」

そう言っただけの数秒で、風呂場に入ってしまった。

まさしく風呂場という表現がぴったりなタイル張りのレトロな浴室に初めて入った時、遙はとてもびっくりしていた。

今ではもう慣れたのか、入ったついでに掃除までしてくれるようになり、とても助かっている。

その間に味噌汁を温めなおし、おかずを並べ、茶碗にご飯をよそった。

牧田さんというのは、遙の仕事の担当者だ。

キャリアアウーマン風の熱血編集者なんだけど、いろいろ話を聞くと結構いい人だったりする。

てつきり二十代後半くらいで独身だと思っていたが、実はもう三十代後半で子供が三人もいるという。

なのにスタイル抜群で、服装のセンスも申し分ない。短すぎないショートボブが知的な顔立ちによく映る。

大学の研究室勤務の旦那さんを全面的にサポートするため、妻である牧田さんが精力的に仕事に励むことで家計を支えているとも聞いた。

遙はそんな牧田さんに一目おいている。

所詮学生の分際で、小遣い稼ぎで仕事をしている遙がどんなにあげても、牧田さんには敵わないのだと気付いたみたいだ。

遙が一人暮らしをしていると思っっている牧田さんは、仕事が終わるたび、何か食べるものを遙に持たせてくれる。

男子学生の倅しい食生活を熟知しているかのように、彼女の気遣いはいつも細やかだ。

遅めの夕飯に、コラーゲンがたっぷり含まれているという特製肉まんを加えて賑やかな食卓を囲んだ後、遙に後片付けをまかせ、今度はわたしがシャワーを浴びに風呂場に向かった。

髪をタオルで拭いて、ドライヤーをかける。たっぷりの化粧水をパタパタと顔につけて馴染ませ、彼が待つベッドに、もそもそもぐりこんだ。

遙が持ってきたセミダブルのベッドは、二人で寝るにはきつと狭いはずなんだけれど、今のわたしたちには丁度いい。

遙に腕枕してもらいながら、大学であったことやアルバイトの話報告する。

いっぱい聞いてもらいたいのに、途中で遙のペースに巻き込まれ、気がつけば自制しなくて良くなった彼に思うがまま抱きしめられ、知ったばかりの快樂の波に呑み込まれて行く。

瞼から頬を伝い、首筋に降りていく彼の唇のかすかなぬくもりが、わたしの呼吸を乱れさせる。

それを合図に、よりいっそうお互いのすべてを確かめ合うのだ。

こればかりは、いくらわたし達の付き合いの歴史が長くても、到底知り得なかったこと。

遙もどこでどうやって覚えたのか、小説の中だけの装飾的な描写だと思っていたあれこれが、まさしくわたしの身に振りかかってくるのに驚愕する。

本や映画で培ったわずかばかりの知識を総動員して挑むそれは、わたしの想像の域を大きく超えていて、恥ずかしさのあまり逃げ出したくなることもある。

日に日にエスカレートしていく遙に、おろおろするわたし。きつ

と何かの間違いだ。遙がそんなことするわけがないとぎゅっと目をつぶり自分自身に言い聞かせ、嵐が過ぎるのをひたすら待つのだ。そんなわたしの醜態をおもしろがる遙は、きつと悪魔にちがいない。

今夜もまた、いつものようにわたしの話なんて最後まで聞かずに暴走するんだろうな、などと考えをめぐらせながら彼に寄り添っていると、頭の上の方からすーすと寝息のようなものが聞こえてくる。

次第にそれは規則正しいリズムを刻み出し、遙が眠ってしまったのを知る。

つい今まで、あちこちをさまよっていた羞恥心のかけらもない彼の手も、急に力が抜けたようになり、わたしの身体にその重みを預けるようにして動きを止めた。

こんなことは初めてだ。そんなに疲れているそぶりも見せなかったのに、すっかり寝入ってしまったている。慣れない仕事のせいだろうか……。

薄明かりの中、閉じられた彼の下目蓋にまつ毛の影が映し出されている。

幼い頃に見た遙の寝顔がいつしかそこに浮かび上がり、なつかしい気持で心が満たされていく。

わたしは彼を起こさないように、そつと腕枕をはずし、そして静かに目を閉じた。

遙の胸の上に置いた手から、彼の寝息のリズムが伝わってくる。いつしか誘われるようにしてゆるゆると眠気が襲ってくるのを、わたしは心地よく迎え入れていた。

薔薇色の日々が、こんなにもあっけなく終わりを告げるだなんて……。

何も知らずに、わたしは遙に身体を寄せて朝までぐっすり眠り

続けた。

14・謎の訪問者

部屋の中がすっかり明るくなっていった。カーテンの合わせ目のすき間から日が射している。

まぶしかったのはそのせいだ。

ちゃんと閉めたつもりだったのに、いつの間に？ それとも、夕べからこのままだったのだろうか。

雨戸がついていないので、カーテンの閉め忘れは、即、睡眠妨害につながる。

一人暮らしの時は慎重すぎるくらい戸締りもカーテンもきっちり確認して眠っていたのに、遥が一緒だと気が緩むのか、窓の鍵もかけ忘れることがある。

まだもう少し寝ていたかったのにといい、自分の至らなさを悔いる。

六月の朝は、随分早いうちから明るくなる。今何時だろう。学校に行く時刻はまだだろうと思いつつも、念のため目覚まし時計を手を取った。

まだ、十時だ。

なんだ、十時か……。

じゅう……じ……。

えっ？

う、うそ！ それって、まずくない？ それとも見間違えた？

わたしは時計のデジタル表示をもう一度見て時刻を確認し、ベッドの上に猛スピードで起き上がった。

寝ぼけていた頭もいっきにクリアになる。これは大変だ。

「はーるーかー！ 起きて！ 大変、十時だよ！」

わたしは大声を出しながら、隣でのん気に寝息を立てている同居人を揺すぶった。

「……なんだよー。るっせーなあ。うっう……ねむっ」

目を閉じたまま不機嫌な声を出す遙は、またすぐに頭を枕に預け、くたつと寝てしまった。

「ちよつと遙。起きて！ もうすぐ二限目が始まっちゃう。遅刻するよ！」

仕事がない時くらいきちんと学校に行かなければ、単位が取れなくなる。

わたしは心を鬼にして、遙をぐいぐいと揺さぶり続けた。

「痛つてえー！ 柎、いい加減にしてくれよ。今日の講義は、昼からだつて。前に言っただろ？ 教授が学会で休講なんだ。おまえも昼からなんだし、まだもう少し寝ようよ……」

あつ。そっいえばそんなこと言つてたっけ？

わたしは、なんだそうだったのかとほっと胸を撫で下ろし、遥とお揃いのストライプのカバーをかけた枕めがけて、パタンと倒れこんだ。

ああ、心臓に悪いよ。全く。

寝返りを打った遙は、わたしを横から抱きしめながら、再び規則正しい寝息を漏らし始める。

家を十二時過ぎに出れば間に合うから、あと一時間はこうしていても大丈夫だ。

掃除や洗濯を済ませてしまいたいのをグツと堪えて、疲れている遥のために、わたしも彼の腕の中でまどろんでいようと決めた。

初夏の陽射しは柔らかく、エアコンのタイマーが切れた室内は少しむっとして汗ばむけれど、タオル地のシーツがサラツとして肌に心地いい。

あれからわたしも少しウトウトとしていたのだろうか。玄関のチ

ヤムが鳴ったような気がしたが……。

オートロックなんて今風のおしゃれな設備は整っていないこのアパートには、家族で暮している住人も多い。

こうやって朝っぱらから、ありとあらゆる訪問者達がやってくる。どうせ何かの勧誘だろうと、もう一度鳴ったチャムも無視して、寝ている遙にしがみついた。

すると今度は、鍵穴をガチャガチャする音が聞こえてくる。

まさか、泥棒？ 学生が住んでいると目星をつけていて、外出中を狙った空き巣がやって来たのかもしれない。

わたしは息を潜めながらもこっそりと薄目をあけ、気配を窺う。へたに騒ぎ立てて、泥棒の気分を逆なでするようなことがあってはならない。

どうせここには、何も取るものなどない。すぐに退散するに決まっているなどと勝手な推測を思い描きながら、台所の向こうにある玄関を見た。

すると間もなくドアが開き、襖を開けたままにしている和室に向かって、すっと光が入り込んだ。

空き巣にしては落ち着いたしぐさの二つの人影がごそそと靴を脱ぎ始めた。

「柊……。いないの？ もう学校に行っちゃったのかしらね。勝手におじゃまするわよ……」

突然わたしの名前を呼んだ人影が、台所に入って来たのだ。

わたしはむくつと全身を起こし、その見覚えのある人物にしばし釘付けになった。

「か、母さん……。それに、おばちゃんも？」

わたしが起き上がったのに気付いたのか、二人の訪問者は、無遠慮にベッドが置いてある和室に近寄って来た。

「あら、柊。いるんじゃない！ いやだ。まだ寝てたの？ 今何時

だと思ってるのかしら。ほんとにこの子ったら」

わたしはとつさに夏掛け布団を隣の遙の頭をすっぱり覆うようにかぶせ、二人が足を踏み入れる前に自分から立ち上がって、台所の方に向った。

起きたばかりでふらつく足元をかばいながらも、どうにか二人の前にたどりつく。

まだ母さんたちは、何も見ていないようだ。

果たしてそんな小細工が通用するのか甚だ疑問であるが、ここはなんとかごまかすしか道はない。

わたしは遙がそのまま眠っていてくれることを祈りつつ、さりげなく後ろを振り返った。

……見えている。遙の足が。

なんてことだ。

夏掛け布団はサイズが小さめだから、身長のある遙の足先まで届かなかったのだ。

ど、どうしよう……。

わたしはひきつりながらも、母さんとおばさんに向かって、いらつしゃいと言った。

「返事がないから、もらってた合鍵使っちゃったわよ。実は今日ね、綾子さんのご実家に用があつて。それで早めに新幹線に乗って来たんだけど。先に柵のところへ寄らないと、学校に行っちゃうと思つて。間に合つてよかつたわ……」

母さんは、まだこの家の異変に気付いてない。

洗面所に立てている二本の歯ブラシも、食器棚にしまつてあるおそろいのマグカップや茶碗にも。

幸い、まだ洗濯物は干していない。玄関に並べている遙の靴は、不審者よけのダミーシューズだと、以前から母さんも了解済みだ。

まさか押し入れの中まで覗いたりしないだろうから、きつと大丈夫。

どうかこのまま無事に時が経ってくれますように……と願ったのもつかの間。

「どうしたの？　ねえ、柊。どこか具合でも悪いの？　顔色が悪いわ」

母さんが心配そうにわたしの顔を覗き込む。

隣の和室に置いてあるベッドが見えないように、母さんの前に不自然に立ちははだかるわたしは、どうみても挙動不審者だ。

目だって、合わせられない。

これはもう、限界かもしれないと思った時、追い討ちをかけるように、綾子おばさんがわたしの肩越しに視線を泳がせる。

そして口をぱくぱくさせて言った。

「お、お姉さん……。べ、ベッドに、どなたかいらっしやるみたいだわ……」

足を見たのだろうか。当然そのサイズは、女性のそれではない。

母さんが血の気の引いた顔でわたしを見た。

「ベッド？　いつの間にそんなもの買ったの？　どなたかいるって

……。ねえ、柊。いったい、どういうことなの？　誰か、寝てるよ

うだけど……」

何かが音を立てて崩れるというのは、まさしくこつこついうことを言うんだ。

心の中でガタガタと大きな音を立てて、何かがぺしゃんこに崩れるのを、確かに今、はっきりと聞いたのだ。

ばれた。

こんな状況でも冷静な意識がどこかに残っているだなんて驚きだ。すっかり立っている。信じられないくらい、ふんばって立ってる人間って、やっぱり、すごい生き物なんだ。

「あ、あのう。……ということなんで。ご、ごめんなさい」

わたしは遥の寝ているベッドに視線を動かした後、うな垂れるよ

うに頭を下げた。

でも冷静だったのはここまで。あまりの緊張感に次の言葉が出てこないのだ。

身体中が震えて、声にならない。

「柊。顔を上げなさい。そ、その……。どなたかは知らないけど、男の方……。なのね？」

顔なんて上げられない。わたしは下を向いたまま、うんうんと頷く。

「突然のことで、母さんもどうしていいかわからないけど。とにかく、わけを説明してもらわないことには……」

もちろん、ちゃんと説明する。わたしは今にも爆発しそうな心臓の鼓動を全身に感じながら、ゆっくりと顔を上げた。

「母さん。おばちゃん。あの……。実は、その……」

わたしが口を開けたとほぼ同時に、布団がもこもここと動いた。

そして、顔を覆っていた布団を威勢よく跳ね除けた何も知らない同居人が、声高らかに叫んだ。

「あつちいーっ！ 息苦しいじゃねえか！ ……」

「たく、柊。なんで布団なんか、かけるんだよ。まだもうちょっとゆっくりしよう……せ……って。……誰？ ……誰かいるのか？」

ベッドの上にはがばつと起き上がった遙は、もちろん上半身に何も身につけていなくて。

何度か目をこすり、二人の訪問者にピントを合わせようと眉間に皺を寄せる。すると、たちまち遙の表情が強張っていった。

「……はるか？ 遙なの？」

遙と目が合った綾子おばさんが、その場に崩れ落ちるようにして、ペタンと座り込んだ。

14・謎の訪問者（後書き）

読んで下さって、ありがとうございます。

毎日、こんなに大勢の方に読んでいただけるなんて、ほんとうに感謝の気持ちでいっぱいです。

遥が登場すると跳ね上がるアクセスに、これまたびっくりしています。

とうとう、とんでもない遭遇が起こってしまいました。

東京に出てきたついでに、子供の様子を覗いていこうというのは親心ですもんね。

そうそう、なんで中からチェーン掛けてないんだ？ という突っ込みはナシでお願いします（汗）。

2人暮らしするようになって無用心になったんでしょうか？ ス、

スミマセン……。2007・11/29

15・二人の母

目を泳がせながら呆然と立ち尽くす母さんと、床に座り込んでうな垂れる綾子おばさんを台所に残したまま、わたしと遙は大急ぎで顔を洗い、服を着替えた。

背中では母さんのため息が聞こえる。その横ではおばさんが、どうして、どうしてと震える声で何度もつぶやいていた。

居間であり、勉強部屋でもある寝室の隣の四畳半の和室に、母さんたちを呼び寄せ、四人で向かい合って座った。

母さんの顔には少し赤みが戻ってきているが、隣に座る綾子おばさんは、顔面蒼白のまま誰とも目を合わせず、俯き加減で視線を彷徨わせていた。

「突然来るんだな……。電話くらいしろよ」

胡坐をかいて座る遙は、とてつもなく気まずい空気の中、平然とした面持ちで、綾子おばさんをたしなめるような口ぶりで、ぬけぬけとそんなことを言う。

でも。遙の言うとおり、せめて三十分前にも連絡をもらえたら、このような形での鉢合わせは避けられたかもしれない。

遙の引越し先が決まるまで、ベッドを預かっているとでも言えば済む話だ。

「はる君。言葉を返すようだけど……」

答えたのはおばさんではなく、母さんだった。

「娘の家に来るのに、いちいち電話しなくちゃいけないのかしら？ 私が柎の携帯番号の控えを持ってくるのを忘れてしまっただって、私はまだ、携帯は持ってないでしょ？ それで、はる君に柎の番号を教えてもらおうと思って、綾子さんに連絡してもらったんだよ。でも、はる君の携帯にも繋がらなかった……」

遙は、ハッと何かに気付いたようにして立ち上がり、昨日はいて

いたジーンズのポケットから携帯を取り出した。

そして、すぐさま、チツと舌打ちをする。

「充電すんの、忘れてたよ……」

必要最低限しか携帯を使わない遙は、充電の間隔もわたしよりずっと長い。

まだ大丈夫だと思っっている間に電池切れになることは今回が初めてではない。

「それじゃあ、はる君。そして柊も。この状況はいつたいどういことなのか、きちんと説明してもらおうかしら。言うまでもないことだけど、あなたたちはもう、五、六歳の小さな子供じゃない。小学校の四年生くらいからは一緒に寝ることもなかったはずよ。そんな二人が同じベッドから起きだして来るってことは、きっとちゃんとした大義名分があるんでしょっかね？」

母さんの歯に衣着せぬ物言いは、ますます磨きを掛けて健在だった。

「母さん、ごめん……。遙とは、遙とは……。その……」

もうごらんの通りですとしか言いようがない。取りあえず今は謝ることが先決だ。

これがわたしの精一杯の母さんたちへの誠意の表し方なのだから。すると遙がわたしを覗き込み、不思議そうな顔をする。

「柊、なんで謝る？ おまえ、おばちゃんに何か悪いことでもしたのか？」

そんなこと言われても困る。もちろん、誰に迷惑をかけたというわけではないけれど。物事の道理というか、道徳というか。

そういうところが欠けていたのは、わたしにだって理解できる。

そして、それぞれの両親にも内緒にしていたのだ。謝らなければならぬ材料はいっぱい揃っている。

それでも遙は怯まなかった。

「おばちゃん。おばちゃんやおじちゃんに何も知らせなかったことは悪かったと思ってる。でも、俺も柊も、遊びや思いつきで一緒に

いるんじゃない。真剣に付き合っているんだ。一緒に暮してもうすぐ二ヶ月になる。大学卒業して就職して……。そして、結婚するつもりだ。柊と」

遥はきっぱりとそう言い切った。

そして遥を穴が開くほど見つめる母さんたち。

どうしたんだろう。涙が勝手にこぼれてくる。泣いてる場合じゃないというのに。

「そ、そうだったの？ はる君がそこまで考えているだなんて、知らなかったから……。でも、結婚まで決めてるんだったら、こうなる前にきちんと話して欲しかったわ。親としては当然の言い分だと思うけど。違うかしら？ ただ、あなたたちは仲はいいけど、こういった関係に進展するなんて、全く想像すらできなかったから……。」
母さんは、本当に何も気付いていなかったんだ。

わたしは何が何でも二人の関係を隠し通すなんて強い意志はなかったけど、こういうことってすごく恥ずかしいし、なかなか自分からは言い出せなかった。

自分自身のことなのに、すべて遥にまかせっきりで、自分からは何も行動を起こさなかった。

こうなる前に、きちんと筋道を通さなかったわたしが悪いのだ。

今頃そんな大切なことに気付くだなんて。

二十歳になっても中身はまだ子供のままだということを実証したにすぎない。本当に情けない話だ。

でも遥が時々、それとなく二人の関係をアピールしていたように思ったのに、それすらスルーだなんて、わたしたち親子そろって相当マイペースな性格の持ち主なのかもしれない。

「おばちゃん……。どうか俺達のこと、このまま見守っていて欲しい。柊のこと、大事にする。一生守っていくつもりだ。だから……。」
遥が真っ直ぐに母さんを見て、自分の気持を伝えている。

いつも何も言わないけど、こんなにもわたしのことを思っていて

くれたんだ。

そんな風に考えるだけで、胸が締め付けられて、とめどなく涙が流れてしまう。

「もう、はる君ったら。知らない間に、こんなにすっかりしちゃって……」

そう言つて、母さんが涙ぐみ、鼻をすすった時だった。

パチンと乾いた音が室内に鳴り響いた。

綾子おばさんが突然遙の前に膝立ちで擦り寄って行き、右手を振り上げて、彼の頬を思いつきり引つ叩いたのだ。

「お、おふくろ……」

遙も驚きのあまり、目を見開いている。

綾子おばさんが遙をぶつなんて生まれて初めて見た。いや、自分の子供に手を上げたのは、これが初めてではないかと思う。

すると、おばさんの目から大粒の涙がポトポトとしたり落ちた。「はるかっ！ あなたの言ってることが、世間で通用すると思ってるの？ 柊ちゃんと結婚するってことが、どんなことかわかって言ってるの？」

遙と同じ目をしたおばさんが、いまだかつて見たことのないような取り乱しようで、遙に食つてかかる。

「柊ちゃんは、蔵城家の跡取り娘。遙は朝日万葉堂の跡取り息子。そんな二人が、どうやって結婚生活を築いていけるというの？ 柊ちゃんには、将来養子をとって、蔵城家の代々の土地を守る義務があるわ。遙には東京で父の店を助ける義務がある。いい年して、そんなこともわからないの？」

驚いたのはわたしたちだけではなかった。母さんがあわてて、遙とおばさんの間に入る。

「綾子さん！ まあまあ、ちょっと落ち着きなさいよ。あなたの言いたいことはわかったわ。もちろんこの子たちが背負ってる物はいろいろあるけれど、それをするかしないか、選ぶ権利というのも、この子たちは持っていると思うの。幸い私も夫もすこぶる元気だか

ら、まだまだ現役で畑仕事も米作りもがんばれそうだし、柊に頼ろうだなんてこれっぽっちも思っていないわ。この子の選ぶ道を応援してやるのが親の努めだと思ってる。もし二人の気持ちが本物ならば、祝福してやりたいと思うのよ。だめかしら？」

母さんは、おばさんの背中をさすりながら、なだめるようにそう言った。

わたしたちのこと、認めてくれるんだね。母さん、ありがとう。本当にありがとう。

綾子おばさんは結婚後も仕事を続けていたので、遥は乳児の頃からうちに預けられていた。

わたしの少し後に生まれた遥は、首が据わって間もなくの頃、先にお座りを始めたわたしと一緒に、母さんとおばあちゃんに育てられたのだ。

母さんにとって遥は、自分の子どもも同然なのだろう。

どんなに憎まれ口をたたこうとも、母さんが遥を見つめる瞳は昔と同じで温かい。

「ねえ、綾子さん。この子たちがこうなったのも、自然な成り行きなのかもしれないわね。東京で知り合いも少なく、お互い頼り合いうちに、心が寄り添ってしまったのかしら。でも、だからと言って、この状況はまずいわね。いくら将来は結婚するって言っても、学生の分際で同棲だなんて……。このまま見過ごすわけにはいかないわ」

「母さん。結果的にはその……。わたしたち同居してるんだし、同棲って言われても仕方ないけど。でもね、今までだって同じところに住んでいたし、同じ物を食べて、同じ学校に行って……。東京に出て来てからの方が、いつも遥と離れ離れで、会えない日がほとんどで、寂しかったの。だから、だから」

「柊の気持ちも、わからないこともないけど……。だからってこんな軽率な行動をしてもいいってことにはならないわ」

母さんの言いたいこともよくわかる。学費も住居費用も両親に出してもらっているわたしが、こんな身勝手なことをしていいわけがない。

「おばちゃん、柀は悪くないから。俺がこいつと一緒に住もうって言ったんだ。もう柀と離れて暮すことなんて出来ないんだ」

遥は叩かれた頬をさすりながら、わたしをかばってくれる。

でも遥ったら、さっきからどさくさに紛れて、とんでもなくわたしを喜ばせるようなことばかり言ってる。

そのたびに母さんが、あら〜とか、まあ〜とか言っていて目をまるくしているのだ。

わたしだっで一緒の気持ちだよ。何があっても、遥とはもう絶対に離れられないもの。

「はる君。あなたの口からそんな言葉が聞けるなんて、とても信じられないんだけど。今夜は嵐でもくるんじゃないかしら。ちよつと訊いてもいい？」

「えっ？ な、なに？」

母さんの質問に、遥が突如眉を吊り上げ、身構えた。

「そんなにびっくりしないでよ。驚いているのはこっちの方なんだから。ねえ、はる君。柀のどこがいいの？ 二人が付き合うようになったきっかけは何？ いつから？ どっちが先に言ったの？」

「……………」

遥がぎょつとしたように、母さんを見た。もちろん、口を固く閉ざしたままで。

「ねえ、教えてちょうだいよ。娘を持った母親として、そこが一番気になるところだもの」

母さんったら、いったい何を言い出すのやら。今ここでそんな質問をされても、答えられるはずがない。

綾子おばさんだっつて黙っているけど、きっと心の中は穏やかじゃないはずだ。

でも遥は母さんの執拗な質問攻撃について観念したのか、閉ざし

た口を開き始めた。

「どこがいいって……。今更そんなこと訊かれてもな。なんでこいつじゃなきゃだめなのか、俺にもわからなくて……。で、中三の時に俺から柊に言った。将来、結婚しようって……」

「ちゅ、中三？ほんとにほんとなの？えらく早いプロポーズだわね。まだ二人とも子どもじゃない！ということは、その時にはもう付き合っていたの？」

「いや、そういうわけじゃないけど。付き合おうって言っても、いつも一緒だし、その辺の区別はあまりなかったと思う。ただ気持を伝えただけで……」

「そうだったのね。ああ、私って母親失格だわ。全く気付かなかっただんだもの。柊ったらそんなこと一言も言わないし。まあ、そんなことあるわけないって思ってたから、疑う余地もなかったんだけどね」

「……わたしは、知ってたわ」

突然顔を上げたおばさんが、ゆっくりとわたしと遥の顔を見て、話を続ける。

「高校一年生くらいだったかしら。あなた達の通ってた学校のある駅前のスーパーに行った時、遥と柊ちゃんが一緒に駅に向っているところを見たの。まさか私が普段行かないその店にいるなんて思ってたのね。あなたたち、手をつないで歩いてたわ。ぴつたりと身体を寄せ合ってたね。その後、よく注意してみれば、あなたたちがお互いに想い合っていることはすぐにわかった。だから、東京に出るって聞いた時、一人暮らしをさせたくなかったの。こうなることは目に見えていたから……」

おばさん……。わたしたちのこと、わかっていたんだ。

家と高校はかなり離れていたの、誰も見てない時、遥と手を繋いで歩いたこともあった。

東京に出てくる前に、しきりにおばさんの実家に下宿するよう勧めていたのは、わたしたちの関係に気付いていたからなんだね。

「遙、あなたの気持ちはよくわかった。でもね、遙がやったことの責任は重いんだよ。親がずっとそばで見張っておくわけにもいかないし、何を言ったところで聞く耳を持たないだろうから、実際問題何も手立てはないんだけど……。ひとつだけ言っておきたいことがあるの。柊ちゃんもよく聞いて」

否定とも肯定ともとれるおばさんの言葉にじっと聞き入る。

「もし……。もしもの話だけど。柊ちゃんが、その、妊娠したらどうするの？ 言ってることの意味、わかるわよね？」

「あっ……」

遙が隣で呻くような声を漏らした。

わたしの心臓がドキドキと勝手に鳴り始める。

全身にありえないほどの緊張感が走り、おばさんの目から思わず視線を逸らせてしまった。

16・決断の時

おばさんの口から重々しく告げられた言葉は、わたしの胸にずしんとのかかって来た。

全く予想していなかったといえば嘘になる。いや、それどころか、いつも心のどこかで不安を感じていたはずだ。

何の根拠もない、絶対大丈夫という遥の言葉にすぎるようにして、この二ヶ月間を過ごしてきたのだから。

もしも子どもができたらどうすると彼に訊いたことがある。

するとたった一言、産めばいいと言った。そして、俺がすべて責任持つからとも言った。

でも万が一、それが現実の物になったとしたら、とてつもなく大きなリスクを負うことになるだろうこともわかっていた。

大学は休学するか、あるいは最悪の場合、退学も考慮しなければならぬのだ。

就職も先延ばしになる。そして何よりも、両親や遥の家族に多大な心配をかけてしまう。

はたしてわたしは、そんな状況に耐えられるのだろうか？

「こつという生活の先には、逃れられない現実がいつも背中合わせなのよ。私の考えが古いと言うかもしれないけど、あなたたちの、その……。ど、同棲には、やっぱり反対だわ。柊ちゃん、近いうちに実家に帰ってらっしゃい。そしてお父さんやおばあちゃんにもすべて話して、今後のことをきちんとした方がいいわ。遥！ あなたも帰って来て、みんなに説明するのよ！ いいわねっ！！」

綾子おばさんの態度は、ある意味、一番常識的なのかもしれない。遥を堂野家の跡取りとして育てた以上、蔵城を継ぐたったひとり娘のわたしが堂野家に入ることは、とても難しいことだというのは理解できる。

おばさんは自分の結婚で俊介おじさんを堂野家の婿養子に迎えた時点で、これ以上蔵城家に迷惑はかけられないと思っただけだ。

「さあ、お姉さん。もう行きましよう。ここにいたって仕方ないわ。取りあえず遙は今夜からここを出なさい。いや、今すぐにでも。いいわね！ そうそう、あなたの優しいお友達のところへでも行って世話になればいいんじゃない？ そんな嘘がまかり通るとでも思っていたのかしら。浅はかだわ。お兄さんにもお姉さんにも、一生懸命向けできないようなことをあなたはやってしまったのよ。わかってるの？ ねえ、遙！」

遙は何も言わない。無言のまま畳の目をじっと見ているだけだった。

「ちょうど明日は土曜日ね。この週末、二人とも一度うちへ帰ってらっしゃい。その代わり、お父さんたちの怒りも覚悟しておきなさいよ。わかったわね。それじゃあ、もう行くわ……」

そう言って綾子おばさんは、誰とも目を合わせずにすくっと立ち上がった。

「そうそう、これを持って来たのよ。はい、おばあちゃんの手作りの漬物。一番生り（な）のきゅうりの味噌漬けよ。柊の好物でしょ？ お昼にこれでも食べて、今後のことを二人でよく話し合いなさいね。私は、あなたたちのこと、信じてるから……」

母さんは漬物の入った容器を食卓テーブルの上に載せ、先に行こうとする綾子おばさんを追うようにして、玄関に向かう。

母さんは、最後に一度だけ私たちの方を振り返って、今までに見たことのないようなとても悲しそうな笑顔を残して出て行った。

母さんたちが帰った後、わたしはその場から立ち上がることが出来なかった。

なんともいえない脱力感に見舞われ、次の行動に移るのがとてもなくおっくうになる。

遙も畳の上に寝転がって脚を組み、じっと天井を見つめたままだった。

今から昼食にすれば、午後の講義にはなんとかぎりぎり間に合う。でも、こんな状態で講義を受けても、きっと集中できるはずがない。

それに、せっかくのおばあちゃんの漬物なんだけど、今のわたしには、到底食欲もわいてこなかった。

「ねえ、遥……。このあと、どうする？」

膝を抱えてうずくまっっているわたしの横で、寝転んでいる遥に訊ねた。

「大学、今日は休むよ。おまえは？」

「わたしも……。こんなんで行けるわけないよね」

「ああ……。それにしてもびっくりしたよなあ」

遥が顔だけこっちに向けて言った。

「うん。途中で意識がなくなりそうになったもの。まさかあんなに急に来るなんて思わないよ」

「あの二人には生き血を全部抜かれたような気分だよ。まあ、俺がちゃんと携帯の充電をしてなかったのが悪いんだけどな」

「ホント、タイミングが悪いよね。いつも言ってるじゃない。充電のチェックは忘れないでって」

「で、俺は電話を受けて、ここから追い出されるんだろ？ それとも風呂場にも隠れるのか？」

「まあ、そんなところ……。だよな」

「はん、残念でした。俺は逃げないね。あいつらに堂々と顔を拝ませてやるよ。このまま隠し通せるわけないしな。いつかはバレる。そろそろ潮時だったってことだよ」

「は、遥！」

遥の自信たつぷりの笑顔に不安がよぎる。まだまだこれですべて解決したわけではないのだ。

「それにしても。ここまで強烈だとはなあ。おまえの親父に殴られる覚悟は出来るけど、まさか、お袋が一番手になるなんて、意外だった。でもな、お袋を弁護するわけじゃないけど、俺やおまえが

憎くて俺達のことを反対してるんじゃないんだ。それだけはわかってくれるよな？」

「うん。わかってる。おばちゃんも堂野家と蔵城家の間で板ばさみなんだよ……。きつと」

「どうしたらいいんだ」

「ホントだね。あたしたち、どうすればいいんだろ。将来、結婚するのは無理なのかな……」

頭ごなしに別れると言われなかったのは不幸中の幸いだったのかもしれない。

でも、遥はここを出ると言われていた。また離れ離れの生活になるのだ。

「昼メシ食って、買い物行って……。帰ろっ」

遥が突然すくつと起き上がった。

「帰ろっ？ 帰ろっつて、どこに？」

「ばあちゃんのいるところ。俺達の生まれたところ……。とつと帰って、話つけてこないとな。でないと、今夜にでもおまえの親父さん、ここに怒鳴り込んでくるぞ」

「わたしたちの家に帰るの？」

「ああ。あそこが俺たちの家。俺たちの始まりはあそこなんだ」

遥がわたしの頬を撫でる。さつき泣いたから、きつと涙のあとがついている。それに化粧だつてしてないし。

遥じゃなかったら、誰にも見せられない顔。

「俺、生きて東京に戻ってこれるのかな……。お袋の一発もきつかったけど、おまえの親父さんのは、あんなのでは済まないだろうな」
わたしの目をじつと見ながら、遥が薄っすらと微笑む。

父さんは本当に遥を殴るのだろうか。でも父さんならやりかねない。

わたしが小学校の低学年の頃だったと思う。遥と希美香の三人でかくれんぼをしていて家の屋根に上がったことがあった。

その時、すごい剣幕の父さんに、おもいきり引っ叩かれたのを

思い出す。

落ちたら死んでしまつたろうと怒鳴りながら、目にいっぱい涙を溜めた父さんが、わたしの頬を叩いたのだ。

もちろん痛くて悲しくて、父さんが大嫌いになつたけど、その時、母さんが言つてた。

わたしのことが心配でたまらなかつたから叱つたのだと。

そんな父さんのことだ。遙にも本気でぶつかつてくるに違いない。わたしはさつきおばさんに叩かれた遙の頬にそつと手を合わせる。右に比べると左の頬がまだ赤い。

遙だけが悪いんじゃないのに……。同意した時点で、わたしも同罪のはずだ。

こうしていると、遙の痛みがわたしの指先を通じて、じんじんと伝わってくるような気がする。

黙つてこつちを見ている遙と目を合わせる。

やっぱりわたしはこの人が好きなんだと思う。この人の声も、顔も、身体も、そしてもちろん心の中も、全部好きだ。

そんなに見られるとどうしていいかわからなくなる。じつと見つめられるだけで、どきどきと胸が鳴つて、呼吸をするのも苦しくなつてしまふ。

すると、遙の頬に触れていたわたしの手にふいに彼の手が重なつた。

遙の顔がすつと目の前に近付いてきて、熱い吐息と共に彼の唇がわたしを覆いつくす。

たつた今、綾子おばさんに言われたばかりなのに、二人を乗せた小船は瞬く間に岸壁を離れ、濃密な霧に包まれた大海原へと漕ぎ出してしまった。

わたしはその小船から降りようとは思わなかつた。

振り落とされないようにしっかりとしがみつき、自らその道を選び取る。

そんなわたしが意外だったのか、ふと力を緩めた遙が目細め、

何かつぶやいた。とても小さな声で。とても優しい声で。

えっ、何、聞こえないよ、もう一度言つてと頼んだのを最後に、わたしの意識は深い海の底に引きずり込まれていった。

「柀……。そろそろ行こうか」

どれくらいそうしていたのだろう。遥の身体の下に組み敷かれたまま、乱れたわたしの髪を指ですくようにして、遥が言った。

「そうだね。そろそろ行かなきゃね……」

わたしは遥に手を引かれて身体を起こし、急いで衣服を身につけた。

大きめのポストンバッグを戸袋から出して荷造りをする。でも……。

二人分を一緒のバッグに入れるのはよくないのではと思いなおす。家で待っている家族たちの気持をこれ以上逆なでするようなことは出来るだけ避けなければならない。

わたしはふうつとため息をつき、改めて小ぶりなバックを二つ用意した。

「卓すくろに会うのも久しぶりだしな。あいつの好きなアニメの対戦カードを買って、敵地てきちに乗り込むとするか……」

遥の気持はついに揺らぐことはなかった。とうとうわたしが一番恐れていた日が来てしまったのだ。

遥の決断力の素早さは今に始まったことじゃないけれど、それにしては急な帰省だ。

バイトはちょうどシフトに組み込まれていなかったからよかったとしても、本当に月曜日までにここに帰ってこられるのだろうか？

二泊の予定で荷造りをしているが、もし滞在が延びたとしても心配はない。向こうにも服くらい、何着がある。そう、何も心配することなんて……ない。

ああ、それにしても気が重い。父さんのことが気になって仕方ない。

きつと怒るだろうな。高校の時、髪を少し染めただけでも不良扱いにされたのだ。

遙と一緒に住んでるなんて言おうものなら……。

遙だけでなくわたしの命も、この先生き長らえる補償はどこにもない。

出て行けーっ、勘当だ！ と門前払いされる可能性だってある。

でも相手はあの遙なのだ。父さんも大好きな遙だよ。

案外拍子抜けするくらい喜んでくれるかもしれない。

いやいや、いくら相手が遙でも、わたしのやったことは許されないこと。怒られるのは当然だ。そんなアツトホームなドラマの台本が、そう簡単に用意されているとは思えない。

複雑な気持ちを抱えたまま、わたしと遙は、日が西に傾きかけた頃アパートを出た。

そしておみやげのお菓子と夕食の弁当を買って新幹線に乗り込む。もちろん卓のカードも袋に入っている。

もしかしたら母さんたちも乗っているかもしれないときよろきよると車内を見回したが、どこにも姿は見えなかった。

家で卓が待っているから早目に東京を発つたのだろうか。

新幹線から降りて在来線に乗り換え、実家の最寄の駅に付いた頃は、もう八時を過ぎていた。あたりは真っ暗だ。

小さい頃から慣れ親しんだ家までの道のりを真っ直ぐに歩いて行く。

繋いだ手をぎゅっと握ると、遙が驚いたように目を丸くしてこっちを見た。

わたしは何があってもこの手は離さないと、心に誓った。遙と一緒に生きていくと決めたのだから。

16 決断の時（後書き）

17・好きだと言って

バスに乗ったほうが少しだけ早く家に着くけれど、バス停から家までは、さらに徒歩で十五分もかかるものだから、めったにバスは使わない。

ただわたしの家の近くにバス停が出来たとしても、利用客はとも少ないと思う。赤字路線間違いなしだ。

だって、うちと遥の家その他には、まだまだもつと村の奥の方に行かないと人の住んでる家はない。

だから市に陳情書を出しても、バス停の設置が認められなかったのだ。

そういう事情もあって、村の人たちは、どの家も車を複数台所有している。

うちも同じで、父さんと母さんがそれぞれ一台ずつと、遥の家と兼用している農作業用の軽トラックの合わせて三台の車が裏庭に並んでいる。

地球のためには優しくないけれど、こうでもしないと生活が成り立たないから仕方ない。

町へ出かける時は、必ず綾子おばさんやおばあちゃんも一緒に車に乗るようにして、なるべくエネルギーの無駄遣いをしないように心がけていると母さんがいつも言っている。

わたしも遥もよほどのことがない限り、送り迎えをしてもらった記憶はない。

いつもこの距離を歩いてきたお陰で、体力には自信がある。

運動部でもないのに、校内マラソン大会で、六位に入賞したことがある。

運動は少し苦手なわたしだけど、長距離走だけは、ちよっぴり我慢できる。

もちろん、今夜もバスには乗らない。遙と手をつないで歩いていけば、長い道のりも辛くないからだ。

それに。あまり早く家に着きたくないというのもある。

蔵城、堂野の両家は、今朝の事件で、大騒ぎになっているはずだ。そんな敵陣に、わたしと遙は今まさに丸腰で乗り込もうとしているのだ。

たとえ生まれ育った実家であっても、そこに向かう足取りが重いのは当然のなりゆきかもしれない。

もうすでにどの店もシャッターが下りていて、閑散とした商店街を通り抜けると、町一番の豪華な建築物である図書館が暗がり姿を現す。

そして併設している市民プールを過ぎ、駐車場の裏側が、わたしと遙が三年間通った中学校になる。

信号を渡ったところから上り坂になって、家までは三十分ちよつとの道のりだ。

このあたりの住宅は同級生も大勢住んでいる。もし、わたしと遙がこんな風を手をつないで歩いてるところを見られたりしたら、みんな驚くだろうな。

でも、そんなことはどうでもいい。誰に見られてもかまわない。一番見られるのが怖い人たちに全てを知られてしまった今となっては、もう何も恐れるものはないのだから。

家族との話し合いの結果によっては、遙と引き離されることだって考えられる。最悪の結末が、わたしの脳裏にくつきりと描き出されるのだ。

そうは思ってみても、やっぱり誰かに見られてるんじゃないかという気になる。

制服を着ている頃は、遙と並んで歩いていてもそんなに周りが気にならなかつたのに、大人になった今の方が緊張するのはいったいどういうことだろう。

遙と身も心もひとつに繋がりが合っている今だからこそ、周囲の人

に全てを見透かされているようで、怖いのかも知れない。
いつもより強張った感じのする遙の横顔を確かめると、彼の手をぎゅっと握り締めた。

今夜は蒸し暑い。梅雨前線が次第に活発になると言っていた天気予報士の言葉がふと頭をよぎる。

「柊、暑くないか？　アイスでも買って帰ろうか？」

急にコンビニの前で立ち止まった遙は、少し表情を緩めてそう言った。

言葉にしなくても遙と気持が通じ合うのは今に始まったことではないが、一緒に暮すようになって、より一層お互いのことがよくわかるようになった。

遙の顔色や息遣い、目の動きを見れば、大抵のことは理解できる。同じように遙もわたしの思っていることをすぐに言い当てる。

わたしって、そんなに不安そうな顔をしていたのだろうか。まるで怯えている子どもをあやすように、遙の手がわたしの背中をそっと撫でた。

「うん。買って帰ろうよ。希美ちゃんと卓の分もね。遙も食べるでしょ？」

遙を見上げて訊ねる。

「ああ。じゃあ、家族みんなの分も買っていこう」

希美香は無類の甘いもの好きだ。わたしにとっても妹同然の彼女には、ちよっぴり値段の張る、有名メーカーのカップアイスを買ってあげようと思う。

卓にはヒーローのキャラクターがついたソーダアイス。おばあちゃんはずきが入った抹茶かき氷。他の家族には何がいいかな？

「卓はもう寝てしまったかもしれないな。その時は、明日食べさせてやろうな」

遙の家族への心遣いが無性に嬉しくなる。少しだけ気持ちのゆとりを取り戻したわたしは、彼と共に店内に入り、アイスクリームの

置いてある冷凍ケースのところに向かった。

雑誌のコーナーには学生らしき人が数人、立ち読みの真つ最中だ。そこを通り抜ける時、Tシャツに短パン姿の長身の男性にカバンが当たってしまった。

すみませんと小声で謝りながらカバンを身体に密着させるようにして、遙に手を引かれたまま店の奥へと進む。

「あれ？ くら……しろ？」

「いったい誰だろう。わたしの名前を呼ぶ声に慌てて立ち止まる。

遙も同時に歩みを止めた

「なんだ。やつぱ、蔵城じゃないか！ おまえ、なんでここにいるんだよ？」

後ろを振り返ると、そこには雑誌を片手にきよとんとした顔でこっちを見ている藤村がいた。

「じゃあ、今、カバンが当たってしまった人物は藤村だったの？」

「ふ、藤村……。久しぶりだね」

別に照れるような相手でもないんだけど、親しかった人物に遥と一緒にのそこを見られるのは、たまらなく恥ずかしい。

わたしは繋いでいる手を離し、藤村に引き攣り笑いを返した。

「元氣だったか？ って、堂野もいるのかよっ！ 相変わらずお熱いことで」

「よお！ 久しぶりだな、藤村。もうすぐ夏だからな。暑いのはあたりまえだ」

遙がやや皮肉を込めて藤村の肩を叩く。

「はいはい。堂野の言うとおりでございます。でも、なんだって、東京にいるはずのご両人がこんなところに？ おまえら、帰るって言うてたか？ 俺、メール見落としたのかな……」

当然ともいえる藤村の質問に答えるために、大急ぎでアイスを買ったわたしと遙は、藤村を伴って店を出て、駐車場の片隅で話し始めた。

「ちょっと野暮用で、たった今、こっちに帰って来たところなんだ」

遙が遠まわしに帰って来た理由を藤村に告げた。

「野暮用？ にしても珍しいよな。春休みにも帰ってこなかったおまえが、なんだってこんな中途半端な時期に帰ってくるんだよ。農作業の手伝いか？」

「いや。ちよつとな……。まさかおまえとこんなところで会うなんて。俺たち、月曜にはまた向こうに帰るさ」

「ふん。そうか。なあなあ、今からちよつと飲みに行かぬか？
な、ご両人」

「あー。今夜はだめだ」

当然のごとく遙が首を横に振る。

「なんで？ たまにはいいじゃないか。堂野、おまえ、付き合い悪くなつたんじゃないか？ それじゃあ蔵城。おまえは行けるだろ？
ちよつくら付き合えよ」

藤村がわたしに矛先を向ける。

「え？ わたしもだめだよ。今夜はちよつと……。ね？」
久しぶりの再会を喜んでくれている藤村には悪いけど、今夜はそれどころではない。

「ちえっ！ つまんねえの。なんだよ、おたくら二人とも。そんなに二人がいいのかよ。つたく、やってらんねえな。んじゃあ、今夜はあきらめるわ。……で、何があつたんだよ。さっきから変だぞ」

藤村もわたしたちの異変に気付いたようだ。

まあ、隠しておく間柄でもないし、ここは正直に話したほうがいいのかもしれない。遙も同じ思いだったのか、一呼吸ついたあと、藤村に話し始めた。

「……こいつとのこと、親にバレた。今から親父らに殴られに行く」
「はあ？」

藤村が口をぽかんと開けて、遙をじつと覗き込む。

「もし生きていたら……。明日なら、多分、おまえに付き合える」
「ええっ？ お、おい！ どういうことなんだ？ 生きていたらって。それに、親父さんたちに殴られるって、意味わかんねえよ」

「だから、そのまんま、言葉どおりだけ」

「じゃ、何か？ おまえ、蔵城のこと、親に内緒にして付き合っていたってことか？ それがバレて、殴られるとでも？ なんでそれくらいで殴られるんだよ。おまえの親父も蔵城の親父も、穏やかそんな人に見えたけどな。それに、おまえら親戚同士だろ？ 何を今さら、怒られることがあるんだよ！」

藤村が、血相を変えて詰め寄ってくる。

「あははは……。それがあるんだよ。この歳になってもまだ親に引つ叩かれるようなことをやってしまったのさ。おまえにまだ言っていなかったけど、俺、今、こいつと一緒に住んでる。寝込みをお袋に突撃された」

「なななな、なんだって！！」

「そういうことだから。悪いが、今夜はもう帰るわ。じゃあまたな」

お、おい、待てよ……。と口をパクパクさせている藤村をコンビ二の前に置き去りにして、わたしたちは再び家に向かって歩き始めた。なんだか藤村に申し訳なくて、ついつい後ろを振り返ってしまうけれど、相変らず藤村はわたしたちの方を見たまま街灯の下で呆然と立ちすくんでいた。

遥は藤村のことなど全く気にも留めない様子で、すたすたと歩いて行く。

驚かすつもりはなかったんだけどなと言って、あははと笑う。これから巻き起こる事態に備えて、まるで自ら勇気を奮い立たせるかのよう、わざと陽気に振舞っているのだろうか。

次第に住宅がまばらになり、街灯も少なくなる。暗闇に、遥の笑い声だけが低く響き渡った。

宅地造成中の看板のところまで来ると、人通りもほとんど無くなる。

そこはかなり高台になっていて、街全体を見下ろすことができる。絶好の場所でもある。

街の灯りがまるで天の川のように帯状につながって、わたしの目

の前に迫ってくる。

ここまで来れば、家まではあと五分くらいだ。すると歩みを止めた遙が、突然わたしの背中に手を回し、抱きしめてきた。

あまりにも急だったので、わたしは目を見開いたまま、身動きが取れなくなってしまった。

両腕でぎゅっと包み込むように抱きしめる遙が、わたしの肩に顔をうずめるようにして、くぐもった声を出した。

「柊。ごめんな。俺が強引に一緒に暮らそうと言い出したせいで、こんなことになって……。今夜どんな結果になっても、俺の気持ちには変わらないから」

遙の腕により一層、力が込められる。

でも。ここでこんなことをしていたら、誰かに見られるよ。遙のとんがり屋根の家の明かりも、すぐそこに見えているというのに。

なのに、こうやって抱きしめられると、まるで魔法にでもかかったかのように、何も怖いものなんてなくなって、とても満たされた気分になる。

今朝も母さんたちの前で、わたしと離れたくないと言ってくれた。照れ屋で面倒くさがり屋の遙が言ってくれる言葉のひとつひとつがこんなに愛おしいだなんて。

中学生の頃までは、あれほどひょうきんでおしゃべりだった遙が、今ではすっかりそのなりを潜め、無口で気難しく変貌してしまった。わたしの前だと、ますます無愛想で、横柄さだけが際立つ。

過去にブローポーズはされたけれど、好きだとはつきり言ってもらったことは、実はまだ一度もないのだ。

遙の本心を疑うわけではないけれど、彼の口から聞きたい。好きだと言って欲しい。

遙からそう言ってもらえると、この後どんなことが起こっても耐えられる。

この村から追い出されることになっても、遙のその言葉を支えに

生きていけそうな気がするのだ。

だから、お願い。遥の本当の気持を聞かせて。

今夜の遥なら願いを叶えてくれるよね。七夕にはまだ少し早いけど……。

「遥。ずっと訊きたかったことがあるんだけど……」

わたしは思い切って訊ねてみる。

「……なんだ？」

遥がいつになく優しい声で訊き返してくれた。これならばきつと……。

「わたしのこと。その……。好き？　ねえ、教えて？」

暗闇に紛れていつになく大胆になる。わたしの肩から顔を上げた遥が、どこか不愉快そうに目を逸らす。

「今さら何言ってるんだよ……。んなもん、いちいち口に出していわなくてもわかるだろ？」

「そりゃあそうだけど。でもちゃんと言ってくれた方が嬉しいんだもの。ねえ、どうして言ってくれないの？　わたしはいつだって言えるのに。遥、大好きだよ……。ほら、ね。　遥は？　遥も言つてよ」

「つたくもう。別にいいじゃないか。嫌いな奴と一緒にいるわけないだろ？」

随分投げやりな言い方だ。それだけでは好きという理由にはならない。

「それならちゃんと行ってよ。ほら、早く」

わたしも今夜ばかりは、簡単に引き下がれなかった。好きの一言が、どうしても聞きたかったのだ。

「おまえなあ……。わかたよ、言えばいいんだろ、言えば」

「うん」

「……好き……だ」

今、何て？　好きだって、言ってくれた？　とても小さな声だったけど。あまり聞き取れなかったんだけど……。

もう一度言って欲しい。今度はわたしの目をみて、はっきりと言
って欲しいと思うのは、贅沢なの？

「遙、お願い。もう一度、言って。よく聞こえなかったの。ねえ、
遙……」

「ふざけるな。二度と言わねえよ。人がせつかく勇気を振り絞って
言ってるのに、そう何度も言えるか」

「は、はい……」

遙がわたしの耳元で怒り出す。わたしなら何度でも言えるのに、
遙だったら、本当に重症の照れ屋なんだから。

「さあ、こんなところで時間食ってる場合じゃないだろ？ アイヌ
も溶けちまう。早く帰ろう」

そんなこと言ったって、最初に立ち止まって抱きしめてきたのは
遥なんだからね。今じゃわたしの方が遥にしがみついて離れない。
離れたくない。

「おまえ、いつまでこうしているつもりだ。しつこいな？ あつ、
誰か出てきた！ こっちに来るぞ」

わたしはびくつとして、遙から離れる。もし父さんだったら大変
だ。服のしわを伸ばし、何事もなかったような顔をして、遙と少し
距離をとって歩き始めた。

ところが、周りを見渡してみたけれど。そんな人はどこにも見当
たらない。どこかに行ってしまったのだろうか。

すると後ろからクツクツクツ……と、押し殺したような笑い声が
聞こえてくる。

「おまえなあ、単純すぎ。誰もいるわけないだろ？」

そう言いながら、なおも笑い続けているのは、意地悪な心を隠し
持った遥だった。

「よくもだましたわね。ひどい、ひどいよ！ 遥なんて、もう知ら
ない！」

わたしはカバンをその辺に放り出し、おばあちゃんの家の前まで
猛スピードで駆け上がった。

そして振り返って叫ぶのだ。遙のばかりと。

両手にカバンをさげた遙が、突然猛ダッシュでわたしのそばまで走って来た。そして、耳元で何かささやく。

「いいか、柊。よく、聞くんぞぞ」

わたしは頬を膨らませながらしびしび遙の声に耳を傾ける。だって期待しても、どうせまた裏切られるだけだもの。

さあ、どうぞ、どこからでもかかってきなさいと言っような挑発的な目で遙を睨みながら、彼の言葉を待った。

「柊。愛しているよ……」

あ……。

わたしは、おばあちゃんの家の前で、魂の抜け殻のように立ち尽くす。

息をするのも、瞬まばたきをするのも、何もかも忘れて……。

その時、右手に持ったアイスの入ったコンビニの袋が、ほんの少しだけ。カサカサと小さな音を立てた。

17 好きだと言って(後書き)

18・遙と父さんと

「はい〜？ ……どなたですか？」

奥の方から、いかにも警戒しているような疑い深い声が聞こえる。希美香だ。

いつもなら勝手に中まで入っていくのに、今夜は生まれて初めておばあちゃんの家の方についているブザーを押した。

インターフォンでもチャイムでもない。めったに押されることのない古びたブザーだ。

門の右側はかなり高い位置につけられたブザーは、押すとギシッとした鈍い感触が指先に伝わる。

でも、壊れてはいない。まだまだ現役活躍中だ。

玄関の引き戸を開けて恐る恐る顔を出したのは、遙の妹の希美香だった。

わたしがブザーを押したので、引き戸に近い位置に立っていた遙が、先に希美香に見つかってしまった。

「お、お兄ちゃん……。えっ？ お姉ちゃんも一緒なの？ なんて？ やだ、大変だ。かあさん！ お兄ちゃんたちが帰ってきたよー」

家の奥に向って希美香が大声で叫ぶ。

そして、もう一度わたしたちの方へ向き直ると、意味ありげに口元をにやつとさせた。

手を腰に当て、さも得意げに胸を張って話し始めるのだ。

「さつき、母さんに聞いたよ……。お兄ちゃんたち、デキてるんだって？」

いきなりの先制パンチになすすべもない。

わたしも遙も無言のまま希美香をそつと窺い見ることしか出来ない。

「へへへへ……。やっぱりそうなんだ。実は、あたしさ。前から二

人は怪しいと思つてたんだから」

「き、希美ちゃん……」

「だつて時々見つめ合つてるんだもの。二人の邪魔になつたら悪いと思つて、あたしなりに遠慮してきたんだよ。あたしつて、なんてよく出来た妹なんだろ。それにお兄ちゃんのスキスキ光線、もうバレバレだし。お姉ちゃん、愛されてるね！」

希美ちゃん、そんなことないつてば……と口に出かかったところで、遙が一步前に出た。

「希美香。おまえ、いい加減にしろよ……」

凄みのある声で、呻くように希美香をけん制する。

怒りの大爆発、一步手前に差し掛かった遙は、威圧的な目で希美香を睨みつけた。

今回の怒り度合いはレベル五くらい。言つとくけど、最大級だ。

悪いこと言わないから、それくらいにしといた方が身のためだよと希美香に目で訴える。

「お姉ちゃん、心配いらないうて。あたし、お兄ちゃんの脅しなんて、もう怖くもなんともないもんね。あとでゆっくり、二人の話、聞かせてもらうからさ。早く中に入りなよ。そうだ……。あのね、先に言つとくけど。父さん……。お兄ちゃんのこと、かなり怒ってるから。そんな風に育てた覚えはないつてね。でもね、あたしは二人の味方だからね。まあ、がんばりなよ……」

希美香が声をひそめて教えてくれたその内容は、ああ、やっぱり……というものだったけど、今それを聞かされると、ますます緊張してしまふ。

わたしは、ご親切にも知らせてくれてありがとうと、心の中でひそかに毒づいた。

「希美ちゃん。はい、これ」

これ以上前もつて聞かされるのは心臓に悪いので、ここはさつさとおみやげのアイスを渡すに限る。

「喜美ちゃんの好きな、カップアイスもあるからね」

わたしは遥と並んで靴を脱いで、廊下に足を踏み入れた。

わたしたちの前をとことこと歩きながら袋の中のアイスを物色している希美香も、もう高校三年になる。

わたしと遥のことも、すべて理解できる年齢だ。

にしても、わたしたち、見つめ合ったりなんかしたかな？

それに、遥に冷たく睨まれたことはよくあるけど、スキスキ光線だなんて、絶対にありえない。

もしかして、希美香にカマをかけられたのだろうか？

ああ、でも……。なんて気が重いんだろう。おじさん、かなり怒ってるって言ってたよね。

ってことはわたしの父さんも……。

だめだめ。それ以上は今考えないでおこう。でないと、ここからすぐに逃げ出したくなるから。

遥は、大丈夫なのかな？ もう心構えはできているの？

わたしの横を歩く遥は、いつもと変わらない。

遥はいつだって、強い。どんな時でも、取り乱したりしない。

遥についていればきっと大丈夫だと、わたしは自分自身に言い聞かせた。

おばあちゃんの部屋に入ると、そこには今朝会ったばかりの綾子おばさんが、おばあちゃんとかたつのテーブルをはさんで、向かい合って座っていた。

「母さん、新婚さんを連れてきたよ」

希美香がアイスの袋を振り回しながら、陽気にそんなことを言う。

「希美香、ふざけるんじゃないやありません！」

「んもう、母さんったら頭が固いんだから。別にいいじゃん。どうせ将来、お兄ちゃんとお姉ちゃん、結婚するんだし」

「いいから、あなたは黙って！ それより、隣のおじさんとおばさんを呼んできて！」

ふん、母さんのわからずやと捨て台詞を残し、希美香が部屋を出て行く。

「あ、あなたたち、もう帰ってきたのね。それにしても素早い行動だこと」

おばさんがテーブルの上の自分の手を見ながら落ち着きなく言った。

「おばちゃん、ただいま。そ、その、今朝はごめんなさい。お茶も出さないで……。わたし、とても失礼なことしちゃったって、後からそう思っ……」

朝の失態を思い出して、ぎこちない態度になってしまふ。

「いいのよ、そんなこと気にしないで。だって、もつと失礼なことを、このバカ息子がやってるんだから」

「おばちゃん……」

「柊ちゃんのご両親になんてお詫びしたらいいのか。私、申し訳なくて、ほんとに心苦しくて……。今日あったことを、おばあちゃんに話してたの。そしたらどう？ おばあちゃん、全部知ってたじゃない。こんな大事なこと、親に何も言わないで。ほんと、遥には失望したわ」

朝早くから家を出て東京までやって来た挙句、目を覆いたくなるような光景に出くわしてしまったおばさんの疲労は、相当なものだろう。

目の下の隈がおばさんの心労をはつきりと物語っている。

「綾子さん、あなたの気持ちはわかるよ。……けどね、この子達、親には言いにくかったんだよ。二人のおかれてる立場がわかっているだけに、簡単には口になさなかつたんだらうね」

おばあちゃんがわたしと遥を交互に見ながら、かばうようにそう言ってくれた。

「でも遥も柊も。おまえたちもいけないよ。あれほど先に籍を入れると言ったのに、どうして今の若い子たちは、手順をきちんと踏めないのかね……」

大学入試前のまだ高校生の時、おばあちゃんにそう言われたんだよね。籍を入れてから、東京へ行けて。

でも、いくらなんでもそれは気が早すぎるといって、遙もあきれ
ていたのを思い出す。

真つ先におばあちゃんに二人のことを知らせたのは、間違いだっ
たと、後悔してたよね。

「ばあちゃん、心配かけてごめん……」

いつもは口の悪い遙も、今夜ばかりは、おばあちゃんには何も言
い返さない。

わたしだって同じだ。言い訳するつもりはない。頭をたれるよう
にして俯く。

「でもまあ、ちつとも悪い話じゃないんだからね……。二人が一緒
になってくれれば、それはご先祖様が一番喜んでくれるんだから。
私がいいと言ったんだ。お前たちは堂々としてればいいんだよ」

「おばあちゃん、ありがとう。あ、あの……。今ごろ、だけど、おば
あちゃん、ただいま……」

そんな間抜けな挨拶をするわたしに、ほんと柊はおもしろい子だ
ねえとおばあちゃんが目を細める。

いつものおばあちゃんだ。目の奥が、きゅっと熱くなった。

遙といえば、ムスツとしたまま、みんなから離れたところで、壁
にもたれるようにして膝を立てて座っている。

綾子おばさんとは目も合わそうとしない。

すると、希美香が息を切らせ、ドタドタと部屋に駆け込んできた。

「みんな呼んできたから。ねえねえ、あたしもここにいていいでし
よ？ 母さん、お願い！」

おばさんは眉をひそめ、ためらいの表情を見せる。

けれど、わたしの横に貼りついた希美香を見て、あきらめたよう
にため息をつき、仕方ないわね、いいわよと頷く。

しばらくすると、わたしの両親と俊介おじさんが厳しい顔つきで
部屋に入ってきた。

そして……。

「はるかっ！ い、いったいどういうことなんだ！ 柊と暮しているだと？ お、おまえってやつは……。俺の納得のいくように、きちんと説明しろっ！」

真っ先に怒鳴ったのは……。

わたしの父さんだった。

そんな父さんの剣幕に一番驚いていたのは、遥の父親である俊介おじさん。

おじさんも怒ってるって聞いていたのに、真っ赤な顔をして怒鳴っている父に圧倒されたのか、逆に恐縮しきった様子でおろおろしているのだ。

ただならぬ父さんの逆上に遥も覚悟をきめたのだらう。素早くその場に正座すると、深く頭を下げた。

わたしも遥と同じように頭を下げる。

「おじちゃん、ごめん……。柊と一緒にいるのは本当なんだ。俺のわがままからこんなことになった。柊は悪くないから……。だから……。俺だけを責めるなり殴るなり、なんでも気の済むようにやってくれたらいい」

遥は膝の下の畳に向かって、搾り出すような声を発した。

父さんは、乱暴に遥の両肩を掴んで起き上がらせると、シャツの襟首を持って、今にも殴らんばかりに至近距離で遥を睨みつける。

父さんの目は真っ赤に血走り、額の血管がくつきりと浮き出していた。

遥はそんな父さんを見つ直ぐに見て、唇を一文字に引き結ぶ。決して後ずさることなく、父さんに身をゆだねるようにして。

父の怒りに震えた右のこぶしが、今この瞬間にも、遥の顔面を直撃しようとしていた。

19・父さんの涙

どれくらい、そうしていたのだろう。

あるいは、ほんの数秒だったのかもしれない。

誰もその場から動けなくて、声も出せなくて……。まるでスローモーションの一場面のようなその光景を、ただじっと傍観しているだけだった。

遙の襟首をつかんでいた父さんの手が、ようやく離れる。

すると今度は父さんが畳に手をつけて、その広い背中を震わせるのだ。

「殴れるわけが……ない。遙、おまえを、どうして殴れるんだ。いっそのこと、どこの誰ともわからん相手だったらどれだけよかったか。おもいつきりぶつとばしてやったのに……」

遙は半ば放心状態で、四つん這いになってうな垂れる父さんをじっと見ていた。

「子どもは、いつかは自分の手元から離れていくとわかっているのに、いざとなると、このありさまだ」

俊介おじさんは目をつぶり腕を組んで、父さんの話を黙って聞いている。

「遙。もう俺が何を言っても無駄なのか？」

父さんが、ゆっくりと腰を落とし、遙の正面に座って顔を上げた。

泣いている。

父さんが。

涙をはらはらと流して、泣いていた。

「遙。なんで、柎なんだ。おまえたちは、姉弟だろ？ たとえ血はつながっていなくても、立派に姉弟だ」

遙は、膝の上に置いた両手のこぶしを、ぎゅっと握り締める。

「そうだ。わたしたちは姉弟だった。でも、本当の家族ではない。子どもながらに、それだけはずっと自覚していたと思う。」

ふと気がついた時、目の前にいる遙はもう弟なんかじゃなかった。好きで好きでたまらなくて、わたしのすべてを彼に受け止めて欲しくて、他の誰にも取られたくなくて。

そんな遙と、栗の木の下で夕日に見守られながら交わした将来の約束が、わたしの全てだった。

「おじちゃん……。柎は、俺の姉じゃない。もちろん、妹でもない。昔から、そんな風に思ったことは一度もなかった。おじちゃんやおばちゃんに何と言われようと、父さんと母さんが何を言おうとも。俺の気持は変わらない。柎は、誰にも渡さない。俺のそばから離さない……」

父さんはよほどびっくりしたのだろう。

流れ落ちる涙を拭うことすらせず、ただ呆然と遙を見ていた。

「柎のことは、俺が全て責任を持つ。それでも甘いと言っのなら。大学も辞めて、仕事を見つけ……」

「遙っ、おまえの領分は学生なんだ。そんな勝手なことは父さんが許さないぞ！」

今度は俊介おじさんが黙ってはいない。遙に掴み掛からんばかりの勢いでまくし立てる。

「俊介、もういい」

父さんがおじさんの腕をつかんだ。

「もういいんだ。遙の気持はよくわかった。こいつ、おまえと同じだ。おまえが綾子さんをここに連れてきた時と、一寸たりとも違わない。頑固なところも、惚れたら最後、どこまでも突っ走るところも……。やっぱり遙は、おまえの子どもだよ」

「に、兄さん。何も子どもたちの前で、そこまで言わなくても……」
父さんのあからさまな言葉に、おじさんは狼狽を隠せない。
わたしだって、恥ずかしい。希美香も真っ赤な顔をしてもぞもぞしている。

おじさんとおばさんにそんな時代があったなんて、変な感じだ。
おばさんと結婚するために、おじさんも今の遥みたいに必死にな
って、おばあちゃんや当時まだ生きていた遥のおじいちゃんに頼み
込んだってこと？　なんだか不思議な気がする。

「遥。柊のことは、おまえに任せた。蔵城家のことは何も考えなく
ていいから。おまえたちのしたいようにすればいい」

したいように……すればいい？　本当に？

ついに父さんが、わたしたちのことを認めてくれた。

でも、まだ涙を目に一杯溜めている父さんはどこか寂しそうで、
そんな言葉とは裏腹に、わたしにどこへも行くなと言っているよう
な気がしてならない。

「父さん……。父さん、ごめんなさい」

何か一言でもしゃべったら泣いてしまいそうで、怖くて口を開く
ことが出来なかったけど。

もうこれ以上我慢できなかった。

父さんに向かってわたしは、堰を切ったように思いを溢れさせた。
「わ、わたし、遥とこれから先もずっと一緒にいたいと思ってる。

だから、もし反対されたら……もう生きていけないと思ってた」

父さんが眉を潜め、言葉では言い表せないような悲しそうな目を
して、わたしを見た。

でも、大袈裟でも何でもない。これは、わたしの正直な気持ちだ
った。

死ぬほど人を好きになるなんて言葉は、映画や小説の中だけのう
そっぱちの表現だと思っていただけ、今のわたしにははつきりと理
解できる。

もしも遥を失うようなことになれば、とうてい生きてはいけない。いつの間に、こんなに遥を好きになってしまったのだろう。一緒に暮すようになってから、ますます遥への想いが深くなっているのは、間違いないのだけだ。

父さんの気持ちは痛いほどよくわかる。たとえ相手がよく知っている遥であったとしても、一人娘が親の知らないところで男の人と暮らしていると知った時の悲しみは、どれほどのものだったのだろう。

それもついさつき知らされたばかりだろうから、まだ心の整理もついていないはずだ。

あんな風に遥に向かってけんか腰になるのも無理はない。

でも、わたしの相手は父さんの大好きな遥だよ。

男の子のいない我が家にとって、遥はずっと本当の息子のような存在だったのだから。

そんな遥をわたしの将来の伴侶として認めてくれるのは、ある意味、当然の流れかもしれないけど、娘を奪った男であることには違いない。

憎い……。でもかわいい。

そんな二つの相反する思いが交錯する父さんの涙は、わたしの心に重くのしかかるばかりだ。

「兄さん、ほんとうにすまない……。遥を許してやってくれ。遥の足りないところは僕がサポートしていくつもりだ。柎に辛い思いだけはさせないから」

俊介おじさんは、まるで遥の気持ちを代弁するかのようひたすら謝っている。

「でもね、兄さん……。遥が柎を選んだのは、わが息子ながらあつぱれだと思うよ。こんなに素直でかわいくて。賢いお嫁さんが将来うちに来てくれるとなると、僕も鼻が高いよ。希美香もうれしいだろっ。」

「あつたりまえじゃん！　いつも威張り散らして気に食わない兄貴
だけど、お姉ちゃんを選んだことだけは尊敬するね。見直したよ、
お兄ちゃん！」

わたしと遥の間にいる希美香が、エールを贈るように、遥の背中
を容赦なくパシッと叩く。

遥の顔が一瞬険しく歪んだけど、いつものように希美香にやり返
すことはなかった。

派手な兄妹げんかは、すでに封印されてしまったのかもしれない。
それにしても……。

本当にわたしでいいの？　真意を問うように、隣にいる希美香を
窺い見る。

「お姉ちゃん。なんだって、そんなに不安そうな顔してるの？　あ
たしはね、お兄ちゃんが選んだ人がお姉ちゃんによかったって、本
当にそう思ってるんだから」

「希美ちゃん……」

「だって、だって、あたし……。小さい頃、お姉ちゃんにいっぱい
助けてもらったんだよ。いつも家に母さんがいなくて、父さんも夜
中にならないと帰ってこないし。だから、ずっと寂しかったんだ。
どんな時でも、お姉ちゃんが側にいてくれて、遊んでくれて……。
もしお姉ちゃんがいなくなったら、あたし……。あたし……」

希美香がわつと泣き崩れた。

わたしの膝に顔を埋めて、細い肩を揺らしている。

希美ちゃん。わたしも知ってたよ。当時、綾子おばさんは仕事で
忙しくて、ずっと家にいなくて。あなたが寂しがっていたこと……。
わたしは、希美香のことを妹のようにかわいく思っていたから、
いつも一緒にいるのがあたりまえだった。

遥は学校から帰るとすぐに、友達と野球やサッカーをしにどこか
へ遊びに行ってしまうから、ひとりぼっちになって余計に寂しかっ
たんだと思う。

時々我がままを言って、わたしや母さんを困らせたりもしたけど、

それも含めてかわいくて仕方なかった。

お姉ちゃん、お姉ちゃんと言って慕ってくれて、わたしがどこに行く時もくっついて離れなかった幼い頃の希美香。

ひとりっ子のわたしの方こそ、希美香の笑顔に毎日幸せをもらっていたのかも知れない。

だからもう、泣かないで……。わたしは、泣きじゃくる希美香の頭をそっと撫で続けた。

「……わかったわ。私ももうこれ以上何も言わない……。」「

ずっと難しい顔をして微動だにしなかった綾子おばさんも、希美香の涙には勝てなかったのだろう。

ふうつと大きく息を吐き、わたしを見てそう言ったのだ。

「柊ちゃん。ここでひとつだけ訊いてもいいかしら？」

「いったい、何だろう。わたしは希美香を抱き起こし、姿勢を正して座り直して、おばさんの質問を待った。

「もし将来遥が朝日万葉堂を継いだとしたら……。柊ちゃんも、遥について行ってくれるの？」

わたしの心臓がトクツと鳴る。そうだった。遥と一緒に生きていくというのはこういうことなんだと今はっきりと自覚する。

もちろん、遥の行く所ならどこまでもついていくつもりだ。でも……。

わたしが東京に永住してしまうことになったら、うちの両親はどうなるのだろうか。

畑は？ 田んぼは？ 家も山もどうなる？

父さんも母さんもこのままいつまでも元気でいられるなんて保証はどこにもないし、近い将来、必ずわたしや遥の助けが必要になる時が来る。

その時、どうすればいい？ 店の切り盛りをしなければいけないわたしに、両親を支えることが出来るのだろうか。

すると、あきれたような遥のため息が聞こえた。

「だから……。俺は店は継がないって言ってるだろ？ 何度言ったらわかるんだ。じいさんもとくに了解済みだ」

返事に困っているわたしの心中を察したかのように、遙が口を挟む。

「遙！ あなたは黙ってて！ もしもの話よ。将来どうなるかなんて、誰にもわからない。父だって口に出しては言わないけど、遙に頼る気持は以前より強くなってるわ。あなただって気が変わるかもしれないじゃない。だからね、柊ちゃん。それだけは覚悟しておいて欲しいの」

「そのことは今、関係ないだろ？ なんでそんな話、蒸し返すんだよ」

「関係ない？ とんでもない。大ありだわ。だから、今は柊ちゃんに話をしてるって言うてるでしょ？ 遙は黙って！ こういうことはあまり言いたくないけど……。堂野家の資産だつて直系の遙が引き継いだ方が、両親も安心だと思うの。私は蔵城姓は名乗れなかつたけど、ここに来た時から俊介さんの育ったこの村に骨を埋めるつもりでいるわ。だから、後は遙しかいないの。私は残念ながら商売の才覚に乏しいことに早々に気付いていた。でも遙は違うわ。遙こそ朝日万葉堂を継ぐのにふさわしい人材だと思うのよ。柊ちゃん。あなたもそう思うでしょ？ 今後は店のことも視野に入れたい欲しいの」

わたしはおばさんの迫力に負けて、うんと頷いてしまいそうになった。

でも、遙の目がそれを許さない。

すると今度は母さんが遙をつかまえて、説得にかかる。

「そうよ、はる君。何も今からお店を継がないなんて決め付けないで。だって、あなたなら、商売も向いてるかもしれないもの。そのルックスをいかせば、新しい客層も増やせるし……。だって、あのポスターすごかったじゃない。そうそう柊も珠算は二級だし、意外とケチなのよね。甘い物も大好きでしょ？ 二人の力が合わさると

相乗効果でうまくいくと思うんだけどな。だって、堂野家は、私の父方の遠縁でもあるんだし、向こうのおじさんもおばさんも、柊のことはきつとかわいがって下さるわ。それになんといつても、将来は社長夫人になれるのよ。すごいじゃない!」

完全に場違いな母さんのはしゃぎように、呆氣にとられてしまった。

遙も啞然とした様子で、わたしと目を合わせる。

いくら慣れ親しんだ間柄とは言っても、遙もわたしの母親には遠慮があるのだろう。

ここはわたしが遙に成り代わって、はっきりと母さんに伝えなければいけない。

「母さん……。わたしが甘い物好きなのは認めるけど、それと商売は関係ないと思うの。遙には遙の考えがあるんだから、わたしたちのことにこれ以上口を挟まないで欲しい」

わたしはきつぱりと言い切った。ところがそれで引き下がる相手ではない。

母さんは怯むことなく、わたしに突っかかって来る。

「あらあ、一人前の口利いちゃって。まだまだ子どもね。そのうち大人の事情つてもわかる時が来るわ」

「そんなのわかりたくない。それに、社長夫人とか、別になりたくないもん!」

もうホントに母さんったらどつちの味方なのか……。社長夫人とか、想像するだけでもジンマシンが出そうになる。

遙だって、もともと据えられている社長の椅子に座ろうなんてこれっぽっちも思っていないはずだ。

そういうのは自分で苦労して切り開いてこそ、価値があるんじゃないの？

こんなにまじめに、いろいろなことを考えているのに、わたしのどこが子どもっぽいと言うのだろう。

このままでは、到底腹の虫が収まらない。

本当にこの子つたらと言って、綾子おばさんと顔を見合わせてク
スツと笑う母さんに反論しようと思いを乗り出した時だった。

「みんな……聞いてくれる？ あたし、前から決めてたことがある
んだ……」

頬に涙のあとをつけたままの希美香がゆっくりと顔を上げて、突
然そんなことを言い始めたのだ。

19 父さんの涙（後書き）

20・女神の降臨

希美香は時折鼻をすすりながらも、顔を真つ直ぐに上げて、はっきりとした口調で話し始めた。

「あたし、大学に行かない……」

そこにいた皆が怪訝そうに希美香を見た。

わたしもびっくりして横にいる彼女を見る。

希美香は、県立西山第一高校に通っている三年生だ。わたしと遙の後輩になる。

遙に匹敵するくらい成績のいい彼女は、ついこの間まで、自分も東京に出て大学に行くんだとはりきっていたはずだ。

まだわたしには、希美香の話の真髓がつかめなかった。

「希美香、大学行かないでどうするんだ？ 働くのか？」
俊介おじさんが慌てて問いたです。

「急にどうしたの？ あなたも東京の大学で栄養士の勉強がしたいって言ってたじゃない？ 高校の先生だって、堂野さんに期待してるって言ってくれたわ。何かあったの？ ねえ、いったいどうするって言うの？」

綾子おばさんもさっきまでの遙への怒りはどこへやら、希美香の予想外な宣言に目を白黒させている。

希美香はおばさんを真剣な目つきで見据えて言った。

「専門学校へ行く。調理の専門学校。……パティシエになる」

「パティシエっ？」

そこにいた全員がそう叫んだ。

父さんが遙の胸ぐらをつかんだ時からずっと泣いていたおばあちゃん、涙を拭っていたエプロンの端から手を離し、小さな目をおもいつきり見開いてきよとんとしていた。

そして、希美香を覗き込むようにして訊ねる。

「パーティー市営……？ なんのパーティーだい？ どこかの市が

やってるのかい？」

よくあるおばあちゃんの聞き間違いに、いつもならここでみんなして大笑いする場面なんだけど、今夜はそうもいかない。

遙が少し肩を揺らした程度で、誰も笑わなかった。

さらりと聞き流したあと、綾子おばさんが洋菓子を作る職人さんのことよと簡単に説明を添える。

おばあちゃんは、へえそうかいと言って、こくこくと頷いた。

遙が希美香をチラッと見た後、わたしと綾子おばさんに向かって全てを悟ったような視線を送り、フツと息を漏らす。

とたん、遙の表情が急激に明るさを取り戻し、笑顔まで見せるものだから、わたしはわけがわからず、ただただ遙を不思議そうに凝視することしか出来ない。

「希美香、サンキュー。おまえには一生足向けて眠れねーな」

えっ？ いったいどういうこと？ わたしは希美香と遙のやりとりの奥にあるものを探ろうとするのだけど、まだ糸口は見つけられなかった。

希美香のパティシエ宣言と、遙の急激な態度の軟化がどう結びつくというのだろう。

「えへへ……。だから言ったでしょ。あたしはお兄ちゃんとお姉ちゃんの味方だつて。いろいろ調べただけど、東京のおじいちゃん家から通えるところに日本国内でも有名な調理の学校があるんだ。

そこに行きたいと思ってる。それで将来は、朝日万葉堂の洋菓子部門でサポートしていけたらいいなって考えてるんだけどね。洋菓子のテクニクを取り入れた創作和菓子なんてのもやってみたいし……

でもまあ、厳しい先生方も多い学校だから、大学以上に大変だと思うけど。自分の大好きな道だからやっていけると思う。お願い、行かせて！ 父さん、母さん、お願い！」

希美香が瞳を輝かせて、自分の未来を語っている。そうか。そういうことだったのか。

やっとな事情が呑み込めたわたしは、泣き虫で甘えん坊だった希美

香が、とてつもなくしつかりした高校三年生に見えてきた。でもその決断は決して恩着せがましいものではないとわかっている。

希美香は小さい頃からお菓子作りが大好きで、うちの台所のオーブンは、彼女のためにあるようなものだったのだ。

クッキーやケーキはもちろんのこと、上新粉や餡もうまく使って、季節の団子なども彼女の手にかければお手の物だった。

母さんもびつくりするほどの手際の良さで、味も抜群にいい。彼女がパティシエを希望するのは意外でもなんでもなかった。

そして彼女の夢の先には、おばさんが心配している朝日万葉堂の跡継ぎ問題もきちんと組み込まれている。

今の世の中、女性の後継者もなんら不都合はないはずだ。

そんな希美香の勇氣ある決断に敬意を表して、さつき遥が足を向けて眠れないなどと言ったのだろう。

「希美香。あなたの希望はわかった。今すぐには返事は出来ないけど。お父さんと学校の先生ともよく話し合って決めましょう。でもまあ、なんと言つか、父は大喜びだね。だって、おじいちゃんはそこの学校の講師として、何度か招かれてるはずだもの……」

希美香がこぼれんばかりの笑顔を見せて綾子おばさんに抱きついたのは、その直後だった。

綾子おばさんが寝ている卓の様子を見に行くといって部屋を出た時、時計の針はすでに真夜中の零時を指していた。

今夜の話し合いは、ここで一区切りのようだ。

みんながわらわらと立ち上がり、大きく伸びをする。

おばあちゃんが、わたしと遥の寢床を母屋の客間に作るうかと言ってくれたけど、父さんの一言で家に戻って自分の部屋で眠ることになってしまった。

もちろん遥とは別々に。

二人の付き合いは認めるが、俺の目の前では好きなようにはさせんなどと言つて、父さんがこそこそとばかりにまた声を荒げる。わたしが父さんに反論しようとする、遥が目配せをするのだ。今夜は父さんの言うとおりにしろと。わたしはしぶしぶ遥にまた明日と告げて、母さんと一緒に家に戻った。

次の日、雨の音で目を覚ますと、ここは実家なんだと改めて実感する。

東京のアパートの天井の上は、上階の住人の部屋になっているので、屋根に当たる雨の音など全く聞こえない。

外に出て初めて雨が降っていることに気付き、慌てて傘を取りに帰ることも多い。

両親はもうすでに起きていて、父さんはいつものように茶の間で新聞を広げていた。

「母さん、父さん、おはよう」

「あら、柊、おはよう。よく眠れた？ 今朝は雨がひどかったでしょ？」

「うん。雨の音で目が覚めた。でもなつかしい……。やっぱり家はいいな」

「ホントにこの子だったらのん気なこと言っちゃって。母さんも父さんも、あなたたちのこと、どれだけ心配したか。父さんなんて、夕べ、ほとんど寝てないのよ」

母さんの声にかぶさるように、これみよがしに父さんの咳払いが聞こえる。

相変わらず父さんは新聞をじっと見たまま、私と目を合わそうともしない。まだ怒っているのだ。絶対に。

「朝ごはん出来てるわよ。はる君も呼ぶ？ あの子、向こうで気ま

ずい思いをしてるんじゃない？」

はる君という母さんの声にピクンと反応した父さんが、ようやく新聞から顔を上げ、こちらを見た。

「遙を呼べ。いろいろ訊きたいこともあるからな」

父さんの声が、朝の空気を一瞬にして緊張させる。

遙に何を訊くのだろう。わたしは胃の辺りがぎゅっとしぼられるような痛みに襲われた。

朝からののしり合い、挙句の果て、つかみ合いの大げんか……なんてことは、出来れば遠慮してもらいたい。

わたしはためらいながらもポケットから携帯を取り出し、遙の番号を画面に呼び出した。

そして通話ボタンを押し、応答を待つ。

昨夜以来、綾子おばさんに完全に無視されている遙は、おばあちゃんの用意してくれた母屋の寢床で、夜を明かしたようだ。

起きぬけの機嫌の悪そうな顔で、雨の中、傘もささずうちの土間にバタバタと駆け込んできた。

雨のしずくが髪を伝い、遙の長いまつげを濡らしている。

見慣れているはずの彼の横顔を視線の端に捉えた時、またひとつ心臓がトクンと鳴った。

「おはよー。はる君、ご飯できてるわよー！」

台所から母さんの大きな声が響く。

「ああ……。今行くよ」

遙はわたしから受け取ったタオルで濡れた髪を拭きながら、ボソッと覇気のない返事をした。

四人掛けの食卓テーブルで、わたしの横に遙が座りその前に母さんが座って給仕をしてくれる。

先に朝食を済ませている父さんが隣の茶の間から台所にやってきて、わたしの前に座った。

これは相当気まずい。想像以上に陰悪な空気が漂っている。

こつやって食事をするのは何も今朝が初めてではない。

子どもの頃はもうひとつ椅子を並べて、毎日のように遙と希美香を交えて五人で食事をしていたのだから。

茶碗をテーブルに置く時のコトリという音と、味噌汁をすすする音
しかない。

何か話題を振らなくてはと思うのだが、この四人に共通の話題など、そう簡単に見つかるとも思えない。

横目でちらつと遙を見ると、もう茶碗のご飯が空になっていた。

何も言わずに母さんがそれを受け取ると、二膳目を軽くよそって遙に差し出した。

「どうも……」

遙がそう言っただけで軽く頭を下げて、茶碗を受け取る。

父さんは……といえは。腕を組み、誰もいない茶の間の空間に、漠然と視線を彷徨わせている。

「お父さん、コーヒーでも淹れましょうか？」

母さんのその言葉が引き金になり、ようやく父さんが、その閉じられていた重い口を開いた。

まずはわざとらしい咳払いをひとつ。そして……。

「遙、柊。おまえたち、式は……いつ挙げるんだ」

湯飲みに入ったお茶をすすっていた遙が、まるでコントのワンシ
ーンのように、絶妙のタイミングでぶはつとそれをふきだした。

20・女神の降臨（後書き）

パティシエ……これはフランス語で男性の菓子職人を表す言葉ですが、日本では男女関係なくパティシエという用語を使用することが多いので文中でもそのまま使用しています。ちなみに女性形はパティシエールと表現するようです。

ここまで改稿済みです。

次話以降、話の内容がだいぶたまたまになっておりますのでご注意ください。8 / 31

21・家族

父さんがあまりにも突然、そんなことを訊くものだから、わたしも遙も当然のように、言葉につまってしまった。

むせ続ける遙の背中をさすり、大丈夫？ と訊ねると、父さんがまた夕べと同じような不機嫌な顔になって、遙にかまうな！ などとこれまた理不尽な注文をつける。

「お父さん！ あなたがいきなりそんなこと訊くから、はる君がむせちゃったのでしょ？ はる君、ごめんなさいね」

遙は、母さんが差し出してくれたティッシュの箱を受け取ると、数枚引き出して口と手をぬぐった。

わたしは遙の背中から手を離し、父さんに訊ねた。

「父さん。式って、そ、その……」

多分あのことだとは思っけれど、こういう時、答えがわかっていても、訊き返してしまうのはなぜだろう。

「け、結婚式……ってことだよな？」

わたしが言ったとたんに父さんが訝しげにこつちを見た。

「あたりまえだ。ほかに何の式があるんだ。……おまえたちが一緒に暮らしたいというのなら、きちんとしておかないとだめだろ？」

「それは、そうだけど……。で、でも、父さん……」

隣を見ると、遙も苦笑いを浮かべている。

そりゃあそうだよな。だってわたしたちはまだ大学生だし、収入もわずかしかない。

誰が見ても、わたしたちには結婚する資格などないと言われるに決まってる。なのに父さん直々に結婚の許可がおりるだなんて、本当に信じられない。

経済力や、社会的な体面も含めて、二十五歳になるまでは結婚は難しいと思っていた。

いや、二十五歳になっても、三十歳になっても。父さんが許して

くれるとは到底思えなかったのに。

母さんといえば、唐突な父さんの問いかけにも左右されることなく、淡々とコーヒーのお代わりを勧めている。

わずか一晩で、普段どおりの父さんにもどっていることにも驚いたが、結婚式の話を持ち出してくるところをみると、わたしと遙のことはすっかり認めてくれているようにも思える。

父さんのこぶしもぎりぎり回避されたし、勘当の言葉を浴びせられることもなかった。

「……おじちゃん。式の話は、まだ何も決めてない」

咳がおさまった遙が父さんに向かって話し始めた。

「俺たちはまだ学生だし、結婚は卒業してからと思っっている。就職して、仕事が軌道に乗ったらすぐにでも式を挙げるつもりだ」

父さんがぎろつと遙を見た。どうして？ 遙は何も間違ったことは言っていないと思う。

でも、わたしも今の遙の話聞いて、びっくりしたことがある。

仕事が軌道に乗ったら結婚するって言ったよね。

ずっと二十五歳になったら結婚すると思っていたから、意外だった。

ということとは、二十三歳でも二十四歳でも可能性があるってことだ。

あと数年後には遙のお嫁さんになるんだと思うと、なんだか落ち着かない。

「仕事もこつちで探すし、ここかばあちゃんのところに住むつもりでいる。それに俺、ここの養子になるから。どっちみち親父も元は蔵城なんだし、異存はないと思う。おじちゃんとおばちゃんももと俺にとっては親も同然だ。義理でもなんでもない。将来はちゃんと世話をするつもりでいる。それと、お袋のことはそのうちなんとかするよ。それでいいだろ？」

遙が養子の話を持ち出したとたん、父さんの目つきが柔らかくな

った。

父さんにしてみれば、わたしと遙が両親の側にいれば何も言うこととはないのだろう。

これなら今までどおり、東京で遙と一緒に暮らしてもいいと言ってくれそうだ。

遙の決意に心の中で惜しめない拍手を贈った。

「……そうか。おまえは、そこまで考えてくれてるのか。そうだな、綾子さんには少しずつ歩み寄っていけばいい。希美香も助け舟を出してくれたことだしな」

父さんが目を細めて、うんうんと頷く。が、しかし。また顔つきがかわしくなってきた。

「でも、それとこれとは話は別だ。いいか、遙。結婚がまだ先の話なら、柊と同棲はするな。向こうに帰ったら別々に暮らせ。いいな！」

い、今……。なんとおっしゃいましたか？ 確か、別々に暮らせつつていいましたよね？

「そ、そんな……。父さん、遙は今住むところがないの。ね、だからもうしばらくは一緒にいてもいいでしょ？」

「だめだ！ 絶対にだめだ！ なんで結婚もしていないおまえたちが一緒に暮すんだ。それに、遙は夕べ言ったじゃないか。もう姉弟じゃないと。ただの男と女だと言うのなら、一緒にいることは許さん。前のマンションに戻れ！ いいな、遙！」

そんな横暴な。付き合うのは認めてくれるけど、一緒にいるのはだめってこと？ 結婚も許してくれたのに？ このっ、頑固オヤジ！

母さんも大きなため息をついてあきれている。

婚約者なのに引き離されるだなんて、父さんは、それがどれだけ辛いことかわかって言ってるのだろうか。

そうだ。父さんは遙が前のマンションに戻れない理由を知らないのだ。だから、平気でそんなことが言えるのだ。

遙は、裏切られた是定先輩がいるあのマンションには、もう戻り

たたくても戻れない。

さすがに先輩は、あれ以来演劇サークルに顔を出さなくなったけど、どこかへ引越したという話は聞いていない。

「……おじちゃん、わかったよ。近いうちに柎の部屋を出る。しばらく本田先輩のところにも世話になるか……」

「うむ。何も柎と会うなと言ってるわけじゃない。ケジメだ」

「ああ、わかつてる」

あっさりと父さんに同意した遙に、肩透かしを食らった気分になる。

昨日、母さんたちに言ったことはもう忘れてしまったのだろうか。わたしはもう離れられないって言ってくれたのは、嘘だったの？ それにたつた今、聞き捨てならないことを耳にしたような気がする。

そう。本田先輩に世話になるだなんて……。

「ねえ、遙。本田先輩に世話になるって、どういうことなの？ 先輩ってきちんとした家があるの？」

劇団の移籍事件以来、ますます本田先輩との絆が深まった遙は、時々わたしたちの住むアパートに先輩を連れてきて、一緒に夕飯を食べることがある。

そうやって仲間の家を渡り歩いているとも聞く。

無口であり自分のことを語らない本田先輩は、まだまだ謎だらけだ。

「おまえには言っていなかったけど、先輩にはちゃんと家があるさ。先輩のお袋さん、ちょっと体こわしてて今は家で療養中なんだ。ほら、去年の大河ドラマの春風の乱に出てた主人公の母親役の伊藤小百合。あの人、途中降板しただろ？ 先輩の母親だと言っていた」
いとうさゆり……。伊藤小百合って。

えっ？ も、もしかして、女優の伊藤小百合のこと？ テレビでよく見るあのきれいな人？

わたしがあたふたしている間にコーヒークップを乱暴にテーブル

に置いた父さんが、奇妙な声を上げる。

「うおおおおつ！ い、伊藤小百合だと？ 今、伊藤小百合と言ったな？ おまえ、伊藤小百合の息子と友達なのか？ なんでそれをもっと早く言わない！」

「おじちゃん……。別に親が女優でも専業主婦でも。子どもには何も関係ないと思うけど。大学には他にも俳優や歌手の子どももいるし、国会議員の息子もいる。でも誰も自分からそんなことを言いたくないし、逆にそれを負い目に感じてる者がいるのも事実だ。だから俺も、あえて話題にしなかつただけだ」

「おまえなあ……。それを聞いて夢をふくらませるのが一般人の楽しみだろ？ なあ、遙……。今度、伊藤小百合のサインをもらってきてくれ。実は……。昔から彼女のファンなんだ……」

と、父さん……。さっきまで遥にあんなにえらそうに言っていたのに急にその態度。

野球と魚釣り番組とバラエティーしか見ない父さんが、伊藤小百合の出ているドラマや映画だけは欠かさず見ていたのは知っているけどな。

それにしても伊藤小百合の息子が本田先輩だなんて、これは驚きだ。

わたしが高校の時に見てた学園ドラマにも、主人公の新任教師の母親役で出てたはず。

小柄で愛くるしい目をしたとてもきれいな女優さんだ。

背が高くワイルドな感じの本田先輩とは、あまりにも違いすぎる。何もかもが……。

「サイン？ まあ、今度会ったら頼んでみるよ。それで、先輩は今母親の望みで最近自宅から学校に通ってるんだ。俺がマンションを出て柊のところに行く時も、うちに来ないかと誘ってくれた。かなり豪邸に住んでるみたいだ。例の協会のポスターを見て、先輩のお袋さんが俺に興味持ってくれているらしい。柊も一緒に一度遊びに来いって先輩から誘われているんだ」

わたしも父さんも、そして母さんも。ぼかんと口を開けたまま、嘘のような本当の話を聞いていた。

遙ったら、今まで一度だってそんな風に話してくれたことはなかった。本当に今日、初めて聞いたんだから。

伊藤小百合に会えるなんて、まだ信じられないけど、だからと言って、本田先輩のイメージがガラッと変わったりはしない。

先輩とは一学年違うだけなのに、五歳以上歳が離れているように思えるくらい落ち着いて見える。

そしてその声はこれまでに数えるほどしか聞いたことがないくらい無口だ。

でも、たまに聞く先輩の声は、低くて艶のある声で……。

洋画の吹き替えにびったりだと常々思っていたのは、遺伝子の仕事だったのかと言わざるを得ない。

遙は口数の少ない先輩と一緒にいても、全く気にならないというけど、わたしはどう接していいかわからなくて、無理しているいろ話しかけたあげく冷ややかな目で睨まれて、全身が縮み上がったのはつい先日のことだった。

「柊、遙がああ言ってるんだ。ぜひ行って来たらいい。くれぐれも伊藤小百合の前で粗相のないように気をつけるんだぞ。そうか、伊藤小百合に会えるのか……。俺も行きたかったなあ。何年たってもきれいな人だからな……」

そうだ。いいこと思いついた！

わたしの代わりに父さんが本田邸に行ってもいいから、これからもずっと遙と一緒に暮らしてもいいと訊いてみるチャンスではないだろうか。

でも、そんなこと。やっぱり怖くて訊けそうも……ない。

すると父さんの隣で、母さんの鼻息が荒くなってくる。

「あなた！ いい加減にしてよ。昔、伊藤小百合よりわたしがいいつてくどいたのは、どこの誰？ 向こうは女優さんだからきれくてあたりまえなの！ 何よ、いい歳して、でれでれしちやって。はる

君。サインなんかもらわなくてもいいからね！ フン」

母さんが椅子に掛けてあったエプロンを手にすると、猛スピードでそれを身につけ、流し台に向かった。

父さん、母さん……。伊藤小百合のことはもういいですから。

ここで言い争いをするのは辞めてください……。と願うのもむなし
く、父さんが食卓テーブルをパンと叩いた。

「おい！ おまえこそ、いい歳して、女優相手に嫉妬してんのか？
嫉妬なんてしてません。子どもたちの前で、にやにやしているあ
なたが不憫になっただけです」

泡だらけのスポンジを握り締め、母さんが物言わぬ背中中で応戦す
る。

「はん、何がにやにやだ……」

無言のままがちゃがちゃと洗物を続ける母さんは、やっぱり一枚
上手だった。

父さんの気迫が急激にしぼんでいく。

「どいつもこいつも勝手なことばかり言いやがって。こら、柎」

母さんに相手にされなくなった父さんが、今度はターゲットをわ
たしに変えたのだろうか。

わたしは、首をすぼめて父さんを見た。

「父さんが甘い顔したからと言って、誤解するんじゃないぞ。さっ
きも言ったとおり、同棲はだめだ！」

わたしのささやかな企みも、すでに父さんに見破られていたみた
いだ。

こくりと頷くしか選択肢はない。

「遙、おまえもだ」

次の標的は遙だ。

「何があっても、同棲は許さんからな。まあ、おまえの気持ちもわ
からないでもないが、あいにく柎は、俺の娘だ。本当だったら、と
つくにおまえなんか、ここから追い払ってるところだ。なのに……。
このやるう、よくも、俺の大事な娘を……。あああ……。また夕

べの怒りがぶり返してきた。遙を見てたらムカムカしてくる。おい！ 柊つ。こいつのどこがいいんだ！ いつからこいつにたぶらかされてる！」

段々と、父さんの行動パターンが読めてきた。

口ではああ言ってるけど、結局、自分を納得させるために、わざとわめき散らしてるんだってこと。

遙も要領を得たもので、何も言い返さずに、父さんの気の済むまですぐに言いたいようにさせているのだ。

「あなた、血圧が上がりますよ。もういいじゃないですか。二人のことは二人に任せて見守ってあげましょうよ。二人が一緒に住んでいようがいまいが、とやかく言うのはもうやめましょう。さあ、あなたたちもいつまでもここにいないくていいから。どこか気晴らしに出かけていらっしやいな。うちの車、使っていいわよ」

わたしが後片づけをしようとタイル貼りの流しの前に近寄ると、ここはいいから早くあっちへ行きなさいと耳打ちされた。

父さんの怒りが収まるまで、ここから出て行けと言うことなのだろう。

母さんの気遣いを温かく受け止めながら、遙と一緒に廊下へ出た時だった。

「お、おい。柊。遙！」

父さんがわたしたちを呼び止めた。

「もし……。もしもだな。その……」

どうしたのだろう。父さんが口ごもりながら、何かを伝えようとしている。

わたしはなぜか振り向かない方がいいような気がして、背中を向けたまま、立ち止まった。

「おまえたちの、子どもが出来るようなことがあったら……。すぐには相談に来るんだぞ。自分達で勝手にことを進めるな。いいか？ わかったな！ 孫は……。孫は、自分の子よりかわいいと、世間では言っからな……」

わたしは、わかったと言って後を向いたまま頷いた。

次第に目の奥が熱くなってきて、廊下の木の継ぎ目が滲んで見えなくなる。

溢れる涙を堪えて、やっとの思いで父さんありがとうつばやき、隣に並んで立つ遙の手をそっと握った。

22・俺、今、すんげえ後悔してる

「雨、ひでえーな。なあ柊。これから、どうする？」

寝転んで足を組み、上になった方の足先をぶらぶらと上下に揺らしながら、遥が言った。

雨のしずくが軒を伝って規則正しくぽとぽと落ちていくのが、窓から見えた。

わたしの部屋の腰高窓のすぐ下には高校時代まで使っていた勉強机があつて、横に本棚、洋服ダンスが並んでいる。

向かい側は壁一面の押入れになっている。この押入れの上の段は、昔、遥の隠れ家だった。

おばあちゃんやうちの父さんに叱られると、決まってここに逃げ込む。

ある日、山に遊びに行ったままなかなか帰ってこなくて、家族総出で遥を探した日の夜、押入れでうずくまって眠っている彼を一番に発見したのはわたしだった。

来る日も来る日も飽きることなくいたずらばかりを繰り返していた遥が、今では誰よりも優秀で真面目な大学生になって、わたしの婚約者としてここにいるのだ。

なんて不思議な光景なんだろう。あの頃は遥がこんなに立派になるなんて、想像すらできなかったのに。

「柊、聞いているのか？」

遥が疑いの目でわたしを見る。

「あつ、ごめん。聞いているよ。昔のこと、いろいろ思い出しちゃってさ。えへへ……」

ついつい懐古モードに浸ってしまった自分を反省して、肩をすくめる。

「まったく、すっかりしろよ。で、今からどうするんだ。どこか行きたいところでもあるのか？」

腹筋の賜物だろうか。いとも簡単に起き上がった遙が、再び同じ質問をする。

「母さんが車使ってもいいって言うてくれたし、どこかに出かけようよ。」

「そうだな。でも、雨だぜ。外は無理だろ?」

「じゃあ……。久しぶりに、映画でも観に行かない?」

駅の近くのショッピングゾーンに、シネコンと呼ばれる新しいスタイルの映画館が去年オープンしたらしい。偵察がてらそこに行ってみるのも悪くない。

遙と映画に行くのも久しぶりな気がする。最後に遙と映画館に足を運んだのは……。

子供向けアニメの三本立てだった。二人ともまだ小学生の頃の話だ。

希美香も加わって、三人でポップコーンをほおばりながら興奮して観ていた映画のタイトルは、誰もが知っている少年漫画のヒット作だ。

ということとは、わたしたち……。二人っきりで映画館に行ったことがないのかも。っていうか、一度もないのだ。

デートと言えば映画と言われるくらい定番なのに、未経験だなんて、悲しすぎる。

「映画? 何も実家に帰ってきてまで、映画観なくてもいいだろ? 駅前のシネコンだと、知り合いに会うぞ?」

しばらく考え込んでいた遙が、もっともらしい理由をくつつけて、反対意見を唱える。

だがしかし、遙の言うことも一理ある。今や町内でも噂になっている遙が、人の大勢集まる所に行けばどうなるのか、だいたい予想がつくというもの。

遙はもともとそういうのを好まない、というか、人に干渉されるのが嫌いなのだ。

ほとぼりが醒めるまでは、出歩くのは控えた方がいいのかもしれない

ない。

「そっか……。そうだよな。知らない人から声かけられたりするの、遙は嫌いだものね。じゃあさ、もう東京に戻るっか？ これからのことも決めないといけないし……」

「もう、戻るのか？ めったに帰って来れないんだし、もう一晩ゆつくりしていけばいいだろ？ これから先、休みとれそうにないしな」

「え？」

遙が日頃から忙しいのは知っているけど、もうすぐ夏休みになるのに、休めないってどういうことだろう。

「まだ言っていなかったけど。俺……。モデルの仕事、続けようと思ってる」

「ええっ？」

仕事を続けるだなんて、初耳だ。読者モデルは一回限りという約束だったはず。

十月号の特集記事に載って、それで終わる予定じゃなかったの？ その一回だけの仕事も、すぐに終わるのかと思いきや、数日間に渡ってスタジオでの撮影が続いて、おまけに野外にも連れ出され何度もポーズを取らされたという。

専属モデルではないので衣装替えは少ないけれど、手持ちの服も組み込んで、素人っぽさを生かした自然なページを作るために、今も尚、地道な作業が続いているのだ。

「俺、親の仕送りを止めてもらうつもりなんだ。学費は奨学金でまかなえるし、生活費はモデルでなんとか稼げそうだし。仕事が軌道にのったら、どこか小さいマンションでも借りて。そうしたら、今度こそ堂々とおまえと一緒に住めるだろ？ おまえのバイト代を合わせたら、十分に二人で生活していけるんじゃないかな」

「ねえねえ、それって、モデルの仕事、契約延長するってこと？」

「ああ。今度は読者モデルじゃなくて、十二月に出る新刊の専属モデルとしての話があるんだ。同じ出版社だから、牧田さんがそのま

ま担当してくれる。ただし、学生の間だけという期間限定で仕事を受けるつもりだ。今の撮影で一度雑誌に出てしまえば、もう何回出ようと一緒だろ？ 提示された契約金や報酬も悪くないし、おまえと暮らすためなら、なんだってやるさ。今度編集部に行ったら、やりますって返事してくるよ……」

「遙……」

あんなに嫌がってたモデルの仕事なのに、報酬のために引き受けるというの？

それに、わたしと暮らすためって言うけど、さっき父さんにあんなに反対されたばかりじゃない。

今度見つかったら、親子の縁を切られるのはもちろん、無傷ではいられないだろう。

「おい、そんな顔するなよ。言っとくけど俺、嫌々仕事をやるわけじゃないから。実はちよつと興味も湧いてきてる。正直、モデルは慣れそうにないけど、雑誌を作り上げるためにいるんな人達が一丸となって取り組んでるだろ？ そこがいいんだよな。誰も妥協はしないし、常に最高のものを要求する。パソコンの画面に撮った写真をレイアウトして、文章が入って。みるみる誌面が出来上がっていく。アパレル関係との連携も見事だし、そのあたりが見ててすっげえおもしろいんだ。テレビ局の仕事にも通じるものがあるような気がする。将来製作する側になった時、今のこの経験がきつと活かせると思うんだ」

最近見たことないってくらい、遙の表情がいきいきと輝く。

「遙がそこまで考えてるのなら、いいと思うよ。けど……」

「けど？ やっぱダメなのか？ おまえ、マスコミ関係、好きじゃないもんな」

「ま、まあね。でも、好きとか嫌いとか、まだよくわかんない。ただ、遙が手の届かない遠い人になっちゃうのだけはイヤなの。そのうち雑誌だけじゃすまなくなつて、テレビとかも出演するようになって……。そんな風に考えると、不安になる」

「でも俺は将来、そのテレビにかかわる仕事を望んでるんだぜ。モデルやタレントを否定することは、結局は俺の将来も良く思っただけでいいことにならないか？」

「それは違うよ。うまく言えないけど……。ただ、遙が忙しくなったら、会えなくなるんじゃないかって思うの。だってこの先はまた別々に暮すんだよ？ おまけに仕事が増えることになったら、わたしたち、前よりも疎遠になるような気がするんだ」

そう。マスコミ関連の仕事なんて、はっきり言ってまだよくわからない。

ただ遙がその世界に必要とされて、わたしの手の届かないところに行ってしまうそののが怖いだけ。

「だから言ってるじゃないか。もっともっと稼いで、おまえと一緒に暮らせるようがんばるんだよ。せめて金銭面だけでも自立すれば、おまえの親父さんも文句は言わないと思うけど？」

「それはそうかもしれないけど……。でも、あの様子じゃあ、それだって厳しいと思うけどね……」

「もちろん、そんなに簡単にうまくいくとは思わない。でも、親父さんだって、おまえのことがかわいいんだ。おまえの幸せを誰よりも願っている。だから、俺がしっかりすれば、同居だって認めてくれるよ」

「そっか……。遥って、すっごく前向きだね。何を言われても引き下がらないんだもの。わたしも遥みたいに強くなりたいよ」

こうと決めたら最後までやり通すところは、昔からちつとも変わっていない。

傍目には頑固で強引で、おまけに相当なうぬぼれ屋だと思われていたけど、それが遥のいいところでもあるんだよね。

「あのなあ、人を無敵サイボーグみたいに言うなよ。誰のせいでもなかったと思ってるんだ」

遙がさっと目を逸らす。少し伸びた髪の間から、真っ赤になった耳が見えた。

誰のせいって……。そ、それは、多分。

「遙。あの、あのね」

何をこんなに照れてるんだろう。遙につられて、わたしまでときどきしてしまっ。

遙、ありがとう。わたしも遙のことだけを考えて生きているんだよとでも言えればいいんだけど、ここは実家で、わたしの部屋で、廊下の向こうには父さんと母さんがいて……。

そんなこと言えるわけがない。

わたしは大急ぎで邪念を振り払い、会話の流れを軌道修正することに専念する。

「あのね、遙。今ふと思ったことがあるんだけど」

まだ少し赤い顔をした遙が、ゆっくりとこつちを見た。

「こつちやって次々と仕事が舞い込むってことは、遙に何か隠された才能があるんじゃないかって思うんだ。わたしね、この頃、ちょっとだけ目が良くなった気がするの。遙もそう思うでしょ？」

「はあ？ 視力が上がったのか？ なんだそれ」

「ちがうよ。視力は悪いままだよ。ずっとコンタクトレンズのお世話になってるんだもの。そうじゃなくて、美しい物や本物を見極める目が育ってきたってこと。だって遙がすつこくかっこよく見えるんだもの。鼻^{ひこきめ}目もあるかもしれないけど、客観的に見てもかなりイケメンだし。特に撮影のあつた日なんかは、ドキドキしてまともに遙の顔が見れないくらいだもの。だからモデルとしてもきつとうまくいくと思う。人気急上昇で、成功間違いなし。そんな人がわたしのカレシだっと思うと、ちょっと鼻が高いかも……」

そっだ。そんな風に考えると、遙がモデルとして活躍するのも悪くない。

遙はきよとんとしているけれど、今言った言葉だけでは足りないくらい、どんどん彼が素敵になっていく。

それに比べてわたしときたら……。高校時代と全く変わらないし、以前やなつぺたちに言われたように、服装も地味なままだ。

遥がうつとりとした目でわたしを見つめることなんか、あったためしがない。

ただぼんやりとこつちを見てるだけってのは、たまにあるけどね。あれ？ これって軌道修正になってるのだろうか。さっきよりも脱線してしまったかも……。

「柊。聞いて呆れるぞ。恥ずかしげもなく、よくまあ、そんなことが言えるな。おまえ、俺に惚れすぎて頭がおかしくなったんじゃないのか？」

わたしの言葉など嘘だとも言うように、遥が苦言を吐く。

「そんなことない！」

だって、大学でも遥の噂を耳にすることだってあるし、遥とすれ違ったとたん振り向いて、かつこいいとつぶやいた人もいた。

よつたとんと沢木さんからも、あれ以来、遥を崇拜しきつた褒め言葉を何度も頂戴している。

それに、それに。決して賢くはないけれど、わたしの頭はいつだって冴え渡っているんだから。

「でもな、俺のおやじも言ってたけど。おまえの方こそ、どんどんその……。きれいになっていくぞ。タベの藤村だって、おまえに見とれてたくらいだからな。だから余計におまえを一人にしておけないんだよ。もうたまんねーな。そこそこかわいいくらいで止まっておけよ」

「うそ……」

そんなの信じられない。わたしのどこがきれいだっていうの？

「嘘じゃない」

そうなの？ このわたしが？ 遥こそ、1.5の視力がついに下降し始めたんじゃないの？

わたしは遥の真意を探ろうとじっと彼を凝視してみた。でもそこに偽りの表情は見つからない。

遥の真っ直ぐな視線が、わたしに向かって注がれているだけだった。

きれいだなんて……。生まれて初めて、遥に言われた。

「さーて。藤村に連絡するか。今夜なら時間取れそうだしな」

おまえも誰か会いたい奴がないのかとわたしに訊きながら、遥が携帯を開く。

そういえば、夢美とは大学に入ってから一度も会ってなかった。

高校からエスカレーター式に短期大学の音楽科声楽コースに進んだ彼女は、自宅から短大に通っている。

連絡すれば会えるかもしれない。

「じゃあ、夢ちゃんに声かけてみようかな。でも、藤村が来るって知ったら来ないかもしれないね。だって夢ちゃん、藤村を何度もフツてるもん」

「ああ、そうだったな。それより篠川は、俺達が付き合ってることを知ってるのか？」

遥は夢美が自分のことを好きだったのも知っている。

藤村も交えてわたしと遥と夢美の四人は、見事な四角関係だったのだから。

「……知ってる。わたしから直接言ったわけじゃないけどね。前にメールもらった時、遥によろしくって書いてあった。ハートマーク付きで」

「そうか。まつ、いいんじゃない？ うまくいけば、藤村に追い風になるかもしれないだろ？」

「それはそうだけど……」

遥は簡単に言うけれど、夢美がそう簡単に心変わりするとも思えなかった。

わたしは複雑な気持を抱えたまま、夢美に連絡を取り始めた。

遥はダイレクトに電話で。わたしは、メールで彼女の都合を聞い

てみる。

「……じゃあ、夕方五時に駅前で。……おう。篠川が来るよう、なんとか柘に頼み込んでもらうよ」

男子の会話は簡潔明瞭だ。特に遙は、誰よりも会話が短い。あつという間に約束を取り付け、携帯をパタンと閉じた。

するとわたしの携帯も、すぐに返事を知らせるメロディーが鳴った。

藤村も遙も来ると正直に知らせたにもかかわらず、行く行くとかわいい絵文字までつけて瞬時にレスしてきたのだ。

心配するほどのことはなかったってわけだね。

「柘……。俺、今、すんげえ、後悔してる」

「ひ、ひゃあ！」

わたしがもう一度夢美に簡単な返事を送り携帯を閉じると、目の前に遙の顔があつてそんなことを言うものだから、驚きのあまり変な声を上げてしまった。

いったいどうしたというのだろう。何を後悔してるってどういう？ 理解に苦しみ、首を傾げてキョトンとしていると、突然遙の手がわたしの首の後ろに添えられる。

「こんなことなら、とつとと東京に戻った方が良かった。ここじゃ、こんなことも、命がけだ……」

わたしの目をじつと見ながらそう言って、次の瞬間、遙の唇がわたしに重なってきた。

携帯がぼとりと畳の上に転がり落ちる。

「ちょ、ちよつと……。ここは東京じゃ、ないんだ……。か……。ら……」

「黙って……」

言葉ごと何もかも遙にのみ込まれる。

身体をよじって抵抗を試みるも、遙はそれを許してくれなかった。いつしかわたしも彼の首に手を回し、遙から注がれる無言の想い

を、懸命に受け止めていた。

その時だった。

すっかり無防備になっていたわたしの耳に、あってはならない声が入り込んできたのは。

22 俺、今、すんげえ後悔してる（後書き）

23・再会

「入るぞ。……遙、もう出かけるのか？」

作業服を着た父さんが、入るぞと言ってから、ほんの少し間をあけてわたしの部屋の襖戸を開けた。

「いいや、まだ」

横になって携帯を見ている遙が、いかにもだるそうに返事をする。一抹の不自然さはぬぐい切れなかったが、遙の機転の速さはそれはもう見事だとしか言いようがない。

わたしの家はかなり古い。人が廊下を歩くと、どこかがぎしぎしと音を立てるのだ。

それは床だったり、柱だったり、あるいは窓枠だったりする。

長年の経験で、部屋に近づく人の気配というものをキャッチするすべだけは、遙もわたしも体にしみついている。

最悪の事態だけは無事回避できたはず……だ。

今の遙との戯れは絶対に見られていないと思う。

「何時に出るんだ」

心なしか、父さんの声が冷たく感じる。

「夕方の五時に友達と待ち合わせしてる。何か用？」

あくまでも携帯を見ているそぶりを崩さず、何事もなかったかのようにそっけなく父さんに答えている。

「じゃあ、ちよつと手伝え。これ以上雨がずっと心配だ。田んぼを見に行くぞ。草取りもしないとな。除草剤は極力控えるから手作業なのはおまえも知ってるだろ？ ぼちぼちおまえにも、田んぼのことを引き継いでいかないとな」

「……わかった」

何か不穏な空気でも感じ取ったのだろうか。遙が携帯を閉じて起き上がり、やや強張った顔で戸口に立っている父さんを見上げる。

「遙。言っとくが……。俺が何も気付いてないと思ったら大間違い

だからな」

父さんの尖った視線が、わたしと遙を交互に突き刺す。

な、なに？ 何も気付いてないと思っただらって、それって……。

もしかして、今ここで遙と抱き合っていたことがバレているとでも？

肩をいからせながら部屋から出て行った父さんの後姿を見ながら、遙が大きくため息をついた。

「親父さんには敵わねーな。こっちが外の気配に気付くように、向こうも中のことがわかるんじゃないか？ まあ、仲が悪いところを見せるよりは、いいんじゃないかねえの？」

遙は簡単に言うけれど。さっきのことを気付かれたと思うだけで恥ずかしくて、顔から火が出そうだ。

今からどうやって父さんと顔を合わせると言うの？

わたしたちの一挙手一投足は、すべて父さんの手の中にあるのかもしれない。

父さんの包囲網はとてつもなく強靱なことなんだね。

米作りは、父さんと俊介おじさんが会社の休みの日を使って作業を続けている。

今では自宅用と近所で頼まれている分くらいしか作っていないけど、昨今の無農薬ブームで、分けて欲しいという人が増えて、仕事量が増えているらしい。

野菜と果樹の世話は、おばあちゃんと母さんが担当している。

田植えや稲刈りの時は、家族総出で田んぼに出ることもある。

綾子おばさんは、会社を辞めてから花作りに目覚め、庭や家庭菜園の一角にあるビニールハウスで種から苗を育て、世界中の珍しい花も栽培している。

村の自治会や、ボランティアを率先して引き受けているのも綾子おばさんだ。

うちと、おばあちゃんと、隣の堂野家とで、バランスよく仕事の

作業分担が出来ていると思う。

将来は、わたしも何かを担わなくてはいけないとわかっているのだけど。

でも、田んぼだけは……。

「柊、おまえも一緒に来いよ」

遙が田んぼに一緒に行こうと誘い、わたしの腕をぐいっつとひっぱった。

い、いやだなあ。わたしは家で本でも読んでいようと思っていたのに。

「わたしは行かないよ。だって、くつがドロドロになるし、カエルとかへビも出るし……」

「んなもん、あたりまえだろ。さあ、着替えろ！」

どうしたというのだろう。突如はしゃぐように準備を始める遙に、目を見張る。

遙だつてつい最近までは、田んぼの仕事をあれほど嫌がっていたのに。この変わりようは何？

父さんの用意した超ダサイ作業服の上に、半透明の雨がっぱを身につけたこの目の前の遙が、実はファッション誌の読者モデルだなんて、誰が信じる？

わたしは重い腰を上げ、高校時代のブルーの体操服を引っ張り出して、嫌々ながらも着替えを済ませる。

遙と同じ雨がっぱを着て、長靴を履けば準備完了だ。

大股でつかつかとあぜ道を歩いていく前方の怪しい二人の男性に引き離されないように、わたしは小雨の中を小走りになりながら、必死になってついて行った。

昼食をはさんで、夕方まで田んぼの仕事に精を出したわたしと遙は、今、父さんの運転する車に乗って、駅前の待ち合わせ場所に向

っていた。

雨は幾分小止みになったものの、日の長くなった六月の夕方とは思えないほどあたりは暗く、灰色の雨雲が低く垂れ込めていた。

せつかくセツトし直した髪も、たちまち湿気を含み、ぼわつと乱れる。

でもこの時期の雨こそが農作物にとっては天からの恵となるのだから、グチばかりも言ってられない。

ため池にたつぷり雨水をためておくことで、夏の日照り続きの間も水不足の心配をしなくて済む。

これから梅雨の末期にかけての集中豪雨と台風の直撃さえなければ、秋の収穫は大方保障されたようなものだ。父さんがハンドルを握りながら言った。

「二人とも、あまり遅くなるなよ。遙、柊を頼んだぞ」

ロータリーで車から降り、父さんの車がビルの角を曲がって見えなくなるまで、その場で見送っていた。

父さんに駅にまで送ってもらったのは、大学受験で上京する時以来だ。

あの時は老朽化のため工事中だった駅ビルが、今や再開発事業で近代的に整備され、以前に比べて乗降客も増えているという。

新しい街の顔となった駅前のおしゃれなコーヒーショップが本日の待ち合わせ場所だ。

店の外にも椅子とテーブルが並べられ、その一角だけは、まるでパリのシャンゼリゼ通りのオープンカフェのような光景に見える。

と言ってもフランスに行ったことはないんだけどね。

どうせ藤村はいつものように遅れて来るだろうからと、遙がわたしの後方を歩く。

その方が、夢美を探すのに都合がいいだろうと遙が提案したのだ。すると、やっぱり。わたしの姿をいち早く見つけた夢美が、奥のボックス席から立ち上がって手を振っている。

わたしも両手を降りながら、彼女のそばに駆け寄った。

「あ〜ん、ひいら！ほんつとに久しぶり！」

夢美が、窒息しそうなほど強く抱きしめてくる。わたしだって嬉しいよ。負けなくらいしっかりと夢美を抱きしめて、再会を喜び合った。

目の前で繰り広げられる乙女の儀式に、遥がやれやれというように首を振り、腕を組んで言った。

「おい、篠川。歓迎のあいさつはそれくらいにしてやってくれ。血行不良になって倒れたこいつを連れて帰るのは俺なんだから。お手柔らかに頼むよ……」

「堂野君！久しぶり。なんか、元気そうね。うわ〜。また一段とかっこよくなっちゃって」

やっとわたしを解放してくれた夢美が、抱きつかんばかりの勢いで今度は遥にじり寄る。

一通りの儀式を終えたわたしたちは、店のスタッフの少し冷たい視線に促されるように、シートに腰を沈める。

夢美の横にわたしが並んで座り、遥はわたしの向かいに座った。

「ひいら、苦しかった？ごめ〜ん。だって、嬉しくって。あたしたちって、こうやって会うの、何年ぶり？高校の時もあまり会えなかったから、二年近く顔を見てないかも。だから今日メールもらって、飛び上がるほど嬉しかったんだから」

座るなり、またマシガンのようなトークが飛び出す。

自分の入り込む余地などにもないと悟ったのだろうか。遥がため息と共にメニューを広げ、時おり醒めた視線をわたしと夢美によこして来る。

「そうそう、堂野君。あなたのポスター、見たわ。すごく素敵だった。短大の友達にも、このモデルの人、幼馴染なんだって、いっぱい自慢しちゃった。ふふふっ……」

柔らかく笑う夢美は、ほんのりピンク色の頬にえくぼを作りながら、手を口元に持っていく。

細くて長い指に短く切りそろえられた形のいい爪。淡い色のネイ

ルが丁寧に施されていた。

声楽コースであっても音楽科に在籍していると、ピアノも必須科目なのだろう。爪が短めなのは仕方ない。

わたしが夢美の手をじつと見てみると、彼女がはつとしたようにその手を引つ込めてしまった。

えっ？ 今、瞬間に見えたキラッと光る物……。

も、もしかして。その左手の薬指に輝いていたのは、ダイヤの……リング？

「ゆ、夢ちゃん……。その指輪」

「あつ、これ？」

夢美は恥ずかしそうに笑みを浮かべながら、ちらつと指を見せてくれた。

「もらったの。……彼に」

ますます赤くなった頬を緩ませ、俯いて答える。

もらった？ 彼に？

わたしの脳内は夢美のひとことでパニックになる。彼って誰？

……い、いつの間にそんなことに？

知らなかったのだ。夢美にそんな彼氏がいるだなんて。

「あたしね、来年、短大を卒業したら、結婚することになったの」

「け、結婚？ うそ、夢ちゃん、うそでしょ？」

「ううん。ほんとなの。おかしいでしょ？ まだ子どもみたいなたしが結婚だなんて……」

「そんなことないけど。でも、何も知らなかったから。わたし、ほんとに何も……」

「ひいら、ごめんね。夏休みになったら、彼と東京に行くつもりだったから、その時ひいらに会って、伝えようと思ってたの」

伏せ目がちになった夢美が、ぼつぼつと、遠慮がちに話す。

「そっか。そうだったんだ。夢ちゃん、おめでとう。どおりで、なんだか大人っぽくなったような気がしてたんだ。美しさにますます

磨きがかかったっていうか……。幸せオーラ出まくりって感じだよ」
「もう、ひいらつたら……。そんなことないって。こんなに早く結婚して大丈夫なのって、短大の友達に本気で心配されてるんだから」
「でもいいな。結婚か……」

「ひいらつたら、何言ってるのよ。ひいらの方こそ、びっくりするくらいきれいになってるんだもん。だってひいら、モデルみたいだよ。ってことは……。やっぱり、こちらの彼氏のお陰かしら。ね、堂野君？」

「おいおい、やめてくれよ。俺を巻き込むなよ」
突然話を振られた遙がうろたえる。

「あたし、西山第一高校の合唱部の子と仲が良くて。その子にいろいる聞いたの。あなたたちが付き合っていることも」

「そうだったのか。まあ、そういうことで……。それより篠川、おめでとう。中学の知り合いの中では、おまえが一番に結婚だな」

「ありがとう。どういうわけかこんなに早く決まっちゃって。でもね、堂野君。今あたしが言ったこと、お世辞でもなんでもないので。

堂野君もわかってるでしょ？ ひいら、すごくきれいになったよね。そう思うでしょ？ ね、堂野君？」

「夢美つたら。そんなにマジにならないですよ。遙だって困ってるよ。ははは……。参ったな。そうだ篠川。こいつに言っちゃってくれ。

もうそれ以上きれいになるなって。こいつ全く自覚ないから俺ずつとハラハラし通しなんだ。世の中の男が、全員敵に見える」

「ちょ、ちよつと、遙。なんてこと言うの。いくら気心の知れた夢美だからって、何もそこまで言うことないのに。」

今日の遙は、どこかおかしい。
「うわあつ、堂野君つたら。いつの間にかそこまで柀にぞつこんなになっちゃったの？ あなたたちこそ明日にでも結婚するべきだよ。それにしてもひいら。愛されてるね。まさか二人がこんなにラブラブだなんて思ってもみなかったから。だって昔は、けんかばかりしてたでしょ？ あたし、そばにいて、ずっとハラハラし通しだったの

よ

「篠川。悪かった。昔は、俺が悪かったんだ。だから、もうそれくらいで勘弁してくれよ。……それより対策を練ったほうがいいぞ。藤村が来る前に」

わたしのことはともかく、ほんとうに夢美ったらこんなになんか幸せそうできれいになって。自分が充実してるから、他人にも優しくなれるんだよね。

でも、浮かれるのはここまで。遥の言うようにここは念入りに対策を練る必要があるそうさ。

夢美一筋の藤村がショックで倒れないように。

「ひいらからメールもらった時、初めは行くのやめようって思ったんだ。でも、隠し通せることじゃないし、今までいっぱい誠意を見せてくれた藤村君にも、きちんと結婚のことを報告するべきじゃないかって、そう思ってた……」

そうか。そうだよ。いつまでもオブラートで包んだまま、ごまかしておけるものでもないし……。

夢美の決心は固そうだ。

あれこれ対策を練るより、真実をありのままぶつける方がいいのかもしれない。

最初は辛いかもしれないけど、これが現実なのだから、藤村が自ら乗り越えるしかないと思う。

「おい、そろそろ注文しに行こうぜ。ここに座っていたら、いつまでたってもコーヒーにありつけないぞ！」

そうだった。ここはセルフサービスの店なのだ。遥がさっと立ち上がり、カウンターに向かった。

結婚話で盛り上がっていた時とは正反対の沈んだ面持ちで、わたしと夢美も遥に続いた。

23・再会（後書き）

24・やさしい涙

たつぷり三十分ほど遅刻してきた藤村の先導で、本日のプチ同窓会の会場である、ろばた風居酒屋に向かった。

電車で二駅ほどのところにあるその店は、特別値段が安いというわけでもなく、いたって普通の店だったが、次第に藤村がここをセツティングした理由が明らかになってきた。

どれもすごい量なのだ。わたしたち女性陣を気遣って注文してくれたサラダがタライのような巨大な容器に高々と盛られて出て来たとき、藤村以外の三人は驚きのあまり、レタスとトマトの尋常じゃない量に瞬きをするのも忘れ、呆然と見入ってしまったのだ。

から揚げしかり、串カツしかり。この店自慢の鯛のアラ炊きに至っては、いったい何匹の鯛が調理されたのだろうと思えるくらいの大盛りだった。

そして味もいい。しょうがと木の芽山椒が香り、瞬く間に骨だけになっていく様子は圧巻だった。

さすが体育大学に行っているだけのことはある。バスケットとの打ち上げは、こういった大盛りの店と決まっているらしい。

にしても藤村君……。今日のメンバーをわかっていながらこの店を選んだあなたは、やっぱり藤村だ。

サラダを半分食べただけで、他にもう何も食べられなくなってしまったわたしと夢美をどうしてくれよう。

ちよつとずついろいろなメニューを口に出来る居酒屋の醍醐味を奪われたわたしは、底なしの藤村の胃袋をほんの少し呪った。

夢美の結婚宣言を聞かされた藤村は、思っていたほど落ち込むこともなく、進んでおめでとうと言って、何度も乾杯の音頭をとっていた。

しかし、どことなく空元から気に見えたのは、気のせいだろうか。
始終賑やかに、それぞれの大学生生活の話などで盛り上がったが、
到底それだけで終わるはずもなく。

二時間ほどで店を出た後、そのままわたしの家になだれこんで、
四人で夜中までしゃべり続けた。

話しても話してもまだ足りない。

遙と二人だけでは決して味わうことのできないなつかしいこの四人の空間がとても居心地が良くて、心休まるひと時に感じられたのは、きつとわたしだけではなかったと思う。

そしてとうとう夢美はわたしの部屋に、藤村はおばあちゃんの家
の客間にと、それぞれ別れて泊まって行くことになった。

これも昔のままだ。藤村は小学生の頃から、ちよくちよくおばあちゃん
の家に泊まって、遙と一緒にしゃいでいた。

夢美もわたしの部屋に何度も泊まったことがある。

何もかもがあ頃のままで、自分が今大学生であることも、すっかり
忘れてしまうほどだった。

夢美がわたしの部屋に泊まるのは中学生の時以来だ。

高校時代もほとんど会っていなかったのに、あの夕日に盛られたかま
くらのようなサラダと一緒についた瞬間から、中学時代のわたしたちに
戻ったような気がする。

枕を横にびったりとくっつけて、まるで修学旅行のような気分でお互
いの空白部分を埋めるようにあれこれ語り合う。

本日最大のサプライズでもあった夢美の結婚話がメインになったのは
言うまでもない。

夢美の彼は短大で助教授をしていて、なんと十五歳も年上だと言
う。

ピアノの授業で指導教官になった彼に、今年になってプロポーズされた
のだと、恥ずかしそうに教えてくれた。

でも、知り合ったのはもっと前だったなどと、意味ありげに付け
足すのだ。

声楽の勉強をしている夢美は、彼の伴奏で歌う時が一番幸せだと
のろける。

音楽という同じ芸術の分野で繋がった二人の絆って、なんだか羨
ましい気もする。

遙とわたしの場合、そう言った繋がりは全くないと言ってもいい。
趣味も違うし、将来目指す方向も違う。

遙は昔からずっとテレビ局勤務を希望していて、まっしぐらに目
標に向かっていくけど、わたしはまだ、これといって何も決まってい
ないのが現状だ。

教員か、会社員になるのだろうか。あるいは司書になって図書館
で働くのもいいかもしれない。

そういえば、デパートの食品売り場の洋菓子販売員にもあこがれ
ていた時期があったなとふと思いつく。

でもどれも是非ともやってみたいという強い願望はない。ただ漠
然と仕事をしたいという意識しかないのだ。

こうやって考えるたびに不安になる。みんなはどんどん前進して
いるのに、わたしだけがもたついて取り残されていくようで……。

夢美が藤村に二回目の告白されたのは高一の夏だった。

その頃はまだ遙のことを引きずっていたと正直に話してくれた。

でも婚約者である今の彼が夢美の目の前に現れた瞬間から、遙へ
の想いが嘘のように心の中からすべて消え去ったと言う。

大学の付属高校に通っていた夢美は、同じ敷地内にある短期大学
部のホールで合唱部の練習をする時に、彼と知り合ったのだと出会
ったきっかけを覚えてくれた。

よく考えてみると、それって俗に言う、先生と女子高生の誰もが
夢見る禁断の愛のシチュエーションってやつだね。

衝撃的な彼との出会いを経て、過去に同級生に恋をした時の想い
とは全く違う、魂を揺さぶられるような深い愛に目覚めてしまった
と、まるでオペラの主人公みたいに、身振り手振りを交えて歌うよ
うに語ってくれた。

短大に入学して彼が夢美のピアノの担当教官になった時、夢美の方から付き合っただけだとアプローチしたというから、これまた驚きだ。

その後は、彼の方が夢美に夢中になり今に至るのだと、まるで映画のような壮大なストーリーを、こと細かに堪能させてもらった。

夢美が誰もがうらやむような幸せをつかんでくれて本当に良かったと思う。

だって、親友と同じ男性を取り合うなんて、とても悲しいことだもの。

遙と気持を通じ合わせた時、その喜びと同じくらいの強さで夢美のことを思い、悲しみに暮れていたあの頃を思い出す。

「それにしてもひいら。よくもあたしを騙し^{だま}続けてくれたわね！短大に入学した時、西山第一から来た子と仲良くなって、あなたたちのことを聞かされて。もう、ホント、どれだけびっくりしたことか。だってひいらが好きな人は、藤村くんだとずっとそう思ってたんだもん。だから藤村くんに告白されても、付き合えないって断ってきたのに……」

まさか夢美がそんな風に思っていたなんて。それは大きな誤解だ。そういえば中学の時に、藤村と夢美の橋渡しをしようとして勘違いされたこともあったけ。

てつきりあれは冗談で、からかわれてるだけだと思っていたのに。「そうだったんだ……。じゃあ、わたしがもつと早くに遙と付き合ってるって言えば、夢ちゃんは藤村の告白を受け入れたの？」

「……ん、まあね。そうかもしれない。あつ、でも付き合ったとしても、そこには愛はなかったわね。きつと……。だって藤村くんのごときは、ただの幼馴染以外には、なんの感情もわかないもの」

「そっか……。愛はなかったんだ。でもさ、こんなこと絶対に藤村には聞かせられないね」

「そうだね。藤村くんには、ほんとに悪かったと思ってる」

夢美がしょんぼりとうな垂れ、視線を落とす。

「こればかりは、どうすることも出来ないし。夢ちゃんは何も悪くないよ。仕方ないよね。ねえねえ、人間の心って、どうしてこんなに厄介なんだろう」

「ひいら、どうしたの？　なんだか深刻そう」

「それがね……。高校の同級生で、藤村のことが大好きな子がいるの。藤村も彼女のことは嫌いではないんだけどね。これがまた、ちつとも進展しなくて。二人がうまくいってくれれば、全てが丸く収まって、わたしにとっても遙にとっても好都合なんだけど……。あの二人がくっついてくれたら、今まで以上に四人で楽しくやっていけそうな気がする。

そのためには、どんな手助けも惜しまないつもりだ。

「もう、ひいらったら。人の心を自分勝手に丸く収めちゃだめだよ。周りがとやかく言わずに、二人にまかせておくべきだと思う」

「そっか、そうだよ。やっぱり、小細工しちゃ、いけないよね」

「うん。そんなことしたらだめ。特に藤村くんには逆効果だよ」

やなっぺの気持を考えるあまり、もう少しでフライングしてしまうところだった。

やなっぺに電話でもしてみればと、藤村にけしかけるつもりだったのだ。

そして、まだやなっぺがどれほど藤村のことを思っているかたっぷり言い聞かせようとまで思っていた。

そんなことしていたら、夢美の言うとおり、逆効果だったかもしれない。

焦らずにゆっくり見守っていこう。それがいい。

「そんなことより、ひいらと堂野くん。これは衝撃だったわ。二人して東京に行ったかと思ったら、実は付き合っていました……。冗談にしてはきつすぎるよ。ねえねえ、いつから付き合ってるの？　短大の友達は、高校二年の時に学校で噂になったって言ってたけど」

「あつ、ま、まあね」

「やだ。ごまかさないではっきり言つてよ。あたしと彼のことは、全部ありのまま、ひいらに教えてあげたのに。もしかして、まだあたしに遠慮してる？」

「そりゃあ、少しは……ね。だってわたし、夢ちゃんにひどいことしたんだもん」

「ひどいこと？ そんなこと何もないけど。ひいらの思い過ごしじゃない？」

夢美がどこまでも食い下がってくる。真実をありのまま語るのも、なかなか勇気がいるものだ。

夢美が遥のことを好きだと知っていながら、結婚の約束をしたのが中三の時。

お互いにまだ子どもで、受験も控えている大切な時期だということに、結婚の約束だなんて。

いったい何を考えているのだろうと、軽蔑されてもおかしくないような話だ。

でも夢美にはきちんと言つた方がいいよね。

わたしはなんとか心の折り合いをつけ、話すことに決めた。

「思い過ごしなんかじゃないんだ。ほんとに悪かつたって思つてる。だって、だって。わたしが遥と付き合つたのは、中学三年の時なんだよ。夢ちゃんが遥を好きだって知つてたのに、わたしは、夢ちゃんを裏切つたんだもの」

「ひいら……」

「ごめんね。わたし、すごく悩んだんだけど、でもやっぱり、遥のことが好きで、遥と一緒にいたくて……」

「いいんだって。ひいら、泣かないでよ。そっか。それで、あたしを氣遣つて、中三の時は誰にもそのことを言つてなかつたんだね。だって、あの当時、中学では誰もひいらと堂野くんのこと、知らなかつたはずだよ。噂にすらなつてなかつたもの」

「うん。絶対に誰にも言わないつて決めてた。だって、親にも氣付

かたくなかったし。まあ、うちもいろいろあるからね」

わたしは夢美が差し出してくれたタオルハンカチで涙を拭った。

「でもさ、ひいら。ありがと。ひいらが自分に正直でいてくれたから、あたしも彼に巡り会えたんだと思う。だって、ひいらが自分の気持ちを隠して、あたしのために心を砕いてくれてたら……。今のあたしは存在しないんだよ。そんなの絶対に嫌だもん。ひいらには悪いけど、堂野くんよりずっとずっと彼の方が、いいんだもん」

「夢ちゃんったら」

「えへへへ。ごめんね、なんだかいっぱいろけちゃった」

「夢ちゃん。ありがと。夢ちゃんが友だちでよかった。夢ちゃんと中学時代を一緒に過ごさせて……。よかった」

わたしたちはしっかりと抱き合って、二人して声を出して泣いていた。

夢美の優しさが嬉しかった。

遥のことなんて婚約者に出会った瞬間、心から消え去った……。なんて言ってたけど、夢美がどれほど遥のことを好きだったかはわたしが一番よく知っている。

そして、それが夢美のわたしに対する優しさだということも。

わたしたちは朝まで、しっかりと手を繋いだまま眠った。

24 やさしい涙(後書き)

25・禁断の香り その1

遙と別れて暮らすようになって、もう何週間くらい経ったのだろう。彼が置いていったセミダブルベッドがこんなに広いとは思ってもしなかった。

手を伸ばせばそこにいた遙がない。朝までずっと抱きしめてくれた腕も、頬を撫で背を彷徨った指も、今はどこにも見つからない。

一人きりの夜がこんなに寂しいだなんて、遙と一緒にいる時は想像すらしなかった。

ほんの数ヶ月前まで、平気で一人暮らしをしていたはずなのに、この変わりようは何？

でも、一緒に暮していなくても、わたしたちの心は、ひとつに繋がっている。

どこにいても、どんなに離れていても、気持は通じ合っているのだから。

いっぱい仕事をして、マンションを借りられるだけのまとまったお金が出来たら、必ず迎えに来るからと言ってこの部屋を出て行った日、遙の目がわずかに潤んでいたのを見逃さなかった。

遙も辛かったんだ。お互いの額をくつつけて、じゃあなと言った時の遙の目を、わたしはこれから先もきつと忘れない。

その日わたしは、あまりにも別れが辛くて、一晩中泣き続けた。

すると次の朝、忘れ物をしたという遙がひよっこりやって来て、わたしの泣き顔を見てお腹を抱えて笑ったのだ。

二度と会えないわけでもあるまいし、おまえが呼べばいつでも来てやるぞと言って、涙を流さんばかりに大笑いをする。

そうだ。七夕が近かったこともあって、あの頃のわたしはちょっ

ぴりセンチメンタルになっていたのかもしれない。

年に一度だけ会うことが許される織姫と彦星に自分たちを重ねて
いただなんて、恥ずかしくて遙には言えるわけもなく。

そしてその夜は、結局また一緒に過ごしてしまった。それ以降も
週に一度は泊まっていく。

そのたびに父さんの顔が目蓋の裏に浮かんで、胃がきりきりと痛
くなるのだけど、これくらいは許してくれるよね。

だって、わたしのアパートに遙が出入り禁止だとは、まだ言い渡
されていない。

言葉の揚げ足を取るようで大人気ないとわかっているけど、父さ
んだってそこまで目くじらを立てることもないと思う。

第一、泊まっているかどうかなんて確かめる手立てはないに等し
い。

それに、母さんたちも、もう二度とあのような前触れなしの突撃
訪問はしないと思う。

あれほど衝撃的で気まずい事件はもうこりこりだ。というか、わ
たしたち以上に、母さんたちが受けたショックの方が大きかったは
ずなので、このアパートには当分近寄らないんじゃないかと予想し
ている。

父さんが、もし子どもが出来たら知らせるとも言ってくれたんだ
し、たまの泊りは大目に見てくれるよね。

以前と違って、遙がメールをこまめに返してくれるようになった
ことも最近の変化のひとつだ。一日の終わりには、必ず電話もかけ
てきて、声を聞かせてくれる。

最初はなんだか照れくさかったけど、これこそ本当の恋人同士み
たいだと、今ごろになって胸がときめいたりもした。

人から見れば、かなり変なカップルだと思われるかもしれない。
い。

普通は一緒に暮し始める前にそういう段階をゆっくりと踏んで行

くはずなのに、遙ときたら何を思ったのか、中学三年生の分際できなりプロポーズをしてきたものだから、順番がおかしくなってしまうのだ。

今夜はなんと、やなっぺがうちに泊まりに来る予定になっている。実家に帰った時、藤村に会ったと電話で伝えたら、急にやなっぺの声色が変わって、彼の近況をもっと詳しく教えて欲しいと泣きつかれたのだ。

やっぱりやなっぺは、藤村のことがまだ忘れられないのだろう。でも今回の藤村情報は、やなっぺにとって、朗報になるかもしれない。

あの日、おばあちゃんの家で遥と過ごした藤村は、わたしが思ってた彼ではなかったようだ。

夢美の前では、何度もおめでとって、彼女の結婚を祝福しているように見えたのに、遥と二人きりになった後、客間では一睡もせずに、頭を抱えて一晩中うずくまっていたらしい。

藤村が泣いているのを見たのは、小学校の一年生の時以来かもしれないと、遥が言っていた。

情けない姿を見られなくなかったのか、わたしと夢美が起き出さないうちに、藤村は朝ごはんも食べないで家に帰ったらしい。

夢美のことは、もう吹っ切れたんだと思っていたのに。平気じゃなかったんだね……。

振られても振られても、藤村は夢美をあきらめきれなかった。それが藤村の愛の形なんだろうけど、男ってみんなそういうもんさと遥が言った一言が、いつまでも耳に残って離れない。

遥もそうなんだろうか。もしわたしが遥ではなく別の人を好きになっただとしても、遥は藤村のようにわたしを思い続けてくれたとでも？

わたしなら、一度振られたらすぐにあきらめると思う。もちろん、

相手を思う気持はそう簡単に消えないだろうけど、追い求めたりはしないだろうな。

だって、見込みの無い恋愛にしがみつくより、新しい生き方を見つけた方が楽そうなもの。

男の人の愛って意外と深いものだったんだと、思い知らされた一言だった。

大学の午後の講義が終わると、急いでバイトに向った。いつもより早目に仕事を終えて、やなっぺを出迎えてあげないとね。

わたしが働いているこの店の人気商品は、ハンバーガーとサラダとドリンクのセットだ。

アメリカ資本の大手ハンバーガーショップより少し値段は高いけど、肉質の良さとサラダの新鮮さで学生や主婦層にも人気がある。わたしの仕事はといえば、注文を聞き、店長と調理スタッフが作った出来立ての商品をテーブルに運ぶというもの。

よほど人手不足にならない限り、直接調理に携わることはない。今夜もようやく人の波が落ち着き、持ち帰りの客がカウンター越しに数人待っているくらいで注文待ちの行列も無くなった。

テーブルを片付けカウンターに戻って来た時、自動ドアの開閉音が背中越しに聞こえた。

新たなお客さんが来たに違いない。わたしはそのままの体勢で、どのスタッフよりも先にいらっしやいませと声をかける。

もう反射的なものだ。この声で、奥にいるスタッフにも来客を伝えることが出来る。

わたしはトレイとグラスを片付けて、カウンター越しに入ってきたばかりのお客さんと向かい合った。

そして、よく知るその人物と、バッチリ目が合ったのだ。

「よう、蔵城。元気そうだな。今日の仕事、何時に終わるの？」

そこに居たのは……。中学の同級生、大河内大輔だった。

25・禁断の香り その1 (後書き)

26・禁断の香り その2

「蔵城さん、今夜はもう上がっていいよ。あの素敵なお客さんに、そう言っただけだよ」

二十代後半のまだ若い店長が、意味ありげな笑顔を振りまいて、こっそりと耳打ちしてくれる。

大河内はまた、この前のように、ちょっと話がしたいと言いだすのだろうか。

わたしの方は何も話すことはない。まだ仕事があるからごめんねと断りたかったのに。

「ほらほら、何をもちたしてるの？　ここはもういいからさ。早く帰る支度して。ねえねえ、あの人、めっちゃかっこいいじゃない。背も高く、イケメンだし。あたしの好みだわ。もしかして、蔵城さんのカレシ？」

今度は調理スタッフのパート主婦がそばに寄って来て耳元でささやく。

気のいい人ばかりで、いつもこうやってお互いに助け合う、いい職場なのだけど。

みんな、何か誤解してる。大河内は、カレシなんかじゃないのに。「い、いえ、違います。ただの友だちです」

と言っただけで信じてくれそうにない。

「やだ。赤くなっちゃって。んもう、蔵城さんいたら、隅に置けないわね。カレ、前も来てたんじゃない？　なんだ、そういうことね。いいわね、若いつて。ほら、早く。その洗い物はいいからさ。若いうちはね、先輩の言うことに逆らっちゃダメなの。さささ、早く、早く」

エプロンを無理やりはずされて、スタッフルームに押し込められる。

「お客さま。蔵城さん、もうすぐしたら出てまいりますので……。
しばらくお待ちください。」

今までに聞いたこともないようなパートさんのはずんだ声が、不
謹慎にも店内に響き渡った。

大河内は、持ち帰り用にハンバーガーを二つ注文してわたしを待
っていた。

着替えて出てくると、案の定、ちよつとだけ話がしたいと言って
表通りのカフェにやや強引に連れて行かれた。

そこは、挽きたてのコーヒーの香りが漂う、静かで落ち着いた店
だった。

奥につかつかと足を踏み入れ、二人がけのテーブル席を見つけれ
と、すつと椅子を引いてわたしを先に座らせてくれようとするのだ。
その流れるような一連の動きに、思わず見とれてしまった。

「あ、ありがとう。大河内君」

「当然のことだよ」

そう言つて、にこつと微笑む大河内は、やっぱりいいやつだった。
こんなことも自然にできてしまう大河内のことだ。今でもきつと
モテモテなんだろうなとふとそんなことを思つてしまった。

エアコンの冷気が心地よいその場所に腰掛けると、アイスコーヒ
ー二つとわたしに何も聞かずに注文する。

「前に会つた時もアイスコーヒー頼んでただろ？ 今日も、それで
いい？」

わたしは普段、あまりアイスコーヒーは頼まない。

あの時は、突然の大河内の出現に驚いて、何も考えられないまま
咄嗟に注文してしまったのが、たまたまアイスコーヒーだったとい
うだけ。

どちらかと言えば、アイスティーの方が好きなのに。

遥なら、必ずアイスティーを頼んでくれる。遥なら……。

そんな風に考える自分がなぜかおかしくなる。どうして遥と比べ

てしまうんだろう。

大河内は恋人でもなんでもない、ただの同級生なのだ。そんな大河内がわたしの嗜好まで知っている方が変だというのに。

それでいいも何も、大河内はもうすでにアイスコーヒーを注文してしまったのだ。

同じ飲食業でアルバイトをしている身としては、厨房の混乱を考えると、今さらやっぱアイスティーがいいななどはとても言えなくて、仕方なくうんと頷いた。

「ねえ、蔵城……。今付き合ってる人とかいる？」

突然真顔になった大河内が訊ねる。

まだ注文したアイスコーヒーも来ていないのに、そんなことを訊かれても……。

眼鏡の奥でじつとこちらを見据えている視線に、どきまぎする。

さらさらの前髪は今尚健在で、すつと通った鼻筋も、きりつとした眉も、より一層、精悍さを増したように思われる。

中学生の頃、大河内のどこがかっこいいのか皆目理解できなかった自分がなつかしい。

あの頃のわたしなら、もう、なんでそんなこと訊くのよと言って肩のひとつでもポンと叩き、がははと笑い飛ばしていたに違いない。

でも今は、そんな風に軽口を叩けるような雰囲気ではない。大人の男性に変貌を遂げた大河内に向かって、いい加減な受け答えは許されないような気がするのだ。

「大河内君……。あの、なんでそんなこと訊くの？」

いるよとさらっと言えばいいのか、それとも、さあどうかしら……とごまかした方がいいのか、大河内の真意を探るように訊いてみた。

「どうかかなと思って、訊いてみただけだよ。もしいたら、こんな風にお茶に誘うのも悪いだろ？」

そうか。そんな風に気を遣ってくれていたんだ。大河内の答えを

聞いたとたん、私の心のバリアがすつと取り除かれる。

「そ、そうだよな。あ、あの……。わたし、付き合ってる人、いるよ」

わたしは大河内の目を見ながら、はつきりと答えた。

「そっか。そうだよな。いるだろうとは、思ってた……。東京で見つけた？」

少し残念そうな顔をした大河内だったけど、それでも白い歯を見せて、笑顔で答えてくれる。

大河内から直接好きだとかは言われたことはないけど、遥は大河内はわたしに気があると断言していた。

わたしだつて、そこまで鈍感ではない。それとなく大河内から発せられる、あまやかな電波をキャッチしたことはある。

だからと言つて、今もそう思つてくれているとは限らないけど、遥が藤村の夢美への思いを、男はそういうものだと言つていたのを思い出し、事実をきちんと伝えておいた方がいいかもしれないと思ひ始めていた。

わたしは大河内に真実を言おうと決めた。

「うっん、東京の人じゃないんだ。あのね、大河内君も良く知ってる人。わたしの親戚の、堂野だよ」

大河内の顔が急に強張る。運ばれてきたばかりのアイスコーヒーのグラスをがしつとつかみ、そのままごくごくと飲み干した。

そして、また形相を崩し、笑顔になった。でも。目は少しも笑つてなくて。

「堂野と付き合ってるんだ。ふふ……。やっぱりな。そんなことだろうとは思ってた。あいつも確か君と同じ大学だったよね？」

「うん……」

「じゃあ、二人は示し合わせて東京に出てきたんだ。そうだろ？」

「う、うん。でも……」

「でも？」

「あつ、うん。あのね、堂野が言ったんだ。大学に行く目的を見失

「つちやいけないって。そこでどうしても学びたいことがあるなら、一緒に東京に行こうって。だからわたしも、生半可な気持ちで東京に出てきたわけじゃないと……思ってる」

わたしはそう言いながらも、少しだけ罪悪感にとらわれていた。

遥と同じ大学を選ぶに当たって、彼に何度も念を押されたのは事実だけど、遥と離れたくなかったっていうのが一番の理由には違いないからだ。

「そうか……。なあ、蔵城。ということは、僕は今、すごく不利な役回りに立たされてるってわけだね？ 蔵城。僕は、堂野に勝ち目はないのかな？ 君の心のどこか片隅にでも、僕を思ってくれるスペースは、ない？」

甘いマスクをおしげもなくさらしながら、大河内が無理難題を押し付けてくる。

容赦なく降り注ぐ告白ともとれるストレートな言葉に、危うく目まいを起こしそうになった。

26・禁断の香り その2 (後書き)

27. ずっと好きだったんだ

「蔵城、あの……。ごめん。そんな顔、するなよ……。」
自分の顔は見えないけれど、きつと、この上なく情けない顔になっているのだと思う。

大河内ときたら、どうして今ごろになって、こんな無理難題を押し付けてくるのだろう。困るよ。

大河内の考えてることなど到底理解できるはずもなく。

遙と付き合っていると、はっきり言っただはずだ。そんなわたしが、同時進行で大河内を思うだなんて、そんなの出来るわけないじゃない。

「僕の言い方がまずかったよね。ねえ、蔵城。僕は、君のこと……。ずっと好きだったんだ。今でも好きだ。中学二年で同じクラスになっただろ？ あの時から、君のことが忘れられない」

大河内がまっすぐにわたしを見て言った。

やだ。心臓がどきどきして、身体中が震えてくる。わたしは土足で踏み込んでくる大河内に魂ごと持っていかれそうな気がして、思わず目を逸らした。

大河内がゆっくりと一言一言をかみしめるようにして、今、とんでもないことを口にしたのだ。

そう。これは告白だ。わたしはとうとう大河内に、告白されてしまった。

「そ、そうだったんだ……。で、でも、今はその、さっきも言ったけど。わたしには堂野がいるし。大河内君の気持ちには、こたえられない。……ごめんね」

もちろん答えはひとつだ。いくら優しく思いやりに溢れている大河内であっても、わたしの気持が揺らぐことはない。

「ああ、わかつてる。わかつているよ。でもずっと君に言いたかったんだ。中学を卒業する時に言うつもりだった。でも……。勇気がなかった。気持ちを伝えた結果、君に嫌われたらどうしようって、弱気になるばかりで」

「大河内君……」

「先日バーガーショップで偶然君に会って、それから、もうずっと、君のことばかりを考えている自分がいて……」

大河内の偽りの無い気持が伝わってくる。その声は大河内とは思えないほどか細くて、震えていた。

大河内ともあるう人物が、わたしなんかを相手に、こんなにも緊張しているだなんて。

でも大河内がなんと言おうと、わたしの返事が覆ることなど絶対にありえないのだ。

わたしが何も言えず、返答に窮しているのがわかったのだろうか。大河内が口元を緩め、ねえ、蔵城とわたしに笑顔を向けてくる。

「でも、時々こうやって、君と話すくらいならいいかな？ 昔のよしみとして」

そうだよ、話をするくらいなら……。わたしは、大河内の巧みな言葉に乗せられて、思わずうんと頷きそうになった。

だが、はたと気付く。それはだめだ……と。

「大河内君、それはできない。だって、大河内君の気持ちには、これから先もずっとこたえられないんだよ。それにわたしには遙が。」

あつ、いや、堂野がいるんだし……」

「遙……か。君たちはそうやって、お互いを親しげに呼び合っていたよね。二人がこそそと話している時、いつもそうだった。あいつが僕たちのいる教室にやって来て、しきりに君に甘えていたのも気付いていた。まだあの頃は君たちが親戚同士ってことまでは知らなかったから、家が近いし、仲がいいんだくらいにしか思わなかったけど……」

「うん……」

「君と堂野が付き合っていることは、納得したつもりだ。堂野から君を無理やり奪おうだなんて思っていない。だから……。友達同士として、お互いの学校の話や、情報交換をするだけでいいんだよ。それでもだめ？ 堂野が許してくれない？」

「友達なら会えるよ。……ただの友達なら。でもね、中三の時、わたしも大河内君のことが好きなんじゃないかって、遙に疑われたことがあって……」

もう一度遙の名前を出したとたん、大河内がはっとしたように目を見開いた。

一向にひるむ様子を見せない大河内には、ありのままのわたしの姿をさらけ出した方がいいのではないかと思いついたのだ。

堂野なんて回りくどい言い方が、大河内に隙を与えてしまったのかも知れない。

勇気を出して告白してくれた大河内には申し訳ないと思うけれど、わたしは心を鬼にして話を続けた。

「それに、遙は……。大河内君がわたしのことを、その、友だち以上に思ってくれているって、中学の時に気付いていて。大河内君のことを、あまり良く思っていないの。わたしがあの頃の思い出話をして、大河内君の話になったら、遙はすごく不機嫌になる。今でもそうなんだ。だから、ね？ わたしたちは、もう二人つきりで会わないほうがいいと思う。わたしは、遙の気持を一番に考えたいと思ってるの」

大河内の話になると遙の顔色が変わるのは今も同じだ。

もちろん、わたしからその話を持ち出すことはもうないけれど、この前藤村たちと会った時に、夢美の口から大河内の話がぼろっと出た時も、あきらかに遙の様子がおかしかったし、実家で妹の希美香が、かつこいい生徒会長の話として食卓の話題に出しただけで、いつの間にか部屋からいなくなるほど徹底的に嫌っているのだ。

もしも、今こうやって大河内と一緒にいることが遙の耳に入ったなら……。考えただけでもおぞましい。

ここが東京でよかったと思う。幸い、バイト先周辺では知っている人に見られる可能性はほとんどない。

「蔵城、ちょっと待って！ 君が僕のことを……って。それ、どういうこと？ もっと詳しく話してくれないか？」

突如活気付いた大河内が、テーブル越しに身を乗り出してくる。大河内にとって、否定的なことばかり並べたつもりなのに、どうしたというのだろう。

「えっ？ だから、わたしが大河内君のことを好きなんじゃないかって、遥が誤解してたことがあったって話なんだけど……」

そう。あくまでも誤解。わたしが大河内に特別な感情を抱いたことなんて一度もない。

「それって、根も葉もない堂野の思い込みなの？ それとも、何か根拠があつてのこと？ そのところ、少し気になるなあ……」

まさかこの話に大河内がここまで興味を示すとは思わなかった。わたしだったら、どこか視点がずれてしまったのだろうか。

言わなくてもいいことまで、しゃべってしまったの？

「少なくとも中二の頃は、君も僕のことをそんなに悪く思ってたよな。毎日、学校でいろいろな話をして、お互いの趣味嗜好にも、かなりの共通点があった。興味本位で僕に近寄ってくる他の女の子と君は、確かに何か違ってたんだ。あの頃、君に僕の気持ちを告げてたら、君はきつと受け止めてくれてたんじゃないかと思う。これはうぬぼれでも何でもないんだ……」

大河内がそう言ったあと、口元をきりつと引き結んだ。

確かに大河内の言ったとおりかもしれない。中二のあの頃は、まだ遥のことを好きだと自覚していなかったはずだ。

そんな時に、大河内に気持ちを告げられていたなら……。

わたしの人生は、今とは違ったものになっていたのだろうか。

「そ、そうかもしれないね……。中二の時、大河内君と仲良くなれて、毎日が楽しかったのは本当だよ。遥以外の男の子と話す機会が

あまりなかったから、大河内君が何でも知ってて、女の子のわたしにも優しくて。こんな男の子もいるんだってびっくりしたのを憶えてる」

「ドラマも同じのを見て、次の週の展開を予想したりもしたよね。君の書いた中学生物語も読ませてもらったし。本当に中学生が書いたのってくらいうまくいった。小説家になったら僕が君の一番目のファンになるって言ったよね。今でも書いてるの？」

「たまに日記みたいなのは書くけど。もう小説とかは書いてない。今は書くより読むほうが楽しくて」

そういえばそんな恥ずかしい物を書いていたなと思いつく。

幼い頃に両親を亡くした少女が、お金持ちの家に引き取られて、中学生なのに政略結婚に巻き込まれるという、とんでもない筋書きの物語だったはず。

文芸読書部で課題が与えられて、原稿用紙五十枚くらいの自分の自分にしては超大作を書き上げ、満足していた記憶が蘇る。

それを大河内に読んでもらったただなんて、今の今まですっかり忘れていた。

「そうか。もう書いてないのか。残念だなあ……。ああ、あの頃に戻りたいよ。毎日君に会えて、話も出来て。僕の人生で一番充実してた時期だった気がする。そして、君にきちんと僕の気持ちを伝えておくべきだったよ」

「で、でも……。今はもうわたし達、中学生じゃないし。過去にもどることはできない」

「もちろん、過去には戻れない。ただ君が当時、僕と一緒にいて楽しいと思っていてくれていたなら、とても嬉しい。それだけでも心の拠り所になる。だから付き合うのは無理でも、たまにこうやって話すのはいいだろ？ 堂野の気にさわるようなことはしない。誓うよ。だから。また会って欲しい。蔵城、お願いだ。頼む」

わたしはぼかんと口を開けたまま、整ったきれいな顔をしかめて

懇願する大河内の様子を、ぼんやりと網膜に写し出していた。

大河内は嘘つきではないし、乱暴な性格でもない。それは誰もが認めることでわたしも異存はない。

だからと言って、たとえ友達としてであっても、こうやって二人きりで会うのは絶対に良くない。

遥だって許すわけがない。

でも、でも……。遥に知られないようにすれば、大丈夫かもしれない……。

そうだよ。いくら付き合っているからって、わたしの身の回りで起こったこと全てを遥に知らせる義務はないはずだ。

たまになら、たとえ相手が男性であっても、こうやって会って話をするくらいなら許されるような気はする。

現にやなっぺは、男性の友人が十本の指では足りなくらい、たくさんいるみたいだ。

そこには同性同士の友情と全く変わらないものが存在するのだと、かつて彼女が力説していたのを思い出す。

時には男性の方がやなっぺに恋心を抱き、友情がこわれそうになったこともあったらしい。

やなっぺもその彼に酬いるべく一歩踏み出そうと努力してみたけど、彼女の心の中の想い人の存在が、それを邪魔する。

藤村以外の男性を恋人として受け入れられないのであれば、初めから誤解を招くような言動は控えることで、男性との友情を勝ち得てきたやなっぺ。

彼女は今でもそうやって、さまざま男性たちと友人としての付き合いを続けているのだ。男女間の友情は努力次第によっては成り立つのだと、身を持って証明してくれた。

「そうだ。今日は君に渡したいものがあって……」
大河内が足元に置いた大きなスポーツバックの中を覗き込むようにして言った。

「あった。これ……。試写会のチケット。今度一緒に行こうよ。もちろん、昔、君が好きだった雪見しぐれが主演だ。ラブストーリーの王道だよ。この映画」

原作本と一緒にチケットをテーブルに並べて、大河内が笑顔になる。

わたしはそのチケットから目が離せなくなった。

恋のつりがね草。なんと、そのタイトルは、去年から今か今かと首を長くして公開を待っていた、今一番気になる日本映画だったのだ。

遙はこの手の映画は嫌いなので、たとえ一人でも封切直後に映画館に足を運ぶつもりだった。

大河内は、わたしが雪見しぐれのファンだったことも憶えていてくれたんだ。

子どもの頃からモデルをやっていた雪見しぐれは、今ではホームドラマや学園ドラマの出演経験を経て、トップスターへの階段を駆け上がっていく真つ最中だ。

わたしよりたったの一学年、年上なだけなのに、落ち着いた風貌と卓越した演技力は各界に定評がある。

この作品が、試写会で誰よりも先に観れるだなんて……。

何としても行きたい。でも、誘ってくれる相手は、嘘か真か、わたしのことを好きだと言う大河内なのだ。

いくら遙に内緒でこっそりと観に行くとしても、だめに決まっている。わたしの良心が許さない。

ああ、どうしよう。どうしたらいい？

「よかったら、この本も一緒に貸すよ。僕は大概、原作本を読んでから映画を観るようにしてるからね。もしかして、もう読んだ？」

「うん。まだ読んでない。だけど、大河内君。わたし、大河内君と……」

一緒に行くわけにはいかないよと言いながら、本とチケットを大河内に押し返す。そう、これでいいんだ。

「蔵城。君にそんな気遣いをさせるだなんて、僕はやっぱり、友人としても失格なのかもしれないな」

「そんなこと、ないよ。誘ってもらって嬉しかった。でも、やっぱり一緒には行けない」

「そうだよな。君の言うとおりだ。じゃあ今回は……。僕は行かないよ。誰か友だちを誘って行けばいい。それならいいだろ？」

「で、でも。大河内君も観たかつたんじゃ？」

「まだチケットの余分があるかもしれないし。もらった人に訊いてみるよ。だから心配後無用。遠慮なく受け取って欲しい」

「いったい大河内がどんなルートを使ってこのチケットを手に入れたのかは知らないが、貴重なものには違いない。」

「なんだか、申し訳ないな。きっと余分なんてないんじゃない？大河内君こそ、誰か他の人を誘って行けばいいのに」

「僕が誘いたかったのは、蔵城だけだから。だから僕が行けなくても、君が楽しんでくれればそれでいいんだ。それに、このチケットは僕のバイト先の上司がくれたものだから、気にすることはない。」

「金銭のやり取りも全くないしね。後日、映画の感想だけでも聞かせてもらえたらそれでいいから」

「感想？」

何か面倒なことに巻き込まれるのだろうか。もうこれで大河内と会うのは最後にしたいのに。

「あつ、そんなに堅苦しく考えないで。おもしろかったかそうでなかったか、感動したかしなかったか。その程度でいいんだ」

「ほんとに？」

「うん。それで十分。友だちにも訊いてもらえると助かる。でもさ、堂野はこういった恋愛物は見ないだろ？ そんな気がするんだけど」

「ええ？　そうだけど……。どうしてわかったの？」

「なんとなく。っていうか、男はあまり見ないと思うよ。僕みたいなのは、少数派かもしれない」

「へえ、そうなんだ」

地元から遠く離れた東京の地で、こうやって、昔の遙のことを知っている人としやべっているのは、なんだか不思議な気分だ。

それが大河内の口から出たものであっても、ちよっぴり嬉しい気分になる。

遙と大河内は、同じクラスになったことは一度もなかったはずなのに、なぜかお互いをよくリサーチしている。

大河内は生徒会長だったから、いろんな同級生情報をまんべんなく把握しているのかもしれない。遙は大河内だけをターゲットにして、完全にライバル視していた。

まるでプラスとマイナス。全くの両極端に位置する二人のように見えるけど、根本的な部分が似ているような気もする。

リーダーシップがあって、人望も厚く、同性だけでなく異性にも人気がある。いや、そのもてっぷりは、二人とも尋常ではなかった。なのに、女性にだらしないわけでもなく、しっかりと自分を持っていて、とにかく何事にも一途だ。

わたしがいなければ、案外この二人は、すんなりと打ち溶け合えるのかもしれない。ふとそんな風に思った。

「それと、これは僕の携帯番号とアドレス。この試写会の会場、ちよつとわかりにくいところにあるんだ。そっくりな名前のホールが近くにあるから、それも気をつけて。もし迷ったら遠慮なく電話してくれたらいい」

本にはさんであるしおりに、さりげなく彼の携帯番号とメールアドレスが書き込まれる。

でも大河内はわたしのアドレスを聞き出そうとはしなかった。

なんだかほつとした。一時はどうなるかと思ったけど、わたしとこれからも会って話したいと言っていたのは、どうやらあきらめ

てくれたようだ。

やっぱり、昔のままの大河内だ。こういうところが彼らしくて、好感がもてる。

「大河内君、本当にもらってもいいのかな？」

そこまで言ってくれる大河内に、頭ごなしにいらぬとは言えなくて。もう一度確認してみた。

「いいに決まってるだろ？ 本当に観たいと思ってくれる人の手に渡るのが一番。さあ、早くカバンにしまつて。アイスコーヒーが水っぽくなってしまつよ」

大河内がわたしの方に本とチケットをぐいっと押しってくる。わたしはありがとうと言って小さく会釈をすると、それを手に取り、カバンにしまった。

ちよつと薄まったアイスコーヒーを飲み終えた時、壁にかかったアンティークの仕掛け時計がオルゴールの音色を響かせて、九時を知らせた。

それとほぼ同時に、カバンの中でわたしの携帯が、ブルルルと震える。やなつぺだ。

ちよつとごめんねと言って、大河内の前で携帯を取り出し開いた。

あと、三十分くらいでそつちに行ける。

焼き鳥持参で行くからね！ 柘は

飲み物の準備、よろしく〜！

そんなおいしそうな文面のメールを、つい頬を緩ませて眺めていたわたしは、目の前の大河内が不信感でいっぱい顔をしてこっちを見ているのに気付いた。

「大河内君……。ごめんね。今夜、友だちがうちに泊まりにくるか、その連絡が入って」

「泊まりに？ もしかして、堂野か？」

無表情になつた大河内の眉がぴくつと上がる。

「違つよ。遙はバイトがあるから、あまり頻繁に会えないんだ。なので、今のメールは高校時代の親友。もちろん、女の子だよ。焼き鳥を買つて来てくれるんだつて。そうだ、試写会、彼女を誘つてみようかな」

みるみる大河内の表情が明るくなつてくる。

「あつ、それいいね。是非そうしてみて。それにしても、メールの相手が堂野じゃなくてよかった。バイト帰りの君をここまで迎えに来て、僕と一緒にのところを見られたら、気まずいよね」

「うん。それは、ちよつと困るかも……。でもね、たまたま大河内君とバイト先で会つたんだよつて説明すればわかってくれると思う。機嫌は悪くなるけどね」

「あー。よかった。命拾ひしたよ」

「そうだね……」

大河内が胸に手を当てて、本気で安堵している様子に思わずクスツと笑つてしまった。

「あつ、蔵城が笑つた」

「やだ。そんなにじろじろ見ないですよ。だつて、大河内君つたら、本当にほつとした顔してるんだもの。なんだかおかしくて」

「君の笑顔を見ると、心が落ち着く。さつき僕があんなことを言つてしまったから……。君の心の重荷になつてしまつたんじゃないかつて、心配だつたんだ」

「大河内君……」

「ほら、またそんな顔になる。僕はこの通り、大丈夫だから。君に気持を伝えられてよかったと思つてる。君が幸せなら、僕も幸せだ……。ということにしておくよ。さーて。こんなことはしていられない。君の友だちを待たせたら悪いよね。僕はここからバスだけど、君は？」

「電車。駅で友だちと待ち合わせしてるんだ」

「そうか。それじゃあ、ここでお別れだ。僕はバス待ちの間、ここ

で時間をつぶすよ」

「わかった。大河内君、今夜はいろいろとありがと。そうだ。本はどうやって返せばいいのかな？」

わたしは一番大事なことを聞き忘れていたことに気付く。

「それなら、また君の店に顔を出すから。その時にでも返してくれればいいよ。急がないから、ゆっくり読んで」

「わ、わかった。それじゃあ……」

また店に顔を出す？ 大河内が？ 一瞬、嫌な予感がしたけど、やなっぺのことが気になるわたしは、アイスコーヒーの代金をそつとテーブルに載せて、とにかく席を立った。

店の出入り口のドアのところは何気なく後を振り返る。別に大河内を見ようと思ったわけではない。

なのに、じっとこちらを見つめる熱いまなざしと視線がぶつかり、わたしの心臓が驚きのあまり、どくと大きく跳ねた。

28・胸騒ぎ(後書き)

ここまで改稿済みです。

次話以降、話の内容がだぶったままになっておりますのでご注意ください。
9 / 26

29・焼き鳥の串にはご用心

大河内に連れて行かれたカフェからやなっぺと待ち合わせをしている駅まで、電車を使って十五分ほどだ。

やなっぺのメールを受信してから、あと数分で三十分になる。

改札を出たところでぐるりと辺りを見回し、やなっぺの姿を探した。

百五十センチそこそこの身長で小柄なやなっぺは、人ごみに紛れるとたちまち見失ってしまう。

夜が更けても乗降客の絶えないこの駅で、やなっぺを探すのは一苦労だ。

スーツ姿のサラリーマン集団の後側で、ぴよんぴよんと跳ねて手を振っている人が見えた。

短めのパーマヘアが、耳の横でぴよこぴよこと踊る。見つけた。やなっぺだ。

本当に二人分なの？　と思うくらい、パンパンにふくらんだ袋には、焼き鳥屋のネームがこれみよがしに赤色で大きく印字されていた。

やなっぺはその袋をぶらぶらと振り子のように揺らしながら、わたしの隣を歩く。

「柎、遅かったじゃん……」

裾をくるくると折り曲げたジーンズに白いコットンのキャミソール姿のやなっぺが、ぼそっとつぶやいた。

「やなっぺこそ、早すぎたんじゃない？　今がちょうど約束の三十分後だよ」

「そりゃあそうだけど。だって、柎はいつも待ち合わせしたら早目に来るでしょ？　だからさ。あたしもがんばって早く来たんだ。バイト忙しかった？」

「あつ、いや、そういうわけじゃないけど。ちょっと、いろいろと……」
「ふん」

どこか腑に落ちないような様子で、やなっぺがわたしの頭の上から足の先までをじーっと眺める。

「やだ、やなっぺ、どうしたの？ わたし、どこがおかしい？」

「別に。フツーだけど。でも。ちょっとだけ、いつもと違う。……」

なんかさ、色っぽくなっただっていうか。堂野と離れ離れになって寂しいなんて言ってたわりには、元気そうだし。何か、いいことあった？ そうだ。もしかして、堂野も家にいるとか。あたしって、おじやま虫？」

「もう、やなっぺったら。わたしは、その……。いつもどおりだけど。それに、遙はいないよ。前にも言ったでしょ。バイトもサークルも目が回るほど忙しいって」

「そっか。じゃあ、あたしの気のせいかも。まあ、柊は幸せ者だからね。堂野はあのとおり、以前にも増して柊にぞっこんなんだし。でも残念。堂野にも聞きたかったな。藤村のこと……」

やなっぺはつまらなそうに口を尖らせ、かかとの高いサンダルを履いたつま先で、器用に小さな石をコンと蹴った。

「で、藤村だけど。どうだった？ あいつ、変わらない？」

我が家で一番大きな器に山盛りになっている焼き鳥を食べながら、ひとしきり盛り上がったところで、頬杖をついたやなっぺが本題に入る。

「うん。変わらないけど……」

わたしはウーロン茶を片手に答えた。

もちろん、わたしとやなっぺが向かい合っているテーブルは、年がら年中出っっぱなしのこたつだ。

その上には、やなっぺが次々と空にしたビールのアルミ缶が、ボ
ーリングのピンのように整然と三角を作って並んでいた。

そう。藤村自身には何も変わりはない。いつものようにのっばで
ひょうきんなままだった。

変わったのは、彼の周囲。彼の初恋の人だけだ。

「けどって、何？」

わたしの言葉尻の含みを嗅ぎつけたやなっぺが、すぐさま訊き返
す。

「終わったんだ。夢ちゃんのこと……」

それまでとろんとした目で、今にも眠ってしまいそうだったやな
っぺが、急にしゃきつと背筋を正した。

藤村が夢美のことをずっと引きずっているのは、やなっぺも知っ
ている。

「終わったって……。どういう意味？ あいつ、懲りずにまた彼女
に告ったの？」

「ちがうの。実はね、夢ちゃん……。結婚するんだ。短大の先生と」

「ふーん。結婚ね……。って、ええええっ！ け、結婚？」

やなっぺ。いくらびっくりしたからって、食べ終わった焼き鳥の
串の先端を、わたしに向けるのは危険ではないでしょうか。

「か、彼女って、あたしたちと同年だね？ なのにもう結婚？
早くない？ すごい。すごいよ！」

だから、やなっぺ……。わたしの目の前で、串を指揮棒のように
クルクル振り回すのは危ないってさっきから言ってるんだけど。

「やなっぺ、やめてよ。その、串」

そのうちほんとうに串刺しにされてしまいそうなので、ちゃんと
注意しておかないと。

「あっ、ゴメンゴメン。つい、興奮してしまって」

やなっぺが憎めない愛嬌たっぷりの笑顔でわたしに謝ると、空の
缶ビールの飲み口にそれをさし、再び身を乗り出してきた。

「で、それで？ 藤村はなんて？」

「おめでとぅって言って、笑顔だった……」

「笑顔？」

「う、うん……」

とにかくみんなの前では笑顔で、夢美を祝福していた。その後、遥だけには本当の自分を見せていたらしいけど。やなっぺにそれは言えない。

藤村が夢美を想って、一晩中膝を抱えて泣いていたなんて、やなっぺには聞かせたくない。

「そっか。でもさ、それって、本人に直接言ったの？ 夢ちゃんが、自分の口で？」

「うん。そうだよ。きっぱりと言ってた。夢ちゃんも、藤村を傷つけたらどうしようって、悩んでたみたいだけど。でもね、変に気を遣って嘘ついたり、遠まわしにほのめかしたりするより、その方がよかつたんじゃないかな。毅然とした態度の夢ちゃんも、それをきつちりと受け止めた藤村も、二人とも、すぐくかつこよかつた」

「そうだったんだ……。藤村、平気そうな顔して、きっと内心はシヨックだったんだろうな」

「たぶん……」

「あたし、夏休みに向こうに帰る。そして、藤村に会う。あいつのしめっぽくなつた心の傷痕に、おもいつきり塩をぬりこんでやる！」
突如、いたずらを企んでいる少年のような目つきになったやなっぺが、いきり立つ。

藤村に救いの手を差し伸べるのかと思いきや、いつも以上に手ごわいやなっぺの姿に、わたしは言葉を失った。

傷心の藤村にいったい何をするというのだろう。

藤村が気の毒な気もするが、ここはやなっぺの荒治療に任せるのが、あるいは良策なのかもしれない。うじうじ悩んでる暇なんて、ない方がいい。

藤村が初恋を諦めざるを得なくなった状況は、逆にやなっぺにとつては、好機到来でもある。

だからと言って彼が今すぐに夢美を忘れて、次の恋に向かうとは思えないが、やなつぺにチャンスがやって来たことには違いない。塩をぬりこむなどと言いながらも、ダメージを受けた想い人に、辛く当たるなんてことはしないだろう。

やなつぺのことだ。自分のことは二の次で、藤村の気持を引き上げようと、あれこれ世話を焼くに決まっている。

「そうだよなつぺ。来週、一緒に映画観に行かない？」

わたしは、さつきから、大河内にもらったチケットのことを言わずタイミングを窺っていたのだ。

やなつぺはわたしに負けないくらい、無類の映画好きだ。藤村の件で希望を見出したせいも、すこぶる機嫌のいいやなつぺは、間髪いれずに食いついてきた。

「行く！ で、何の映画？」

「恋のつりがね草」

「なんとという、グッドタイミング！ 原作本、つい先日読み終わったところなんだ。あの本の装丁、あたしの大学の先輩が手がけてんだよ。あの本が売れて、先輩のところには、仕事がいっぱい舞い込んでるって噂なんだ」

「へ〜。そうだったんだ。ほら、これだよね」

わたしは部屋の隅に押しやっていたカバンから、さつき大河内に借りた本を取り出し、こたつの天板の上に載せた。

「柎も持ってたんだ。それにしても、このストーリー。涙、涙だったよね。最後、想いが叶ったとたんに、あれだもん。あれはないよ……」

やなつぺが熱く語り出す。でもそれ以上はだめだ。言わないで。

「やなつぺ、ストップ！ 実はわたし、まだこの本読んでないんだ。だから、いつそのこと、何も知らないまま映画を先に観ようと思ってる。だから、ネタバレ禁止！」

「な〜んだ。てつきり柎も読んだのかと思った。それにしても、危

ないところだったよね」

「ホント。危なかった。この本、借り物なんだ。映画を観たあと、いつきに読んで返そうと思ってる」

「そっか。でもさ、その映画って来月末に公開だったと思うけど……。ってことは。もしかして試写？　なんで柊がチケット持つてるの？　何かの抽選で当たった？　それともオークションで落札した？」

「違うよ。あ、あの……。おおこ……じゃなくて、昔の友だちに、もらったの……」

大河内にもらったと正々堂々と言えばいいのに。どうしたのだから。

なぜか咄嗟に言いよんどんでしまい、名前を隠してしまった。

30・男だね。絶対に男だ

「ふうん。そうなんだ……。ところで、昔の友達って誰？ そんな人、東京にいた？」

やなつぺは、こういうところ、やけに鋭かったりする。

アートデザイナーの直感とでもいうのだろうか。

「う、うん。まあね。その友だちと……バイト先で偶然会って、それで、もらったって言うか……その……」

もっと具体的にもらった人の名まえを言うべきだった。

田中さんとか、鈴木さんとか。山本さんでもよかったかな？ その方が真実味が増して、やなつぺもすぐに納得してくれたかもしれないのに。

そうだ、白石さん！ 彼女の名まえを出すのも一案だ……。でもだめだ。

白石さんは、高校も一緒だったから、やなつぺもよく知っている。大阪の大学に行っている彼女がなぜ東京にいるのかと、これまた一悶着起きてしまいそうだ。

それに、もし遥の耳に入ったりしたら、すぐに嘘だとバレしてしまう。

そもそも白石さんが、わたしにチケットをくれるはずがないからだ。

「偶然？ で、チケット二枚？」

わたしが俯き加減でごにごによともたついていると、やなつぺが、すかさず突っ込んでくる。

「そう……だよ。友達誘って行けばいいって……」

そうだ。やましいことなんて何にもない。ほんとうに、もらっただけなのだから。

「やなつぺ、なんか疑ってるみたいだけど、本当にもらったただけなんだよ。他意はないってば」

酔ってるはずのやなっぺが突然マジな顔になって、カウンセラーのごとく大仰に頷いてみせる。

「ふうん。もらっただけね？ 柊が雪見しぐれのファンってことも知ってるんだよね、そのくれた人。……その人、男だね。絶対に男だ」

や、やなっぺ。何が言いたいの？ やなっぺだっていつも男の友達と出歩いているんだし、映画のチケットをもらったくらいでそんなに詮索しないでよ。

「そ、そうだよ。男性だよ。ただの友達だから……」
「ほらね、やつぱり」

やなっぺが勝ち誇ったような顔を、これ見よがしにわたしにひけらかす。

「だから、やなっぺが思ってるようなことは何もないんだってば」

「そりゃあ、もちろんそうでなきゃ。何かあったら大変だよ。で、堂野は知ってるの？ そのお友達のこと」

「も、もちろん知り合いだよ。だって中学の同級生だもん。でもね、やなっぺ。こういうことは、その……。ちょっとデリケートな問題だから、バイト先で会ったとか、チケットもらったとか……。そういうことは、いちいちこと細かに遥に言うつもりはないんだ。だって変に勘ぐられたくないでしょ？ 余計な心配はさせたくないし……いくら恋人同士だからって、何から何まで知らせる必要はない……と思う。」

遥のプライベートだって、すべてを把握しているわけではないのだからお互い様だ。

「……なんか怪しい。柊、早口になってる。その人がただの友達で、堂野も知り合いなんだっいたら、どうして隠すの？ あんた達、秘密は作らないはずでしょ？ また前の二の舞？」

完敗だ。やなっぺにはもう隠し通せない。ここは正直に、あったこと全部を説明するべきなのかもしれない。

「二の舞だなんて、そんなこと言わないでよ。わたしは、遥を裏切

るようなことは……してないよ。多分。きつと」

「じゃあ、どうして？」

「あのね、それが……。その友達のこと、遥はあまりよく思っていないんだ。昔ちよつといろいろあって」

「いろいろ……ね。もしかしてその人。生徒会長やってた人？ ……」

……その話、聞いたことあるかも」

わたしは絶句して、やなっぺの顔をじつと見入った。彼女がそんなところま知っていたなんて驚きだ。

でも、大河内のこと、やなっぺに話したことなんかあったっけ？

そういえば高校の卒業式のあと、遥と藤村とやなっぺの四人でお別れパーティーと称して、ファミレスで食事をしたことがあった。

調子に乗った藤村が、大河内を話題に出して遥をからかったのだ。わたしが中学時代に好きだった人は大河内だと誤解したままにいる藤村は、遥を嫉妬させるためにそんな話を持ち出していた。

その時の遥の不機嫌さが尋常じゃなかったので、やなっぺの記憶にしつかりと残っていたのかもしれない。

「柊。そのチケット、返したほうが良くない？ 堂野が知ったら間違いなく大暴れするね。そのお友だちのところに殴りこみに行くんじゃない？」

殴りこみ？ そんな大げさな……。でも、遥ならやりかねない。

遥の大河内に対する気持は、いつだって危ういものがあったはずだ。

だからこそ、わたしもこのことを内密に済ませようとしたのだ。

遥には絶対に知られたくなかったから……。

「悪いこと言わないからさ。堂野が変な気を起こす前に、きちんとしとかなきゃ。ねえ柊。やっぱ、送り返すべきだよ」

やなっぺの目が真剣にわたしに訴えかけてくる。

わたしはここまでできて、ようやく自分の間違いに気付き始めた。

やなっぺの言うとおりだと。

「そ、そうだよ。わたしっいたら、なんで大河内君からもらったり

したんだろ。雪見しぐれに釣られちゃったのかも。あっ！ でもどうしよう。大河内君の住所とかわかんないよ」

「じゃあ、そのまんまにしておくこと！ もしまたそいつが店にやって来たら、チケット失くしたとか、用事で行けなかったとか。適当に理由を説明して、それとなく相手を遠ざけるようにね。間違っても、柊が自分から直接そいつの大学に向いたりして、チケットを返しに行かないこと。向こうの思うツボだから」

「でも、それって、もったいないと思わない？ 大人気のチケットなんだよ？ ちゃんと返して、誰か他の人に観に行ってもらわないと。それに、行けなくなつてごめんねって謝るべきだと思うんだけどな。本も借りたままだし……」

いくらなんでも、失くしたただなんて、人間性を疑われそうてわたしの本意ではない。

「柊、あんたつて、ほんとうにおめでたいね。相手は柊を誘つてこの映画を観に行きたかつたに決まつてるじゃない」

「あ……」

「どうしたの？ 何か思い当たるふしでも？ もしかして、そいつに告られたとか？ まさかね」

わたしの心臓がどきどきと鳴り始める。確かにやなつへの推測どおり、大河内に告白されたのは事実だ。

「……って、そのまさかなの？ ホントに？」

わたしの顔色を見て、やなつぺがすべてを見抜いてしまったようだ。

ためらいながらも、わたしは、こくりと頷いた。

「やだー。それ、マジやばいって。偶然を装った出会い。たまたま手に入った様に見せかけてチケットを渡す。これ、誘いの常套手段だよ。柊つてば、堂野に過保護にされすぎちゃつて、世の中のこと、何もわかつてないからね。……気をつけなさいよ」

そっか。常套手段なのか……。確かに、わたしは、何もわかつてないのかもしれない。

こうなったら、大河内には悪いけど、行くのは辞めよう。

わたしって、なんでこんなにバカなんだろう。よく考えればこれがダメなことくらい、すぐにわかるはずなのに。

「柊。あんたって、意外ともてるからね。高校時代、あたしがもみ消した話もいくつかあるんだからさ」

「あたしがもてるって？ それはないって。もみ消したとか、大げさすぎるよ」

「柊ってホント、鈍感だからね。これじゃあ、堂野も身が持たないはずだ。大学でも、付き合ってたって言われたりするでしょ？」

「へ？ ないよ。お茶に誘われたりはするけど、学校終わったらすぐにバイトがあるし、そのうち誰も誘ってくれなくなって……」

「合コンとかは？」

「行かないってば。だって、女子の友だちには彼がいるって言うてるし、類は友を呼ぶじゃないけど、わたしの周りには、そういうの、興味がない子が多くて。だからまだ一度も合コンとか行ったことないし」

「おお、これぞまさしく純粹培養の極みだね。まあ、とにかく、その大河内君とやらには、これ以上かかわらない方がいいよ。わかった？」

「わかったってば。そこまで言われたら、わたしだって、慎重になるって。やなっぺの言うとおりにする。安心して」

まるでどこかの小姑娘さんみたいな口調だったやなっぺが、ようやくいつものかわいい笑顔を見せてくれた。

わたしたちは顔を見合わせて、くすくすと笑った。

「ねえねえ、柊？ 藤村、どうなってた？ イケメン度はアップしてた？ ますますカッコよくなってたでしょ？」

ビールのあと缶チューハイに移行したやなっぺは、ますます陽気になって絡んでくる。

つい今しがた、わたしを諷めたばかりの彼女とは思えないほど、

恋する乙女の顔に変わっていた。

「ああ、会いたいよう。藤村に会いたい」

やなっぺは、地元に近い大学に進学した藤村とは、年に数回しか会えない。もちろん恋人同士ではないのだから、それも仕方ないこと。

「藤村くん。大好きだよー。愛してるよーっ！」

とうとうやなっぺのブレーキが効かなくなって来た。こうなったら、もう手に負えない。

お願いだから、そんなに大声を出さないで。ここは壁の薄い共同住宅なのだ。みんなに聞こえてしまう。

「…………ヒクツ…………。ひえくん、ヒクツ…………。えくん！」

と思ったら、今度は泣き始めた。

今まで涙なんかちつとも見せたことなどなかったのに。友達思いでしっかり者のいつものやなっぺはどこにいったの？

「藤村に、会いたい。ヒクツ。ふじむらあ…………。会いたいよ…………」

空き缶に埋もれるようにして、こたつの天板に突っ伏したやなっぺは、それから何度も藤村の名前を呼びながら泣きじゃくっていた。藤村の失恋を一緒になつて悲しんでいるようにも見えるやなっぺの涙は、とうとう今夜一晩中、枯れることはなかった。

神様。どうか、どうかやなっぺの気持ちが報われる時が来ますように。そして藤村が今度こそ、彼女の思いを受け止めてくれますように。

わたしはやなっぺの肩を抱きながら、ずっと祈り続けた。

31・甘い響き（前書き）

【初めてお越しいただいた読者様へ】

続こんぺいとうにお越しいただきありがとうございます。

柘と遥の青春の始まり、こんぺいとう本編よりお読み下さい。

各ページ下及び続こんぺいとう目次下にこんぺいとうへのリンクがあります。

【以前からお読みいただいている読者様へ】

ここから後の新規投稿は、以前のものの改稿版になります。

大筋では変更はありませんが、サブタイトル及び内容の区切り等、各所に変更箇所があります。

終盤に新エピソードが加わる予定です。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

31・甘い響き

翌朝、やなっぺと一緒に駅前のファストフード店で期間限定の朝食セットを食べて、それぞれの大学のある方面の電車に乗り込んで別れた。

やなっぺは夕べ相当飲んでた。そのせいか、頭が痛いし喉が渇くと言って、コーヒを三杯もお代わりしていた。

そして別れ際に念を押されたのだ。絶対に映画に行ったらだめだよ、大河内にはくれぐれも気をつけてって。

まるで彼が犯罪者であるかのように厳しい口調で非難する。

やなっぺは大河内に会ったことがないし、彼の人柄を何も知らないから、そこまで警戒してるんだと思う。

でももちろん、いくら大河内がいい人だからって、彼の誘いにはのらないと決めたのだ。

だから安心してね、やなっぺ……。

わたしは突然休講になった午後時間を、大学の図書室で過ごしていた。

来週の言語学の試験に必要な資料をそろえようと思ったからだ。

日本国内における歴史的背景と言語の移り変わり云々……と難解な部分だらけのこの講義は、毎年多くの学生が単位を落とす、いや、落とされることで有名だ。

このままではわたしもきっちりそこに仲間入りしそうな勢いだ。

案の定、参考文献が上がっていた本はことごとく貸し出し中になっていった。

それでもあきらめずに必死になって探し出した結果、やっとのと幾冊か使えそうな本を見つけ出した。

一ヶ月以上も前から言われていたのに、いろいろなが重なっ

て後回しにしていた結果がこれだ。

ネットの本屋さんで注文することもできるけど、これまた半端なく値段が高い。専門書がどうしてあんなに高いのか、貧乏学生のわたしには全く理解できない。

学生が手にする本こそ、安くしてもらわないと……なんて勝手なことばかり考えている。

そんなこんなで、本日午後の休講は、思いがけず時間をプレゼントされたみたいで、正直とてもありがたかった。

マナーモードにしていた携帯が低い唸りをあげて、ジーンズのポケットの中で震えている。

周囲を見渡して、わたしの立っている書庫の間に誰もいないのを確認すると、携帯を取り出して送信者を確認した。遥からだった。

こんな時間に彼からメールが来るなんて、珍しいこともあるものだ。

何かあったのだろうか？ 急いでメールを読んでみた。

絵文字も顔文字も何も無い、シンプルな文字の羅列がわたしの目に飛び込む。

今日、バイト休みだよな。

本田先輩の家に一緒に行かないか？

五時に大学前で待っている。

大学前とは、遥の在籍する学部がある最寄り駅の名称だ。わたしのいる文学部学舎からは電車で二駅。

駅までの徒歩区間や、乗り換えの時間を考えれば四時半までにはここを出ないと間に合わない。

休講だったから良かったものの、突然の遥の誘いには、さすがに驚かされる。

本田先輩の家に行くって……。って、ちょっと待って！ 本田先輩の家って、すなわち伊藤小百合の家ってことだよな。

ということとは……。大変だ。こんなことしてる場合じゃない。

わたしは、大急ぎに必要な本をカウンターに持って行き、貸し出しの手続きを済ませた。

蔵城さん、どうしたの？ と声をかけてくれる馴染みの仲間たちへの返事もそこそこに、重いカバンを抱えるようにして、駅まで猛スピードで駆け下りた。

とにかく一度アパートに帰って、着替えと化粧直しをしないと到底本田邸には近寄れない。

ぎりぎり時間はある。電車の扉にもたれかかりながらきれいな伊藤小百合の姿を思い描き、部屋の箆笥の中のありったけの自前の洋服をイメージして、何を着て行こうかとあれこれ思い悩む。

ところが、どれもイマイチなのだ。だからと言って今から買いに行く時間も予算もない。

電車の中で冷や汗を垂らしながらどうしようかと悶絶してるわたしは、きつと危ない人だと思われたに違いない。

わたしはあわてて身体の向きを変え、乗客に見られないように窓に顔をくっつけた。

白地にネイビーブルーのドット模様がちりばめられた肩紐タイプのワンピースに、レースのミニ丈の上着を羽織り、かごバックと白いミニールという、少しは今どきの女子大生に見えるかもしれない精一杯のおしゃれをして、約束の時刻に大学前に到着した。

わたしを呼び出した張本人を探すのだけど、どこにも見当たらない。いったいどこにいるのだろうか。

ふと前方を見ると、数人の女子高生に囲まれた男性がいるのが見えた。

その人は下を向いていたけれど、その横顔はよく知っている人物に違いないと瞬時にわかった。

見つけた。あそこに遥がいる。

短めのチエツクのスカートにハイソックスとローファーを組み合わせた女子高生達が、カバンにつけた大きなぬいぐるみのキーホルダーを揺らしながらはしゃいでいる。

「ねえねえ、堂野遥でしょ？ 写メ撮らせて。お願い！」

遥の返事を待つまでもなく、彼女たちがカシヤカシヤと写真を撮りはじめたのだ。

「ああん、こつち向いてよ。ねえねえ、堂野くん。顔上げて！」

「ほんとのほんとに、ほんものお？ 写真よりずっとカッコいいし！ あたしと一緒に撮るところ、撮つてよ」

そう言つて、馴れ馴れしく遥の腕にぴたつとくっついていく。

周りの迷惑などおかまいなしに、彼女たちは騒ぎながら携帯を遥に向け、シャッターを切り続けていた。

遠巻きに様子を窺っているわたしにようやく気付いた遥が、手で携帯のレンズ部分をさえぎり、やんわりと彼女達を制止する。

「ごめん。今から約束があるから……」

「ええーっ。もうちょっといいじゃん！」

「知人をこれ以上待たせるわけにはいかないんだ。ゴメン！」

一瞬の間を置いて、遥が走り出す。

「あー」

女子高生たちが唾然として、こつちにやって来る遥の姿を追っている。そして遥がわたしの横を通りかかった時、こそっと耳打ちした。

「柎、後ろを向くな……。このまま大通りのはずれまで走るからな。一緒に来い……」

わたしは遥に言われたとおり、少し遅れて走り出した。

そして、駅構内から出たところで、待っていた遥に腕をつかまれ、全力疾走でスクランブル交差点を駆け抜ける。

逃げそうになるミユールを気にしながらも、なんとか人通りの少ない路地に入り込んだ。

「柎、大丈夫か？」

少し呼吸の乱れた遙が、わたしの背中に手を置いて、訊ねる。

「だい、大丈夫だよ。はあ、はあ。こんなに走ったの、久しぶり、だから……。ちょっと、息切れがするけど」

膝に手をつけて、肩で息をするわたしの横で、遙がクツクツクツと笑った。

わたしも呼吸がまだ苦しいけど、なんだかおかしくなつて笑つてしまう。

「あははは……。まるで、なんか悪いこととして逃げ出すみたくに走つて。わたしたち、絶対に怪しいよね」

「ああ、十分に怪しい。でもここまでくれば、あの子たちも追つてはこないだろう」

遙に手を引かれて、ゆっくりと歩き始めた。

「昔、希美ちゃんに遊んでつて付きまとわれて、二人で裏山に逃げたことがあつたよね」

「ああ、そんなこともあつたな」

「わたしは、希美ちゃんも一緒に遊んであげようつて言つたんだよ。なのに遙が……」

「なんだよ。おまえだつて、結構おもしろがつてたじゃないか」

「そんなことないよ！」

「そんなことあるつて！」

そう言つて、またお互いに顔を見合わせて、ぷつと吹き出す。

遙とこんなに笑つたのは何日ぶりだろう。別居してからは、きつと初めてだ。

「ああ、おもしろえー。腹が痛いよ。昔話はさておいて……。おまえ、めいっばいかわいいカッコしてんのに、こんなに走らせてしまつて、ごめんな。その靴じゃ、走りにくかつただろ？」

「く、つ、じゃなくて、ミュール」

「はいはい、ミュールね」

ミュールとサンダルの違いがわからないのはまだ許せるけど、足に履くものを全部靴つて言うのは、いい加減やめて欲しい。こんな

んで本当にモデルの仕事が出来るのかと、ふと心配になる。

「あんまり走るから、ヒールが取れるかと思った。でも仕方ないよ。だって、あの子たちから逃げ出すには、こうするしかなかったんだし」

「まあな。ほんとに参ったよ。向こうは悪気はないし、頭ごなしに断ることもできねーしな」

「そうだよ。でもあの子たち、どうして遥だつてわかったんだろ？ 前のポスターのことを覚えてくれたのかな？」

「いや、そうじゃなくて。多分、昨日発売の例の雑誌のせいだよ。次号の予告が載ったんだ。そこにちゃっかり俺も写ってたみたいでさ。あの子たちもきつと、それを見たんじゃないかね？ やつと最近、ポスターのことを言われなくなったのに、また振り出しにもどつてしまったよ」

「遥も大変だね。ふふ……。さっきの女子高生たちに囲まれてる時の遥だったら、すつごく困つてる顔してた。でもわたしが近付いて声かけたら、もつと大騒ぎになるかもしれないと思って、知らないフリしてたんだよ。ファッション・ユ一の次の号が発売になったら、もうこんな風に街を歩けないよね。ねえ、遥。これからどうする？ わたしは冗談半分遥の顔を覗きこんだ。

「大きなお世話だ。んなもん、ばれないようにすればいいだけだよ。俺を誰だと思ってる？ これでも舞台役者の端くれなんだぜ。世間の人をうまく欺く自信くらいあるぞ」

遥が腕を組み、息巻く。

「髭ひげついたり、カツラかぶったりするの？」

「おお、それいいねえ。女装したり、でっかいマスクしたりってのはどうだ？」

「よかつたら、わたしの服、貸してあげる。化粧品も必用だよ」

「そうだな。その時はよろしく。でもおまえの服は残念ながら入りそうにないな。そうだ、ばあちゃんに送ってもらおつか？」

「おばあちゃんに？ それって、遥がおばあちゃんの服を着るの？」

遥の本気とも悪ふざけとも取れる話が徐々に熱を帯びてくる。

「そうだ。ゴム入りスカートなら、きつと俺にも穿けるぞ」

「ええ？ それはやめてよ。絶対にいやだ」

「ついでに、ブラウスとカーディガンも送ってもらおうか」

「は、遥、お願いだから……。本当にそれだけは、やめてよ。わたし、今度大きめの服をバーゲンで買うから。せめて、それを着るようにして。ね？ 遥」

わたしは暴走する遥を食い止めるべく、最後の手段を提示した。

なのに、遥ったら……。

「ひ、い、ら、ぎ？ おまえ、俺が本当にそんなことすると思っ
たのか？」

遥のいたずらっぽい目がわたしをじっと見る。

「えっ？」

「あのな……。全部冗談に決まってるだろ？ それとも何？ おま

えさあ、俺がばあちゃんの服着てるところ、想像してたのか？」

「そ、そんなわけないよ。してない！ 絶対にしてない！」

わたしは必死になってふるふるとクビを振った。

そりゃあ、少しは想像したけどね。でも遥のそんな姿は絶対に見
たくなかったし、すぐさま、頭の中から消し去った……。つもりだっ
た。

「おまえのあわてた時のその顔。いつ見てもおもしろいな」

「もうっ、からかわないで……」

わたしが真面目に遥のことを考えてあげているのに、こいつとき
たら、いつもここうやってわたしを茶化すのだ。

その時だった。遥が突然真顔になり、ふくれっ面のわたしの頬に
顔を寄せてくる。そして……。

わたしは遥の不意打ちのキスに、驚きのあまり、その場でかちっ
と固まってしまった。

な、なによ……。遥ったら、こんなところで、なんてことするん
だろう。

「今夜は久しぶりに……。おまえのアパートに、行くよ」

耳元をかすめる遙の声に、危うく心臓が止まりそうになった。

ともすれば回りの雑音にかき消されてしまうほどの低くかすれたその声が、やや甘さをふくんでわたしの胸の奥に響く。

遙の言っていることの意味がわからないほど、わたしも子どもじやない。

わたしは、こくつと小さく頷いた。さっき遙が口づけた唇の端が、まだ熱い。

わたしがほんの一瞬、遙の横顔を仰ぎ見たら、繋いでいた遙の手に、ぎゅつと力がこもった。

さっきの遙の一言のせいと、どこをどう歩いたのか、全く覚えていない。

二人とも無言のまま路地から大通りに出る。そして携帯を取り出した遙が画面を見て、大通りの反対車線を指差した。

「あそこで、先輩が待っていてくれる」

遙の指し示した先には、どこかで見たことがある豪華なエンブレムのついた外車が歩道の脇に横付けされていた。

左ハンドルの運転席に見える横顔は、確かに本田先輩だった。

3.2 別世界へのいざない

大学の正門前を通り過ぎ、東側の住宅街に入っていく。

そこは、政財界の大御所や、各所で成功を収めた人たちが住んでいることで知られている国内有数の高級住宅街だ。

だからと言ってそこかしこに豪邸が立ち並ぶ……といったわけでもなかった。

いまだかつて経験したことのないふかふかのシートに身をゆだね、まるでどこかのお嬢様にでもなったような気分の後部座席と戯れていたのもほんの数秒。

外の景色が気になって仕方ないわたしは、窓に鼻をすり寄せんばかりにして、後に流れていく町並みを目で追っていた。

何がそんなにおかしいのか。助手席に座っている遥が私の方を向いて、クツクツクツと笑っているのだ。

「遥だったら、いったいなんなの？ わたし、どこか変？」

遥の失礼な笑い声に、カチンとくる。運転してくれている本田先輩のことも忘れて、わたしはムキになって遥を睨んだ。

「だって、おまえ。マジで、子どもみたいに無我夢中で外を見てるし。卓なみだな。ここがそんなに珍しいのか？ でもな、このあたりはおまえの住んでるアパート周辺とあまり変わらないぞ。期待に沿えなくて残念だな、あははは……！」

「ひ、ひどい。卓と一緒にしないでよ。わたしは、ちがうもん。ただ、外を見てただけだもん。遥こそ、こっちはかり見てないで、ちゃんと前を向きなさいよ……あつ。ご、ごめんなさい……」

突然のブレーキに身体が前後に大きく揺れる。

わたしは先輩が不機嫌になって急ブレーキを踏んだんだと思い、小さくなって謝った。なのに、先輩ったら……。

「あんた、何謝ってんの？ 信号、赤になったから、進むのやめたただけけど？ まあ、遠慮なくイチャついてくれ。堂野、おまえも

後ろへ行けば？ 俺は別にかまわねえ」

本田先輩は前を向いたままそんなことを言って、またすぐに黙った。

「冗談とも、本気ともとれる先輩の言葉にとまどってしまっ

普段あまりしゃべらない無口な先輩から、イチャつくなどと、こつ恥ずかしい言葉が出てくること事態が妙な感じた。

もしかして、これが素の先輩の姿で、ちょっとしたジョークのもりだったとでも？

そんな先輩に対して、謝るどころか、まだ肩を揺らして笑っている遙を見れば、一目瞭然だ。

これは先輩の軽口ということなのだろうか？

それにしてもわかりにくい。やっぱりわたしは、本田先輩が苦手だ。

「なあ、柊、もう少ししたら驚くような一角に出くわすからな。よく見とけよ」

今度は振り向かずに、遙がわたしに話しかける。

わたしは返事もせず慌てて窓に顔を寄せて、再び景色を追いかけ始めた。

テレビのお宅訪問番組でしか豪邸というものを見たことがないので、この目でその全容を把握しようと必死で外を見る。

日本のビバリーヒルズとも言われているここ城川通りの真実を、今から窺い知ることが出来るのだ。胸が逸る。

でもわたしの視界に入ってくるのは、マンションやコンビニ、小学校に、動物のパネルが壁一面に貼り付けられた保育園。激安スーパーの看板くらいのもんだ。何一つ目に留まるようなものはなかった。

なーんだ、ちつともたいしたことないじゃん、窓から顔を離して、ふかふかのシートに身を沈めかけたその時だった。

視野に飛び込んでくる外の異変に気付いたわたしは、目を大きく

見開いて、その景色を網膜に焼き付けた。

そこに次々と姿を現すのは、ありえないほどの大きな門構えの家、家、家。

うっそうと茂る森に囲まれた邸宅もあれば、外国の家のようにオープンな建物もあった。

わたしはぼかんと口を開けたまま、それらを見ていた。何も言葉が出てこない。

本当に驚いた時は、言葉を失うものだ、この時初めて知った。

凱旋門かと思うほどの大きな門をくぐり、あきらかに公道ではない石畳の道を車がゆっくりと奥に進んでいく。

そしてホテルのロータリーのようなところに車が止まり、中から人が出てきた。

「お帰りなさいませ。お車はどういたしましたしょう」

スーツ姿の中年の男性が、本田先輩にとても丁寧な物腰で応対している。だ、誰？

「車庫に……ああ、いい。俺が自分で置いてくるから。堂野と彼女をゲストルームに案内しといて」

「はい、かしこまりました」

遙がシートベルトをはずし、自分でドアを開けて外に出た。そして、スーツ姿の男性にどうもと頭を下げてあいさつをしている。

先輩の家に居候をしている遙は、この人とも顔見知りなのだろう。車の右側に回りこんだその男性が、わたしの座っている側のドアを開けてくれた。

こんなの、初めてだ。なんだか緊張する。

何かの本で読んだ記憶を頼りに、揃えた両足を先に車外に出し、最後に腰を上げる方法で降りようと試みるけれど。

なんだかぎこちない降り方になってしまった。もしかして、このやり方は、着物を着たときの降り方だったのかな？

慣れないことはするもんじやないと思った。

車を降りたわたしは、何が何だかわからないままスーツ姿の男性に先導されて、遙の後をこそそと歩いてついて行った。

「どうぞ、こちらでございます」

男性が案内してくれたのは階段を上がってすぐ横にある八畳くらいの広さの部屋だった。

そこにはソファークッションとコンソールがおいてあった。コンソールは遙の家のリビングにもあって、珍しいものだから綾子おばさんに、これ何？ と子どもの頃から何度も訊いてその家具の名まえを覚えていたのだ。コンソールに間違いはない。

綾子おばさんは、そのテーブルのような台の上にどこかの国で作られた磁器の花瓶を置いていた。

ここのコンソールの上には何も置いていなくて、壁にアンティークっぱい鏡がかけられていた。

まるで十九世紀のヨーロッパの屋敷みたいな雰囲気だ。

「雄太郎様がお戻りになるまで、こちらでお待ちくださいませ。すぐにお食事にご案内できるかと思えますので、当主人の意向により、お茶の給仕は遠慮させて頂いております」

そう言っって頭を下げると、礼儀正しい男性は、すーっと部屋からいなくなった。

ホテルの案内係の人みたいに、卒のない丁寧な物腰の応対に目を見張る。

「ねえ、遙……。今の人、誰？」

わたしはその人がいなくなったのを確認して、遙にそつと訊ねてみた。

「あの人か？ あの方は、伊瀬さんって言っんだ。先輩のお父さんの秘書で、この家の全般的なことを任されてるみたいだ。まあいえば、執事さんってとこかな」

「し、し、執事さん？ それって、もしかして。家族じゃない人が

家にいるってことだよな？ 嘘みたい。信じられない。そんなでもって、本田先輩は、この家のお坊ちゃまつてこと？」

「そうだ。真正銘、この家の坊ちゃんだ。でも、これだけの広い敷地に家を構えて、人の出入りも多いとくれば、他人の力も借りないと管理しきれないだろうな。先輩のお父さんも会社役員だと聞いているし、伊藤小百合も大女優だ。警備上の面からも、周りで支える人が必要なんじゃないかな？ 伊瀬さん以外にもそういった人は何人かいるよ」

「そうなんだ……。なんだかわたしたちとは別世界に住む人たちって感じだね。ねえねえ、本当にわたしがここにいてもいいのかな？ 今日の服、変じゃない？ もっとバツチリメイクにした方がよかった？ わたし、不安だよ」

「何言ってるんだ。大丈夫だつて」

遥はあきれたようにフツと笑って、わたしのおでこを人差し指でツンと突っついた。

33・トップシークレット

「い、痛いよ」

わたしは遙に突かれたおでこをさすりながら下を向いた。

本当は痛くなんかないけれど。そんな風におでこを触られたことなんて、今までなかったものだから、なんだか恥ずかしくて、そしてちよっぴり嬉しくて。

思わず俯いてしまったのだ。

「ねえ、遙。ってことは、遙もこの建物のどこかに住ませてもらってるんだよね？」

わたしは下を向いたままミユールの足先を蹴って遙に訊ねる。くれぐれも、おでこのことを悟られないように。

よく考えてみれば、ここは家の中だというのに、靴を履いたままだということに気付く。

足元はフローリング風の木の床で。ここまで歩いてきた廊下は、毛足の短い絨毯が敷き詰められていた。

本当にホテルのようだ。わたしは気持がふわふわして、踊りだしたいような気分になっていた。

映画のワンシーンのように、男性にリードされて、ワルツのステップを踏めたらどれだけ素敵だろう……。

こんな家で暮している遙がうらやましい。ここなら本当に部屋はいっぱい余っていきそうだ。

「住み心地はどう？」

やっと落ち着きを取り戻したわたしは、遙と目を合わせて話すことが出来た。

「住み心地？ ああ、いいよ。でも俺が寝泊りしてるのは、この建物じゃない。離れの、普通の家にいる。先輩の家族も普段はそっちで生活してるぞ。ここはおもに客を招く時の特別な場所なんじゃないか？ よく知らないけど、俺も初めて通されたんだ」

「そうなんだ。ああ、びつくりした。だって、まるでホテルみたいなんだもん。なんか場違いっていうか、もう帰りたいてっていうか……」

「はははは、来るなり帰るってか？ 実をいうと俺も。先輩ちに世話になるって決まって、初めてこの門をくぐった時、マジで腰抜かしそうになったからな。このでけー建物はいったい何だ、ってなそれに、おまえの見立ては間違ってる。ここは、昔、ホテルというか、迎賓館みたいなところだったらしいぞ。先輩のじいさんが事業に成功して戦後のどさくさに紛れて、安く買ったんだとさ」

天井が高く、壁の腰の位置にボーダー柄の壁紙が貼られ、まるでインテリア雑誌からそのまま飛び出してきたようなエレガントな内装に仕上げられていた。

木枠の窓も上下にスライドさせるレトロなタイプで、チュールレースだろつか、見るからに上等だと思われるレースのカーテンが細かいひも状のタッセルで窓の片側に寄せられ、夕方の柔らかい光が室内を優しく満たしていた。

庭には樹木も多く植えられていて、心持ち暑さも和らいで涼しく感じられる。

さつきまでうるさく鳴いていたアブラゼミも、とたんに静かになった。

「悪い。待たせたな。食事室の方へ行くとするか。蔵城。今日は突然誘って申し訳ない。俺も、正直こういった会食は苦手なんだが、お袋がどうしても言うもんで……。それにあなたにはうまい夕飯をよく食わしてもらったからな。今夜はゆっくりしてってくれ。二人とも、あまり硬くならないで、普通にしてくれてたらいいから。今朝からはりきってだぞ、お袋」

なぜか笑顔まで見せながら、本田先輩がわたしに謝ったりするものだから、調子が狂うったらありゃしない。

本田先輩って、本当はこんなに陽気にしゃべる人だったの？

何か言わなければと焦ってしまう。せっかくこんなに楽しそうに話してくれてるのに、頷くばかりでは失礼だ。

わたしは意を決して、気になっていたことを訊ねてみることにした。

「せ、先輩。あの……。お母様、具合が悪いんですよね？　なのに、押しかけてしまって、本当にいいんでしょうか……」

そうだ。誘ってもらったからって、わたしまでほいほい付いてきてしまったことに後悔し始めていた。

社交辞令ということもある。

「あつ、そのことなら心配いらないよ。もう治っているから。マスコミには内緒だぞ」

先輩が口元に人差し指を当て、ちゃめつけたっぷりにおどけてみせる。

「ええっ？　そ、そうだったんですか？　治って、よかったですね」

「ありがとう。言っちゃあなんだが、ピンピンしてるぜ。医者には休養するいい機会だって言われて、しばらくはやりたいうようにさせておこうと親父もそう言ってるんだ。そのうち退屈だーとほざくに決まってるからな」

先輩の顔がいたずらっ子のように、いきいきと輝く。こんな表情をする人だったんだと、また新しい発見をしてしまった。

「お袋。高校卒業して、それからずっと休まずに仕事を続けてきたからな。俺を生んだ後、一カ月間だけ休んだのが最初で最後の休みだったと言ってた。今やっと念願の長期休暇が取れたって嬉しそうにはしゃいでいるよ。俺も、ずっと親不孝者だったから、ちよっとくらいは見逃してやろうかと。だから、くれぐれも元気だったとか、外部に言わないでやって欲しい。仕事のオフアー、すべて断ってる状態だから」

「でも、お元気で何よりです。そんな、お休みもなくずっと働いていらしたただなんて、やっぱりすごいです。尊敬します」

「子どもを産んだだけでもハンディらしいからな。その間に、ライバルにどんどん追い抜かれたそうさ。以後は、母親役ばかりだったとよくこぼしてた」

「まさか先輩のお母様が伊藤小百合さんだなんて……」

「信じられないだろ？」

「い、いや、そんなことは」

わたしがピンチに追いやられていているというのに、遥ときたらにやにやしているばかりで、ちっとも助けてくれない。

そりゃあもちろん、信じられないけど、それは先輩が嘘を吐いてるとかそういうのではなくて、夢みたいだと言いたかっただけなのに。

「俺とお袋は、あまり似てないだろ？ だから必ず本当に親子なのかと疑われるよ。俺は父親似だからな。それに子供の頃以降、一切家族はマスコミに出てないから、余計に俺がよ者みたいに見えるらしい。まあ、そのおかげで外で自由にふるまえるってのもあるけどね。嘘かと思うかもしれないが、俺、小学生の頃まで伊藤小百合とお袋は別人だと思ってたんだ。堂野はもう知ってるけど、これから会う伊藤小百合の正体も他言無用。くれぐれもトツプシークレットということで」

せ、先輩。ウインクなんて、しないでください！ ああ、びっくりした。

やっぱり先輩の母親は、あの伊藤小百合なんだ。よく見れば、口元とかが、似てないこともない。

それにしてもトツプシークレットって、どういう意味だろう。

母親と伊藤小百合が別人だと思っていたという事は。家での伊藤小百合は、とても公言できないほどだらしないとか、口が悪いとか？

ああ、気になる。どんな伊藤小百合が待っているのだろう。

「さあ、もたもたしていると、お袋がうるさいぞ。早く行こう」
先輩が先陣を切つて、ゲストルームを後にする。

絨毯敷きの長い廊下をぐんぐん歩いていく。多分突き当たりの扉の向こうに伊藤小百合が待っているに違いない。

イブニングドレスを身にまとい、髪をアップにして、耳元にはパールイヤリングが上品な輝きを放ち……。

そして、さっきの執事さん風の男性やメイドさんなんかもいたりして、きつとそこはもう別世界なのだ。

緊張感がピークに達してきて、頬が引き攣るのがわかる。

心臓の音も、ありえないくらいの大音量で鳴り響き、屋敷中にこだまするような錯覚に陥る。

右手と右足が同時に前に出るようなぎこちない歩みになり、思わず遙にしがみついてしまった。

レリーフの施された重厚な扉が開かれ、真つ先に目に飛び込んできたのは大きな大理石のテーブル。

そして、そして……。

こぼれんばかりの笑みを湛え、腕を大きく広げて出迎えてくれたのは。

「まあ……。よくいらつしゃったわね。ええと、ええと……。柊さんっておっしゃるのよね？ あつらあ、かわいらしい方じゃない。

ほらほら堂野君もそんなところに立ってないで、座って座って」
わたしはそのおばさんに腕を引っ張られて、部屋の中に無理やり

引き込まれた。

この強引で朗らかなおばさんは、いったい誰？ え？ ええええっ！

大きな光り輝く瞳をした、細くてかわいらしいこの人は。多分、もしかすると、いや、きつと……。

伊藤小百合だ。

白いシャツとジーンズ。そして、ウエストに小さく巻かれた、ギヤルソン風のエプロン。

ノーメイクでそこにいる女性は確かに伊藤小百合のようなんだけど……。

普通のどこにでもいる、母親の姿をしたおばさん……だった。

岡山出身だという本田先輩のお母さん、すなわち伊藤小百合は、大きな寿司桶いっぱいにちらし寿司を作ってくれていた。

部屋中を見渡してみても、使用人は誰一人見当たらない。

も、もしかして。

大女優であるはずの伊藤小百合が、一人で作ったとでも言うのだろうか。

「これはね、祭り寿司っていうの。岡山県人はみんな知ってるわ。ままかりっていう酢でしめた魚をのせるんだけど、いいのが手に入らなかったのよね。だからさわらで代用してみたの。あとえびと鯛もたっぷりね。しいたけもいい具合に煮含められてるし……。そうそう、天ぷらもいっぱい作ったから……。さあ、みんなで頂きましょう。しいちゃん、あなたも早くいらっしやいな！」

隣の調理場に向って伊藤小百合が声を張り上げた。誰かいるのだろうか？ もしかして、先輩の妹かお姉さん？

「はーい！ すぐに行くわ」

どこかで聞いたことがあるような若い女性の声が、さわやかに響き渡った。

34・女優と母親と祭り寿司

「おばさま、お待たせ。しいちゃん特製のお吸い物も完了よ！ あ、ごめんなさい。もう皆さん、おそろいだったのね」

調理場から食事室に入ってきたその人は、わたしたちを見るなり、あわてて白いレースのエプロンはずそうと身をよじった。

そして……。

「はじめまして、本田しぐれです」

まだ随分若いその人は、落ち着いた物腰で、あいさつをして顔を上げた。

「あ……」

「え……？」

わたしも隣に座る遙もその人を見たとなん、息を呑む。

そんな……。ありえない。なんで、この人が、ここに？

「驚かせてしまつてごめんなさい。雪見しぐれは芸名なの。わたしも本田家の一員なのよ、ふふふ……」

明るめのブラウンのロングヘアを無造作に束ねたその人は、間違はなく、雪見しぐれだった。

昨日、大河内にもらったチケット……。その映画の主人公を演じているのが、今日の前にいる雪見しぐれなのだ。

真つ白な首筋にまとわりつく数本の後れ毛を気にしながらも、驚いているわたしたちを気遣うように、にっこりと微笑みかけてくれる。

ブルーのカットソーにオフホワイトのチノパンツ姿の彼女は、ありえないほどの長い足をおしげもなくわたし達の面前にさらしながら、まるでモデルウォークのようなきれいな歩き方でテーブルに近づき、スマートな身のこなしで席に着いた。

「堂野君も柊さんも。今日しいちゃんがここに來てること、知らなかったのね。ねえ、雄太郎。あなた、お客様に何も言つてなかつた

の？」

伊藤小百合……いや、先輩のお母さんが、訝しげに先輩に訊ねた。「ああ。別にいいだろ？　ここに来ればわかることだし……」

先輩はそ知らぬ顔をして、テーブルの上のおしぼりで手を拭く。

「もう、ホントにこの子つたら。何でこんなに気が利かないのかしら。堂野君、こんな息子でごめんなさいね。なのにこの子を慕ってくれるあなたに、申し訳なくて……」

「い、いえ。そんなことないです。小百合さんのご好意でこちらに置いていただき、先輩には常々感謝しているんです」

さ、小百合さんつて……。まさか大女優に向かつて、おばさんつて呼ぶわけにもいかないし、遙も考慮した結果そう呼んでいるのかもしれないけど。

それにしても、遙つたら自分のことを僕とか言ってるし、顔つきもいつもと違う。

広い家でのびのびと暮してうらやましいなんて思ったけど、彼なりにいろいろと気を遣ってるのかな。

「堂野君……。そんな風に言っていただけなんて、どうしましろう。ありがたいわね。ここにはずっといてもらってもいいんだから遠慮しないでね。では、改めて紹介させていたどうかしら。こちらには私の夫の姪で雄太郎の従妹の本田しぐれ。多分……ご存知よね。前から堂野君に会いたいつて言ってたんだけど、仕事の都合でなかなかここに来れなくて……。ようやく時間が取れて、今朝から駆けつけてくれるの。いろいろと手伝ってもらったわ」

目の前でにこやかに笑顔を交し合う伊藤小百合と雪見しぐれ。

これは、夢？　きつとそうだよ。そんなことあるわけないもの。

この数ヶ月でいろいろなことがありすぎて、意識が混乱してるだけ。もう一度まばたきをして、目を大きく開けたら、誰もいなくなってるかも。

そうに……。違いない。わたしの思い過ごしなんだつてば……。

「……ぎ、……らぎ。おいっ、柊！　しっかりしろよ」

「へっ？　あ……」

遙に肩を揺すられてようやく我に返ったわたしは、ご馳走を前に、目を開けたままぼんやりしていたことにやっと気付いた。

その間、わたしはいつたいどんな顔をしていたの？

初対面の人の前で、そんな情けない姿を見られていたのかと思うと、想像しただけでも恥ずかしくて、顔から火が出そうになった。

もう一度目の前の現実を受け入れようと、向かいに座る二人をしっかりと視界に収めた。

「うふふふ……。柊さんっておっしゃるのね。堂野君の彼女かしら？　とてもきれいな方。学生さん……。よね？　もしかして、高校生？」

顔中が目なんじゃないかと思われるくらい、大きくて澄んだ瞳のしぐれさんがわたしに向って訊ねる。

高校生って……。違うんだけど、頭ごなしに否定するわけにもいかないし。

わたしは、懇願の眼差しで遙を見た。遙、お願い。助けて。

すると、本田先輩がケタケタと笑い出し、あのなあ、しぐれ……と身乗り出した。

「この人、これでも大学生。俺のひとつ下の学年。と言っても、俺は早生まれだから、同い年のはずだ。蔵城、そうだろ？」

「あ、はい。そうです。わたし、こんなだけど、大学生……。なんです。本田先輩の後輩になります」

「そうなの？　柊さん、ごめんなさいね。だって、あまりにも純粹そうで、かわいらしい様子だから、お若いのかと思っちゃった。そして、こちらが堂野君よね。スタッフの間でもあなたのことでもちきりなのよ。きつといつかはメジャーになるって騒いでる人もいるわ。あたしも、たまたま休憩の時に見てたワイドショーであなたの

ことを知って。それからずっと気になったの」

「あつ、そうですね。光栄です。本田しぐれさん、これからもよろしくお願いします」

遥はその場で立ち上がってすつと手を出し、しぐれさんに握手を求めた。

「こちらこそ、よろしくね」

そしてしぐれさんが今度はわたしの方を向いて同じように手を伸ばしてくる。

わたしは突然の出来事にたじろぎながらも、なんとか立ち上がり、しぐれさんの手をそつと握った。

細くてしなやかなその手は、とても柔らかくて、すべすべしていた。

中学生の時からあこがれていた雪見しぐれがわたしに笑いかけて、握手をしてくれているのだ。

わたしは気の利いたあいさつもできないまま、握手が終わってもしばらく呆然としぐれさんを見ていた。

終、座れよと遥の声が聞こえて、慌てて腰を下ろす。

「ねえ、堂野君。来月発売のファッション・ユーに、あなたが載るって聞いているけど……。本格的にモデルデビューなのかしら？」

「いや、それはまだ……。読者モデルとして、少しでも掲載される予定です。でも、今年の末に出る新刊雑誌の専属モデルとしての契約も決まったんで、またお目にかかることがあるかも……。しれません」

「まあ、そうなの？ おめでとう。あそこの出版社なら大手だから、デビューにはもってこいだわ。そうだ。年間購読の申し込みしなきゃ」

しぐれさんがおどけるようにしてうふふと笑い、肩をすぼめる。ほとんど化粧もしていないのに、なんて透き通るような肌をしているんだろう。

一般人にはほとんど見かけないくらい小さな顔をしたしぐれさん

がコロコロと表情を変え、周りのわたしたちまでもなごませてくれる。

「ところで、さつき雄ちゃんの後輩だっておっしゃってたけど、二人とも城川大学の学生さんってこと？」

大きな目をよりいっそう大きくしてわたしと遙を見た後、先輩に問いかける。

雄ちゃんか。そうだよね。従妹って言ってたから、しぐれさんはそうやって先輩のことを呼ぶんだ。

「そうだ。……二人とも、大学からの入学だ。俺と違って出来がいんだぞ、この二人」

本田先輩が少しふざけたようにそんなことを言う。

わたしたちの通う城川大は幼稚園から大学院まであって、学生の三分の一くらいは、高校からエスカレーター式に大学が上がってくる。

幼稚園や小学部で入学した人の中には、運で入ったなどと謙遜して言う人もいるにはいるのだけれど……。

でも、中学、高校と節目ごとに学内進学試験もあるらしいし、学力が満たなければ退学もありうると聞く。

だから、外部受験生が特に優れているということはないと思うのだけだ。

「す、すごいっ！ 尊敬しちゃうわ。あたしは、あそこの高等部で挫折した口だから……。まあ、あの厳しい中高部で仕事しながら全うするなんてことは神業に近いものがあるんだけどね。あたしもちゃんと高校卒業して、大学に行きたかったなあ……」

「あらあら、しいちゃんったら。あなたは仕事を選んだんでしょ。私だって助言したはずよ。仕事はセーブして学校を続けなさいって、でもしいちゃんは意志を曲げなかった。仕事を頑張るって、そう言っただもの」

「そうだったわね。あの時はそう思ったのよね……」

「でもね、しいちゃん。もしどうしても大学に行きたいのなら、ま

だチャンスはあるわよ。通信教育で高校卒業も出来るって聞くしね。しいちゃんの人生だもの。目先のことに囚われないで、長いスタンスで考えればいいのよ。若いうちに勉強しておくのもいいかもしれないわ」

「おばさま。そんな真剣に言わないで。あたしには、そんな自由はないの。もう、三年先まで仕事が埋まつてるのよ。身勝手なことは出来ない。それに、仕事も楽しいし。やだ、おばさまも、みんなもそんな目で見ないで。大学に行きたいだなんて冗談だつてば。ちょっと言ってみただけなんだから」

一瞬、しぐれさんが寂しげな表情を浮かべたように見えたのだけど。気のせいかな。

この人、仕事のために高校を辞めたんだ。知らなかった……。それだけプロ意識が高かったのだろうと思うけど。

何も考えずに、流れに任せてのほほんと生きてきたわたしには、しぐれさんの心の中なんて、何もわからないのかもしれない。

「しいちゃんつたら……」

小百合さんがしぐれさんを見る目も、少し悲しそうに見えた。

同じ仕事をする者同士にしかわからない何かが、二人の間に密かに流れているような気がした。

「あら、いやだ。こんな話聞かせちゃって、ごめんなさいね。さあさあ、みなさん、召し上がれ。お腹すいたでしょ？ 天ぷらも山盛りあるわよ。今夜はダイエットのことは忘れること。また明日からがんばればいいの。何も気にせずにもりもり食べましょう！」

小百合さんの掛け声で、今夜の会食が始まった。それは、ごく普通のどこにもある家族の夕食だ。

取り分けてもらった祭り寿司の酢加減がちょうどいい。おばあちゃんの作ってくれるちらし寿司の味によく似ていると思った。

しいたけや薄焼き卵もどっさりのついで、ダイナミックで食べ応えがあった。

天ぷらもサクサクして、とてもおいしかった。

食事が終わっても、お手伝いの人は現れず、小百合さんが率先して後片付けを取り仕切っているのだ。

手伝おうとしても、いいからいいからと調理場に入れてもらえなかった。

「さあ、若い人たち同士で、お酒でも飲みながら楽しみなさいな。ここは私に任せてね。そうそう、柘さんもゆっくりしていつてね。今夜はここに泊まったらいいから。堂野君がここに来てくれて、ホントに良かったと思うてるの。おかげで、雄太郎もすっかり家にいるようになった。それまではあの子ったら、どこで何をしてるのか、さっぱりわからなかったんだもの」

小百合さんが、くしゃつと子どもみたいな笑顔になる。先輩が家にいるようになって、嬉しくて仕方ないとも言つように……。申し訳ないと思いつながら、小百合さんの言葉に甘えて、みんなと一緒にリビングへ移動した。

リビングなんて言うから、てっきり普通の居間を想像してたけど、やはりここは本邸。

大学の講義室がすっぽり入ってしまうのかと思えるくらい、広いホールのような部屋だった。

レトロな感じの板張りの床の中央には、毛足の長いラグが敷かれ、しぐれさんが足を崩して座っている。

わたしは胸の高鳴りを必死で押さえながら、こつちこつちと招かれるまま、彼女の横にそつと腰を下ろした。

35・女優の横顔

「急にお誘いしたのに、今日はわざわざいらして下さって、どうもありがとう。堂野君や柁さんに会えて嬉しかったわ」

やさしい香りのするしぐれさんが、わたしのすぐそばでふわりとした女神のような笑顔を見せる。

「こ、こちらこそ。お招きいただいて、ありがとうございました。お料理もとてもおいしかったです！」

わたしは何て返事をしたらいいのか全くわからなくて、自分の指先を見つめながら、何かを口走った。

言い終わった瞬間にすべての言動を忘れてしまうほど、どうしようもないくらいに舞い上がっていたのだ。

「ふふっ、よかった。でもあたしなんて、おばさまの言うとおりに切ったり混ぜたりしただけ。お吸い物だけよ。一人で作ったのは」

「でも、本当においしかったです。何もかも、全部！……あっ、ご、ごめんなさい。つい、興奮してしまって」

わたしは慌てて口をつぐむ。わたしったら、いったい何をやってるんだらう。

いつもテレビの画面の中でしか見たことのない人が、すぐ目の前にいる。

それも、しぐれさんが手を動かせば、ブルーのカットソーの袖がわたしの腕をすつとかすめるくらいの距離に。

あまりにもどきどきし過ぎて、今にも口から心臓が飛び出しそうな状況で、自分をうまくコントロールできないのだ。

「そこまで褒めていただいて、なんだか照れちゃうわ。毎日、仕事仕事で、ゆっくりお料理してる時間はないけど、好きなの。あたしもおばさまみたいに、いろいろ作れるようになりたいって思ってるわ。今は一人暮らしだし、誰にも食べてもらえないでしょ？ だから今夜は柁さんや堂野君、雄ちゃんにも食べてもらえて、なんだか

とつても幸せな気分よ」

しぐれさんの言葉に偽りはないと思う。頬を幾分紅潮させ、瞳を輝かせて微笑む。

「あの、わたしも、とても幸せです。だって、まさかしぐれさんにお会いできるなんて、思ってもみなかったから。まだ本当のこととはとても思えなくて……」

目の前に本物の雪見しぐれがいるというだけでも夢心地なのに、こうやって旧知の仲のように隣同士に座って、ましてや二人っきりで話までしているだなんて。

もしわたしに運というものがあるのなら、一生分を今ここで使い果たしたんじゃないかと思えるくらい、最高の幸福感に浸っている。

「そんなに堅くならないで。あたしだって仕事を離れば、どこにでもいるただの二十一の女の子よ。友達といっても、この世界ではうわべだけの付き合いがほとんどで、心から打ち解けることのできる人なんてごくわずか。そうだわ。ねえねえ、柊さんさえ良ければ、これからもこうやってお話がしたいんだけど。だめかしら？」

「ええ？ ……と、とんでもないです。わたしでいいんですか？ わたしなんて、これと言って取りえもないし、おもしろくもなんともなくて。しぐれさんに申し訳ないです。でも、そう言っていただけで、嬉しい。夢みたいです。だって、わたし、昔からしぐれさんのファンだったんです……」

ああああ……。どうしよう。社交辞令で言ってくれただけなのに、わたし、マジになってるし。

変な子って思われなかったかな？ なんてあつかましくて気の利かない子なのって言われたらどうしよう。

ああ、もうこうなったら、どうにでもなれって心境だよな。

しぐれさんが本気でわたしに会いたいと思ってくれるなら、毎日でも会いに来ますから。うん、絶対に！

わたしは背筋をピンと伸ばして、しぐれさんを真っ直ぐに見た。

「あら、やだ。そんなにかしこまらなくていいのよ。ね？ 柊さん。

力を抜いて！」

わたしは今までに知らなかったしぐれさんの一面を見るようだった。

ドラマや映画では勝気なヒロインの役を演じることが多かったせいか、しぐれさん自身も、凜とした無口な人だと思っていたのだ。

しぐれさんがその細い腕を伸ばし、わたしの肩にふわっと手を載せる。

そして、わたしがリラックスできるように、肩をポンポンと軽く叩いてくれた。

「でも、あたしのファンだなんて、嬉しいわ。同じ年頃の女性にそう言ってもらえると、男性に言われるよりハッピーな気分よ」

彼女のやや丸い形をした唇が、まるで少女のようにふるふると揺らめく。

そうか、絶世の美女であるはずのしぐれさんが、どこことなく親しみやすく感じるのは、この唇のせいなんだとふと思い当たる。

テレビの画面からは伝わってこなかった新たな発見だ。

「柘さん、あたしね、今月の半ばまでドラマの撮影で、ずっと休みなしだったの。その前は、今度上映される映画の撮影で、半年間休みなし。映画の仕事は長丁場だから、クランクアップするまではほとんど外界との接触がなくなってしまふのよね。もう完全に浦島太郎状態よ」

体操座りのように膝を抱えて身体を前後に揺すりながら、しぐれさんがおもしろおかしく仕事の話 시작했다。

「そしたら雄ちゃんのところ、あのちまたで話題の堂野遙が来てるって言うじゃない。もう居ても立ってもいられなくて、おばさまにお願いしたの。そして念願になって、今日会えたってわけ。想像通りの素敵なお人だったわ。ねえねえ、柘さん。彼、きっとこの世界で成功するわよ」

「そ、そうですね？ や、あの。わたしにはよくわからなくて……」
まさかとは思うけど、しぐれさんともあろう人が、遙に何か特別

な感情を抱いているとでも？

いや、そんなはずはない。ないよね。だって今日初めて会ったばかりなんだよ。

見知らぬ同士がそこまで瞬時に心を通わせることは無理だと思う。でも……。

遙のことを話す時のしぐれさんの生き生きとした表情を見れば、全くないとも言い切れない。

わたし、どうしたらいいの？

「あつ、やだ。誤解しないでね。あたしの言い方も悪かったわね。んもつっ、柘さんったら、そんなに心配しないで。確かに堂野君は素敵だけど、あなたの彼氏だってことは十分承知してるから手出しはしないわ。あたし、これまで、年下の男の人とうまくいったためしがないの。だ、か、ら……。安心してね、ぷっ！」

突然笑い出したしぐれさんと目が合ったとたん、わたしまでどうしようもなくおかしくなって、お互いの肩を叩きあいながら心ゆくまで笑いこぼれた。

「あははは……！　こんなに笑ったの、久しぶりだわ。だって、柘さんったら、本当に困ったって顔してるんだもの。はあーっ。ああ、おかしい。あたしが堂野君を横取りするわけないでしょ？　あたしにはちゃんと……。って、こんなこと初対面のあなたに言うべきじゃないわね。あたしったら、すっかり柘さんの優しさに甘えちゃってる。ごめんなさいね。ふうーっ。そうだわ、ちよつと訊きたいんだけど」

「なんででしょうか」

ようやく笑いの嵐が去っていったしぐれさんが、呼吸を整えて、わたしに何やら疑問をぶつけてきた。

「柘さんと堂野君って、お付き合いがかなり長そうなんだけど。だって二人の間には、全然他人行儀なところがないんだもの。なんだ

かとっても微笑ましくて」

しぐれさんにそんな風に見られていたなんて、恥ずかしい。

そう言えば車の中でも本田先輩に、遠慮なくイチャついてくれとか言われたのを思い出す。

もしかして、自分でも気付かないうちに、遥とべたべたしてるのかなあ。

わたしに限ってそんなことはないと思っていたのに、他人の目にはそのように映っているってこと？

なんだか自己嫌悪に陥りそうだ。

「長いと言えば、長いです。すごく長いと思います……」

わたしは意気消沈しながら、正直に答えた。

気持を通い合わせてからはまだ五年くらいだけど、一緒にいる時間を問われれば、生まれてからずっとということになる。

「ふふふ……。柊さんったら。そんな敬語なんて使わなくてもいいのに。大学のお友だちに話すみたいに、普通にしゃべってくれたらいいのよ」

「で、でも。そういうわけには……」

「いいってば。その方が、お互いのことをもつと知れるし。あのね、雄ちゃんが心を開く人って、すつごく限られてるの。だから雄ちゃんが太鼓判を押した人なら、間違いないって思うことにしてるの。」

今朝、あたしがここに来るなり、あなたたちのこと、すつごく自慢げに話してくれたのよ。ふふふ……」

「そうなんですか？」

太鼓判って。でもちっとも本田先輩がわたしに心を開いてるとは思えないんだけどね。

ただし、遥と先輩は、日に日に絆が強くなっているように見える。しぐれさんの言ってることも的を得ている気がする。

「ほらほら。また敬語になってる。普通にね」

「は、はい。じゃあそうしま……。じゃなくて、そうする……。ね」

「うんうん。その調子。で、さっきの話だけ。やっぱり、堂野君

とのお付き合い、長いんだ。じゃあ、高校の時から？」

「ううん。違うの。それが……。付き合い始めたのは中三の時なんだけど、小さいころからずっと一緒だったの」

「へえ、そうなんだ。なら、幼なじみって感じ？」

「うん。家も隣同士で、親戚なんです……。じゃなくて、親戚なの」「なぐんだ。そうだったの。道理で、すっごく馴染んでるわけだ」「馴染んでる？」

そんな言い方をされたのは初めてだったので、思わず首を傾げてしまった。

「そう。恋人同士の熱いラブラブ感ってのはまた違うのよね。どう言えばいいのかな。そうそう、あたしと雄ちゃんの間の流れてる空気と同じような感じ……」

さつき小百合さんが言ってたように、しぐれさんと本田先輩は従妹同士だ。

そう言われれば、しぐれさんと本田先輩の関係に似ているのかもしれない。

本田先輩のことをとても嬉しそうに話すしぐれさんをじっと見てみると、ふと、とんでもない事実が浮き彫りになってきた。

本田先輩には失礼な話だが、二人はあまり似てない。

しぐれさんは誰の目から見ても、大勢いる日本の女優さんの中でも、最上級に美しい部類に入ると思う。

だが、本田先輩は……。

顔の作りは残念ながら、わたしたちと同様、一般人の範疇から抜け出すことはないと思う。

背が高く、スタイルは抜群なのは認める。声も渋くて素敵だ。

でも顔は……。親しみのある、標準的日本人顔。

もし本田先輩が、小百合さんの遺伝子を強く受け継いで、おまけに先輩のお父さんの血縁関係にあるしぐれさんに似ていたなら。

もう間違いない、生まれながらにしてのトップスターになっていたんだろっなと思う。

そんなことを考えながら、わたしは何か引つかかるものを感じていた。

本田先輩の話をする時の、しぐれさんの何とも言えない幸せそうな、そして、楽しそうな表情が目には焼きついて離れないのだ。

馴染んでいるという、わたしと遥の関係に似ているしぐれさんと本田先輩の間柄……。

んん？

これって、もしかして、もしかするよね。

しぐれさん、本田先輩のことが、好きなのかな？ 親戚同士だけど、それを越える特別な気持を抱いているとか……。

可能性はなくはない。というか、大ありだ。

野生的なワイルドさを持った本田先輩と、類稀な美しさと賢さを兼ね備えた美女、雪見しぐれ。

ついさつき、本田先輩が一般人顔だとか、言いたい放題、心の中で論じたことを反省する。

ちつとも悪くない。この二人の組み合わせは、案外ベストカップルなのかもしれない、なんて思えてくる。

本田先輩も、しぐれさんに思われて、悪い気はしないはずだ。

ってことは、今後そんな進展もありなのかな？

そこでわたしは、ハタと気づいたのだ。本田先輩の好きな人のことを。

遥の部屋に真夜中にやって来た、あの里中先輩のことを……。

この人は、その事実を知っているのだろうか。

何か飲み物を見繕つてくると言って本田先輩と遥がこの部屋を出て行ってから、随分経つ。

しぐれさんの話をこの先もつと聞きたいような、でも、遥と先輩に早く戻ってきて欲しいような……。

そんな複雑な気持ちを胸に抱きながら、わたしはしぐねさんの憂いを帯びた横顔をこっそりと窺い見た。

36・秘められた恋心

「あたし、柊さんと堂野君がうらやましい。あなたたちには自由があるもの」

自分の膝に額をくつつけながら、しぐれさんがぼそとつぶやいた。

しぐれさんの恋愛は、そんなに不自由なものなの？

それは、女優だから？ それとも、辛い恋だから？

「あたしはね、恋人とデートに出かけたりだとか、買い物に行ったりだとか。普通の人が普通にするのを何もやったことないの。おかしいでしょ？ 事務所からの制限も少しはあるけど、基本、恋愛は自由なのよ。なのに、自由じゃない。矛盾だらけの世界……」

「そうなんですか？」

「意外だった？」

「え、ええ……」

しぐれさんが恋人とデートしたことがないというのにももちろん驚いたけど、恋愛が自由だなんて、びっくりだ。

そういうことは一切禁止されてるのかと思ってた。

だって、ワイドショーや週刊誌で大騒ぎになったりするから、厳重に管理されているって普通思うよね。

自由なはずの恋愛なのに、しぐれさんは自由じゃないと悲しそうな声を出す。

「もちろん、あからさまに付き合ってるのを公表するのはダメだけど、仕事に支障がなければ大目に見てくれるって感じかな。でも、どんなに変装しても、すぐにバレちゃって。行った先々のお店や公共の場でかなり迷惑かけちゃうのよね。あたしのやってる仕事、見かけは華やかだけど、実際は楽じゃない。それを三十年以上続けてきたおばさまってすごいと思う。でも、雄ちゃん性格はあんな風になっちゃったけど……ふふふ」

しぐれさんの話は、やっぱり本田先輩のところには舞い戻る。

しぐれさんが先輩を好きだというわたしの推測は、かなり信憑性が増してきたのかもしれない。

本田先輩のことを話すしぐれさんはとても自然で、かわいらしい少女のようにも見える。

「本田先輩の性格と小百合さんが、何か関係があるの？」

わたしは謎が多すぎる本田先輩のことを知りたくて、しぐれさんに訊ねてみた。

あんな風になっちゃったけどと言っているのは、きっとわたしが苦手だと思っている本田先輩の性格のことだと思う。

いついかなる時でもポーカーフェイスで、無口で。そして、無愛想。

確かに、本田先輩は、付き合いにくい部類の人だ。

少し前までは放蕩生活を送っていたし、極力人との関わりも避けて通るような、一匹狼のような存在だった。

唯一、サークルの代表の是定先輩と遥にだけ心を開いていたように思う。

そうだったのは、伊藤小百合のせいだとしても？

「最近は少しましになったけど。でも、雄ちゃんって、ちょっと変わってるでしょ？」

「ま、まあ……。ほんの少しだけ」

いくらしぐれさんに同意を求められたからって、はいそうですねとは言いにくい。

それに、全面的に肯定してしまうと、そんな変わった性格の本田先輩と付き合える遙もまた、変人だということになってしまう。

「わたしが女優の道を歩みだしたのは、おばさまに頼まれて臨時の子役を引き受けたのがそもそもきっかけなの。そして、そんなおばさまに反抗し続けたのがあなたの先輩である本田雄太郎。あいつは芸能界が大嫌いな。母親であるおばさまを奪い取られた芸能界を仇のように恨んでいた」

しぐれさんが膝を抱えていた手をほどいて、ラグに後ろ手をついた。

天井を見上げ、遠い昔を思い出すような目で、自分や小百合さんのこと、そして、本田先輩のことを語り始めた。

「ほんとはね、その子役……。雄ちゃんがおばさまと親子共演する予定だったのよ。頑固なあいつは最後まで出るのは嫌だつて拒んじやつて。で、急遽あたしがやることになったの。世の中つて不思議よね。何がどう人生を変えるかなんて誰にもわからない。でもね、雄ちゃんつたら、こつそり演劇やつてるんだもの。テレビにもエキストラ出演してるつて言うじゃない？ 誰も伊藤小百合の息子だつて知らないのよね」

わたしも遥に聞くまでは、伊藤小百合が先輩の母親だつてことはこれっぽっちも知らなかった。

大学でも誰も気付いていない、というか、小学部からいるのだから、知っている人も敢えて話題にしないだけなのかもしれないけど。「あれだけ芸能界全般を嫌がってたのに……。変な奴。一度、おばさまとこつそり、大学のサークルの舞台を観に行ったの。なら、どう？ すつごくへタだった……。もう、ありえないくらいにね。周りにバレないうちに、暗がりの中、途中ですごすごと帰ったわ。ふふふ……。これでは百歩譲つても、伊藤小百合の息子だつてことは誰にも言えないわねえつて、おばさまと大笑いしちゃった」

そうだったんだ。だから反抗して、家にも帰つてなかったつてことだね。

有名な母親がいていいな、なんて思つたりもしたけど、本人にしてみれば、辛いこともいっぱいあったに違いない。

伊藤小百合があれだけテレビに出てたつてことは、先輩が子供の頃、おかあさんはほとんど家にいなかったことになる。

普通の仕事と違って、ロケで何日も帰つて来ないなんてことも、日常茶飯だったのだろう。

寂しい思いをしていたのかもしれない。

その時ふと、遙と妹の希美香、そして先輩の姿がだぶった。

希美香はこの前の騒動で家族会議になった時、小さい頃、おじさんもおばさんも仕事で家にいなくて寂しかったと言っていた。

おばさんの仕事はとても忙しくて、女性であっても長期出張もあったし、夜中まで残業なんてのも珍しくはなかった。

遙は何も言わないけれど、我慢していただけで、実は彼も希美香と同じ思いだったのかもしれない。

だとすると、遙が先輩と親しくなったのもわかるような気がする。幼少の頃、同じ思いを体験した者同士が通じ合う何かがあったのかも知れない。

「しぐれ、誰が大笑いしたって？ あることないこと、蔵城に入れ知恵してるんじゃないぞ」

氷や飲み物をトレイに載せて、先輩と遙が戻って来たのだ。

「だってあなたたち、戻って来るのが遅いんだもの。雄ちゃんのあることやこんなこと。いっぱい柊さんに教えてあげたから。柊さん。この人に意地悪されたら、あたしの言ったことを言い返してあげるといいわ」

「あつ、はい」

わたしはしぐれさんに向かって、遠慮がちに頷いて見せた。

「おいおい。何を吹き込まれたか知らないが、しぐれの言うことはでたらめばかりだ。蔵城、今すぐ全部忘れてしまえ」

「は、はい」

わたしは先輩に向かって、慌てて返事をする。

「あー！。ひどいつ。柊さん、忘れちゃだめよ。こいつをそのうち、ぎゃふんと言わせてやるのよ！」

「あつ、はい、わかりました」

二人の言うことが冗談だとはわかっていても、年下で後輩のポジションであるわたしは、両者に従うしかない。

あつちを立てればこつちが立たず。

遙。そんなところに突っ立てないで、何とか言つてよ。わたし、どうすればいいの？

先輩としぐれさんの言い争いというか、じゃれ合いの様子をやれやれと言つような顔をして眺めていた遙が、わたしにだけ見えるように、お手上げのポーズを取る。

「しぐれ、今夜の喧嘩はこれくらいにしておこう。お客さんに申し訳ないだろ？」

「はいはい、わかりました。じゃあ、一旦休戦つてことで」

「それに俺の腕、酒とグラスの重みで、かなりしびれているんだが、ここに下ろしてもいいか？」

本田先輩がトレイを載せた手をわざと震わせて、そう言った。

「うん。じゃあ、ここに置いてくれる？」

しぐれさんがポンポンと、わたしと彼女の間にあるすき間を叩いて場所を示す。

二人のあうんの呼吸に、なんだかホツとするわたしがそこにいた。

37・歯車の歪み

先輩が慣れた手つきでグラスに氷を入れ、ウイスキーとミネラルウォーターを注ぐと、無言のまま遙に渡す。

すると遙が思案顔になり、グラスをそのまま盆の上にもどした。

「おい、どうした。水割りは嫌いか？　うちは親の仕事の関係上、ウイスキーをもらうことが多いから、どうしてもこういうのになる。ソーダで割ったハイボールもうまいぞ。それとも、チューハイの方がいいのか？　宮崎から取り寄せている焼酎もあるにはあるが……」
そう言えば小百合さんは、つい最近までウイスキーのコマーシャルに出ていたような気がする。

先輩のお父さんも会社役員だと言っていたから、贈答品としてももらうことも多いのだろう。

「あつ、いや。それが、実は俺、まだ十九なんで……」

先輩の言葉を受けて、遙が気まずそうに言った。

「今度の雑誌の発売の件もあるし、誕生日までは飲むのをやめとこうかと思つてて。せつかく勧めてもらったのに。本当に申し訳ないです」

そうだった。遙はまだ十九だったんだ。でも、なんでまた突然にそんなことを？

「あら〜。律儀なのね。でも、ここで飲んだって誰にも知れやしないわ。せつかくだもの、もしいける口ならばガンガンいつてちょうだいよ。遠慮はいらないわ」

そう言つて、しぐれさんが遙にグラスを差し出す。ところが本田先輩がその手を押さえた。

「しぐれ、やめとけ。そうか。おまえ、モデルやってるんだつたな……」。こんなことで週刊誌を賑わせるのもどうかと思つし。おまえ、この後、蔵城を家まで送るつもりなんだろ？」

「ええ、まあ……」

「なら、おまえはウーロン茶かジュースにしておけ。といつても、誕生日、もうすぐなんじゃないのか？」

「ああ、来月です。まあケジメっていうことで。しぐれさん、付き合いが悪くてすみません。その代わりといっちゃんなんです、こいつ、もう二十歳なんで、俺の分もどんどん飲ませてください」

隣に座っている遙が、わたしがお酒に弱いつて知っているくせに、からかうような目つきでそんなことを言う。

確かに年齢的には解禁だけど、ビールも缶チューハイも、たったグラス一杯飲んだだけで顔が真っ赤になるんだよ。

それなのに、ウイスキーだなんて。とてとても。飲めるわけないし、無理に決まってる。

ところが、まずは水割りね、としぐれさんにとっこり微笑まれるとそれ以上何も言えなくて。

珍しさも手伝って、香りのいいウイスキーやブランデーを勧められるままに飲んでいたら、いつの間にか意識が無くなるほど酔ってしまった。

後で遙に聞いたところによると、わたしの酒癖は決して悪くはないけど、突如意思表示がはっきりして、とてつもなく頑固者になるぞうだ。

みんなが泊まっていけというのを完全に無視して、絶対に自分のアパートに帰るんだと、右も左もわからない本田邸の庭をふらふらと彷徨っていたらしい。

遙に取り押さえられ、タクシーでアパートまで連れ帰ってくれたのだと言う。

言葉では言い表せないほどの激しい頭痛で目が醒めた時には、思いつきり不機嫌な顔をした遙がベッドで腕枕をしてくれていて。

どうやってここまで帰って来たかなんて、全く何も思い出せなかった。

きた。

そうだ、やなっぺだ。彼女に昨日のことを聞いてもらおう。きっと、びっくりするだろうな。

そんなの嘘だと言って、すぐには信じてもらえないかもしれない。わたしは逸る胸を抑えながら携帯を手にして、素早く通話ボタンを押した。

「……あ、もしもし。やなっぺ？ 今ちよつといい？」

『柊？ いいよ、どうしたの？ 何かあった？』

「い、いや、別にたいしたことないんだけど。……うふふ。ちよつとね」

初めはテンション低めに話して、さりげなく爆弾発言。よし、この手でいこう。

わたしはやなっぺのリアクションを想像しながら、わざと遠まわしに話を進めた。

『ちよつと？ ふーん。たいしたことないんだ。じゃあ、切るよ。電話』

ちよ、ちよつと待ってよ、やなっぺ！ もう、ほんとうにやなっぺってば、文面どおり、ダイレクトな受け止め方しかないんだから……。

このままあっさり電話を切られてしまったら、おもしろくもなるともないじゃない。

これから待っている、史上最強の特ダネを聞かずに電話を切るうだなんて、あまりにも残念すぎる。

それはいくらなんでも、ひどすぎやしませんか？ そりゃあ、もったいぶったわたしが悪いんだけど。

「やなっぺ、お願い。電話、切らないでー！ ちゃんと話すから……」

『はいはい。で、何？ また堂野とけんか？』

「ちがうよ。遥とはタベちゃんと会って、今朝まで一緒に過ごしたんだから」

『そうですか、そうですか。オアツイコトデ……。よかったね。じやあ、さよなら』

「……って、そうじゃなくて。いい？ やなっぺ、驚かないでしっかり聞いてね」

『あい……』

完全にわたしの話を右から左に聞き流す気満々の、やなっぺの鼻にかかった惰性の相槌が、虚しく耳に届く。

まあ、今はそうしてなさい。数秒後には、あなたの周囲を取り囲む天と地を、くるりとひっくり返して差し上げましょう。

「新しい友達できちゃった」

『友達？ 柊にしちゃあ珍しいじゃん。学校で？ それともバイト先？』

「どっちもハズレ」

『ハズレ？ もう、そんなのわかんないよ！』

「あのね、遥の先輩の親戚の人なの。名まえは、本田さんって言うんだ」

『本田……さん？ なんか、聞いたことあるけど。堂野の先輩にいたよね、そんな名まえの人。男？ それとも女？ それで、その人がどうしたの？』

「ふふふ、女性だよ。でもって彼女の仕事がすごいんだよね。多分やなっぺ、当てられないよ」

「ここら辺で、やなっぺの闘争心を煽る作戦に出る。」

『えらく、挑発的じゃん。仕事ね……。わかった。弁護士！』

「ぶー！ 違いました。もっと目立つ仕事なんだよねー」

『目立つ？ CA？』

「キャビンアテンダントもちがいます！」

いいぞ！ その調子！ やなっぺの負けず嫌いのツボをくすぐっていること間違いなしだ。

「じゃあ、本田しぐれ、って言えばわかる？」

『本田しぐれ？ しぐれだなんて、また、珍しい名まえだね。芸能

人みたい』

「そうでしょ？ だってやなっぺの言うとおりだもの。じゃあ、雪見しぐれならどう？」

『雪見しぐれがどうしたのさ。何寝こと言ってるの？』

ここまで言っても、まだわたしのことを相手にしない気なんだね。やなっぺこそ寝言は今のうちだよ。

「へへへ。実は、その雪見しぐれさんと友達になったんだ」

『……………』

「だから、彼女と友達になったの。ねえ、やなっぺ、聞いてる？」

『…………… 柎、あんた、何か悪いものでも食べた？』

「違うって！ もう、やなっぺだったら。わたしが冗談でわざわざこんなこと、電話なんかすると思う？」

『思わない。でも、雪見しぐれだよ？ 若手ナンバーワンの女優だよ？』

「うん。そうだよ。これからも時々会って、いろいろ話そうなって、約束したんだ」

『…………… って、マジ？ ホントのホントに？ うっそーっ！』

予想通りのやなっぺの反応に十分満足したわたしは、夕べの出来事をすべて報告した。

その間、やなっぺの発した、ホントにとっつそーという言葉は、ゆうに百回は越えていたと思う。

この日を境に、わたしと遙の歯車がうまく噛み合わなくなるなど全く気付きもしないまま、浮かれ気分でやなっぺとの電話を心行くまで楽しんだ。

38・歯車の軋み

電話でやなっぺと話し始めて、もう二時間くらい経つ。午後のパイトの時刻がじりじりと迫ってくる。

どうにか話の途切れ目を見つけると、今度はわたしがやなっぺの家に泊まりに行くから、その時に続きを話すねと言って、やっと電話を切ることに成功した。

わたしの方からかけておきながら無理やり切ったみたいで悪かったけど、これもパイトのため。

やなっぺだつて午後から大学に行くつて言つてたのに、大丈夫なんだろうか。

最後にやなっぺは、くれぐれも大河内の映画のチケットの件だけは、妙な出来心を起こさないようにとわたしに忠告するのを忘れなかった。

大河内に何を言われても、無視すること……。そうなんだ。それなのよ。

しぐれさんとまさかの出会いがあつて、なんとなくお互いに親しみを感じてしまったのは夕べの出来事。

なのに、彼女が一生懸命取り組んだ主演映画のチケットを、わたしは大河内にもらつたという理由だけで無駄にしようとしている。

やなっぺが言うことにも一理ある。大河内にこれ以上深入りするなと警告してくれているのだ。

でも……。だからと言って、しぐれさんの映画をこんな形でないがしろにするなんて、わたしにはできない。

バイトにチケットを持って行って、もしも、大河内が店にやつて来たら、都合が悪くなつたと言つて返すべきではないだろうか。

そうだよ。そうした方が……。いいよね。

わたしはカバンにチケットと借りた本を入れ、バイトに向つた。

その夜、やはり大河内はバイト先に現れなかった。そんな都合のいい話があるわけがない。

家に帰ってテーブルの上に並べたチケットを眺めながら、どうしようと思案すること三十分。

いつそのこと彼の携帯に連絡を入れて、どこかで待ち合わせをして返すべきではないだろうか、錠を破りそうになる。

あれほどやなっぺにやめておけと言われた待ち合わせだけれど。

映画の上映日はあさつてだ。もたもたしていたら、本当にこのチケットが無駄になってしまう。

しぐれさんが一生懸命演じた作品が、わたしの決断力の鈍さで無残にも踏みにじられようとしているのだ。

とにかく、早くどうにかしないと上映日に間に合わない。でも、どうすればいい？

携帯で大河内から家の住所を聞き出し、小包で送り返すのはどうだろう。

これなら待ち合わせをしなくてもいい。顔も合わせないし、お互いの気まずさも最小限で済む。

やなっぺも、わたしがしぐれさんと仲良くなったことを知っているのだから、チケットを無駄にしないためにも、これくらいは多めにみてくれるだろう。

なんでこんな簡単なことに今まで気付かなかったのだろう。

借りた本にはさんであるしおりを見ながら、間違えないように大河内のアドレスを携帯に打ち込む。

急に映画に行けなくなったことと、チケットと本を返したいので住所を教えて欲しいと要点だけまとめた短いメールを送った。

五分くらい経って、彼から返信があった。

わたしは紙とボールペンを用意して、住所を書き写す気満々で大河内の返信を画面に呼び出した。

メール、ありがとう。僕は、大学のテストとアルバイトが詰まっついて、明日もあさつても遅くまで家に帰れないんだ。

だから郵便小包は受け取れない。ごめんね。

あさつての五時以降なら君の大学のそばまで取りに行ける。

そして、誰か他に行けそうな人をあたってみるよ。

詳しいことはその時にメールするね。

柊からのメール、嬉しかったよ。

わたしはその文面を見て、ボールペンをポトリと紙の上に落としてしまった。

あさつて……。大河内が、大学までチケットと本を取りに来ると言っている。ど、どうしよう。大変なことになってしまった。

これって、よくないよね。でも返すって連絡を入れたのはわたしだ。大河内は何も悪くない。

さて、困った。もしもこのことがやなっぺに知られたら……。きっと絶交される。

あたしのアドバイスを聞かないのなら柊の勝手にすればと言って、そばを向かれるのは目に見えている。

それより何より、柊からのメール、嬉しかったよって、いったいどういうこと？

大河内ときたら、さりげなくとんでもない言葉をメールの文章に忍ばせているんだもの。

わたしはパチパチと瞬きをして、見間違いじゃないかとその文章を何度も何度も読み返した。

メール上のことだし、言葉の弾みと言われれば、そうとも受け取れる。でも、だからと言って、わたしのことを柊と呼び捨てにして、大河内つたらどういふつもりなんだろう……。

特に重要事項が綴られているわけでもなく。保存しておく必用も

ないだろうと判断した。

わたしは遙に見られないうちに、大河内のメールを、即刻削除する。

心臓がドキドキと鳴る。わたし以外誰もいないのに、部屋の中をきよろきよろと見回した。

遙にこのことが知られたら、やなっぺの怒りどころの騒ぎではないだろう。

今遙から電話がかかってきたら、わたしが動揺してることなど、すぐにバレる。

そしてここに舞い戻ってきた遙に、すべて洗いざらい白状させられるのだ。

それを回避するには、先手必勝、あの方法しか残されていない。わたしは遙に宛てて、大急ぎでメールを送った。

二日酔いはすっかりましになったことと、昨日、しぐれさんや小百合さんに会ったことをやなっぺに知らせて驚かせたと、カラフルな絵文字まで組み入れて、何事もなく元気に行っていることをアピールしてみた。

もちろん、遙に早く会いたい今度はいつ会えるのという文章を組み込むことも忘れずに。

もう寝ようとベッドに腰をかけ、遙からの返事も諦めかけた頃、ようやくメールが届いた。

仕事の打ち合わせが長引いて、携帯を見るのが遅くなったらしいでも、わたしに秘密のプレゼントがあるから、楽しみにしておくようになどと記してある。

そして、今夜は遅くなったので、ここには来ないらしい。わたしは不謹慎にも、ホツと胸を撫で下ろした。

でも秘密のプレゼントって、どういうこと？ 遙らしからぬメールにわたしはしばし首を傾げる。

気になって仕方がないので、折り返し遙に問い合わせるも、秘密だから今は言えないとしか返ってこない。

秘密と言われると、めっぽう弱い。何かわたしを喜ばせようと計画してくれているのだとしたら、こんなに嬉しいことはない。

遥の秘密のプレゼントで頭がいっぱいになったわたしは、あさつての大河内との一件など、もうすっかりどこかに追いやってしまった。

胸をときめかせながらベッドに入り、秘密のプレゼントのことだけを考えてそつと瞼を閉じた。

そして、二日後。ついに大河内との約束の日がやってきたにもかかわらず、彼からのメールは夕方になっても届かなかった。

わたしは、いつもの喫茶店『ロラン』でダーズリンティーを注文して、大河内の連絡を待っていた。

このまま大河内が約束を忘れてくれたらいいのになど思ったりもしながら。

普段は入れない砂糖を軽くスプーン一杯だけカップに入れて、ほんのり甘い紅茶を口に含む。

甘さだけは感じるけれど、香りまで楽しむゆとりはなかった。

変な汗がこめかみを伝う。昨日までは、遥の秘密のプレゼントで浮かれ気分だったのだけど、今朝はそうはいかなかった。

目覚めるなり、携帯ばかり見てしまう。

大学でも、テストだと言うのに、カバンの中の携帯ばかり気にしていた。

紅茶を全部飲み終えた時、ポケットの中の携帯がブルブルと振動するのがわかった。多分、大河内からだ。

大学が出るのが遅くなったので、ここまで来ると上映時刻に間に合わなくなると大河内が知らせて来たのだ。

わたしは店を出て、大河内の指示通り、試写会場のあるここから五つ先の駅に向うことにした。

大河内に指定されたその駅は、これまで一度も立ち寄ったことの

ない場所だった。

高層マンションが立ち並び、ファミリー層が多く暮らす街だ。

雑誌で紹介されるおしゃれなカフェやブティックも多いと聞く。

わたしは約束の本屋の前で、大河内が現れるのを待った。

この時、わたしの心の奥にある歯車が微かな音を立てて軋きしんだのを、とうとう気付くことはなかった。

39・ハンカチ女王作戦

「やあ。待たせたね」

程なくしてやって来た大河内は、バイト先で会った時とは一転して、夏生地で作られた仕立てのいい紺色のブレザーに白いスラックス姿で、より一層爽やかさをアピールしながら、わたしに特上の笑顔を向ける。

「大河内君。わたしの方こそ、こんなことになってしまって、ごめん……」

「どうしても抜けられないミーティングがあつて。さあ、行こう」わたしの言葉を途中で遮るようにして、大河内が遅れた理由を言つたと思つたら……。

さあ、行こうだなんて。いったい、どこへ行くと言つての？

だから、わたしは。チケットと本を。

返しに来ただけ、なんだけど……。

大河内が放心状態のわたしの手を取ると足早に本屋から遠ざかり、JRの高架をくぐってレンタルショップの裏の路地をずんずん進んで行く。

「ねえ、大河内君。いったいどこに行くの？ わたし、こ、困る……」

「もちろん映画さ。この時間に君がこうしてここに来れるんだもの。あと二時間くらい、大丈夫だって。どうせ、誘った友達の都合が悪くて、今日は無理だって理由でチケットを返しに来てくれたんだろ？ それとも……。堂野に遠慮してる？」

「そ、それは……」
もちろんそれもあるけど。わたしが行かないと決めたのだ。行くべきではないと。

それなのに、大河内は一向に手を離す気配もなく、わたしの気持

などおかまいなしに、どんどん歩いていく。

何度か路地を曲がったあと見知らぬ大通りに出た。そのまま真っ直ぐ東方向に進み、ホールのような大きな建物の前に辿り着いた。入り口からホール前の広場にはチケットや当選葉書を手にした大勢の人達がずらっと行列を作っている。

わたしと大河内が立ち止まったところは、ほとんど最後尾に近いところだった。

後には、ほんの数人がパラパラと繋がる。

「なんとか間に合ったみたいだね。さあ、もう降参して。バイトだつて今日は入れてないんだろ？」

「そ、それはそうだけど。でも」

「映画を観るだけだから。終わったら駅で解散。それならいいだろ？ 柗の好きな雪見しぐれの主演作品は二年ぶりだし、これは絶対君と一緒に見たいと思ってたんだ。僕のささやかな希望」

そんなに無邪気に微笑まれても、到底笑顔で返すことは出来ない。「大河内君つて、案外強引なんだ。……わかったわ。じゃあ、映画を観るだけならね。それに、こういうのは今回だけにしたいの。大河内君にはまだ言っていなかったけど、わたし遥と婚約してるし。誤解を招くような行動は慎みたいと思ってる。だから、その……」

わたしのことを怗って呼ぶのも。ちょっと、困る」
一瞬驚いたような表情でわたしを見た大河内は、わかったと言って頷くと、難しい顔をしたまま黙り込んだ。

普段は演奏会や演劇なども催されるのだろうか。

舞台にもたつぷりと奥行きがあり、両サイドの壁面や天井は音響効果のための工夫が凝らされている。

大河内に連れてこられたホール内は、すでに満員の人で埋め尽くされていた。

わたしと大河内がやっとのこと探し当てた席は、一階前方の端寄

りの場所にあった。

それは、映画を観るには最も悪条件が揃っているとわざわざ得ないような悲惨な席。

ほぼ最後尾に並んだのだから、これも仕方ない。というか、もともと来るつもりすらなかったのだ。文句など言えた義理ではないことは重々承知していた。

「見えにくいね。真ん中辺りの関係者席が空いてないか、訊いて可
ようか？」

大河内が突然、今までの沈黙を打ち破り、とんでもないことを言い放つ。

関係者席など、一般人のわたしには縁遠い席なのに。大河内は何か心当たりでもあるのだろうか。

「あのね、ここ、僕のバイト先なんだ。特に休日は各種のコンサー
トなんかもあつて、たとえ学生アルバイトであつても、結構役に立
つんだよ。ここの主任も館長もよく知ってるので、もうちょっとま
しな席に替えてもらえるよう頼んでみるよ……」

席を立ちかけた大河内の腕を引っ張り、ギリギリのところを彼を
引き止めていた。

だって、そこまでしてもらう理由は何もないんだもの。

もう本当に、これ以上ことを大げさにしないでと声を大にして叫
びたい衝動に駆られる。

すると、ちょうどタイミングよく館内放送が流れる。もうすぐ開
演しますというお決まりのアナウンスだ。

大河内も諦めたのか、ブスっとした表情をして着席し、おもむろ
に腕を組んだ。

ええっ？ 大河内でもこんな顔をするんだ。遥ならいつものこと
だけど、などと思いながら、大人気ない大河内にちよっぴり親近感
を持ってしまった。

わたしはそんな不機嫌な大河内を尻目に、アナウンスの指示通り
携帯の電源をオフにし、とにかく無事に映画が終了することだけを

祈りつつ、シートに上半身をもたせかけた。

上映前にスポンサーと配給元関係者の簡単な挨拶があり、そのあとすぐに映画が始まった。

しぐれさんが演じるヒロインが育ての親との確執を経て人生を翻弄される物語。

すれ違いを繰り返し、ようやくつかんだ幸せとかけがえのない大切な人。

なのにそれはひと時の夢に終わり、最後は壮絶な死を遂げるといふ、悲しくも美しい純愛ストーリーだった。

エンドロールが始まる頃には、あたりからはすすり泣きの声が聞こえ、わたしも手に握ったハンカチはすでに乾いているところがないほどにびしょびしょになってしまっていた。

隣にるのが遥でないことにふと気付いたわたしは、悲しい感情が湧き上がるのを出来る限り我慢して、これ以上泣かないように自分に言い聞かせてみる……。が。到底そんなことは、無理な相談で。

一度堰を切った涙は、そう簡単には止まらない。

どうしよう。大河内にこんな泣き顔は見られたくない。

わたしはさぶ濡れのハンカチを顔から離すことができなかった。

拍手が止むと司会の人が出てきて、では皆様、お待ちかね……と声も高らかに意味ありげな笑顔を振りまき始める。

わたしが怪訝そうに大河内を見ると、彼はしてやったりというような顔で、今から主演の俳優たちが挨拶するんだよなどのたまうのだ。

ということば……。

すなわち、しぐれさんがここに現れるということ？ そ、それって……。

非常にまずい。だめだよ、そんなこと。

わたしはあせった。もしわたしがここにいるのがしぐれさんにバ

したら、それは何を意味するのか。

無理にでも早めにここを出るべきだったと思ったが、時すでに遅し。

出入り口には会場スタッフの面々が張り付いて、嚴重な警戒態勢が敷かれている。

テレビカメラも何台かスタンバイ中だ。

わたしは、手に握っているハンカチに一縷いちぢゆの望みをかけた。

まだ泣き続けているふりをしてハンカチで顔を覆うようにするのだ。

大河内はそんなわたしの不可解な行動を見て苦笑いをしている。

場内の割れんばかりの拍手の中、舞台に俳優たちが並んだのがわかった。

時々手の隙間から舞台を伺い、しぐれさんの様子を覗き見る。

幸いわたしたちが端っこにいるせいで、舞台中央にいるしぐれさんとは全く視線が絡まないのがわかり、幾分ほっとした。

地獄のようなこの数分間、どうにか隠れ通したわたしは、俳優達が舞台袖に下がったのを確認して、ふうーっと安堵のため息を漏らした。

本日のプログラムがすべて終了したことを知らせるアナウンスと同時に観客が席を立ち、スタッフの誘導のもと帰路につく。

とにかく一分でも早くここを立ち去りたい一心で歩みを進めるのだが、なかなか人が動かない。

そんな状況の中、大河内がわたしの背中にそつと手を添えているのに気付いた。

今すぐにでも払いのけたいのに、前も後も人に挟まれているので身動きが取れないのだ。

というか、そんな人ごみからわたしを守るために大河内が手を添えてくれているのがわかっていただけに、強硬な態度が取れない自分が情けない。

ようやくホールのロビーにたどり着いて、大河内の手も自然に離

れてくれた。

「大河内君。今夜は、どうもありがとう。じゃあ……」

「そんなに感動した？　最後にせっかく雪見しぐれが舞台に出て来てるっていうのに、君は泣き続けているんだもの。残念だったね、あははは！」

大河内がわたしの話などちつとも取り合わない様子で、そんなことを言ってくる。

もう大河内との約束は果たしたわけだし。ここで帰ってもいいよね。

これ以上会話を長引かせないために、わたしは慎重に言葉を選び、もう一度、別れを切り出す。

「とってもいい話だった。大河内君、今日はありがとう。もうここでいいよ。みんなの後について行けば、駅まで戻れると思うから……」

「何言ってるんだよ。こんな夜道、君一人で帰すわけにはいかないよ。何かあったら、堂野になんて言い訳するんだい？　あつ、そうだ。少しだけ映画の感想、聞いてもいいかな？」

「感想？　今ここで？」

まだ帰してくれないのだろうか。でも感想を言えばすぐにでも解放してくれるというのなら、話は違う。

「この試写会のチケット、ここの館長から渡されたんだ。僕も一応ここのスタッフだから、感想を報告する義務がある。柊……あつごめん。君を見ると、ついそんな風に呼んでみたくなって。蔵城がそんなに感動したのなら、是非、一言でもいいから、今の気持ちを館長に伝えてくれないかな。頼む。今後のこのホールの運営の参考にするそうだし。感想次第で、試写会の受け入れをもっと増やすかもしれないとも言っていた」

大河内が真剣な眼差しで、わたしに訴えかける。

困った、困った。それならそうと、先に感想のことを言ってくれば、こんなに感動しなかったのに。

つまらなそうな顔をしていれば、こんなことにならなかったかもしれない。

いや、でも。しぐれさんに見つかるわけにはいかないし、ハンカチはあの場で、絶対に必要なアイテムだった。

泣いていたおかげで、顔を見られずに済んだのだ。

どうして次から次へと、こんな泥沼にはまってしまっただろう。

チケットを返そうなどと思わなければ、こんな思いをせずに済んだのに。

やなつぺのアドバイスを反故にした結果がこれだと言っのなら……。

自分のまいた種を最後まできちんと回収するのが、わたしに残された道なのかもしれない。

わたしは大河内の後についてホール横の通路を歩いてゆき、関係者以外立ち入り禁止と書いた紙が貼っているスタッフルームの扉の前で立ち止まった。

「大河内君。映画はどうだったかな？」

スタッフルームの扉の前で、通路の向こう側からやって来た人に親しげに話しかけられた。

「あっ、主任。今日は無理言って、本当にすみませんでした」

大河内がより一層姿勢を正して、その人に礼をする。

「何か不備はなかったかね？ 私たちスタッフとしては、わりとスムーズにお客さまを誘導できたんじゃないかと思うんだが」

父さんと同じ年齢くらいだろうか。

大河内が主任と呼んだその人は黒のスーツをピシッと着こなし、仕事をバリバリこなせそうな頼りがいのある人に見えた。

「ええ。混乱もなくよかったですと思います。ただし、僕たちが館内に入ったのが遅くなったせいもあるんですけど、一階の端のシートはスクリーンが見にくくて。前方五列の両サイド三シートは予備席としてあらかじめ封鎖しておく方が、お客さまに対して親切だったかもしれません」

「やはりそうか。まあ、もともとこのホールは映画鑑賞用ではないからな。そのあたりは今後の課題ということで、君の意見を参考にさせてもらおうよ。で、そちらのお嬢さんは？ もしかして、れいの？」

主任さんが目を細めて、わたしを覗き込む。れいのって、どういう意味だろう。

まさかとは思うけど、大河内がわたしとの関係を、誇張してこの人に伝えていたとしたら……。

「あ、いや。昔の同級生の、蔵城さんです。で、この方はこのホールのスタッフで主任の国本さんだ」

「あ、あの。こんばんは」

大河内が紹介してくれた主任の国本さんにとりあえず挨拶をする。

終始にこにこと笑顔を絶やさないこの人は、きつとわたしと大河内の関係を誤解しているんだ。ど、どうしよう。

「蔵城さん。彼からあなたのお噂はかねがね……あははは！ そんなに緊張しなくてもいいですよ。大河内君は若いのに、これがまたなかなかやり手でしてね。私たちホール職員も彼にはいろいろと助けてもらってるんです。そんな彼がね、どうしても今回の試写を見てもらいたい人がいると言うものだから、じゃあモニターになってもらおうとスタッフ配分のチケットを彼に渡した、というわけです。こいつ、こんな目立つ容姿だから、コンサートの出演メンバーとよく間違えられて、サインまで迫られるほどの名物スタッフなんですよ。蔵城さん、これからも大河内君のこと、よろしくたのみますね。はっはっはっはっ！」

わたしの噂はかねがねって。それに、これからも大河内のことを頼みます、ですって？ それっていったい……。

主任さんったら、何もそんなに楽しそうに笑わなくても。

こういう場合、なんて返事をすればいいのだろう。本当に困る。今すぐにも、ここから逃げ出したいくらいだ。

「主任。蔵城に向かって、あまり変なことを言わないでくださいよ……。彼女、困ってるじゃないですか。前にも言いましたけど、蔵城にはちゃんと彼氏がいるんですから」

わたしは大河内の言葉に思わず顔を上げた。

「ただの中学時代の同級生だって、ちゃんと説明したのに。その辺はきちんと理解していただかないと、もう彼女と会えなくなるじゃないですか。それで、蔵城が帰りを急いでるみたいなので、館長に手短に感想を伝えたいのですが……」

今の大河内の言葉から、主任さんの勇み足だと言うことがわかってほっと胸を撫で下ろす。

よかった。大河内はわたしとの関係をきちんとわきまえてくれているようだ。

「ああ、それなんだが。今館長はこのスタッフルームで接待中な

んだ。もう少しだけ待つてもらえるかな？」

「わかりました。……蔵城、それでもいいかい？」

大河内が申し訳なさそうにわたしを見る。彼がわたしを早く帰そうと気遣ってくれているのがわかって、少し気持ちが楽になった。

ここまで来たのだから、あと少し待つのも今すぐ帰るのもたいして変わらないだろう。

「いいわよ。あと、少しなら」

そう言うてにっこり笑った。すると、大河内が安堵したのかふうっと息をつき、ありがとうと言った。

わたしだつて、それくらいの度量は備えているつもりだ。

大河内がまじめに取り組んでいる仕事絡みのことだもの。出来る範囲で協力したいと思う。何もやましいことはない。

それから数分後にスタッフルームの扉が開き、中からぞろぞろと人が出て来た。

少し年配のどこかで見ることがあるような顔立ちの男性に目を奪われる。

んん？　もしかして、おばあちゃんがよく見てたテレビの時代劇に出てた人？

そうだ、さつき舞台挨拶をしていた、あの俳優さんだ。

そうか。このスタッフルームでさつき舞台にいた俳優さんたちを接待していたんだ……。

ということとは……。しぐれさんも、ここに？

ドクンと心臓が大きく跳ねたまさしくその時、すらりと背の高い女性が、甘い香りと共にわたしの前に姿を現した。

瞬間、その人と目が合う。

あ……。

足が動かない。

はっと息を吸いこんだ後……声も出ない。

その人から目を逸らすことも出来なかった。

そこにいたのは。

やっぱり、間違いなく。

雪見しぐれだったのだ。

しぐれさんは大きな目をぱっと見開いて駆け寄り、両手でわたしの手を包み込んだ。

「柘さん？ 柘さんじゃない！ まあ、どうしてここへ？ 試写のチケット、どうやって手に入れたの？ 懸賞に応募したのかしら？ あたしの割り当て分は余分がなかったので、堂野君に渡せなかったのに……。出版社関係から回ってきたのかもしれないわね。そうそう、柘さん。今夜のパーティーには来てくれるんでしょ？」

「あつ、は、はい……」

チケットがどうのとか、今夜のパーティーとか、何のことだかさっぱりわからないけれど。

ここで質問したりするのはしぐれさんに対して失礼な気がして、咄嗟に話を合わせてしまった。

それより何より、今ここで彼女に会ってしまったことの方が、わたしにとっては、過去最大級のピンチなのだ。

何も言えずに立ちすくむわたしと、何やら親しげに話しかけてくる雪見しぐれを見て、わたしの隣にいる大河内は、驚きのあまり呆然としてその場に突っ立っていた。

それに気づいたしぐれさんが、不思議そうに訊ねてくる。

「あの……。もしかして、こちら、柘さんのお連れの方？」

遙がないことによく気付いたのだろうか。しぐれさんが、少し気まずそうにわたしを見た。

一方、しぐれさんに直接話しかけられた大河内は完全に舞い上がっている。

わたしは大河内が余計な口を挟まないように、先手を打つ。

「あつ、いや、そうじゃなくて。感想を……」

わたしが差し障りのない返事をしようと口を開いた矢先のことだった。

「は、はい。お、大河内大輔と申します。蔵城とは中学時代の同級生なんです。僕が彼女を誘って、映画を観ました。まさかこんなところで雪見しぐれさんにお会いできるなんて、光栄です。本当に信じられない……」

大河内が口を滑らせてしまったのだ。同級生だと。僕が誘って映画を観た……。と。

もう、絶体絶命だ。

ハンカチのおかげでしぐれさんに気付かれずに済んだのに、せつかくの苦労も水の泡。

もしこのことが遙の耳に入ったらと思うと、恐ろしさのあまり、震えが止まらない。

ああ、もうおしまいだ。

「柘さんの同級生の方？ そう……。あの、はじめまして」

しぐれさんが大河内に向かって握手を求めようと右手を伸ばしたとたん、横に控えていたマネージャーらしき人が、そろそろ行きましようと彼女と大河内の間に割って入る。

「わかった。あともう少しだけ待って」

少し不機嫌になったしぐれさんが、その人を押しのけるようにして進み出る。

「ねえねえ、柘さんの周りの男性って、なんだかとても素敵な方ば

かりよね」

「そ、それは……」

大河内が一般的にみて、素敵だと評価されるのはわかる。

でも、だからと言って、うんと素直に頷くわけにはいかない。

だって、遥と同等だなんて思いたくないから。

わたしにとつての一番は、誰が何と言おうと遥なんだもの。

「そうだわ！ おおこうちゃん……だったかしら？ よろしかったら今夜のパーティーにあなたもいらっしやいませんか？ 柊さんの同級生ってことは、堂野君ともお知り合いよね？ ならちよっどいいじゃない。是非そうなさつて。ね。是非……」

「あ、ありがとうございます。でも、僕なんかおじゃましてもいいんでしょうか」

「もちろんよ。柊さんからもお願いして。ね？ 是非、一緒に来ていただいてね」

どういうわけか、しぐれさんが大河内に何度も来てくれと念を押す。

それだけはだめだ。いくらしぐれさんの望みでも、それだけは……。

幸い、ちよっどここでタイムリミットが訪れた。

わたしの返事を待たずして、しぐれさんはさっきの人に無理やり引っ張って連れていかれてしまったのだ。

大河内も社交辞令だと思ったのだろう。それ以上この話をすることはなかった。

「大河内君、今日はご苦労。こちらが君の彼女かね？」

しぐれさんを見送っていたスタッフのうちの一人が戻ってきて、

大河内に話しかける。

「館長、今日はいろいろとご配慮いただき、ありがとうございます。それと、はっきり言わせていただきますが。彼女はただの友人

ですから。さっきの主任もそうですが、彼女とか、もう勘弁してくださいよ……」

大河内が困惑の表情を浮かべ、彼らしいソフトな言い回しで抗議する。

この人が館長さんなんだ。館長っていう言葉のイメージとは少しかけ離れた感じの、小柄で穏やかそうな人だった。

さつき会った主任さんの方がよっぽど館長らしい堂々とした風貌を備えていた気がする。

「ははは！ そんな細かいことを言うな。しかしこちらのお嬢さん、雪見しぐれさんとお知り合いとは、こりゃあ、参った。大河内君の人脈はすごいな。それでは少し時間を頂いて、今夜の映画の感想を伺うとするか」

温厚そうな中にも確固たる芯を持った人なのだろう。仕事となる一転して、きびきびとした態度で話を進めていく。

さすがホールの管理の総長たる人物だ。

無駄な時間は微塵もなく、要点を抑えた質問で、あっという間に話が終わった。

大河内はその後ホールの雑用が残っていたため、幸いわたしは一人で駅に向うことが出来た。

送れなくてゴメンと謝ってくれた大河内だが、もうこれで彼と会うこともないだろうと、どこかすっきりした気分になったのも事実だ。

ただ、さっきのしぐれさんとの予期せぬ対面は、大きな計算違いだった。

帰り道、携帯の電源をオフにしたままだったのを思い出し、あわててオンにして着信を確認する。

なんてことだろう。三時間程前から十個のメールと電話を三回受信している。

送信者はもちろん。……遙だ。

内容を表示したとたん……。心臓が暴れ出し、携帯を持つ手が小刻みに震えた。

今夜どうしても連れて行きたいところがあるから、八時にここへ……と今いる駅の近くのヘアースロンの場所が記されていた。

最後に届いたメールなんて、一文字一文字に殺気を感じるほど、遙の激しい怒りが画面から伝わってくる。

遙の連絡を無視し続けていたわたしに、怒り狂っているに違いない。

ど、どうしよう……。遙に叱られる。

これで、大河内と一緒にだったと知られたら……。

今すぐにでも東京から姿を消した方が身のためかもしれないけれど。

時計を見るとまさしく八時ちょうどだ。

さつきから気になっていた点と点が、これでようやく繋がる。

遙の言っていた謎のプレゼントは、しぐれさんのパーティーのことだったのだろう。

そこに連れて行くことが、遙のわたしへのプレゼントだったのだ。なんで、よりによって今日なの？ ついさつき、パーティーの主役のしぐれさんと会ったばかりだ。

これはまさしく、わたしに下った天罰なのかもしれない。

遙に指示されたカットサロンは迷いようのないほどわかりやすいメイン通りにあった。

まばゆいばかりのイルミネーションで建物全体が照らされている。店の前で携帯を片手に、明らかに落ち着きのない様子でわたしを待っている遙の姿が見える。

わたしは深呼吸を繰り返し返し覚悟を決めると、遥のところで大急ぎで駆け寄った。

41・真紅のドレス

「柎、おまえ……。いったい、どこに行つてたんだ。携帯も繋がらねえし、何かあつたんじゃないかと思つて、おまえのアパートまで覗きに行つたんだぞ。まったくおまえつて奴は、人騒がせな……」
スーツを着た遙が腕を組み、引き攣り顔のわたしにチクチクと説教をする。

完全に怒っているのだ。取り付く島も無いほどに。

ただし、心配していた疑いの眼差しは、今のところ、どこにも見当たらない。

連絡が取れなかったことだけを責めている。誰と何をしていたのかまでは追求してこなかった。

わたしが考えすぎだったのかもしれない。

多忙なしくれさんのことだもの。知り合つたばかりの遙に、わざわざ映画の試写会でわたしに会つたなどと告げ口する暇などないだろう。

助かった。

でも、やっぱり。後ろめたさは隠せない。勘の鋭い遙のことだ。わたしの態度の微妙な変化に気付いてしまつかもしれない。

気をつけなければ……。

いつもどおり普通にしていればいい。超能力者でもあるまいし。わたしが黙つてさえいれば、大河内と会つたことなど、遙に見破られるはずがない。

そう。冷静に、普段どおりに。チケットを返そうと思つたら、不可抗力であるような状況に巻き込まれただけ。

何も悪いことはしていないのだから、びくびくする必要はこれっぽっちもない。

だって、わたしの愛する人は、遥ただひとりなんだもの。

自分に暗示をかけるようにして、心を落ち着かせる。

「ごめんね、遙。講義が終わった後、本屋さんに行ってたんだ……。ほら、マナーモードでもブーって響くでしょ？ 迷惑になつたらいけないと思って電源切ってた。そして、さっきまでそれすら忘れてて。あわてて携帯をチエックしたってわけ。えへへへ。たまたまこの近くの本屋さんが品揃えがいいって聞いていたからね。偶然にもそこにいたってわけ。ああ、よかった。知らせてくれた時刻に間に合ってた」

変に思われなかっただろうか。

大河内と待ち合わせをした本屋が結構有名な大手の書店だったので、咄嗟に思いついた嘘もうまくまとまった気がするのだけど。

「しょーがねえな。まあ俺も、前もっておまえに知らせなかったのが悪いんだし。そんなことより早くしろ！ せっかく、すんげーところに連れてってやるうと思ってたのに。おまえが来ないんじゃ、どうしようもないからな。ハラハラさせるなよ……ったく」

カットサロンはもう閉店しているが、貸切の札がかかり、中でスタッフが動き回っているのが見える。

「本田先輩のお母さんの口利きで、ここを紹介してもらったんだ。ドレスもしくれさんのを借りてきてる。今から、パーティーとやらに行くぞ」

遙が先導して店に入り、中に案内される。

やはり、思ったとおりだった。あのパーティーに行くのだ。

でもこの話は今初めて聞いたばかりなのだから、一応ここで驚かないと、話が噛み合わなくなる。

「ぱ、パーティー？ パーティーってなんだろ……」

しまった。うまく驚けない。すでに知っていることを、知らないふりするのがこんなに難しいとは。

「柊？ 何、きよろきよろしてんだよ。店の人、みんなおまえを待たせてくれたんだぞ。あとで、ちゃんと礼を言っておけよ。それにしても……。さっきからなんか変だな、おまえ」

遥が次第に疑わしげな目を向けてくる。

あああ、だめだ。なんでもっと自然にふるまえないんだろう。これじゃあ、今までわたしは悪いことをしてましたって、宣伝しているようなものだよ。

こんなことになるなら、わたしも遥と一緒に演劇サークルに入っ
て、芝居の練習をしておくべきだった……などと後悔してみても、
今さらもうどうすることも出来ない。

ただひたすら、知らぬ存ぜぬを通すしか、わたしに残された道は
ないのだ。

「そ、そんなことないよ。ただ、パーティーって聞いて、びつくり
しただけ」

「ほんとうか？ …… まあいい」

なんとかごまかせたようだ。わたしはこっそりと安堵のため息を
ついた。

「しぐれさん主演の映画完成披露パーティーが、今夜この近くのホ
テルであるんだ。監督やいろいろな来賓を招待してるんだとき。あ
んまり気乗りしねえ集まりだけど、本田先輩までスタッフの一員と
して借り出されている。俺も終わった後の片付けを頼まれているか
ら、どうしても顔を出さなきゃならない。で、しぐれさん。おまえ
に絶対来て欲しいんだってさ。なんかおまえのこと気に入ったみた
いで、先輩にいろいろ聞いてるらしいぞ」

そうなんだ。しぐれさん、わたしのことを気に入ってくれている
んだ。

本当なら光栄すぎて、歓喜乱舞するところなんだろうけど、さっ
き大河内と一緒にのそこを見られているだけに、手放して喜べない
ところが苦しい。

今からここで着飾って、パーティー会場のあるホテルへ連れて行
かれるのだろうか。本当に、わたしなんか行ってもいいの？

しぐれさんのドレスって言うけれど、彼女はわたしより五センチ
くらい背が高い。

胸の大きさを……。完全に負けている。サイズが合わないと思うんだけど、どうするのだろう。

「伊藤小百合が女優の目で見た、確かな見立てらしい。ここにある二着を持ってけと言われた。ロングの方はヒールの高いくつで裾を合わせろってさ。さあ、どっちにする？」

黒の膝丈のシンプルなワンピースと真紅のエラインのロングドレスが、店の奥にあるフィッティングルームのような小部屋に吊るされていた。

すると、店のチーフを名乗る女性が、真紅のドレスをわたしの肩のラインに合わせ鏡を覗き込んでくる。

「こちらがお似合いじゃないでしょうか。雪見さまの方が少し背が高くっていらっしゃるけど、お客さまとてもスタイルがよろしいから……」

胸元にたつぷりドレープがとつてあり、少し大きく開きすぎのよな感じがするが、プロの目は侮れない。

自分で言うのもなんだが、とても似合ってる……と思う。

まさかこんな大胆なドレスがわたしに似合うなんて信じられないのだけど、このドレスを着た自分を想像するだけで、気分が高揚してくるのがわかる。

「こ、これをお願いします……」

なんだか恥ずかしくて、とても小さな声になってしまった。

チーフがにっこりと微笑み返してくれたので、なんとか気を取り直し、鏡の前の椅子に身体を小さくして座った。

まず、ヘアメイクから。

衣装に合わせて、イメージを作り上げるらしい。

とにかく早くしないとパーティーに間に合わないの、もう一人のアシスタントと二人がかりで頭全体にカーラーを巻かれ、メイクを施される。

つけまつ毛は小さくカットされ、両方の目尻の上に部分的に接着

しているのが見えた。

そのままべったりとまぶたのラインに沿って貼り付けるのかと思っていたので、小さく切ってしまうのが意外だった。

わたしのまつ毛はそのままでも十分な長さや量があるので、全部貼り付ける必要はないと説明してくれた。

そんなの初めて聞いた。いつも遥の長いまつ毛がうらやましかったので、たとえお世辞でも、そんな風に言ってもらえて嬉しい。

どンドン、メイクが出来上がっていく。鏡に写る自分の姿を見るのが照れくさくて、つい、目をそらしてしまった。

「さあ、これでどうでしょう」

最後にドレスと同色の口紅を引き終えると、メイクをしていたチーフがわたしの後ろに回りこみ、鏡と一緒に見ながらウエーブの出した髪を手で軽く押さえるようにしてセットの具合を確かめる。

「いかがでしょう。お気に召されましたでしょうか？」

後方の椅子に座り、うとうとと舟をこぎながら待っていた遥もそばにやって来て、目を丸くしている。

「ほおーっ。おまえじゃないみたいだな。たまには、そんなのいいんじゃないの？」

いいとも悪いとも、どっちにでもとれるような感想を言う。

やっぱり遥はどんな時でも遙だ。こんな時くらい、うそでもいいから、きれいだよって言うてくれてもいいのに。

「堂野さんも鼻が高いのではないでしょうか。ほんとうに彼女は美しいですよ。小顔でいらっしやるし、肌もきめ細やかでお化粧のりもとてもいいので……。薄めのメイクでも十分に華やいで見えますから」

ほ、ほんとうに？

高校時代までは美しいなんて形容詞とは全く無縁な生活を送っていたので、耳を疑ってしまう。

東京の街ではよくあるモデルの路上スカウトにも、これまで全く

声をかけられたことがないのに。

プロのメイクテクニクで、ここまで変身できるのだ。

鏡の中のわたしは、まるで別人。見違えるようにきれいに見える。大急ぎでドレスに着替え、用意してもらっていた靴やカバンを合わせる。

レース地のシルバーのラメが輝くストールを肩に掛け、遥の手配したタクシーに二人で乗り込んだ。

五分ほどで会場になっている老舗ホテルに到着し、遥に引き摺られるようにしてすでにパーティーが始まっている桜の間の前まで連れてこられた。

そこはちょうど結婚式の披露宴が行われるようなところで、すでに百人くらいの人が自由なスタイルで立食を楽しんでいた。

紺のシースルーのドレスを身にまとったしぐれさんが、会場の奥の方で大勢の人に囲まれていた。

きつと関係者との挨拶が長引いているのだろう。

わたしなんかとしゃべっている暇はなさそうだ。この調子だとさっきのことを詮索される可能性も低い。

わたしはようやくホッと胸を撫で下ろし、このまま何事もなく平穩に時が過ぎてくれますようにと祈った。

慣れないドレスとヒールの高いフォーマルシューズのせいで、身動きがとれないわたしは、壁際で人間観察に勤しむ。

どこを見回しても、わたしのような一般人は見当たらない。

やはり場違いな気がする。

時折り前を横切っていく人が、怪訝そうな顔をして、こっちを見る。

わたしは不安になって、隣にいるはずの遥の名前を呼び、彼の腕にすがろうとしたのだが。

遥が、いない。

ついさっきまでそこにいたはずなのに、遥の姿がどこにも見えなくなってしまったのだ。

42. なんだか気になるのよ

いったいどこに行ってしまったのだろう。

ヒールの高さを入れると、いつもより数段高い位置に目線があるというのに、遙を見つけ出すことはできなかった。

しぐれさんを取り囲む人ばかりを凝視してみても、遙らしき人物は見当たらない。

幼い子どもでもあるまいし。遙の姿が見えないくらいでおろおろしてどうするんだと自分を戒めてみる。

気を取り直し、もう一度、ぐるりと辺りを見回した。

すると、後ろの扉のあたりに人が集まっているところが見えた。

その中心にいる見覚えのある人物に焦点をあててみる。

やっと見つけた。遙だ。

歩き回る人の邪魔にならないように、壁伝いに少しずつ距離を詰めて遙に近寄っていく。

それが怪しげな動きであることは、わたしにもわかっていた。

でも、慣れない足元が、どうしてもわたしの行動を制御してしま
うのだ。

こうやって壁に手を添えながらでないと、思うように前に進めな
いのだから仕方ない。

ようやく遙のそばまでたどり着くと、呆れたような顔をした彼と
目が合った。

取り囲まれていた数人に頭を下げて、遙がこっちに駆け寄って
くる。

「なんでこんなところまで来るんだよ。あそこで待っていればよ
かったのに」

「だ、だって。急に遙がいなくなっちゃうんだもの。わたし、心細
くて」

「すぐ戻るつもりだったから、おまえに何も言わなかったんだ。だ

つておまえ、珍しそうにあちこちを眺め回していただく？」

「それはそうだけど。いなくなるんだったら、一言わたしに声をかけてよ」

「はいはいわかりました。以後気をつけます」

全く反省しているそぶりを見せない遙に、段々腹立たしさを覚える。

誰も知っている人のいない会場で、ポツンと一人ぼっちになることがどれだけ辛いことか。遙は何一つわかっていない。

大勢の前だから自粛したつもりだけど、ほんの少しだけ口元を尖らせて、不満をアピールしてみた。

「まあ、そんなに怒るなよ。それがさ、俺のことを知っている広告代理店の人と、さつき偶然会って。なんでこのパーティーに来てるんだとかいろいろ聞かれてさ。本田先輩との打ち合わせどおり、事務所つながりだと言っておまかしておいたよ。小百合さんやしぐれさん絡みで俺がここにいることは、あまり公におおやけしないで欲しいというのが本田先輩の意向なんだ。しぐれさんの立場もあるからな。彼女と個人的に知り合いとなると、それはそれで、まずいこともあるらしい」

遙もいろいろと大変なんだ。

しぐれさんは日本中の人から注目されているんだもの。

モデルデビューを控えている遙との接触も、慎重さを求められるのだろう。

伊藤小百合が病気を理由に仕事から遠ざかっていることもあって、あまり彼らの名前を出せないというのもある。

わたしはしぐれさんの友人ということになっていろいろらしい。もし誰かに何か訊ねられたら、そう答えるようにとタクシーの中で遙に言われた。

今後は遥のプライベートもあまり大っぴらにできないのかもしれない。

だから、わたしが遙と親しげにしているのもあまりよくないと、

頭では理解しているつもりなんだけど……。

コンパニオンの女性が運んでくれたグラスワインを飲みながら、遥と少し離れた位置に立ち、再び周囲の人を傍観することにした。しきりに時計を気にする人、携帯を手放さない人、若い女優やタレントの卵らしき集団にちよっかいを掛ける人……。

純粹にしぐれさんを祝福するただけにここに来ている人は、いったい何人くらいいるのだろう。

形ばかりのこのパーティーに、社会の裏側の縮図を見たような気がした。

すると突然、おおっと言う声が湧き上がる。

そして次の瞬間、大粒のパールのネックレスがわたしの目に飛び込んできた。

しぐれさん？ わたしの前で立ち止まりにつきり微笑んでいるのは、間違いなくしぐれさんだった。

「柘さんったら、こんなところにいたのね。どおりで、どこにいるのかわからなかったはずだわ。今夜は来て下さって、どうもありがとう」

わたしの手を握りながらしぐれさんが優しく声をかけてくれる。

あまりにも急で、何も準備が出来ていないわたしは、ただぼかんと口を開けたまま、しぐれさんの透き通るような白い肌を見ていた。

「あら、素敵……。そのドレス、とっても似合ってるわよ。……堂野君。彼女、とてもきれいだわ。そんなに離れてないで、ちゃんとエスコートしなきゃ。柘さん、誰かにさらわれちゃうかも」

わたしは遥の耳元でささやくしぐれさんの最後の言葉にドキッとさせられる。

きつと、何も悪気はなく、わたしを褒めてくれただけなんだろうけど。

さっきの試写会のことがあるから、素直に聞き入れることができ

ないのだ。

このまましぐれさんといったら、あのことがばれてしまうのではないかと、気が気でない。

「しぐれさん、本日はお招きいただき、ありがとうございます。そして、映画の完成、おめでとうございます」

わたしの心配をよそに、しぐれさんの話をさらりと聞き流した遥が、すらすらとしゃべる。立ち居振る舞いも完璧だった。

「おい、おまえも……」

わたしにも挨拶をするよう、遥がそつと背中を押した。

「あ……。こ、今夜は、こんな素敵なパーティーにお招きいただき、ほんとうにありがとうございます」

緊張のあまり、結局こんな杓子定規なあいさつしかできない。

「まあ、柘さん。前にも言ったでしょ。わたしたちの間には遠慮なんていらなくて。普通の友達同士のように話してねって。ふふ……。柘さん、残念なんだけど。向こうの扉の辺りにいる、おじさまたちにもご挨拶しなきゃならないの。そろそろ行かなくちゃ。ゆっくりお話しできなくてごめんなさい」

しぐれさんは少しすねたようにして、そんなことを言う。

本当にしぐれさんはここでゆっくりと話をしたかったのかもしれない。

いくら仕事だとはいえ、しぐれさんだって、家に戻ればわたしとひとつしか変わらない女の子なんだもの。

もつと自由に振舞いたいに違いない。人には言えない苦労もたくさん胸に秘めているのだと思う。

見るからに打算的な笑顔で尻尾を振る業界の人たちと、まだまだ対峙しなければならぬのだ。

仕事だと割り切つて、この場をうまく切り抜けてこそ、今後の雪見しぐれとしての女優生命が繋がっていくのかもしれない。

さつき、業界風の人たちに囲まれていた遥もそうだが、華やかな世界の裏側には、とんでもなく醜い大人達の打算が渦巻いているよ

うに思えてならなかった。

わたしは遠ざかっていくしぐれさんを見ながら、さまざまな思いを巡らせていた。

そして、何事も起こらなかったことに、安堵のため息をつきかけた……のだが。

向こうに行ったはずのしぐれさんが、再びこちらに戻ってきて、わたしの身も心も凍りつかせるようなことを言うのだ。

「えっと……。さっきの柊さんのお友だち、誰だったかしら……。ほら、すらっとしてハーフのような顔立ちの。メガネをかけたあの男の方。今夜はいらっしやらないの？ 今からでもいいので、是非連絡してさしあげて。なんだか気になるのよ、ふふふ……」

ほんのり頬を染めたしぐれさんはそれだけ言い残して、今度こそ扉の方に向かってわたしから離れて行く。

時折り振り返って、こっちに向かつて手を振るしぐれさんを呆然と見ているわたしの前に、視界を妨げるように誰かが立ちはだかった。

遙だ。

すべてを聞いていた彼の凍った視線が、わたしを冷たく射抜く。もう目を合わすことなんてできない。

おもわず下を向くと、その先には震える遙の拳があった。

「柊。ちよつと来い……」

遙の低く唸るような声がわたしの耳にじつとりと響き、全身を恐怖で覆いつくした。

43 遙の愛の形

遙に腕をつかまれ、瞬く間に会場の外へ連れ出された。

レースのストールが肩からずり落ち、右手に持ったバッグが反動で大きく揺れる。

絨毯敷の廊下にヒールが引っかけり、躓きそうになった。

それでも遙の歩くスピードは一向に変わらない。それどころかどんどんスピードを増す。

わたしはよろめきながらも彼のスピードに合わせてよう小走りになっただけで、エレベーターホールを過ぎ、突き当たりの階段の踊り場で、ようやく遙がわたしの腕から手を離れた。

痛みはないけれど。遙がつかんでいたところだけ、皮膚の色が変わっていた。

「柊。さっき、しぐれさんが言ったこと……。あれはなんだ？」
遙が一切表情を変えずにわたしに訊ねる。

「それは……」

この人が本当に遙なのだろうかと思えるくらい別人のような目をした彼をじつと見つめたまま、わたしは言葉に詰まってしまった。

「おまえ、ここに来る前、本屋にいたと言ったよな？」

「う、うん。その……」

「なのにどうして、しぐれさんがあんなこと言ったんだ？ ハーフのような顔立ちの男って、誰だよ。おまえ、そいつと一緒にいたのか？ なあ、柊。どうということなんだ？ 何か隠してるだろ？ ちがうのか？」

遙の顔が目の前に迫ってくる。でもそこには、いつも見つめ合う時の慈しむような優しい瞳はどこにもなく、わずかばかりの甘さのかけらすら見当たらない。

鋭い光を放つ瞳が、殺意すら含んでいるように見える。

じりじりと踊り場の壁際に追いやられ、わたしの背中にひんやりとした大理石の壁面が密着した。

片手でネクタイを緩めシャツの一番上のボタンをはずした遙が、わたしの両耳の辺りで後の壁に手をつき、今にも額が擦り合うくらい距離で、こっちを見下ろしていた。

こめかみから頬を伝う銀色の汗が、彼の首筋に次から次へと滴り落ちる。

激しく胸部を上下する荒々しい呼吸の波形が、ここから逃れられないわたしをますます恐怖の淵へと追いやるのだ。

狂気にも似た遙の眼光に捉えられ、わたしはまるで行き場を失った子羊のように、ブルブルと震えることしかできない。

もう隠し通すことは不可能だ。

しぐれさんは、大河内のことが気になるあまり、無邪気にさっきのことを語っただけ。

大河内のことを単なる同級生だとか思っていないしぐれさんは、わたしたちの過去など何も知らないのだから、彼女に罪はない。

それに。

わたしだって、浮気をしたわけじゃない。

遙に何も知らせなかったのは悪かったけど、もう大河内と会うこともないんだし、真実を知れば遙だって許してくれるはずだ。

だとすれば。堂々と胸を張って本当のことを言えばいい。

「遙……」

まだ震えが止まらない全身から搾り出すようにして、彼の名を呼んだ。

「なんだ」

遙の眉がピクッと反応する。

「さつきね、映画……観てたの……」

「映画？」

「うん……。しぐれさん主演の映画の試写会に行ってたの。そこで

偶然、しぐれさんに会った」

とうとう言ってしまった。そのとおりだ。どこにも偽りはない。

「なるほどな。俺に内緒でか……」

「内緒だなんて……。そうじゃなくて、映画を観るつもりはなかったの。本当だつてば。だから……」

「だからどうだつて言うんだよ。しぐれさんですら、家族用に二枚しか招待券が渡らなかつたんだぞ。いったいどうやって、そのチケットを手に入れたんだよ。おまえ、誰かと一緒だつたんだろ？」

遙はひるまなかつた。全てを聞き出すまで、わたしをここから逃すつもりはないようだ。

でも、その誰かの名前を言ったなら。

遙がたちまち冷静でいられなくなるだろうことは目に見えている。ハーフっぽい顔立ちのメガネの人なんて、日本中を探せばいっぱい見つかるに違いない。

わたしは大河内の名前だけは絶対に口が裂けても言わないと心に決めて、話し始めた。

「バイト先でたまたま会った人にチケットをもらったの。でもね、遙。わたし、そのチケット、その人に返すつもりだつたんだ。それで待ち合わせしたんだけど。結果的にはその人と一緒に、その……」

「観たのか？」

「う、うん。でも、それだけ。本当にそれだけだから……。ね？」

信じて。もう絶対にその人と会わないし」

「ほう……。そいつ、店でおまえに一目ぼれでもしたのか？」

「違うつて。そんなんじゃないんだつてば」

「なら、なんでおまえを誘うんだ。なんでそんな奴にのこのこついて行く？　どんな奴かもわからねえのに、そんなに簡単に心を許してしまうなんて。俺よりそいつの方がいいのか？　おまえつてやつは、そんなにも軽い女だつたのか？」

「わ、わたしが軽い女？　ひどい。ひどすぎる。わたしが一度だつてそんな軽い女だつたためしがある？」

それは遙、あなたが一番よく知ってるじゃない。

わたしが遥だけを愛していることは、あなたが一番よくわかって
いると思っていたのに。

「大河内君が、変な人じゃないってこと！ 遙も知ってるでしょ？」

「おお……こうち？」

遙の目がカツと見開かれる。

言ってしまったのだろうか？ あれほど大河内の名前を出さないと決めていたのに。

たった今、わたしの口から言ってしまったのかもしれない。大河内と……。

「おまえ……」

壁から手を離れた遙が、わたしの首の後ろを緩いウェーブのかかった髪ごと思いつきりつかみ、自分の方に引き寄せる。

その刹那、彼の唇がわたしのそれを強くむさぼるように覆いつくした。

あまりに唐突な荒々しい口付けにめまいを起こしそうになった。

息も継がせないほどの狂おしいまでの情熱が、いったい遥のどこに潜んでいたというのだろう。

何度も何度も角度を変え、執拗に求められる。それは永遠に続くかと思われた。

わたしの膝がガクンと折れ、全身が崩れ落ちそうになった時。急に彼の顔が離れ、今度は懇願するような表情をわたしに向けるのだ。

「おまえの口から、あいつの名前は聞きたくない。二度とその名前を言つな。頼むから、二度と……」

「わ、わかった。もう言わない。遙、ごめんね。わたし……」

うな垂れる遙の肩に恐る恐る手をかける。

「柎。あいつ、おまえを追って東京に出て来てるんだぞ。まさか、

もうおまえと接触していたなんて……。あいつのこと、藤村に聞いていたのに。俺もつかつたよ」

「遙。もう何も心配いらぬよ。こんなことは困るって、ちゃんとおおこ……じゃなくて、その人に言ったから」

わたしが大河内と言いかけたとたん、遙がキツと睨む。

「なあ、柊。しぐれさん、言つてたよな。大河内にもパーティーに来て欲しいって。呼べよ。あいつをここに呼べよ！ あいつの連絡先、知ってるんだろ？」

突然遙が声を荒げる。でもそれだけは出来ない。

しぐれさんだつて社交辞令であんな風に言つてるだけだもの。

わざわざ大河内をここに呼ぶ必用なんてないじゃない。

「遙、待つて。もう二度とあの人は会わないって決めたんだから、絶対に呼ばない。それとも遙。彼に何かするつもり？」

「俺が何をするって言うんだ？ おまえ、何もやましいこと、してないんだろ？ なら、何もする必要はない。俺はただ、しぐれさんのために呼んでやれって言ってるんだが」

「ならお願い。もうこのことは忘れて。しぐれさんだつて、あのとおり忙しいんだし。呼んでも、話すら出来そうにないんだから。そうだ。彼のメールアドレス、今ここで消去する。もう必用ないもの。遙、ちゃんと見ててね」

わたしはバッグから携帯を取り出し、遙の目の前で大河内のアドレスを表示させた。

消去の手順をふもつとしたその瞬間、わたしの手から携帯が取り上げられ、素早くメールを打った遙が送信ボタンを押した。

「最後に俺の記名をして、あいつを呼んだ。一度きつちり、話をける」

「遙……」

「はははっ。安心しろ。あいつを殴ったりはしないよ。俺とおまえの間には誰も踏み込めないってこと、思い知らせてやるだけだ」

わたしの口紅が付いてしまった唇を手の甲でぬぐいながら、遙が

乾いた笑い声を響かせる。

とうとう一番恐れていた事態に陥ってしまった。

遙に相談せずに、勝手に事を進めてしまったわたしのせいで……。

「ひいらぎ……」

再び遙の顔が近付き、頬が触れ合った。

そのままわたしの首筋に顔を埋めるようにした遙が、そっとうなじに唇を這わせる。

「おまえなあ……。俺の気持ちくらい、そろそろ気づけよ。なんでそうやって、いつも俺の手からすりぬけようとするんだ。俺が悪いのか？ それとも、おまえが無意識でやってるのか？」

遙の右手がわたしの背中をそっと撫でる。

「俺、もうこれ以上我慢できねえから。おまえのおやしには悪いけど。はやいとこ新しいマンション探して、おまえと一緒に住みたい。それで、ばあちゃんの言うとおり、さっさと籍も入れてしまおう」「籍？ それって……」

「結婚してしまおうってことさ。山でおまえと結婚の約束をして、もうすぐ五年になるんだぜ。婚約期間はもう十分だろ？ いやとは言わせない」

遙のくぐもった声が静かに響く。

「わ、わかった。そうする。父さんには、わたしが説得するから」顔を上げた遙がふっと笑みを浮かべ、頬に軽く口付ける。

ネクタイを締めなおし、スーツを整え。何もなかったかのようにすました顔をして、会場に引き返す。

その変わり身の早さにしばし唖然とした。

わたしの方は到底すぐさま平常心にもどるなんて、とても出来そうになくて……。

たった今、わたしは遙から二度目のプロポーズをされたのだ。

しぐれさんのパーティーの日に。それも、こんなところで。

首筋にはつきり残る遙の熱い吐息に呼び覚まされた甘い疼きが、
いまだにわたしの身体中を支配し、会場に戻った後も遙の顔を真っ
直ぐに見ることが出来なかった。

44・俺、怒りますよ。本気で

再び会場に戻った時、しぐれさんがわたしたちに駆け寄り、不安そうな目を向ける。

「あつ、いたいた。あなたたち、いったいどこに行ってたの？ ご挨拶したスポンサーの会長さんがとても分別のある方だったから、すぐにあたしを自由にして下さったのに。どこを探しても、二人ともいないんだもの。もう帰っちゃったのかしらって心配したのよ」「ごめんなさい。ちよ、ちよつと、ここから外に出たので……」明らかに不機嫌そうなオーラを漂わせている遙に変わって、わたしはしぐれさんに答える。

「何か急用でもあったの？ ここに来ていただいたことが、ご迷惑だったのかしら。だとしたらごめんなさいね」

「いや、そんなんじゃないよ……。ち、違うんです。こちらこそ、心配をおかけして、ごめんなさい」

首を傾げるしぐれさんを前に、いなくなった本当の理由など言えるわけがなくて。

ましてや、そこで遙に抱きしめられてプロポーズまでされたなんて、どんな顔をして話せというのだろう。

これ以上訊いても無駄だと思ったのだろう。しぐれさんがにっこりと笑顔を見せて、いいのよ、気にしないでねと言ってくれた。

「ねえねえ、柊さん。あの人、やっぱり来ないのかしら。残念だね。堂野君も同級生なのでしょ？」

しぐれさんは、わたしが大河内と会っていたことを、遙が了解済みだと思っているのだろう。

知っているのが当然であるかのように、遙にも訊ねる。

遙は返事をするでもなく、怪訝そうな顔をして、しぐれさんを見た。

「あら？ 堂野君、なんだか変よ。ほら、さっき試写会場で柊さん

と一緒にいたあの人の。堂野君もよく知ってる人なのでしょ？」

「ああ……。大河内ね。知ってると言えば知ってるし、知らないといえば知らない……。そういう関係ですけど。そもそも俺はそんなに親しくないですよ。ただし、柘はあいつと同じクラスだったこともあるから、仲がいいんじゃないですか？」

遥は近くにいるわたしのことなど見向きもせず、淡々と返事をする。

「仲がいいんじゃないですかって、なんだか人事みたいね。ねえ、堂野君。もしかして……。だけど。あなた、妬いてるんじゃない？」

遥の眉がキツとつり上り、しぐれさんを睨みつけた。

「やっぱり、そうなんだ。うふふ……。そりゃあ仕方ないわよね。あの人の、そうとうカッコよかったもの。堂野君、ぼやぼやしていると柘さん、あの人に取られちゃうわよ」

しぐれさんの愛嬌たっぷりの口元が、あろうことが、世にも恐ろしい言葉を吐き出してしまったのだ。

それは遥にとって、一番触れて欲しくない領域。

「しぐれさん。いくらあなたでも、それ以上あいつの話をするなら

……。俺、怒りますよ。本気で」

遥の目が鋭い眼光を放つ。

今夜はしぐれさんの映画完成の記念パーティーだというのに、遥ときたら、ムキになって感情を露わにする。

それくらい、笑って聞き流すのが、大人の対応ってものじゃないの？

だが裏を返せば、遥がわたしのことをそんなに深く想ってくれている証拠ともとれる。

遥のストレートな気持が嬉しいはずなんだけど。でも……。遥の顔、かなり怖いよ。

しぐれさんも言い過ぎたと思ったのだろう。ほんの一瞬、彼女の顔から笑顔が消えたような気がしたが、またすぐに瞳に生気が戻ってきた。

「まあ、堂野君ったら。本気にしてる。そんなの、冗談に決まってるでしょ！ それにしてもうらやましい。こーんなに堂野君に愛されちゃって。幸せよね、柊さん」

「あつ、いや……」

わたしをじつと見つめるしぐれさんの大きな瞳に、全身が吸い込まれてしまいそうな気持になる。

大きく開いた胸元が急に気になり、恥ずかしくなる。

手でドレープを押さえ、胸元を隠すようにしながら、まだ不服そうにしている遙をちらつと見る。

わたしが見ていることに気付いているはずなのに、遙ときたら、わざとわたしを避けるようにして、そっぽを向いていた。

それを見てクスツと笑ったしぐれさんが、わたしの耳元でこつそりとささやくのだ。

男の人って、どうしてこんなにわかりやすいのに、素直じゃないのかしら……と。

「それに、柊さんったら。ふふふ。口紅、取れてるわよ。さては、ここからいなくなってた間に、彼に食べられた？」

わたしはあわてて口元に手をやる。

さっきの遙の激しい口付けを思い出し、顔中がカーツと熱くなってきた。

わたしの口紅が遙にあれだけ付いてしまったんだもの、取れていても不思議はない。

うるたえるわたしを見て、しぐれさんは尚も小刻みに肩を震わせ、声を出さずにクスクスと笑い続けていた。

「柊。ぼーっと突っ立ってないで、早く直してこい。それと、しぐれさん。あなたのご希望どおり、あいつをここに呼びましたから」

遙がわたしを押しやり、しぐれさんの前に立ちはだかる。

「えっ？ ホントに？」

それを聞いたしぐれさんの瞳が、キラキラと輝きを増した。

「しぐれさん。あいつが人の物に手を出さないよう、しっかり見張

っしておいてくださいね。頼みましたよ」

何度も瞬きを繰り返して次第に頬を染めていくしぐれさんをその場に残し、わたしは遙に追いたてられるようにして、化粧室に送り込まれた。

パーティー会場に着いてから、どれくらい時間が経ったのだろうか。

あんなにたくさん、色とりどりに並んでいた料理も、今では添え物のグリーンが銀のトレイの上にぼつんと取り残され、給仕係のスタッフが忙しげに下げていく。

そろそろお開きのようだ。来客の前でしぐれさんが笑顔で謝辞を述べ、深々とお辞儀をした。

それはまるでバレリーナの挨拶のようで、とても優雅で、煌びやかな光景だった。

会場内がわれんばかりの拍手に包まれ、真夏の夜の宴もとうとう終わりを告げたのだ。

テレビで見て知っている俳優も何人が来ていたし、映画関係者や新聞雑誌その他マスコミ関係の人たちも多かった。

遙も何人もの人に呼び止められ、話を訊かれているのがとても不思議だった。

後片付けが終わるまで遙を待つて、一緒に帰ればいい。そうだ、わたしも手伝えば、早く終わるかもしれない。

そして今夜はうちに泊まってもらうつもりだ。

遙の結婚への意志があれば、もう別々に暮らす理由はどこにもないのだ。それならば、もう別々に暮らす理由はどこにもない。

これからはずっとそばに居て欲しいと言ってみようかな。

遙の驚く顔が見たい。そうすれば機嫌も直って、いつものように優しく抱きしめてくれるかもしれない。

わたしは解決法を見つけた名探偵のように大きく頷き、会場を後

にする人の波に紛れて、着替えのために控え室に向かった。

ようやく片付けが終わると、もう十一時を過ぎていた。

しぐれさんとマネージャー、そしてパーティーの間中ずっと受付で来客の接待を任されていた本田先輩と共にホテルを出る。

もちろん、遥も一緒だ。

「柘さん、あなたにまで後片付けを手伝っていただいて、本当に申し訳なかったわ。今夜はどうもありがとう。うちの事務所の車で家まで送るように頼んでいるから。さあ行きましょう。……大河内さん。あの人、とうとう来なかったわね。ちよつと残念」

しぐれさんがわたしにだけ聞こえるような小さな声で、大河内のことをぼそつと付け足した。

深夜だというのに、七月の戸外の空気はむっとしていて、呼吸すら辛く感じる。

見る間に肌が汗ばみ、額に汗が滲む始末だ。

両手に借りたドレスや小物類の入った紙袋を提げているため、汗が拭えないことをちよつぱり不快に感じながらも、ホテルの前のロビーまでたどり着く。

その時だった。

ホテルの正面玄関前でタクシーが止まり、中から見覚えのある男性が降りて来るのだ。

わたしの後ろを歩いていた遥が先にその人に気付いたのか、つかつかと前に歩み出る。

「大河内。遅かったじゃないか。怖気づいて、もう来ないのかと思っていたよ。今日は柘が世話になったそうだな」

腕を組み、微かに笑みすら浮かべながら、遥がその男性に向かって言った。

一見、ごく普通の昔なじみ同士の再会のようにも見えなくはないのだが。

遙の発する言葉ひとつひとつが、まるで鋭利な刃物のような危うさを秘めていて、大河内の表情が徐々に強張っていくのがありありと見て取れた。

45・静かな夏の夜

わたしの横で同じように立ち止まったしぐれさんが、あの人よねと声をはずませ、遥の隣にすつと身を寄せた。

「あ、あの……。試写会のホールでお会いした方ですよね？」

しぐれさんがほんの少し首をかしげ、大河内に訊ねた。

「あつ……」

大河内が硬い表情のまま、驚きの声を上げる。

「やっぱりそうだったのね。さつきはゆつくりとお話できなくて」

めんなさい。えっと、大河内さんでしたよね」

「はい、そうです」

「堂野君。あたしのこと、この方にきちんと紹介して下さいませんか？」

突然そんなことを言うしぐれさんに、遥が眉を顰める。

「ねえ、堂野君」

えっ？ わたしは目の前のありえない光景に息を呑んだ。

しぐれさんが遥の腕に自分の手を絡ませ、甘えたようなしぐさを

見せるのだ。

わたしは繋がった遥の腕としぐれさんの手から目が離せなくなつた。

やめてと言いたいのにな。言えない自分が無性に腹立たしい。

「あ、ああ。わかりました。こちら女優の雪見しぐれさん。大河内、おまえもよく知っているだろ？」

遥がまとわりついているしぐれさんの手をどうにか引き離して、

大河内に紹介する。

「もちろん、よく存じ上げています。こちらこそ、ホールでは失礼いたしました」

ようやく緊張がほぐれたのか、大河内が笑顔になった。

「お忙しいのに、こうやって来てくださって嬉しい。堂野君、柊さん、彼を呼んで下さってありがとうございます」

しぐれさんが振り返り、につこりと微笑んだ。

いや、それは違うの。遥が腹いせに大河内を呼んだんだ……などとは言えなくて。

「蔵城」

わたしは、はっとして大河内を見た。

「さつきは無理を言ってごめん。館長や主任も君の貴重な意見が聞けてよかったと言っていたよ。それにしても今日は驚かされっぱなしだな。いったいどうなってるんだい？ 君だけでなく、堂野も雪見しぐれさんと知り合いなのか？ 信じられないよ。ああ、頭の中がクラクラしてきた」

頭をぶるぶると振り、両手で頬をパンと叩いた大河内が、しぐれさんと遥とわたしを何度も不思議そうに見ている。

そこにいるのは、いつもの颯爽とした大河内ではなかった。

中学時代でさえも、ここまでうるたえている彼を見たことがない。「俺は今、しぐれさんの親戚の家で世話になってるから、こうして親しくさせてもらってるんだが」

遥がいかにも答えるのが面倒だとも言うように投げやりな態度を取る。

「そうだったのか。それで蔵城も雪見しぐれさんと……」

わたしは遥を視界の端に捉えながら、控えめにこくつと頷いた。

「雪見さん。本日はせっかくお招きいただいたのに、こんなに遅くになってしまって申し訳ないです。会場の後始末に時間がかかってしまっ。もう帰ってしまわれたかもしれないと思っていましたが、こうやって再びお会いできて本当に光栄です」

すると、しぐれさんがおもむろに両手を伸ばし、大河内の右手を包み込むように握ったのだ。

しぐれさんの大胆な行動に思わず目を見張ったが、それがしぐれさんの握手のやり方だとわかり、なぜかほっと胸を撫で下ろした。

遥の腕にしがみついた時といい、両手で大河内の手を握ったこと

といい。

あまりにも大胆なしぐれさんの行動に、さつきから驚かされっぱなしなのだから。

ドラマや映画で数々のラブシーンも演じてきているしぐれさんにとって、こんなことは些細なことなのかもしれない。

「今日はあなたにお会いできて、本当によかった。あたしにも、映画の感想を聞かせてもらえないかしら」

「そ、それは、もちろん。でも今夜はもう遅いですし」

「そうね、じゃあまた日を改めて。柊さんから連絡していただくかしら……」

「大河内。今からちょっといいか？」

いいムードになりつつある二人だったのに、何が気に入らないのか、遥が気難しい顔をして話に割り込んだ。

しぐれさんがわたしから大河内に連絡してもらおうと言ったから、それが気に障ったのかもしれない。

「堂野……。別にかまわないが」

大河内が怪訝そうな顔をしながらもしぐれさんの手を離し、遥の望みに従う。

「しぐれさん。申し訳ない。大河内と会うのは随分久しぶりなんだ。だから……」

「まあ、堂野君。今からまた飲み直すの？ いいわね、同級生ってあたしも行きたいな。あつ、でも今夜はやめておくわね。だって、車でマネージャーが痺れを切らせているみたいだもの。明日も秋の特番の撮影があつて、スタジオ入りが早いし。それじゃあ、今夜はこれで。ねえねえ、柊さんは？ どうするの？ 行かないのなら、家まで送るけど」

「わたしは……。あの、行きます」

もちろん、ついて行くに決まっている。遥と一緒に帰りたいというのもあるが、それ以上に二人のことが心配だからだ。

遥が大河内に何をしでかすかわからない今夜だからこそ、彼から

絶対に目を離してはいけないと思った。

なのに遙ときたら不服そうな目を向けて、おまえは来なくていいと言っ。

「そんなあ……。わたしも連れて行って。お願い」

みつともないと思いつつも、遙にすがりつくような目で訴える。するとしぐれさんが腰に手をやり一歩足を踏み出して、助け舟を出してくれた。堂野君って、意外と冷たいのねと。

さすがに遙もしぐれさんには敵わない。

「まったく、世話の焼ける奴だななどとぶつぶつ言いながらも、わたしが一緒に行くことを許してくれた。

「先輩、いろいろとお世話になりました。ここで失礼します」

遙が車の中にいる本田先輩に向かって声をかけた。

本田先輩は助手席の窓から左手を出して、わかったとOKの合図を送ってくる。

その時、突然両手にあつたはずの重みが消え、軽くなったのに気付く。

クリーニングに出してから返そうと思っていたドレスや小物の入った紙袋を、しぐれさんに奪われてしまったのだ。

「柘さん。これはいいから。あなたは何も気にしなくていいの。クリーニングはね、決まったところにまとめて出すから心配しないでさあ、早く行って。楽しんで来てね」

「しぐれさん……。ごめんなさい」

「いいから、いいから。早く。ほら、堂野君が先に行っちゃうわよ。柘さん、またね。また連絡するね」

しぐれさんの声が、ロータリーに響き渡る。わたしは何度も後を振り返り、彼女に向かって手を振った。

わたしの前をゆっくりと歩いていくのは、遙と大河内。今までに一度もなかった組み合わせだ。

これからどこに行くのだろう。そして何をするのだろう。

遙が何かを言うのだろうか。大河内に向かって？ それともわたしに向かって？

街灯に照らされて出来た二人の黒い影を追いながら、歩いていく。時折り横を走り抜ける車の音が耳をかすめる。

とても静かな夜だった。

歩いている三人の足音しかしない、静かな夏の夜だった。

4 6 不安定なトライアングル

「大河内……。おまえとこうやって話すのは、初めてだな」

遙は、テーブルにストローを置いたまま、アイスコーヒーの入ったグラスを直接手にして、ごくりと飲んだ。

「ああ。中学の時は結局一度も堂野と同じクラスにならなかった。それに、共通の友人もいなかったし」

大河内はホットコーヒーにミルクを入れ、スプーンでゆっくりとかき混ぜながら言った。

「共通の友人か……」

遙がそう言っただけをわたしを見る。まるでわたしがその共通の友人だとしても言いたげに。

「おまえが東京に来てるってことは、藤村に聞いて知っていた。もっと早いうちに、おまえに会っておくべきだったのかもな」

遙がグラスから手を離すと、そこだけ水滴が取れて、丸く指の形が付いている。

でもまたすぐに曇ってきて、小さな水滴で覆われるのだ。

ここは、喫茶店。向かいに国内各地で人気のセルフサービスのコーヒーショップがあるけど、遙は無言のまま、この小さな喫茶店に入ってしまった。

ホテルから歩いて十分くらいのところだ。

当然、アルコール類はない。

「いい？」

ブレザーのポケットからたばこを取り出した大河内がわたしを見て、吸ってもいいかと訊いたのだ。

わたしは一瞬ためらいながらも、ええと言って頷き、大河内を凝視する。

たばこを吸う大河内は初めて見る。

ブルーのパッケージの中から一本取り出し、口にくわえた。

「堂野は？」

大河内が遙にもたばこを差し出す。でも遙はいいと言って断り、またアイスコーヒーを飲んだ。

遙はたばこは吸わない。でも、一度だけ、吸ったのかなと思ったことはあった。

遙は何も言わないけれど、遅くに帰ってきて、抱きしめられた時、そんな味の口づけをされたことがあったからだ。

大河内がたばこの先にライターをかざして息を吸い込む。火がついたたばこは、一時だけ、赤く燃えさかるように見えた。

遙やわたしに煙が来ないように配慮してくれているのだろうか。

大河内は天井を見上げて、自分のはき出した白い煙の行方を目で追っていた。

「堂野……」

灰皿を引き寄せ、指をとんとんとはじいて灰を落とす。

なぜだろう。そんな何でもない大河内のしぐさを、わたしは息を呑んで見守っていた。

「なあ、堂野。君と僕とは、案外似てるのかもしれないな。いろいろな面で」

大河内ったら、急に何を言い出すのだろう。

わたしはアイステイーを飲みながら、二人の不可解なやりとりを聞いていた。

「昔からそんな風に思っていたよ。僕が生徒会長に立候補した時も、君が対立候補なら選挙に負けると思ってた。なあ、堂野。担任から推薦されていたんだろ？」

遙がふつと息を漏らす。今ごろ何を言い出すんだとつぶやきながら。

でも、そんな話、今はじめて聞く。遙が生徒会長候補に推薦されていたなんて、わたしは今の今まで知らなかった。

遙は何も教えてくれなかったから……。

と言つても、当時はほとんど話をしなかったのだから、無理もないけどね。

もし遙が立候補していたら、かなりの接戦になっていたのだろうか。

遙の生徒会長姿つて、どんな感じなんだろう。無愛想で、いつも面倒くさそうで。不機嫌な顔の遙が生徒会長だなんて、やっぱり想像できない。

誰がなんと言おうと。生徒会長は大河内以外考えられない。

「そんなこともあったかな。当時は部活一色の毎日だったからな。寝てもさめてもバスケのことしか頭になかった。実際問題、生徒会との両立は無理だし、興味もなかったしな」

「おかげで無風選挙だった。でも本音を言えば、二期連続だったから、君にやって欲しかったというのもある。まあ、もう終わったことだけどね。君なら僕が手をつけられなかったこともいろいろ改革してくれそうだったから。残念だったよ」

どこか遠くを見るような眼差しでたばこをくゆらした大河内は、まだ半分も吸わないうちに灰皿の中で火をもみ消す。

それを見計らったかのように、遙がいきなり大河内をキツと睨みつけたのだ。

「大河内。俺が何を言いたいか、もうわかってるだろ？」

とても低い声だった。

「ああ……」

大河内が手元のコーヒーに視線を落とし、頷いた。

「もうこれ以上、終に近寄らないでくれ。俺、何か間違ったこと言ってるか？」

「いや。もつともだと思う。蔵城は、君の彼女だよ。でも……」

「でも？ でもなんだ。言えよ」

遙の声が少し大きくなる。隣のテーブルのサラリーマンがぎろっところちを見た。

わたしは慌てて遙の腕に手を添え、なだめるような目で彼を見上

げる。

ところがそんなわたしの不安をよそに、大河内が追い討ちをかけるのだ。

「僕が心の中で誰をどう思おうと、それは自由だし、誰にも干渉されたくないと思っている」

遙の体がピクツと反応する。わたしは彼の腕をぎゅっと握った。

遙、怒らないでと心の中で叫びながら。

「大河内、どういう意味だ？」

遙の語気が荒くなる。

「そのまんまだよ」

「なんだと！」

遙はテーブルをこぶしで叩きつけ、今にも掴みかからんばかりの勢いで大河内に詰め寄る。

その振動で、テーブルの端にあったシュガーポットのふたが、カランと音を立てて、トレーにずり落ちた。

静かな店内にその金属音が甲高く響き渡り、客が一斉にこっちを向く。

皆が一様に不可思議な三人組みの言動に注目しているのだ。

わたしはどうすればいいのかわからず、恐る恐る手を伸ばし、シュガーポットのふたをもとに戻した。

アイスコーヒーを一気に飲み終えた遙が、幾分冷静さを取り戻し、声を抑えて話し始めた。

「おまえがこいつに気があるのは、昔から知ってたよ。でもまさか、まだあきらめてないとはな……。俺も正直驚いている」

「君たちが婚約してるってことも、今日、彼女から聞いたよ。二人の間に無理やり入り込んで、どうしようもないなんてことは考えてない。ましてや蔵城の気持ちを見無視して、彼女を君から奪おうだなんて……。それだけは絶対にしない。やっても意味のないことだとわかってるよ。ただ、同郷の友人として蔵城とこれからも付き合っ

いけたらいいなと思ったけど、それすらも堂野を傷つけるのなら……」

次第に無機質になっていく二人の会話が、わたしの頭上をまるで他人事のように通り過ぎていく。

さつきは、遙の怒りの赴くまま、外で乱闘シーンが始まるのかと思いきや、今は不気味なほど静かで、遙の呼吸も全く乱れていない。嵐の前の静けさなのだろうか。

到底二人の顔を見る勇氣などなく、ひたすら俯いて、グラスの中の黄金色の液体と、輪切りのレモンをぼんやりと見ていた。

こんなことなら、遙の言ったとおり、ついて来ない方がよかったのかもしれない。

張り詰めたような空気の中、先に沈黙を破ったのは遙だった。

「柊はおまえのことをただの友だちとしか思ってたなくても、大河内、おまえはそうじゃない。映画を観ただけだと聞いても、俺の腹の中は言いようのない怒りで煮えくり返っている。とても平静でなんかいられない。今だって、ギリギリの精神状態だ……。それに多分、おまえはきつといい奴と呼ばれる部類の人間なんだろう？ 昔から人望もある。そんなおまえに、今後柊の気持ちに傾かないとは言えない。俺はどうしようもないほど臆病者なんだよ。おまえという存在が怖いんだ」

「僕も同じさ。今も堂野への嫉妬心で、身も心もボロボロに壊された気分だ。でもそんな心の内をありのままにさらけ出したとしても、蔵城が心変わりするわけないし。……わかった。もう君たちの前に姿を見せないよ。もちろん、これから企画されるだろう同窓会にも行かないし。だから安心してくれ……」

そう言っつて、大河内がまたたばこを一本取り出し、くわえた。

でもそこまですなきゃならないのだろうか。この先、二人きりで会わないのは当然だけど、同窓会にも行かないなんて、そこまで気を遣わなくてもいいと思う。

彼はそのまじめな性格上、口にしたことはこれからも一生守り続

けるだろう。

人気者の元生徒会長不在の同窓会なんて、想像しただけでも虚しい。ましてや、それがわたしのせいだなんて……。

このままでは、わたしの方こそ、一生同窓会に行けない。

「ねえ、遙」

わたしは咄嗟に思いついた打開策を提案することにした。これならばきっと、遙も納得するだろうと思ったのだ。

「何も大河内君が、そこまでする必要なんてないと思うの。年に一度の中学の同窓会くらい、行ったって、全然かまわないと思う。それに、これからもこうやって三人で会えば問題ないんじゃないかな？ わたしたち、同じ地域に実家があるんだし、共通の話題も多いよね。大学生活で困ったことがあれば、お互い助け合っていけば……」

助け合っていけばいいのに……と言いかけたとたん、遙が唇をわななかせたのだ。

怒りを露わにした目をわたしに向けて。

「柊。おまえ……。いい加減にしろよ」

「遙。わ、わたしは、ただ……」

「おまえは何もわかってない！ 仲良しグループなんて、子どもみたいなこと言ってるじゃねえよ。わかった。そんなにこいつと会いたいなら、おまえ一人で会えばいいだろ！ 勝手にしろ！ 俺はもう帰る」

遙はぎいっと椅子を引いて立ち上がった。

肩で息をしながら。わたしを震えさせるくらい冷ややかな目で見下ろして。

遙は上着の内ポケットから取り出した折り目の付いた一万円札をテーブルに残し、瞬く間にわたしの前から消え去ってしまったのだ。

47・遙、待つて

「遙、どこ行くの？ 待つて。ねえ、待つて！」

すぐに遙の後を追って店を出たけれど。

表通りにはもう彼の姿はなくて。向いのおしゃれなコーヒーショップから出てきたカップルにじろつと睨まれる。

わたしは、まだ支払いを済ませていないことを思い出し、くるりと踵を返して喫茶店に舞い戻ったが、ちょうど店から出てきたばかりの大河内とぶつかりそうになり、はつと顔を見合わせた。

「はい、これ」

折り目どおりにきれいにたたまれた一万円札が、わたしの手に載せられる。

「きつと、これでコーヒー代を払えってことだろうけど……。これ、君に渡しておく」

大河内が目を細めて、そう言った。

「あ、ああ……。そうだね。これ、遙の……。だよね。わたし、預かっておくね。あの、さっきのお茶代は？」

「いいよ。まとめて払っておいた」

「そんなわけにはいかない。あの、じゃあ、せめて遙とわたしの分だけでも払わせて」

わたしはバッグの中をごそごそとかき混ぜる。大河内を前に、気持ばかりが焦ってしまう。

やっと、遙から誕生日にもらったお気に入りのクリーム色の財布を見つけ出し、ファスナーを開けたけれど。

「蔵城、もういいって。それより、堂野は？ 本当に行ってしまったのか？ 追いつかなかったんだ……」

絶対に代金を受け取るうとしない大河内に負けて、わたしは再びバッグに財布を戻す。

自分のみつともなさに、気分が滅入るばかりだ。

「悪かった。君にも、堂野にも。僕がいつまでも未練がましいことを言うから、君にまで気を遣わせてしまって」

「そんなことないよ」

「君は、いつだって優しいよ。そうやっていつも周りに気を配っている。中学の時も、そんな君だからこそ僕は惹かれたんだと思う。あー。またこんなことを言ってしまった。君を困らせるつもりはないんだけどなあ……。堂野の言うことはもっともだ。蔵城の気持ちは嬉しいけど、堂野と一緒に居る君を見るのも相当辛いんだ。だから僕も三人で会うのは反対だ。僕たちはもう会わないほうがいいと思う」

「さあ、送るよと言って、通りを歩き出す。」

「堂野が君んちに帰ってくるかもしれないんだろ？ なら、早く帰った方がいい」

大河内が手を上げてタクシーを呼び止め、同乗することになった。後部座席に並んで座ったけど、何も話すこともないまま時だけが過ぎていく。

「堂野とはいつ婚約したの？ 最近？」

わたしが車の窓から目を離し前を向いたタイミングで、大河内が口を開いた。

「いつって……。いつだろう？ 家族公認になったのは先月実家に遥と一緒に帰った時だったから、その時？ いや、プロポーズされたのはもっと昔だからそつちかな。」

「えっと、いつだったかな。はつきりとはわからないんだけど。その……。二人で結婚の約束したのは、中三の時なんだ」

余程驚いたのだろう。大河内がぼかんと口を開け、わたしをじっと見ている。

「そりゃあそつだよ。普通、世間一般の中学三年生は、婚約したりしないもの。」

「で、でもね、親公認になったのは先月。わたしの父と遥のお母さ

んは、私たちのこと、多分、心の中ではまだ反対してると思う」

「へえ、そうなんだ。家の人は厳しいの？ 交際とかに」

「うん。それもあるけど。わたしの家も遙の家も、いろいろあるんだ。跡取り問題とか……」

「ふ〜ん。大変だな」

「それに、わたしっいたらいい年して、遙としか付き合ったことがないから、こんな風にいざこざが起きるたび、どうしていいのかわからなくなって。それでいつも、大騒動になっちゃうの……」

「君も、苦労してるんだね。それにしても、中三で婚約とは、これまた早いといつかなんというか……。ということは堂野も君しか知らないんだ。それって結構すごいことかもしれないな。お互い、相手への思いが強すぎて、八方ふさがりになってるってことはない？」

大河内が隣で腕を組み、う〜んと唸った。

「こんなことになるのなら、中二で蔵城と同じクラスになったの時、何が何でも君に告白するべきだったな」

「またもやそんなことを言い出す大河内に、返す言葉が見つからない。」

「なーんてね。ああ、気にしないで。もう昔のことだから。これからはさつきも言ったとおり、君には絶対に会わないよ。バイト先のハンバーガーショップにも行かない」

わたしは複雑な気持のまま、こくりと頷く。

これはつまり。わたしのせいで、彼の行動範囲を狭めてしまったのだ。

でも、もうどうすることもできない。

「君の家、このあたりなんだろ？ どこで止めてもらったらいい？」
そうだった。大河内はわたしが住んでいるアパートの位置までは知らない。

大河内を疑うわけじゃないけど、教える必用はないと思っていた。

アパートまで、まだ少しだけ離れているけれど、その時表示されていた乗車料金を無理やり大河内に渡し、最寄のコンビニ前で車を降りた。

大河内が窓越しに手を振っている。眼鏡の奥の目は、微かに微笑んでいるようにも見えた。

もうこれで二度と大河内に会うことはないのかと思うとちよつぴりセンチメンタルな気分になる。

これから先も決して大河内に恋愛感情を持つことはないと言断できなければならない、今回ばかりは、異性間で友情を育てることの難しさをこれでもかというくらい思い知った。

遥が大河内に対して過敏になりすぎだと思つ反面、逆にわたしが遥の立場なら、やっぱり同じように不安になるだろうなと想像がつく。

遥の嫌がることはしたくない。

大河内を乗せたタクシーを見送りながら、これでよかったのだと自分に言い聞かせた。

アパートに帰り着いた時には、0時を過ぎていた。少しだけ期待したけれど、真つ暗な部屋にはやはり遥の姿はなかった。

しぐれさんにパーティーのお礼のメールを送り、シャワーを浴びてベッドにもぐりこむ。

そして、手にしたままの携帯を何度も覗き込んだ。

遥からの連絡は何もない。まだ怒っているのだろうか。

もうすでに、本田邸に帰りついたのかもしれない。

それとも、一人でどこか違う店に行ったのかも……。

どこでどうしているのだろう。考えれば考えるほど心配で、眠れなくなってしまう。

遥のことを考えるだけで、泣きたくなる。

わたしは遙の番号を呼び出し、意を決して通話ボタンを押した。
携帯を耳にあてながら、遙の返事を待った。

48・涙色の空

何度電話をかけても、遙から応答はなかった。

電源が切られていている可能性があります……と、お馴染みのアナウンスが虚しく繰り返されるばかりだ。

一向に受信する気配のない携帯を、何度も開いては閉じを繰り返して、胸元で握り締め。

全く眠れないまま夜を明かしたわたしは、部屋の隅にたたんで置いてあった薄いブルーのＴシャツとデニム地のスカートを大急ぎで身につけた。

大学に行くことにしたのだ。遙を待ち伏せするために。

朝ごはんも食べずに、一目散にキャンパスに向った。

今日は一限目に日本経済史の前期試験があるはずだ。ここにいれば、きつと遙に会える。

わたしを見つけた遙は、なんでおまえがこんなところにいるんだと言って、いつものように不機嫌な顔になるのかな。

携帯だって、また充電を忘れていただけかもしれないしね。

政治経済学部のF棟ホールで今か今かと彼を待つ。次々とやって来る学生たち。でも、遙の姿はどこにもなかった。

場所を間違えたのだろうか。いや、そんなことはない。

目の前を通り過ぎていく二人連れの学生が、遙がいつも話題にしていた教授の名前を口にしている。その手には日本経済史の分厚いテキスト。この建物に違いないようだ。

というのも。わたしが通っている文学部キャンパスは、この敷地内にはない。

ここは第二キャンパスで、基本、文学部の人間は、学祭と特別講義の時以外は出入りする必要がない。

めったに來ないので、同じ大学と言えども、自分が部外者のように感じてしまうのだ。

すれ違うのは男子学生ばかり。たまに見かける女子学生もパンツやジーンズ姿の人が多く、きらびやかな文学部のイメージとはほど遠い。

人の波のピークが過ぎ、とうとう一限目が始まってしまった。

遙は來なかつた。携帯もまだ繋がらないままだ。

どうしたというのだろう。

試験も受けられないくらい、腹を立てているのだろうか。

それは、わたしのせい？

ここで待つのをあきらめ、オープンテラスのある学内カフェで休むことにした。

雑誌でもたびたび紹介されるこのカフェに来るのは、今日が二回目だ。

一回目は、遙と一緒に暮らして初めての朝を迎えた日だった。

同じベッドで目を覚ましたのが気恥ずかしくて、目を合わせることにすらできなかつたあの日。

午前中休講だったわたしは、大学に行くため先にアパートを出ようとした遙を見送りながら、不覚にも泣いてしまったのだ。

遙の背中が涙で滲んで見えなくなるくらいに。

夜になればまた一緒に過ごせるのに、遙がもう戻ってこないような氣して、不安で不安で仕方なくて。

あまりにも幸せだった夜から一夜明けてみれば、いつにも増して無口でよそよそしい遙がいて。

もはや、遙に愛想をつかされたのかとネガティブな思考しか浮かばず、彼の上着を握って離さなかつたあの日。

遙はそんなわたしをあきれたように見たあと、手を差し出してく

れて、結局そのまま一緒に大学に向かうことになった。

そして、連れて来られたのが、このカフェだった……というわけだ。

あの時と同じアイスティーを飲みながら、遙のことばかり考えている。

夕べあの後、先輩の家にも戻らずに、他の店に行ったのだろうか、とか。

行く当てもなく公園のベンチで夜を明かしたのだろうか、とか……。

それとも、ネットカフェで一人寂しく朝を迎えているのかもしれない……などと思ってしまう。

それならまだいい。

考え事しながら道路にふらふらと飛び出して交通事故にあつてたらどうしようと、ありえないようなことまで考えてしまう。

あるいは、行きずりの女性と一夜を共に過ごしたり……とまで思ったところで、思考を止めた。

止めたつもりなのに、また悪い方に悪い方にと想像を膨らませてしまうのだ。

まさか、里中先輩のところに行っているのでは……などと。

ない。絶対にない。

ないと……思う。

でも……。

どんどんとマイナス思考になっていく。

このままもう二度と彼に会えなくなるのではないかと、最悪の結末すら脳裏をよぎり始める。

以前、遙が真夜中に里中先輩を連れて帰ってきたことがあった。

遙を許せなかったわたしは、彼からの電話を拒否し続けて、やなっぺのところの身を寄せた。

もう、顔も見たくなければ、声も聞きたくないと思ったあの時がなまなましく蘇る。

もしかして。遙は今、あの時のわたしと同じ気持ちなのだろうか。あの時の遙は、今のわたしみたいに、ずっと連絡を待っていてくれたのだ。

だとしたら。

わたしがもう一度きちんと謝って、大河内とは今後一切接点を持たないと約束すれば……。

そうすれば、わたしに歩み寄ってくれるのかもしれない。

わたしだったら、もう大学生だというのに、ほんとうに何やってるんだろう。

同じ過ちの繰り返し。進歩のない日々。

小学校の低学年の頃、遙と顔を合わせるたび、ケンカばかりしていたのを思い出す。

泣かせたり、泣かされたり。叩いたり、叩かれたり。嫌い、大嫌いとこのしり合ったりもした。

これじゃあ、あの頃と少しも変わらない。小学生以下だ。

でも昔はそれでも良かった。次の日にはケロツとしてあつという間に仲直りしてたから。

なのに今は……。

こんなことばかり繰り返し返してたら、本当にお互いの気持ちが離れてしまう日が来るような気がする。

でもわたしと遙の場合、普通の恋人同士のように、スパッと別れることはできない。

実家が隣同士な上に、親戚なんだもの。

気まずい思いを抱えたまま、一生親戚付き合いを続けていかなければならない。

わたしは、離れて行った遙をずっと思い続けて、ひとり寂しく一生を終えるのだ。

遥には……。

そう、彼には新しい家族が出来て、幸せそうに暮らしているのを、常に身近に感じながら、わたしはずっと一人ぼっちで生きて行く。そんな生活。耐えられると思う？

遥がわたしじゃない女の人と仲良く暮らしているところなんて、想像すらしたくない。

他の女の人が産んだ子どもをあやす遥なんて、絶対に見たくない。

わたしは携帯を取り出し、また何度も電話をかけた。

女性のアナウンスが、遥の声に変わるのを願いながら。

遥、お願い。電話に出て。

メールでもいいから。連絡して。

携帯を握り締める手が震える。

ここでは絶対に泣かないと思っていたのに。零れ落ちた涙が頬を伝い、携帯を操作する親指を濡らす。

まるで朝顔の花から朝露が零れ落ちるように、それは何の前触れもなく静かに滴り、携帯にまでしみ込んでいく。

アイスティーのグラスを動かした時に残った水溜りと、わたしの涙で出来た小さな小さな水溜りが、くっつき合うようにしてひとつの水溜りになる。

次々と溢れる涙を手のひらで拭う。手の甲で、そして指先でも拭う。拭っても拭っても、それを止めることは出来なくて。

いつしかわたしは、両手で顔を覆って、声を上げて泣いていた。

オープンテラスのオーニングの向こうに見える七月の空の色は。

まだ気象予報士が梅雨明けの宣言もしていないのに。

抜けるようなブルーがどこまでも続いていた。

49・告白

夏の太陽の光が、オーニング越しにわたしのからだをすっぽりと包み込む。

七月のカフェテラスは風もなく蒸し暑い。

流れる涙をそのままに、そっと指の間から周囲を見渡してみた。わたしの様子が余程彼らの目に奇異に映っているのだろうか。あからさまに離れた席に座って、訝しげな視線をこちらに向けている。あの子いったいどうしたんだろうね……と、ひそひそ話をしながら。

さつきより、随分、太陽の位置が高くなってきた。もうすぐ一時間目の試験が終わる。

アイステイーをグラスに半分残したまま、返却口に運んだ。氷もすべて融けてしまったそれは、すっかりぬるくなってしまった。

これ以上遙を待っても無駄だと悟ったのだ。

わたしは今日、試験の予定はない。

気持を切り替えよう。今すぐアパートに戻って、バイトに行く準備をしようと思った。

遙のことは……。またあとで考えればいい。

アパートに戻り、シャワーを浴びて着替えて。

冷凍しておいたご飯を電子レンジで解凍して、あり合わせのおかずと一緒に食べた。

おばあちゃんと母さんが育てた野菜がいっぱい入っている味噌汁。遙にも食べさせてあげたかった。

ジャガイモもニンジンも。タマネギもインゲンも入っている、色とりどりの野菜の味噌汁。

かつおのだしが効いているはずなのに、何も感じない。
一人で食べる昼ごはんは、少しもおいしくなかなかった。
けれど、残さずに全部食べた。最後は無理やり、口に押し込んだ。
食器を片付けて、洗濯物を干して。鳴らない携帯を握り締めて、
わたしは家を出た。

「蔵城さん、どうしたの？ 顔色悪いね」

店長が心配そうに気遣ってくれる。睡眠不足くらいよくあることだし、八時までの五時間だけががんばれば、後は家に帰って寝るだけ。これくらい……平気。最後までがんばるつもりだ。

とは言っても、帰ってから、試験勉強はしなければいけないが……。

そんな時に限って、カウンター前に行列が出来る。

大通りで配ったクーポン券のせいだ。

それを提示すれば、どのセットメニューもいつもより五十円から二百近く安くなる。効果テキメン……というわけ。

注文を間違えないように受けて、出来上がったものをテーブルに運んだつもりだったが、ハンバーガーの数が足りない。

わたしの不始末に気付いた店長が、すぐに別のトレーに載せて、それを運んで来てくれた。

申し訳ありませんでしたと深く頭を下げる店長に、胸が痛い。

その後も小さなミスが重なり、日頃温厚な店長が眉を顰めて、わたしに耳打ちする。今夜の蔵城さんは、注意が足りないよと。

すみませんと謝った後、とうとう接客から厨房内の仕事に変えられてしまった。

ようやくバイトが終わり、帰り道、かすかな期待をこめて携帯をチェックしてみた。

メール受信が数件あったが、遥からの連絡は一切そこにはない。

登録している家庭教師のバイト先からの派遣依頼とレンタル店のメルマガが、やけに張り切った文章に見えて、わたしの気分を逆なでする。

家についてからも、ベッドに入ってからも。やっぱり遥は何も連絡してこなかった。

次の日も、わたしの気持とは正反対に、空は真っ青に晴れ渡っていた。

昨夜は眠くて、二時間くらいしか勉強できなかったけど、なんと国文学史と英米文学の試験を受けて、昼過ぎに学校の門を出た。

陽射しがきつい。校門前の花壇には、白と赤紫色のペチュニアが咲き乱れている。

奥にはミニヒマワリ。凜とした顔を一齐にこちらに向けている。

そういえば今朝のニュースで、気象予報士がようやく梅雨明けですと言っていたような気がする。

また巡ってきた夏に、大きいため息をつく。

折りたたみの日傘をバッグから出し、開きかけたところで、耳をつんざくような音に襲われた。

今、ここにいるのはわたしだけ。と言うことは、プップと短く二度聞こえたクラクションは、わたしに向けて送られたものだろう。対向車線に停車している軽自動車は、実家で母さんが乗っているのと同じ車種の車だ。

確かにその車からクラクションが鳴ったように聞こえたのだが…

やっぱりそうだ。運転席の窓から顔を出して、誰かがわたしを呼んでいる。

「柊。おい、ひーらぎー！」

わたしは、その人物に釘付けになった。

なんとその人は……。あろうことか、遥だったのだ。

今日の天気に合わせてかのような陽気な笑顔で、こっちこっちと手招きをする。

連絡しても何も返事をくれなかった遙が……。
どういうわけか、そこに、いた。

「遙……。な、なんで？ どうしてこんなところに？」

わたしはまるで幽霊でも見ているような気分で、恐る恐る目の前の遙に訊ねる。

「待ってたんだよ。おまえが出てくるのを」

遙は運転席から腕を伸ばして助手席のドアを開け、早く乗れと言
う。

「ずっと、電話してたのに。メールだって、何度も何度も送ったの
に……」

遙に促されるまま助手席に腰を下ろし、シートベルトを締める。
口をへの字に曲げて、溢れてくる涙を堪えながら。

「電源切ってたからな。俺もおまえも、頭を冷やしやすい機会だった
る？」

エンジンをかけ、遙が車を発進させる。母さんと一緒の。だけど
色違いのこの車を、いとも簡単に遙が操る。

「わたし、わたし。遙のことが、心配で、心配で……。昨日も大学
まで行って、ずっと遙のこと、待ってたのに。それなのに、遙っ
たら、来ないんだもん」

とうとうこぼれ落ちてしまった大粒の涙を拭いながら、遙に訴え
る。

「そうだったのか？ 昨日の試験、俺は行ってないよ。レポートで
合格もらってたから、受けなくてもオツケーだったんだ」

「ええ？ そうだったの？ でも、いっぱい来てたけど……」

「ああ。昨日は、不合格だった奴だけ来てたはずだ。まあ、半分以上が不合格だったらしいけど……。俺のこと、そんなに心配して

くれてたんだ。悪かったな」

「遥のバカ。心配するに決まってるじゃない！ 夜通し街をふらついでるんじゃないか、事故に遭ったんじゃないかって、どれだけ心配したと思ってるのよ！ 遥はこんな私の気持、ちっともわかってないんだから！」

わたしは、この二日間の感情を、おもいつきりぶちまける。

「わかった。俺が、悪かった。だからもう泣くな」

反省している様子など微塵も見せずに、ハンドルを握り続ける。おまけにその横顔は、憎たらしいことに、笑顔すら浮かべているではないか。

「柊、ごめん。もう機嫌直せよ。でも、最初に俺を不安にさせたのは、おまえなんだぞ。あいつのことはどうするんだ。まだ会う気なのか？」

遥が急に語気を強める。あいつとはもちろん大河内のことだ。

わざとそんなことを訊いて、わたしを困らせようとしているに違いない。

「そんなわけないでしょ！ わたしが大河内君と会うわけないじゃない！ わかつて、そんな風に、言うんだから……。ヒクツ。もう、遥なんて嫌いよ！ 大っ嫌いっ！」

「あははは！ 嫌いで結構だよ」

わたしがこんなにも傷ついているというのに、遥ときたら、どうしてここまで陽気でいられるのだろう。

大笑いした拳句、嫌いで結構だなんて。いくらなんでもひどすぎる。

なんでこんな憎たらしい奴を好きになってしまったのだろう。

一生の不覚。後悔先に立たず。後の祭り。自業自得……。

ありつたけの後悔を並べてみても、まだ足りない。

「でもな、柊……」

急に神妙な声になる遥を、そっと窺い見る。どうしたのだろう。

バカとか嫌いとか、ちよつと言いすぎたかな。

それでも、久しぶりに間近で見る遥の横顔は、やっぱりドキッと
するくらいきれいで、眩しくて……。

不覚にも遥に見とれていたら、突如彼がこっちを向いて、目が合
つて。

「俺は……」

とたん、遥の視線から、逃げられなくなる。

「な、何？」

次の瞬間、遥の口元がふつと緩んだ。そして、目に優しい光が宿
つて、わたしを包み込む。

「柊……」

「うん？」

「何があっても、俺はおまえのことが好きだから。誰よりも、おま
えを愛しているよ。……迷惑か？」

「あ……」

信号が赤から青に変わる。遥の視線が再び前を向き車が発進して
も、彼から目が離せない。

わたしはぼかんと口を開けたまま瞬きもせず、今聞いたばかり
の遥の言葉を何度も何度も思い返していた。

50・大きな賭け

いつも遥の告白は突然だ。

なんで今なの？ どうしてここで？ 数々の疑問が脳裏を駆け巡るけれど、答えは何ひとつ見つけられなくて。

信号待ちになったとたん遥がこっちを向き、まだ彼をじっと見たままのわたしと目が合う。

顔が熱い。車のエアコンが効いているはずなのに、身体中がカッカと燃えるようだ。

突然遥の手が伸びてきて、わたしの頬に触れる。

「俺も悪かったよ。おまえと大河内が、今更どうこうなる……なんてこと、あるわけないのにな。わかってるんだ。けど、あいつを見ると、どういうわけか平常心を保っていらなくなる」

遥の少し冷たい手が今のわたしに心地いい。

信号が青に変わって、また車が動き出す。

わたしの頬にあった彼の手が、無情にもそれに合わせてハンドルの定位置にもどっていく。

ああ。やっぱりわたしも遥が好き。

誰がなんと言おうと好き。死んでしまいたいそうなくらい好き。

このまま遥の体の一部分になってしまいたいくらい……大好きだと思った。

言ってしまうおうか……。わたしも遥が好きだよって。

いつもだとすぐに言えるのに、こういう肝心な時、決まって何も言えなくなってしまう。

どうしよう。言いたいのに言えない。

でもわたしもこんなに嬉しかったのだ。遥だって好きと言われて嫌なわけではない。

迷ってる場合じゃない。よし。ちゃんと気持を伝えなきゃ。

わたしは大きく息を吸い込んで、遥の横顔に向かって口を開いた。

「わたしも、す、す……」

「何？ どうした？ …… スって何だ？ 調味料の酢か？ そういえば、おまえんちの酢、ほとんど空だったよな？ あとで、スーパーに寄ってもいいけど」

わたしがはつきり最後まで言わなかったものだから、遥が勘違いをしてしまったのだ。

運転に集中しないといけない遥に、これ以上インパクトのある発言は慎むべきなのかもしれない。

「そうじゃなくて。その……。す、す、すごい車だね」

好きって言うべきところが、いつの間にか車の話にすり替わってしまった。

タイミングを逃した今となっては、これも仕方ない。

さっきからずっとこの車のことが気になっていたので、これでよかったのかもしれないと思うことにする。

それにしてもこの軽自動車。遥の長い足が^{つか}悶えて狭そうに見えるのは気のせい？

「はあ？ なんだ、この車のことか」

遥がようやく、わたしの言い損じた告白を車のことだと理解してくれた。そして、俄かに得意げな顔になる。

「おまえにまだ言っただけじゃなかったっけ？」

「うん」

わたしはこくこくと頷く。

「本田先輩の知り合いから、安く譲ってもらったんだ。ただ同然の価格で。おまえのお袋さんのと同じだろ？ これなら柘も運転できるだろうと思っただけに決めたんだ。前の持ち主が丁寧に乗ってるから、中古にしてはいい状態だと思うよ。エンジンの調子もいいし、タイヤも換えたばかりみたいだ。まだ数年は問題なく乗れるんじゃない」

ないかな」

「そ、そうだったんだ。遙ったら、突然車でやって来るんだもの。ホントにびっくりした。でも駐車場とかは、どうするの?」

都内で駐車場を月極めで借りると、とんでもなく高いと聞く。それに車の維持費だつてかかるよね。

「それなら心配いらぬ。今は本田邸のゴージャスな駐車場の片隅を使わせてもらってるから何も問題ない」

「そっか。それならよかった。これから便利になるね」

「ああ。これなら、もう道端で誰かに呼び止められることもないし、おまえとも移動しやすいだろ? 実家にもこれで帰れる。ばあちゃんを連れて来れることもできるしな。で、今日これから行く場所なんだけど……」

「どこかに連れて行ってくれるの?」

どつりで、さつきから知らない道を走っているはずだ。いったいどこに向かっているのだろう。

「今からマンションを見に行く。あと十分くらいで着くから」

マンション? わたしは遙の真意がわからず首をかしげる。

「なんだ、その顔は。そんなに驚いたか? 実は……。事務所がマンションを借りてくれることになったんだ。しいていえば社宅なんだけど、これから仕事も増えるし、いつまでも先輩の世話になるわけにもいかないだろ? 牧田さんが駐車場付きのいい物件を見つけてくれたんだ。ただし1LDKでちよつと狭いけど、最小限の荷物で住めば、なんとかなるんじゃないかと思う。給料も結構もらえるし、おまえを養えるメドもたった。また、一緒に暮らそう。な、柊」

そうだったんだ。自分の稼いだお金で生活していくメドが立ってわけだね。

でもわたしは、遙に養ってもらおうだなんてこれっぽっちも思っていない。

これからもバイトは続けるし、大学を卒業したらバリバリ働くつもりなんだもの。

「夏休み中に、もう一度おまえのおやじさんと直談判するよ。それで帰省したついでに籍も入れてしまえばいい。うちの親は俺が何とか説得する。おまえは何も心配しなくていいから」

「遥……」

遥の口調から、強い意志が感じられた。さっきの告白は、こつこつとことだったんだ。

「もう、こんな生活、本当にキツイんだよ。これ以上おまえと離れてたら、俺、頭がおかしくなっちゃう。……わかるだろ？」

もちろんずっと一緒にいたいのはわたしも同じ。

ただ、遥のキツイって気持ちは、別の意味もあるんだってことを、この数ヶ月でたっぷり学習させてもらった。

素直にうんと頷くのは、少々ためられる。

彼の笑顔に包まれて、そっと抱きしめられて……。

わたしなら、それだけで身も心も充分に幸せでいられるのに、遥ときたら、そんなもの何の足しにもならんなどと言ってすぐにふて腐れる。

女心をちつとも理解してくれない遥には、いつもうんざりさせられているのだ。

まさか彼がこんなに節操がないなどと想像だにしていなかったのだから、一緒に暮らし始めた頃は彼のあまりに大胆な行動の数々に、かなりショックを受けていたんだけどね。

やなっぺに言わせれば、男は皆同じだよと鼻で笑うのだが、わたしはまだあきらめていない。

いつの日か、遥が物語の中の王子様のように、優雅に優しくふるまってくれることを願ってやまないのだ。

「わ、わかっているって。遥の気持ちはよくわかってる。けど……」
わたしはあれこれ妄想を巡らせているうちに返事に詰まってしまうた。

「けど？ なーんか煮え切らねえな。まあいい。これからそのマン

ションで、牧田さんと落ち合う予定になっているんだ。俺は、そのまま契約するつもりだからな」

自信満々にそう語る遙。今度はきちんと親に知らせて、籍も入れて同居しようと言う。

「いよいよわたしたち、結婚する……みたいだ。」

ということは、この前父さんに言っただように養子縁組ってことだから、遙も蔵城姓になる。

それって、大丈夫なんだろうか？ それこそ仕事に差し支えなければいいけど。

でもきつと大丈夫。遙にまかせておけばすべてうまくいくような気がする。

「多分、心配ない。多分……。」

どうやら目的地に着いたようだ。マンション前のロボットゲートの駐車場で、牧田さんが待っているのが見えた。

牧田さんは、出版社からの出向と言う形で、遙のマネージャーも務めている。

これからもずっと二人三脚でやっていくのだと、この前聞いたばかりだ。

「まあ、久しぶり。柊さん……だったわね。今日は彼の住むところのチェックかしら？ それはそれは、オアツイことで」

遙はわたしのことをそれとなく事務所や牧田さんに伝えてあると言っていた。

「多少のことは多めに見てくれるらしく、恋愛にも寛容だ。」

わたしは車を降りて、笑顔までもがキリつとした印象の牧田さんに、こんにちはは、お久しぶりですと挨拶をした。

「じゃあ、早速部屋へ行きましょう。不動産屋さんも来てるので、異存がなければ契約してしましましょうね。こんないい物件は他にないわ」

颯爽と前を歩く牧田さんについてエレベーターに乗り、七階で降りる。

エレベーターから数えて三つ目の扉が、遙とわたしの新居だ。南向きの明るい部屋だった。八畳くらいの洋室と十畳くらいのリビングダイニング。

あとはユニットバスとウォークインクローゼットが付いている。「な、いいところだろ？ 日当たりもいいし、電車の駅にも近い。洋間が広いから、ダブルベッドが置けるぞ」

さも満足そうに遙が部屋を眺めている。その時、牧田さんの顔色が少し変わったような気がした。

牧田さんは腕を組み、遙に近付いた。

「堂野……君？ まさかとは思うけど。ここに柘さんも一緒に住む……って言うんじゃないでしょうね？」

遙は、はっとしたように牧田さんを見た。

「そのつもりですけど……。ダメですか？」

「ダメですかって、冗談はよしてよ。これからデビューしようって人が、いきなり同棲中ってのはいくらなんでも虫が良すぎる話だと思っただけ。違うかしら？」

「もちろん、そう思います。だから俺たち、同棲などしませんよ」

「そうなの？ ならよかった。あたしの取り越し苦労だったってわけね。それなら、ダブルでもクイーンでもキングでも。何でも置いてもらってかまわないわ」

また笑顔を取り戻した牧田さんに、遙が突如立ちはだかる。

「な、何？ まだ何かあるの？」

牧田さんが訝しげに遙を見上げた。

「ええ、牧田さん。俺たち、この夏に結婚するつもりなんです。だから。こいつと一緒にここに住もうと思っっています」

牧田さんの眉がピクツとつり上る。そして一瞬にして、彼女の顔面から血の気が引いていくのがわかった。

51・約束が叶う日

「堂野君？ 何言ってるの？」

牧田さんが色をなくした唇をぴくぴくと震わせ、遙ににじり寄る。「だから……。こいつと。蔵城柊と結婚するんです」

システムキッチンについて説明をしようとしていた不動産屋の社員も、上部の戸棚を半分開けたまま、ピタリと動きを止めた。

「ば、馬鹿なこと言わないで。冗談よね？ 将来結婚したらこんなところに住みたいって、夢の話でしょ？ 堂野君、そうでしょ？」

「牧田さん。真面目に聞いてくださいよ。俺、本気ですから」

遙はこれみよがしにわたしを片側に抱き寄せ、あくまでも結婚すると言い張るのだ。

「ちよつと待つて。あなたたち、まだ学生じゃない。それに、ご両親だって反対されるに決まってる。ええ、きつとそうよ」

牧田さんが落ち着きなく早口でまくし立てる。彼女の目は猜疑心で溢れていた。

「両親のことですけど……。実は、俺たちのことはもう報告済みなんで。こいつの親父さんにも、一応結婚の許可はもらってます。予定より時期が早まったので、近日中に改めて相談に行くつもりですが」

牧田さんの反応を伺うような遙の態度に、どこか違和感を感じる。いつもの遙じゃない、と思った。

「そんな……。それは困るわ。そもそもモデル契約も、あなたが独身であることが前提になってるはずよ。せめてあと一年。いや半年でもいいわ。その結婚、延ばせないかしら？ それにご両親の許可があるって、それ、本当なの？ とても信じられないんだけど」

牧田さんの声が上がってかなり動揺しているのがわかる。

その隣で不動産屋の社員が、ずり落ちたメガネを元に戻し、牧田さんに同意するようにこくこくと頷いた。

そんな二人に比べて、遙はこの上なく落ち着いているように見える。

結婚の許可は確かにもらっているけど、それは社会人になってからの約束だったはずだ。

今すぐ結婚するとなると、またひとめするだろうことは容易に想像できる。

わたしは、今ここでこの話を持ち出した遙の真意を測りかねていた。

「牧田さん……」

遙が話し始める。牧田さんの目を見て。言葉を噛み砕くようにゆっくりと。

「俺と柊は親戚同士で、おまけに俺は、こいつの両親に育てられたようなものなんです。だから何も不都合はありません。先月、両家を交えて家族会議をして、結婚の許諾を取り付けました。それでもだめですか？」

「親戚？ そうだったの？ それじゃあ、あなたたちのご両親は全て納得されているのね。でも、何も急いで今すぐ結婚する必要はないでしょ？ まさか、子どもが出来たとか……」

牧田さんのストレートな言葉がわたしの胸に突き刺さった。

「それは……ないです」

遙が否定したあと、ややためらいがちにわたしと目を合わせる。

そ、それって。わたしに再確認ってことだろうか。もちろんそんなことはありえない。大丈夫なはずだ。

先週二日間ほどお世話になった鎮痛剤を思い出しながら、確信する。

「あつ、ないです。絶対にそれはないです！」

とにかく潔白を証明しなくてはいけない。わたしは牧田さんに信じてもらうために、必要以上に大きな声で返事をした。

「ふふふ。柊さん、わかったわ。ごめんなさいね、あなたたちを疑うようなこと言っちゃって。ならば。やっぱり結婚は認められない。

もちろん同棲も」

「牧田さん……」

抑揚のない声で遙がつぶやく。

「デビューするなりスキャンダルまみれは勘弁して欲しいわ。でもね、柊さんのことはまだ誰にも知られてなし、ここに通うのは大目に見ようと思ってる。堂野君、それじゃあ、だめかしら？」

遙はそのまま黙り込んでしまった。わたしもなんて返事をすればいいのかわからない。

遙に寄り添い、じつと俯いていることしか出来なかった。

でもよく考えてみればわかること。

これからモデルデビューしようとしている人物が、事務所の斡旋したマンションで新婚生活を送るなんて、どう考えてもありえない話だ。

いくら世間知らずなわたしでも、それくらい理解できる。

多分遙だって、そこに気付かないはずがない。

ということは……。もしかして、遙は、確信犯なの？

「あ……。そんなもんですか。やっぱり無理ですよな？」

「そうね」

牧田さんが遙の問いに深く頷いた。

「わかりました。俺もこんなことくらいでこねたりしませんよ。おっしゃるとおり、ここは俺一人で住みます。事務所に迷惑はかけません。ただし、前にも言ってますが、この先どんなことがあっても、決してこいつとの関係は切れませんから。その条件あつての仕事の契約だと認識してていいですよな？」

どういうわけか牧田さんの意見をすんなり受け入れた遙が、今度は逆に条件を提示している。

「えっ？ ああ、そうね。そうだったわね。もちろん、かまわないわ。あなたは男性だし、柊さんは一般人。駆け出しのあなたに、そこまでマスコミも突っ込んでこないでしょう。女性モデルのデビューだと、いろいろと難しいんだけど。男性の場合、彼女がいる方が

人気が上がったたりすることたまにあるから、その辺は臨機応変に対処するつもりよ」

「ありがとうございます」

牧田さんに頭を下げる遙の横顔は、思いのほか柔らかい。

そして、まるで計算しつくしたかのような特上の笑顔を貼り付けて牧田さんに微笑んでみせる遙は、すでにプロのモデルとしての風格すら感じられるほど、見事な振る舞いだった。

「そうそう、言うておくけど。あたしは基本、あなたたちの味方だから。ね？」

遙のスマイルに気をよくしたのだろうか。牧田さんがウィンクまでして、おどけてみせる。

事務所にも近くて交通の便もいいこのマンションが。とうとう遙の新しい住まいになることに決定した。

あの忘れもしないパーティーの夜から三日目。

お互いを許し合ったわたしたちは、久しぶりにアパートで一緒に過ごすことになった。

ベッドの中で腕枕をしてもらいながら、始終機嫌のいい遙に疑問をぶつけてみる。

「ねえ、遙。結婚の話はどうなったの？ あのマンションに住むってことは、その……。結婚はまだしないってことだよね？」

事務所の方針で立ち消えになったとはいえ、あの結婚宣言の行方が気になって仕方ないのだ。

「俺は今すぐにも結婚したいけどな。でもまあ、結果は予想どおりだったというわけだ。あれは賭けだった。却下されるのは百も承知で、結婚のことを牧田さんにぶつけてみたんだ」

「ええ？ そうなの？ だめだとわかってるなら、結婚するなんて言わなきゃよかったのに。わたし、恥ずかしかった。だって、あんなことまで訊かれたんだよ？」

わたしは遙に背中を向けて、頬を膨らませる。

「あははは。悪かったな、柊。まあ、俺たちみたいな学生が結婚を急ぐ理由は、牧田さんの指摘どおりのことが多いだろうしな。でもこれで、少なくともおまえとの関係は維持できる確約を得られたってわけだ。これはすごい収穫だと思わないか？」

腕枕をしていない方の手が伸びて、わたしをくるりと反転させた。「牧田さん、言ったよな？　せめて半年後にしてくれって」

確かに牧田さんはそう言った。結婚は一年後か、せめて半年後にして欲しいと。

横になつたまま遙と向かい合わせになつたわたしは、遙の目を見てこくと頷いた。

「じゃあ、結婚は半年後だ。春になったら籍を入れよう。おまえとの結婚は、誰にも文句を言わせない」

薄明かりの下で、遙がニヤリと笑う。なんとという策士家なのだろう。

わたしが遙に会えないというだけで涙に暮れている間に、このデビュー目前の新人モデルは、今後の身のフリ方をあれこれシュミレーションしていたというわけだ。

人生経験豊かな、あの牧田さんですら翻弄させるほどのこの男。やはりただ者ではない。

「遙。遙ってやっぱりすごいよ」
わたしは遙の背中に手を回し、ぎゅっと抱きついた。

「いいか、柊。よく聞いておけよ。俺をそうさせるのは、おまえなんだからな。おまえをこうやって抱きとめておくためなら、なんだってする。俺の能力以上の力も発揮してみせる。ああ、おまえといると、マジで命がいくつあっても足りねえな」

首の下にある遙の右腕が、わたしの頭を抱き寄せる。

その瞬間、車の中で言いそびれたあの言葉が脳裏をよぎった。今なら言える。言えそうな気がする。

わたしは、遙の胸に顔をくっつけたまま彼に訊ねた。

「遙、ちょっと聞いて欲しいことがあるんだけど」
そうだ。たつぷりと極上の甘さを添えて、遙が好きだと言ってやろう。

それはもう、聞いてる方が恥ずかしくなるくらいに、思いのたけを込めて……。

「なんだ？」

遙の声が胸から伝わる。

「あのね、車の中で言いかけたこと、あつたでしょ？ もう一度、ちゃんと言いたい。お願い、言わせて」

「はあ？ そんなもの、あつたか？ 俺は別にどうでもいいよ。それより、なあ……」

遙の熱い吐息が額にかかった。

「は、遙……。ま、待ってよ。あのね、わたしね、遙が……。あ……」

俺は別にどうでもいいって、いくらなんでもそれはないよ。
どうして、コイツはいつもこうなのか……。

やなっぺ、教えてよ。本当に世の中の男ってみんな同じなの？
やっぱ、遙だけが特別に変な人なんじゃないの？

人の話を聞かない悪いやつ顔を見てやろうと顔を上げた瞬間。
わたしの唇は瞬く間に彼に覆い尽くされ、甘い吐息と共に二人だけの世界に導かれていった。

5 1・約束が叶う日（後書き）

1 2 / 2 3 1 6 : 5 0 にコメントを下さった方。

どうも、ありがとうございます。

こんぺいとうを気に入っていただけ、とても嬉しいです。

こうやってコメントをいただけると、とても励みになりますよ。

これからも更新がんばりますね

52・衝撃

前期試験も無事終わり、わたしたちは長い夏休みを迎えていた。わたしは名誉挽回のために、たつぷりとこの夏の二ヶ月間を実家で過ごすことに決めたのだ。

遙は、といえば。夏休みの前半は演劇サークルの夏公演にかかりつきりで、後半は雑誌の撮影の仕事が入る予定だ。

結局遙と一緒に過ごせたのは、試験中だけだったけれど、学生なんだもの、それも仕方ない。

実家でアルバイト三昧の日々を送っている。

ひとつは塾講師の短期バイトだ。中学生の夏期講習を担当している。

もうひとつは図書館の手伝い。司書の勉強にもなるので、願ったり叶ったりの貴重なバイトだ。

というわけで、今のわたしは、遙のことも忘れてしまっくらい多忙な毎日を過ごしている。

猛暑の中、エアコンの効いた図書館のバイトは、文句のつけようのないほどありがたい職場環境だと思う。

返却された本を書棚にもどし、蔵書のチェックと入荷した新刊の詳細をパソコンへ入力するのがおもな仕事だ。

もちろん本のメンテナンスも業務の合間に組み込まれている。

表紙の補修や落書きのチェックも見逃せない。

推理小説の犯人にご丁寧に丸がつけられていたり、展開部分が切り取られていたり……。

信じられないようないたずらの数々も、見つけ次第担当上司に報告して、補修しなければならない。

気の遠くなるような作業が続く。

書棚への返却は、台車のようなワゴンに載せて運ぶのでそんなに重くはない。

パソコンへの入力もマニュアルどおりにすればいいのですぐに覚えられた。

名作といわれる昔の本から最近のベストセラーまで、いろいろ出会えるおかげで、今後読んでみたい本のタイトルで携帯のメモ欄がどんどん埋まっていく。

図書館でバイトをするようになってから、突然、英米文学の翻訳本にはまってしまい、同じタイトルの違った訳を読み比べるおもしろさに目覚めてしまった。

大学で翻訳を専門にしている教授の講義を受けていたせいもあるけど、毎日膨大な本に囲まれているせいで、ますます興味を抱くようになってしまったのかも知れない。

お気に入りの作品を原語で読んで、自分なりの翻訳を試してみたいとも思うようになった。

英語はとても好きな科目だ。中学高校と、英語だけはいつもいい成績をもらっていた。

地元の難関私大の英文科も受かっていたのだけど、卒業したあと何をしたのかと考えた時、自分の将来像が何も浮かばなかったのだ、遥と同じ大学の国文科を選択した……という経緯がある。

国語の教員免許をとって、地元の中学が高校で教師をしながら、遥のお嫁さんになる、なんて夢を、漠然と描いていたのだが、今ごろになって、英文科に行かなかったことを少し後悔している自分がいるのだ。

やっと今、ほんとうに将来やりたいことが見えてきたような気がする。

国文学だけが文学じゃない。たとえ英米文学であってもそれは同

じだと思っ。

作者の意図をどれだけ正確に、言葉も国も違う読者に伝えるのか。それには、英語をより正しく理解した上で、作者のねらいから逸れることなく、センスのある翻訳文を作り上げていく力を必要とされる。

考えれば考えるほど奥が深い分野だ。だからこそ、生涯の仕事として、翻訳に携わってみたいと本気で思うのかもしれない。

それには今のわたしの英語力ではまだまだ太刀打ちできないとわかってる。

でもやってみたい。やりたいのだ。

そんなわたしの将来の夢を、いつも仕事を丁寧に教えてくれる司書の江島さんに話してみたところ、とてもいいアドバイスをもらった。

まずは絵本を研究してみればいいのでは……と教えてくれたのだ。それからというもの、休憩時間に絵本コーナーに行っては海外秀作絵本なるものを片っ端から見、原語本を照らし合わせるという作業を続けている。

絵本なんて、小学校の低学年以来、全く読む機会がなかったというのに、いつの間にかぐいぐいと内容に惹きこまれ、絵の美しさもさることながら、躍動感のある翻訳文に、心を驚つかみにされているのだ。

子どもの頃に読んだ絵本の多くが、翻訳本だったというのも驚きだった。

まだ日本の子どもたちに知られていない作品を自分で発掘して翻訳できたら、どれだけ楽しいだろう。

このわくわくする気持を早く遙に知らせたくてたまらなくなる。

司書の江島さんは、今年でもう三十歳になるんだそうだ。

図書館という職場の性格上、職員にも年長者が多く、ときめくよ

うな出会いなど皆無に等しいと言う。

残念ながら、まだまだ当分独身生活が続きそうだと、声を潜めて自虐的に言う割には、普段は明るく気さくな人だ。

本という恋人がどっさりいるから退屈してる暇がないらしい。

決して負け惜しみでなく、本気でそんな風に言っているところが頼もしくもあり、好感が持てる。

確かに江島さんの言うとおりがかもしれない。

もうかれこれ二週間ほど遙に会ってないけれど、本に囲まれていると昼間は寂しさなんてすっかり忘れて、この環境にすっかり馴染んでいる自分がいるのにふと気付くのだ。

昨日の晩、遙がまるでホームシックにかかったみたいな内容のメールを送ってきた。

八月の末にはなんとか都合をつけて、こっちに帰って来ると言うてくれたのだ。

やっと会えるんだと思うと、わたしまで遙のホームシックがうつってしまったのか、いつになく甘い文面のメールを返してしまった。すると、とんでもない返事が間をおかずに返ってくる。

早くおまえに会いたい、キスしたい……などと、とても人に見せられるようなものではない、恥ずかしいことこの上ない文が、携帯の画面いっぱいに乱れ舞う。

でもこっちに帰って来たとしても、ベタベタできる場所が用意されているわけではないのに。

婚約はしていても、父さんの目があるかぎり、ずっと一緒にいるわけにはいかないのだから。

いったいどうするつもりだろう。なんだか遙が気の毒だ。

今朝、食卓を囲んでいる時に、遙が早くこっちに帰りがつていと両親に言ったら、父さんにおもいつきりギロつと睨まれた。

それでも母さんは、はる君がいつ帰ってきてもいいように、客用布団を干しておかないと……なんて言うものだから。ますます父さんが不機嫌になったのは、言うまでもない。

単身赴任の夫を持つと、きつとこんな感じよ、だとか、こっちに帰って来たら、柵の部屋に泊まってもらったらいいからね、だとか……。

拳句、いつまでもそんな態度じゃ、はる君に嫌われるわよと、母さんの父さんに向けた攻撃は日増しに激しくなる。

わたしはただひたすら、父さんにごめんねと心の中で謝ることしかできない。

最近の図書館の充実ぶりには、目を見張る物がある。

本の数も増えているが、設備も年々すごいことになってきている。音楽や映像も鑑賞できるし、漫画や雑誌までもがすべて網羅され、誰でも手にとって読めるようになっていたのだ。

本屋では袋がかぶせてあったり、ひもが掛けられていたりで、立ち読みもままならない。

ただで、おまけに座って読むことが出来るものだから、それを知った人たちは、新たなレクリエーションの場を見つけたかのように、足しげく図書館に通い始めることになる。

ハードカバーの本はもちろんのこと、雑誌類は紙質が弱いものが多いので、透明フィルムを貼り付けたり専用のビニールカバーをつけたりする。

これがまた、大変な労力が必要だったりする。いろいろある仕事の中でもこの作業が一番手間がかかるかもしれない。

空気が入らないように、しわにならないように。丁寧にフィルムを密着させる作業は、何度やっても難しい。

江島さんの素早く丁寧な仕事ぶりに、いつも見とれてしまう。

でもそんなのん気にしている暇はない。

次から次へと送り込まれてくる新刊に、常に追い立てられているのだから。

今、その作業の真っ最中だ。

大衆向けの週刊誌に専用のビニールカバーを取り付けていた江島さんが話しかけてきた。

「ねえねえ蔵城さん。この人知ってる？」

わたしはどれどれと覗き込むようにして、江島さんに体を傾けた。知的な笑みを浮かべるその人は。雪見しぐれだった。

江島さんが指差す先にはしぐれさんの小さな写真があったのだ。

「あつ、知ってます」

わたしはさらっとそれだけ言つて、すぐに自分の作業に戻つた。

あまりいろいろ話すと、余計なことまで言つてしまいそうだからしぐれさんがこういった類たくいの雑誌に載るのは、何も今回が初めてではない。

新作映画が封切りになつた時など、アップで表紙を飾ることさえある。

「へえ……。新しい恋、ロマンス発覚、だつて。お相手はデビュー間近のモデル……。ふん。えつと、なんだつて……」

ロマンスつて……。しぐれさんが誰かとデートをして、スクープされたのだろうか。

江島さんは見出しの文を興味深げに読み上げる。

「あつ、このお相手知ってるわ。ほら、いつとき有名になつたでしょ？ この町出身の、堂野遥だつて。彼女は年下好みだったのね。うふふ。蔵城さんは、この堂野遥つて人と同い年くらいよね？ 彼のこと知ってる？」

「えっ？」

わたしは作業の手を止めて、江島さんを見た。

どうして江島さんの口から遙の名前が出てくるのだろう。心臓がどくどくと、急に早鐘を打ち始める。

「蔵城さん、大丈夫？ どうしたの？」

「あ、ああ……。なんでもないです。それより、その週刊誌。ちょっと見せてもらってもいいですか？」

わたしは江島さんから週刊誌を受け取り、しぐれさんと遙の名前が印刷された活字を、穴が開くほど見続けた。

遙としぐれさんに、いったい何があったというの？

わたしはしばらくの間、作業台の上に置いた週刊誌から目を離すことが出来なかった。

53・虚構の世界

その日わたしは、図書館の業務を六時に終え、すぐに駅近くの本屋に駆け込んだ。

それは店に入ってすぐの棚に並んでいた。立ち読みをしている人と人の間にすつと手を伸ばし、忘れもしないあの週刊誌を掴む。

素早く棚から引き抜いて、急いでカウンターに向い、五百円硬貨と共にそれを差し出した。

左手にはトートバッグと重ねて持った週刊誌の入ったビニール袋。そして右手にはレシートと一緒に握り締めた釣銭。

わたしは脇目も振らず流れ落ちる汗もそのままに、ただひたすら家に向かって歩き続けた。

「ただいま……」

玄関の戸を開けて声をかけたけれど、母さんからの返事はなかった。

どこに行つたのだろう。鍵が開いているところを見れば、そう遠くには行っていないようだ。

きつと、畑かおばあちゃんの家にいるのだろう。それとも、遙の家だろうか。

母さんがいないとわかれば、さっき買った週刊誌を読むのにはちよつと都合がいい。

いろいろ詮索されるのは辛い。それに、母さんの顔を見れば、今まで保ち続けていた心のバランスが一気に崩れてしまふかもしれないから……。

わたしは自分の部屋に入ると、夏だというのに襦をきつちりと閉めて窓も開けずに、畳の上に週刊誌を広げた。

正座をして前かがみになりながら、あの記事を読む。

たった三ページの中に、信じられないような内容がいかにも真実のように語られているのが、否応なしにわたしの目に焼きついていく。

雪見しぐれが仕事の悩みを打ち明けたのが堂野遙との交際の始まり……。

わたしは目を疑った。遙がいつそんな悩みをしぐれさんから受けたと言っのdarou。

絶対にありえないことなのに。

先月の映画完成披露パーティーで仲睦まじい様子が目撃され、堂野遙のモデルデビューを雪見しぐれが献身的に支えている……。

それって、あの夜のパーティーのことだろうか。

あの中に、この記事を書いた人が潜入していたとでも？

それならば、ずっと遙のそばにいたわたしが噂の対象になってもいいはずなのに。

ほんの少しだけ会話をしたしぐれさんが、遙の相手としてこんなにも真実味を帯びた内容で書かれてしまうのだ。

あの場にいた人なら、ここに書いてあることがすべて嘘っぱちであることは、理解してもらえるに違いない。

けれど、あそこにいた人たちはみんな知らない人たちばかりだ。

いったい誰が遙の潔白を証明してくれると言っのdarou。

堂野遙は日本国内でも有名な和菓子のお舗、朝日万葉堂の跡取りで、いずれ雪見しぐれは女優を引退し、女将として彼を支え、店を盛り立てていく……。

ここまで来ると、もう笑っしかない。

遥の親族も全く知らないことが、あたかも本当のことのように書かれている。

もちろん遥は、そこに書いてあるとおり、和菓子屋の跡取り息子であることは事実だ。

でもどうして、しぐれさんが女優を辞めて店の女将さんになるなんてことにまで話が進展するのか。

というか、憶測でここまで書いてしまうこの記事の編集者に、是非とも会ってみたいと思うわたしは、間違っているのだろうか。

夏休みに入ってすぐの日付で、スタジオ近くのカフェで二人が会っているところをスクープされている。

確かにその画像はわたしの知っている二人に違いない。

遥は斜め後ろからのアングルだが、服とシルエツトで彼だとわかる。

そして向かいに座りにこやかに微笑む女性は、はっきりとしぐれさんだとわかるように撮られている。

しぐれさんの柔らかい笑顔がその場のなごやかさを物語る。

恋人同士の語らいの場に、見えなくも……ない。

二人が会っていたのはわたしも知っている。

しぐれさんはあの日以来、大河内のことが忘れられなくて、遥に彼のことを訊いていたのだ。

そう、それは決して仕事の悩み相談ではなく、彼女自身の恋の相談だったはず。

なんとかして大河内にもう一度会いたいと、わたしにメールをよこしてきたしぐれさんの頼みに、遥がようやく重い腰を上げた結果がこれだ。

あまり気乗りしないまま、しぐれさんと大河内が会えるための段取りを付けるため、遥が仲介役を買って出たのが裏目に出てしまったのだらう。

それにしても……。

パーティーのあとも、あれほど頻繁に遙と一緒にいたわたしの存在なんて、どこにも見当たらない。

おそらくこの写真を撮った記者は、しぐれさんをマークしていたのだろう。

そうしたら飛び込んできた、願ってもない遙とのツーショット。

わたしは遙に詳細を訊ねるため、バッグから携帯を取り出した。きっと大笑いして、こんな嘘っぱちの記事なんて気にするなと言うに決まってる。

遙ときたら、夕べ誰にも見せられないようなどびきり甘いメールを送ってきたばかりなのだ。

この週刊誌の記事が捏造であることは、誰の目にも明らかであるはずだ。

なのに。

おかしい……。

メールがそのまま返ってきた。そんなはずはない。昨日はちゃんとやり取りができたのだから、アドレスに間違いがあるとは思えないのだけだ。

それに、遙がわたしに何の連絡もなく勝手にアドレスを変えることも、絶対にありえない。

携帯電話会社のトラブルかもしれない。きっとそうだ。少し時間を置いてもう一度送信してみればいい。

五分ほど経ったのち、また送信ボタンを押してみるが。やはり、届かなかった。

わたしはドキドキと鳴る胸を押さえながら、遙の電話番号を表示させる。こうなったら直接声を聞くのが手っ取り早い。

ところがそれすらも繋がらなくて。

何度も何度も電話をかけてみたが、それでもだめだった。

しぐれさんにも連絡を取ってみたけれど、電源を切っているか電波が届かないところに……というアナウンスが流れるばかりで、何も情報を得ることができなかった。

ただ遥とは違って、しぐれさんの携帯は登録しているアドレスで繋がるようだ。連絡を待っていますというメールを送り、返事を待つことにした。

それでもなくても忙しい彼女のことだ。本当に返事が返ってくるのだろうか、不安がよぎる。

それならば、と……。奥の手がひとつあることを思い出したのだ。遥の事務所に直接連絡する方法だ。

所属タレントやモデルがダイレクトに事務所と連絡しあえるためのホットラインを教えてもらっている。

でもこれは最終手段。家族に不幸があつた場合など、緊急連絡が必要な時にしか使わない回線なので、これくらいのことでは電話をかけるのは、やっぱり尻込みしてしまうのだけだ。

ぎりぎりまで待つてみて、それでも遥と連絡が取れない場合にはもうこの道しか残されていない。

わたしは携帯を握り締め、祈るような気持で、遥とそしてしぐれさんからの連絡を待つことにした。

玄関の引き戸が、ガラガラと開く音が聞こえた。母さんが帰ってきたのだ。

わたしは慌てて週刊誌を閉じ、いかにもたつた今バイトから帰ったばかりであるかのように装って、母さんのいる台所へ向かった。

「あ、あら。終ったら、もう帰ってたのね。そろそろ晩御飯にしましょうね」

母さんの様子がいつもと違う。わたしと目を合わすことなく体を屈め、コンロに火をつけた。

そして冷蔵庫を開け、中を眺めただけでパタンと閉める。

何かを考えているように立ち止まったかと思うと、また冷蔵庫を開けておひたしの入った鉢を取り出し、つけたばかりのコンロの火を消してしまった。

「母さん、どうしたの？ このお鍋、温めるんじゃないの？」
わたしは母さんの不可解な行動に首をかしげ、もう一度コンロに火をつけた。

「えっ？ あ、そ、そうね。温めるんだったわね。私、どうしちゃったんだろう。いやだわ。歳のせいかしら……」

「そんなことないって。母さんはまだまだ若いんだし。この頃暑いし、疲れてるんじゃない？ 今も畑にいたのでしょ？」

食器を並べながら、母さんに訊ねた。

「畑？ そうじゃないんだけど……」

「じゃあ、おばあちゃんち？」

「う、うん。まあね……」

鍋の中を覗きながら、母さんが曖昧に頷く。

「ねえ、母さん。やっぱりおかしいよ。身体の調子が悪いのなら言っつてね。台所のことばわたしがするから、食べたあとはすぐに休んでくれたらいいよ」

「柊、ありがとう。私のことなら心配いらないわ。どこも悪くはないし。それより、柊。あなたの方が……」

「わたし？ わたしがどうかした？ バイトも順調だし、何もなければ……」

「そ、そう。ならいいんだけど。ただ……」

「ただ？」

「あ……。夕食が終わってから言おうと思ったんだけど。それが、その……」

「母さん……」

母さんの目が何か言いたげにわたしをじっと見つめた。わたしをいたわるような、それでいて、とても哀しそうな目だった。

「柊、今から私が言うことをしっかりと聞いて欲しいの。でもね、

柀は何も心配しなくていいの。これはまだ確かな話しじゃないから……」

「母さん。もしかして……。遙のこと？ ね、そうでしょ？」

そのとたん、母さんは持っていた菜ばしをぽんと床に落とした。

「あなた、知ってたの？ はる君のこと」

母さんが落とした菜ばしを拾おうともしないで、目を丸くしたまま驚いたように立ちすくむ。

「うん。だってわたしのバイト先、図書館なんだよ。週刊誌も最新号がすぐに配布されるの。今日見てびっくりしちゃった。えへへへ。遙も大物に、なった……もの……だ……ね」

普通に話しているつもりだったのに。

あんなの、全部でたらめだよって笑い飛ばそうと思ったのに。

母さんの顔を見たら、涙が勝手にあふれてきて、とまらなくて……。

わたしはそのまま母さんの胸にすがって、泣き崩れてしまった。

54・待ちわびて

母さんは泣きじゃくるわたしの背中を、小さな子どもをあやすように優しくさすってくれた。

ありのままのわたしを受け入れてくれる母さんの胸は、いつだって広くて温かい。

「週刊誌って、買った人が楽しめるように、大抵は大げさに脚色して書いているんじゃないかと思うんだけど」

わたしは母さんのひとり言とも取れる会話を聞きながら、うんと頷いた。

「だから何も心配する必要はないわ。しぐれさんって、人の恋人をとるような、そんなことをする人じゃないんでしょ？ 柊のような普通の一般人にも、優しく気配りのできる人だって言っただけでなかつた？」

「うん……」

母さんは、わたしがしぐれさんと友だちになったことも、時々メール交換をしていることも知っている。

もちろんわたしも、そんなしぐれさんを疑う気持はこれっぽっちもない。母さんの言う通りだと思う。

でも、だけど。そうとわかっていても、不安で仕方ない。

遙と連絡が取れない今、わたしが知り得ることは、この週刊誌の内容だけでしかないのだから。

しぐれさんを。そして遙を。この二人を信じるためには、信憑性のある情報量があまりにも少なすぎるのだ。

「だったら君だって、今頃あの週刊誌を見て大笑いしてるわよ。あの子に連絡してみたの？」

「うん。何度も。でもね、携帯、繋がらないの。遙ったら、番号、変えちゃったみたいなんだ」

わたしは母さんにすがりついたまま、ぼつぼつと答えた。

「そう……。そうだったの。なら仕方ないわね。実は……。さつきまで綾子さんとはる君のこと話していたんだけど。綾子さんはこれははる君にとっていい薬だと言ってて、あの子をこのまま放っておくそうよ」

「ええ？ このまま放っておくの？ そんなあ……」

このままにしておくなんて、到底信じられない。

今すぐにも、綾子おばさんやおじさんの力で、遥の潔白を証明して欲しいというのに。

「親に相談もせず、自分で勝手にモデルの仕事なんかを引き受けるからこんなことになるんだって。彼女は反対なのよね。モデルの仕事。ちゃんと地に足をつけて生きていつて欲しいといつも言ってるわ。はる君から何か言ってきたら助け舟を出してもいいけど、こっちからは何も言いつて。いざと言つ時には、おじいさんの顧問弁護士さんに頼ることも出来るんだけどね。でもこつちが行動を起せば朝日万葉堂に迷惑がかかるのは目に見えてるし……」

そうだった。週刊誌には遥のおじいさんのお店の名前も実名で挙がっていたのだ。

有名な老舗だから、遥サイドが騒ぎ立てると、遥自身よりもそつちの方に注目が集まる可能性は高い。

「隣にも、うちにも、夕方に記者やリポーターを名乗る人がカメラマン付きでやって来たの。この調子だと、明日の朝、テレビでも騒がれるかもしれないわ。でもね、今のところ柘は巻き込まれてないから安心しなさい。それでね、綾子さんと口裏合わせをしておいたんだけど、もちろん記事の内容は当然すべて否定するって方向で。それと、あなたとはる君との関係も、何もないことにしておくからいいわね。とにかく今は余計なことは言わないで、ほとぼりが冷めるのを待つしかないわ」

母さんがわたしの肩に手を添え、ゆっくり体から引き離す。

そしてわたしの目を見て、わかったわねと念を押した。

遥がどんどん遠くに行ってしまう。

もしかしたら、週刊誌に出てくる彼は、本当の遥じゃないのかも
しれない。

堂野遥という名を語る作られた人物が、わたしの知らないところ
で世の中を騒がせているのだとしたら……。

それなら、何も気に病むことはない。きっとそうだ。そうに決ま
ってる。

虚構の世界に足を踏み入れた彼の魂は、このまま行く当てもなく
永遠にさまよい続けるのだろうか。

本当の自分を見せることも、知られることも許されずに……。

わたしは先の見えない不安と焦燥感で今にも押しつぶされそうに
なっていた。

シャワーを済ませ、布団の上に寝そべりながら、図書館で借りて
きた絵本を広げる。

右手には日本語訳のもの。左手には英語の原書。

まずは原書から読んでみよう。パラパラとページをめくり、英文
を追ってみる。

繰り返し同じ文章を読んでみるけれど、少しも頭に入らない。

韻を踏んだ簡潔な文章は、きつと心地よいリズムを刻みだしてい
るに違いないはずなのに。

わたしの心の中で、ついにそのリズムが軽やかなステップに変わ
ることはなかった。

せめて絵本を見ている間だけでも、遥のことを忘れることができ
たらと思っただけ……。……。

週刊誌に載っていた写真ばかりがくつきりと脳裏に浮かび上がり、

消えてくれないのだ。

わたしはとうとうあきらめて、両方の絵本をパタンと閉じた。

灯りを落として仰向けになり、タオルケットを胸の辺りまで引っぱり上げる。

このまま目を閉じて眠ってしまおう。そうすれば朝が来る。

朝になれば仕事に行つて、夜になって眠つて、また次の朝が来て夏が終わる頃には、遥とすぐれさんの噂も人々の記憶から遠のき、何事もなかったかのようにいつもの日常が訪れるかもしれない。

そんなことを考えながら無理やりまぶたを閉じている時だった。

頭上に時計と一緒に並べて置いていた携帯が、ひっそりとした暗闇の中で着信ライトを光らせ、メロディーを奏でる。

遥だ。

わたしは素早く腹ばいになり、携帯を開いた。

あろうことが、それは本田先輩からの電話のようだ。

何で本田先輩？ という疑問を胸に抱きながらも、これは遥に関する連絡に違いないと確信したわたしは、ためらうことなく通話ボタンを押した。

「柊？ 柊か？」

「もしもし、遥？ 遥なの？ 遥なのね！」

わたしは布団の上に飛び起きて、てっきり本田先輩だと思っていた相手に向かつて、声を張り上げた。

「ああ、俺。やっと繋がった。ごめんな、柊。もうあのことが知ってるんだろ？ 週刊誌の……」

「知ってるも何も。大変だったんだから。あんなの読まされて、わたし、わたし……」

泣くつもりはなかったのに、遥の声を聞いたとたん勝手に涙が溢れてくる。

「おまえに連絡する間もないまま、携帯番号を変えることになってしまつて。新しい番号は、このあと先輩の携帯から送っておくから」

「うつ、うつ……。わかった……」

わたしは鼻をすすりながら、やっとのことそれだけ言った。

登録している番号以外は着信拒否に設定しているので、遥の新番号はわたしの携帯では受け付けなかったのだ。

本田先輩の番号は、以前遥が先輩の実家に世話になっていた時、もしもの事があつた場合の連絡手段ということで、無理やり登録させられていたものだ。

先輩に遥のことを訊ねてみようと思わなかったわけではない。

明日も連絡が取れなかった時の奥の手の手段として、そのことも想定していた……。というのは単なる言い訳で。

だってやっぱり、本田先輩は苦手なんだもの。

絶対に必要ないと思っていた先輩の番号が、こんな形で役に立つなんて思ってもみなかった。

削除しなくて良かったとホッと胸を撫で下ろす。

「……それにしても参ったよ。まさかあの時、写真撮られてたとはな。ちっとも気付かなかつたよ」

「そうなんだ。遥も知らなかつたんだ」

「うん。まあな。でもちよつと前に、しぐれさんの事務所に出版社から打診があるにはあつたらしい。もみ消しも可能だったけど、結局、ああいった形で世間にさらされることになってしまったんだ」

「そんなあ……。なんでわかつてたのに差し止めしなかったの？」

「だって、あれは全部嘘なんですよ？」

「そりゃあもちろん、嘘つぱちのオンパレードだよ。おかげで今朝から俺の携帯も事務所も電話鳴りっぱなしでさ。まいったまいったおまけにおまえに連絡するのがこんなに遅くなってしまって、悪かつたと思ってる。おまえんちの電話にかけて、おじちゃんやおばちゃんが出たらと思うと、それも出来なくて……。ごめん。心配かけたな」

「わたし、いっぱい心配したんだから……。でもよかった。遥の声

が聞けて。これで安心して眠れるかも」

そうは言っても、嘘だとわかっていながら出版を許したしぐれさんサイドの対応が気になる。

何か裏があるのかもしれないなどと勘ぐってしまっ

て、ごしごしと涙を拭く。

きりつと正面を見据え、毅然とした態度で遙と携帯越しに向き合うことにした。

55・わたしの遥

「ねえ、遥。正直に答えてほしいの。わたしに遠慮はいらないから。本当のことが知りたい。なぜあんなことになったのか、全部教えて欲しい！ねえ、遥。なんとか言ってみよ！」

包み隠さずすべてを語って欲しかった。

わたしは真実を知りたい一心で、深夜にもかかわらず叫びにも近い声を上げてしまったのだ。

『はあ？おまえ、何ムキになってるんだ？正直も何も、今言っただことが、この件に関して俺の知り得るすべてだけど？それとも、俺の連絡が遅くなったこと、まだ怒ってるのか？』

「そうじゃないけど……」

なかなか連絡が取れなかったことは辛かったけど、決して怒ってなどいない。

遥のそばにいないもどかしさから、見えてこない背景に不安が募るのだ。

遥の声はいつもどおりだった。何かを隠している様子は窺えない。だとすれば、しぐれさんサイドが記事の差し止めを行わなかったことも、遥は納得しているのだろうか。

『あの写真、俺としぐれさんの二人しか写ってないけど、実は彼女のマネージャーもいたんだ』

「ええ？そ、そうなの？ならどうして、こんな記事になっちゃったの？」

それは知らなかった。でもマネージャーの姿はどこにも見当たらなかったはずだ。

『マネージャーの携帯に電話がかかってきて、彼が店の外に出た瞬間を狙って撮られたんだと思う。まるでずっと二人でいたかのよう』
に写ってたたる？』

「うん……」

『うまいよな。見事だ。まあ、今の技術だと、人の一人や二人くらい、消すことも増やすこともマウス一つでちよちよっと出来るだろうけど。なあ、柊、よく聞けよ。カメラマンも編集者も。実は全部わかった上でやってるんだ。その証拠に文のどこにも、二人つきりているとは書いてねえだろ?』

「えっ? そうだった? ちよつと待って」

わたしは立ち上がったって部屋の灯りをつけ、机の上に置いてある週刊誌を手に取り布団の上にぺたんくと座る。

そのページを広げ、遙の指示通り再び記事に目を通した。

確かにどこにも二人つきりしているとは書いていない。

にこやかに微笑んで、リラックスした表情の二人……とある。

「ほんとだ。二人つきりだとは書いていない。でもなんでそんな誤解を与えるようなことばかり書くんだろ。何も知らずにこれを読んだ人は、二人は恋人同士だって絶対に思うよね。どうしてこんなことするのか、わたしにはさっぱりその理由がわからない」

『そりゃあ、売るためだろ? 今旬の女優のネタには、誰もが群がるからな。でも心配するな。こんなことはこの世界ではあたりまえのことらしいし、知名度アップにも繋がる。みんな持ちつ持たれつで、うまく共存してるってことだよ』

信じられない。

あれほどモデルになって世間に知られることを嫌がっていた遙の言葉とは、とても思えない。

『おい、柊、聞いてるのか?』

「ちゃんと聞いてるってば」

『でも納得してない。そうだろ?』

「そんなこと……ないけど」

『ったく、おまえも頑固だな。じゃあ、何度も言っけど。俺にはおまえがいるのに、なんでわざわざしぐれさんと付き合う必要がある

？』

「それは……」

もちろん、付き合う必要はないし、遥からそんなそぶりすら感じたこともない。

だけど、遥と会えなくなって随分経つ。

その間に何か変化が起きていたとしても、わたしには気付きようがないのだから。

『しぐれさん、大河内のことがずっと気になってるみたいなんだ。

あいつと会えるように段取りするなんてつい言っちゃったけど、俺あいつの連絡先といえは実家しか知らないし。だからってバイト先におしかけてまでってのも、めんどくせーしな。おまえ、どう思う？ ここはしぐれさんのために、やっぱり一肌脱ぐべきなんだろうけど……』

「どう思うつて。そんなことわたしに訊かれても。でも、大河内君もしぐれさんのファンだし、しぐれさんが会いたがつてるって言えば、嫌とは言わないと思うけど……」

『そうだな。ならやっぱり道をつけてやるべきなんだろうな。でも……。なんか気がのらねえ。あいつとは二度と関わりたくないつてのが、俺の本心だ。かと言って、おまえに大河内に連絡しろなんて口が裂けても言いたくないしな……』

「あ、あたりまえだよ。わたしはもう二度と、遥の目の届かないところで、大河内君と連絡取ったりしないつて決めたんだものっ！」

わたしだつて、大河内君とはもう関わりたくないと思ってる。

いい人には違いないけれど。

わたしと遥には決して交じり合う相手ではないと嫌と言うほど思い知らされた。

『あははは、そいつはいい心がけだ。おまえも成長したな』

「当然でしょ。だつて、遥が嫌がることは、この先絶対にやらないつて決めたんだから」

『よし。じゃあ、おまえのその忠誠心に報いるためにも、俺がうま

く立ち回ることにする。あいつ、榎木山ホールでバイトしてるんだよな?」

「うん。そうだよ」

「今度、時間を見つけて、そこに行ってみるよ。それであいつとしぐれさんがうまくいけば、俺の噂なんてあつと言つ間に立ち消えになるさ」

「そっか。そうだよ。遥、いろいろ大変だけど、がんばってね」
「そう。これ以上の証明はないだろう。」

嗅覚のすぐれた記者は、すぐにもしぐれさんの変化に気付くはずだ。

「ああ。わかった。がんばってみるよ。それはそうと、そっちの状況はどうなんだ。マスコミが押しかけたんじゃないのか?」

「わたしはバイト中だったから会ってないけど、リポーターを名乗る人たちがやって来たらしいよ。朝の情報番組で放送されるかもつて、母さんが言ってた」

「やっぱりそうか。で、ばあちゃんやお袋たちは? 何か言ってたかったか?」

「わたしが直接聞いたわけじゃないけど、遥が家に電話もしないから、おばちゃんも怒ってるって母さんが……。そう。今からでも、電話してみれば?」

「そのうち……。な。あつ、それと、もうひとつ言っておくことがある。明日の午後、記者会見があるらしいんだ。俺は関係ねえけど、しぐれさんサイドがなんらかの表明をするって聞いた。今のところ、記事の内容を全面否定の方向らしいけどな。じゃあ、また何かあったら連絡する。おやすみ」

「うん、おやすみって、遥っ! ねえ、はる……」

遥の返事は返ってこない。

自分の言いたいことだけを言っただけで一方的に切られた感じもしいでもないけれど。

あの調子だと、当分家に電話する気もなさそう。

まあ、言い換えれば、わたしに中継ぎの役割をしるってことなのだろう。

明日朝一番に隣に行って、今の電話の内容を知らせてあげよう。おじさんもおばさんも、そしてもちろんおばあちゃんも。少しは安心するだろうな。

その後すぐに送られてきたメールに記載されていた遥の新しいアドレスと電話番号を登録して携帯を閉じる。

両手の指を組んで前に伸ばし、ふうつと大きく肩で息をした。

灯りを消し、枕に顔を埋める。

遥のいない寝苦しい夏の夜。

彼が恋しくて、会いたくて、悲しくて。

わたしは、ひとり静かに声を押しとどめて……泣いた。

56・遙の彼女は……

今朝は少し早めに家を出た。立ち止まって家の周りを見渡してみる。

大丈夫だ。マスコミ関係らしき人は誰もいない。

まあ、それも当然のことかもしれない。無名にも等しい遙をこれ以上追いかけても、何も得はないということだろう。

誰かが待ち伏せしているのではないかと思ひ玄関を出るのが怖かったが、それも取り越し苦労に終わり、ほっと胸を撫で下ろした。

遙の家に寄って、昨夜の電話の内容をかいつまんで綾子おばさんに伝えた。

おばさんは顔をしかめるだけで、それ以上は何も訊いてこなかった。

今日のバイトの予定はぎっしりだ。今から四時まで図書館の業務をこなし、五時から塾の講師の仕事が待っている。

当然、朝や昼の情報番組を見る時間はなく、昨日のインタビューも今日の午後の記者会見も、家に帰ってから録画したものを見るまでお預けだ。

大きなミスもなく図書館の業務を終えた後、コンビニで買ったおにぎりをほおばり、そのまま塾になだれ込んだ。

わたしは中学三年生の国語を担当している。

長文読解のプリントの答え合わせをしながら、ひとつひとつ説明を加えていくのが本日の指導内容だ。

接続詞の選び方や、指示代名詞の示す内容、そして長文を要約するコツなどを伝える。

個人の経営する小さな塾なので、生徒の数も少なく、とても教えやすい。

アットホームなところは、昔のままだ。

そういうわたしも中学三年生の時、夏休みと冬休みの受験集中講座でこの塾のお世話になった。

内申点が完璧に不足していたわたしを奮い立たせ、志望校の合格ラインすれすれまで成績を引き上げてくれたこの先生には、感謝してもしきれないほどの恩義を感じている。

三年一学期の内申点があそこまで低くて西山第一高に合格した子は、後にも先にもわたし以外には例がないそうだ。

そんな恐ろしい経歴を持ったわたしを、塾長は今でもかわいがってくれる。

そして高校でも誰もが認める劣等生だったにもかかわらず、私大最難関とも言われる城川大に合格したと報告した時の塾長の喜びようと言ったら、それはもう……。

涙を流して大喜びしてくれたあの日のことを、今でも鮮明に思い出すのだ。

今回のバイトの件も、帰省した夏の間だけでいいから是非後輩たちのために授業を受け持って欲しいという塾長の願いもあって、少しでも過去にお世話になったお返しができればと、講師を引き受けた経緯がある。

生徒たちのキラキラした瞳が一斉にわたしに注がれる。

どの子も一字一句聞き逃すまいと、真剣に授業を受けている。

しんと静まり返った教室には、こつこつとペンを走らせる音とプリントをめくる乾いた音だけが響いていた。

生徒たちのあまりに熱心な姿に、心を打たれる。

どう表現すればいいのだろう。今までに感じたことのないような満ち足りた情感が、身体中に溢れてくるような気分になる。

大学四年の六月には、卒業した中学校で教育実習をする予定だ。教師としての未来像が、着実にわたしに近付いてくるのを感じつつていた。

手元の時計が、授業の終了時刻を示していた。学校とは違い、この塾ではチャイムは鳴らない。

教室の時計を見て、そろそろ終わるとそわそわし始めた生徒たちの様子を見計らって、授業の終了を告げる。

そしてなけば授業の延長のような休み時間に突入するのだ。

トイレに行く子、隣の友達とおしゃべりに花を咲かせる子、空腹に耐えかねてパンをかじる男子生徒もいる。

もちろん、わからなかったところを質問してくる子もいるし、次の授業の予習に取り掛かる子もいる。

その光景を眺めているのも、わたしにとって楽しい時間だ。

「よっこ！……見た見た！……だよね。……やっぱりそうだったんだね。あたし、雪見しぐれが大好き。去年やってた連ドラで、すっかりファンになっちゃったんだ」

「あたしは、堂野遙がいい。でもちよつと残念。この先、カレのことを応援しようと思ってたのに、もう……しぐれと付き合ってるんだよ。それって、ひどすぎない？」

今一瞬、慣れ親しんだ名前が教室にこだましたような気がした。

女子三人組が何やらうきうきと楽しそうに話しをしてるのだ。

どこかで聞いたことがあるような内容が、ときれときれにわたしの耳に届く。

当の本人たちはひそひそ話のつもりなのだろうけど、若いエネルギーに満ち溢れた彼女達のパワーは、大学生の比じゃない。

うるさいなあと顔をしかめる男子生徒の頭上を、彼女たちのけたたましい声が行き交う。

「ねえねえ、蔵城先生にこの話し、訊いてみない？ 先生ならいろいろ知ってるんじゃないかな。先生！ 蔵城先生！ ちょっといいですか？」

三人組のひとりが手を上げてわたしを呼んだ。

次の授業までまだ十分ほど時間がある。わたしは何かしらと言いながら、彼女たちのそばにいそいそと近寄って行った。

「あのさあ、先生。堂野遥って、この町の出身だよ。先生、カレのこと知ってる？」

「あ……」

わたしは啞然としながらも小さくトクンと鳴った心臓を大急ぎで落ち着かせて、必要最小限の答えを用意した。

「し、知ってるよ。それがどうかした？」

さりげなさを装えただろうか。

彼のことなど知らないと言つてとぼける選択肢もあつたけど、彼女たちが目指している高校の先輩でもあるわたしは、ここで見え透いた嘘を吐くのは得策ではないと思つたのだ。

「先生すごい！ やっぱり知ってるんだ。なんで？ どうして知ってるの？」

「えっ？ あ、あのう。同級生だから。高校の……」

「うわあ。先生、やるじゃん！ そうだよ。先生も堂野遥も西山第一高校だもんね。で、堂野遥ってどんな人だった？ 昔っからあんな風にかっこよかった？ きゃあーっ！ どうしよっ」

「でも、わたしはあんまり……」

彼のことはよく知らないからとつぶやいても、興奮状態の彼女たちの耳に入るはずもなく。

「みんな、聞いた？ 蔵城先生、堂野遥のこと知ってるんだって！ ひゃー！ 先生お願い。あとで写メさせて。ね、ね？ 友達にあたしの塾の先生、堂野遥の知り合いだよって自慢するんだ……」

遥の同級生というだけでわたしの写真を撮って、いったいどうするのだろう。

女子中学生の考えていることは全くもって理解できない。

ああ。でもこうやって遥のファンがいるからこそ、モデルの仕事も成り立っていくのだろうと思うのだけど……。

まるで悟りを開いた仙人にでもなった気持ちで、かわいい生徒たちを見ているわたしがいた。

「それで、その。堂野君がどうかしたの？」

わたしはさっきの彼女たちのコソコソ話がどうも気になって仕方ない。

怪しまれない程度に質問してみる。

「ええっ？ 先生、知らないの？ 堂野遙ったら、雪見しぐれと付き合ってたよ。塾に来る前、記者会見で言ってたらしい。今後とも温かい目で見守ってくださいって雪見しぐれが言ってたよ。なんかさあ、恋する乙女のわりにあまり嬉しそうじゃなかったけど。でも、すっごくきれかった。美人だよ、あの女優」

「あ、あの。今、なんて？ 雪見しぐれさんが、誰と付き合ってるって？」

「やだなあ、先生。ちゃんと聞いててよ。あのね、雪見しぐれの彼氏なの。堂野遙が！」

わたしは目を見開いたまま、棒立ちになってしまった。

確かに遥がタベの電話で、今日の夕方に記者会見があると伝えてくれていた。

でも週刊誌の内容を全面否定すると言っていたはずだ。

なのに、なのに……。

体が少し震えている。喉もからからに渴いてきた。

そのあと、どうやって授業を進めたのか、何をしゃべったのか。

全く記憶に残らないほど動揺していたわたしは、終業時刻と同時に塾の入っている雑居ビルを飛び出した。

先生、どうしたの？ なんでそんなに急いで帰っちゃうの？ 写

真撮らせてよー！ と後方で叫ぶ生徒たちに心の中でごめんねと手を合わせながら、わたしはひたすら家を目指して、街中を脱兎のごとく駆け抜けた。

57 小さな相棒

玄関に入ると、小さな青い靴がちょこんとそこに並んでいた。遥の弟、卓すくろの靴だ。

ということとは、その隣にあるベージュのサンダルは、綾子おばさんのものだろうか。

「ただいま……」

多分家の中の誰にも気付かれなくらいの小さな声で、いつものようにそう言ってみる。

そしてそのままこっそりと自分の部屋に向かい、情報番組を録画したビデオを観ようという魂胆なのだが……。

「とーっ！ やーっ！ かかってこい！」

卓の勇ましい掛け声が、わたしの行く手を阻む。

卓が跳ね回って遊んでいるところを通らなければ、部屋にはたどり着かないのだ。

どうしよう、どうすればいい？

「これ、卓。そんなところで暴れたらだめ！ 縁側の窓が割れたらどうするの？」

綾子おばさんの怒鳴り声が追い討ちをかける。

「あっ、ひいらぎだ。ひいらぎ、おかえりなさい。すうくん、ひいらぎがかえってくるの、ずっとまってたんだよ」

戦隊物のヒーローになりきっていた卓が、わたしを見つけるや否やバタバタと駆け寄ってきた。

「すう君、ただいま」

わたしは膝に顔を埋める卓を抱き上げ、ほわほわしたりんご色の頬にわたしの頬を重ね合わせた。

なんて柔らかいのだろう。遥と同じ目をした卓がにっこりと笑って、ちゅっと小さなキスを頬に返してくれた。

かわいい。このまま食べてしまいたいくらいだ。卓がかわいくて

たまらない。

「これ、卓！ ひいらぎじゃなくて、ひいらぎお姉ちゃんでしょ！」
そんなわたしたちをよそに、綾子おばさんが卓の馴れ馴れしい口調をたしなめる。

帰省するたび遙がわたしのことを柊と呼び捨てにするものだから、卓もまねをしているのだ。

小さい天使はわたしの首にしがみつき、引き離そうとする母親に精一杯抵抗する。

「卓。お姉ちゃんはお仕事から帰って来たばかりなのよ！ 疲れているんだから、甘えちゃだめ！」

尚もおばさんは容赦なく卓を責め立てる。

「いやだよ。ひいらぎといっしょがいいよ。」

おばさんと卓の攻防が続く中、わたしはぐずる卓の頭を撫でて、そつと足もとに下ろした。

「すう君、ごめんね。また今度早く帰ってきた時に遊ぼうね。今夜はもう遅いし……」

本当はもっと卓と遊んでいたのだけど、今夜はそうもしてられない。

我が家に綾子おばさんが来ていることが全てを物語っているではないか。

きつと遙のことを母さんに相談していたに違いない。

「あのね、お姉ちゃんは今から大事な勉強があるから、自分の部屋に行かなきゃならないの」

わたしは卓の目の高さにあわせて腰を屈め、彼に許しを請うように言った。

「ええー。つまんない。そんなのいやだよ。だって、みんな、おにいちゃんのことばかりおはなししてて、ちつともあそんでくれないんだもん」

卓が不満げに口を尖らせる。

「そっか。誰も遊んでくれないんだ……。すう君は戦隊ごっこが大

好きだもんね。じゃあ、ちょっとだけ遊ぼうか？」

「やったあー！ で、でも……」

「でも？ どうしたの、すう君」

急にしょんぼりとうな垂れる卓を覗き込んだ。

「あのね、ひいらぎがおべんきょうするのなら、あそぶの、がまんする。だってすうくんは、はるかおにいちゃんよりひいらぎのことがだいすきだから、わがままはいわないことにきめたんだ」

「すう君……」

「そうだ。いいことおしえてあげる。あのね、はるかおにいちゃん、テレビにでてたおんなのひと、なかよしなんだって。でもママがおこってるんだよ。なんでなかよしなのにおこってるんだろね、へんなママ」

無邪気な卓の口からこぼれたその言葉に、衝撃が走る。

「ねえ、はるかおにいちゃんといいらぎって、パパとママみたいにけっこんするんでしょう？ そしたらすうくん、ひいらぎのこともになる。だってひいらぎはいつもいっぱいあそんでくれるもん。ないしょのはなしだけど、すうくん、きみがおねえちゃんはきらいなんだ。すぐにあっちにいけて、いじわるばかりいうから。ねえねえ、ひいらぎ。はやくはるかおにいちゃんといいらぎしてよ。あのテレビのひとじゃ、いやだからね。はるかおにいちゃんといいらぎするのは、ひいらぎじゃなきゃ、ぜったいにいやだからね！」

目にいっぱい涙を溜めた卓が、彼なりの自分の思いを伝えてくる。周りの不穏な空気を、本能的に察しているのかもしれない。

まだまだ赤ちゃんだと思っていたのに、いつのまにこんなに成長したのだろうか。

テレビの女の人って、きつとしぐれさんのことだ。

「卓ったら、柊ちゃんを困らせたらだめでしょ？ さあ、こっちにいらっしやい。卓ももう寝る時間だわね。私たちもそろそろ家に帰

らなきや……」

半ば強引に手を引かれ居間に入った卓は、おばさんのひざの上に向かい合うようにして抱きかかえられた。

頭をおばさんの胸にこすりつけて、拗ねているようにも見える。

「柊ちゃん、帰るなり卓が纏わりついちゃってごめんなさいね。でもう全部知ってると思うけど……。夕方のテレビは、見た？」

卓の背中をとんと叩きながら、おばさんが立っているわたしを見上げて訊ねた。

「まだ見てない。でもだいたいのことは、わかっているつもり」

「そう……。柊ちゃん。ほんとうにごめんなさいね。遥の身勝手に、あなたを苦しめてばかりだわ。多分、あの記者会見も、作られた台本どおりの進行なんだろうけど。あれだけ遥の名前を全国の視聴者に向って連呼されたんじゃ、もう引っ込みがつかないわね」

とつとつ卓は、おばさんの腕の中で寝息をたて始めた。

その愛らしい横顔が遥にそっくりで、こんな緊迫した状況にもかかわらず思わず口元が緩んでしまいそうになる。

このままずっと卓を眺めていたいけど、それより何より、どんな内容の会見だったのか早く自分の目で確かめてみたい。

「おばちゃん。今すぐ部屋に行つて、録画したビデオを見てくるね。それから、遥に聞いてみる。ほんとうのことを……」

卓を起こさないように声をひそめてそう言つと、わたしは静かに部屋に向かった。

テレビの前に陣取り、リモコンの巻き戻しボタンを押す。テープがしゅるると不気味な音を立てた。

そのわずかな時間さえもどかしい。

親戚中からあきれられているが、我が家にはDVDなる利器はまらない。

十年間現役を保ち続けているこのビデオデッキだけが頼りなのだ。

番組のオープニングが華々しく始まる。大物歌手の離婚騒動と悪徳商法の裏手口を早送りして、ようやくそれらしき場面にたどり着いた。

どこかのテレビ局の出入り口付近だろうか。しぐれさんが記者に囲まれて質問を受けている映像が流れる。

いつにも増して背筋をピンと伸ばし視線を一点に定めた彼女には、当然のように笑顔はなく、質問に頷くだけで口元は堅く結ばれたままだ。

そばにいる事務所の人の代弁で週刊誌の内容が語られ、最後にしぐれさんにマイクが向けられた。

「堂野遥さんとは……良いお付き合いをさせていただいています。これからお互いを支えとして、仕事にまい進していきたいと思っています」

と、しぐれさん自らの発言で締めくくられていた。

それ以外にも何か一言でも彼女に語らせようと、記者達が必死になって質問している。

その場を退散しようとしたしぐれさんに、尚も質問が浴びせかけられていた。

「堂野遥さんとのご結婚は、もう決められてるのですか？」

しぐれさんが、いいえまだです、とだけ答え、車に乗り込もうとするのだけだ。

「彼はこれから売り出しの新人モデルということですが、今回の熱愛報道は、それを見越しての売名行為ではとささやく人もいます。

その件に関しては、雪見さんはどうお考えですか？」

しぐれさんの目がその質問をした記者を鋭く睨み返した。

「そんなことは絶対にありません。彼とは、その……。いいお付き合いをさせて頂いています。たまたまこのタイミングで、あの写真を撮られたまでのことです。今までどおり、仕事はきちんとさせていただく予定ですので、今後とも温かく見守ってください」

途中、不自然な間が空いた後、言いよどむことなくすらすらと答

える。

あまりにも卒がなさ過ぎて、かえって違和感を感じさせるほどの答を残し、車に乗り込んだしぐれさんは、それっきり、二度とカメラに顔を見せることはなかった。

今までも今回と同じような会見場面を見たことがあるが、こんなに緊張して食い入るように画面にかじり付いたのは生まれて初めてだ。

おまけに、情報番組の司会やコメンテーターとおぼしき面々が、若いうちにはいっぱい恋愛をするべきだ、などと無責任極まりない発言を呈し、今回のしぐれさんのスクープに好意的なのがショックだった。

芸能レポーターを名乗る女性が、遥の出身地から中学高校時代のことまで語り始めたのだが、これがまた、見事に嘘八百を並べ立てていて、突っ込みどころ満載なものだからやりきれない。

ここまで捏造された経歴を語られると、怒りを通り越して滑稽にすら思える。

トップの成績で高校を卒業して、家業の和菓子屋の手伝いも惜しまずやっているなど、孝行息子として語られるのは確かに美談には違いない。

遥の成績は確かに上位だった。が、トップの座は全くの別人が君臨していたはずだ。

そのトップを争うツワモノが他に五、六人はいたのだから、彼らに申し訳ないことこの上ない。

遥はせいぜいよくて十番くらいだったと思う。

和菓子屋の手伝いに至っては、ポスターのモデル以外は何一つやったことがない。本当に何も関わっていないのだ。

これにはきつと、綾子おばさんも苦笑いをしたに違いない。

でもどうしてこんな内容の会見になってしまったのだろう。

しぐれさんの様子を見ても、あらかじめ決められたセリフを淡々としゃべっているだけだというのが、ありありと伝わってくる。

これはきつと何かわけがあるにちがいない。

遙サイドの売名行為とまではいかなくとも、裏で何か大きな力が働いていることは明らかだ。

残された道はただひとつ。真実を知るには、本人に聞くしかない。

わたしはカバンから携帯を取り出し、遙の電話番号を表示させる

や否や通話ボタンをぎゅっと押し、彼の応答を待った。

58・早くおまえに会いたいよ

『もしもし。柊？』

「うん、わたしだよ。遥……だよね？」

『あたりまえだろ？ 俺だ』

思いのほかすぐに繋がった携帯から愛しい人の声が跳ね返ってきた。いつもの遥だった。

「遥、今電話してても大丈夫なの？」

『ああ、大丈夫だ。ただし、あまり長い時間はとれないけど』

「わかった。じゃあ、手短に話すね」

『そうしてくれ。まあ、おまえの言いたいことなら、だいたいの予想はついている……。あのことだろ？』

「うん……」

『で。何から説明すればいい？』

「しぐれさんが記者会見で言ったこと。どういうことなのか、真実が知りたい……」

『そう……だよな』

「ちよつとシヨックだった。まさかしぐれさんが、遥との関係をあんな風に言うなんて、とても信じられなくて。わたし、何も知らなかったから……」

ちよつとどころか、本当は意識が遠のきそうなほど強烈なシヨックを受けたのだけだ。

わたし以上に傷ついているかもしれない遥のことを思うと、これ以上強くは言えない。

『そうだよな。俺も前もって知っていれば、おまえにすぐにでも連絡していたよ。俺があの実事を知らされたのは、今日の午後になつてからなんだ。その後は常に事務所の人と行動を共にしていたから、おまえに知らせることも出来ず……』

「そうだったんだ。でもどうしてあんな内容になってしまったの？」

遥はその……。しぐれさんとは付き合ったりなんか」

『してるわけないだろ？ 俺にはおまえがいる。なんで別の女と付き合う必要がある？ しぐれさんとは、本田先輩を通して知り合った……。というだけの関係だよ。友人という域にも達していないと思う。それはおまえもよく知っているだろ？』

「う、うん。それはそうだけど……」

そんなこと言われなくてもわかってる。でも、どうしてテレビで報道されているようなことになっているのか、その理由を知りたいのだ。

『放送される前に記者会見の方向性を聞いた時、正直俺も驚いたよ。それはないだろうって……。その後、事務所の社長に説明を求めて噛み付いたんだが……。この先俺が仕事を続けていく上で、あの回答が一番いいと判断した結果だと言っただ』

「遥の仕事にプラスになるの？ あの報道内容が？」

『ああ。そうらしい。俺にはさっぱり理解できないが、そういうことらしい。ほんと、参ったよ。これからますます、大学にも通いにくくなるんじゃないかと心配になる。まあ今ここで話せないこともいろいろあるから、おまえに直接会って詳しく言っつもりだ』

「わかった。じゃあ、今度いつ会えるの？ 近いうちにこっちに帰って来れるの？」

『それなんだけど……。スケジュールもびっしりで、当分そっちに帰れそうにないんだ。悪いけど、おまえがこっちにもどれないか？ バイトの都合もあると思うけど。お願いだ。日帰りでもいいから、俺に顔をみせて欲しい』

「そうだね。それしか方法がないのならそうする。わたしがそっちに行けばいいんだね。バイト代もたまったし、費用の心配はいらないから」

『あはは。何言ってるんだよ。おまえに負担をかけさせるつもりはない。それくらいなら俺が持つから。何も心配せずこっちにもどってくればいい』

「うん、わかった。そうする。この後バイトの勤務予定表を見て、行けそうな日が決まったらメールするね」

『そうしてくれると助かるよ。頼んだぞ。なあ、柊……』
「何？」

『早くおまえに会いたい。俺、もう限界だから』

遥の苦しみがひしひしと携帯越しに伝わってくる。

付き合ってもいない人と交際宣言されて、その理不尽さに相当参っているのだろう。

わたしも遥に会いたい。今すぐ遥の顔が見たい。遥の匂いを感じながらその胸に顔を埋め、いつものように力いっぱい抱きしめられたい。

そして今度は、わたしが遥を抱きしめるのだ。

もう大丈夫だよと彼の背中を撫でながら、彼の不安な気持ちごと全部包み込んであげたい。

遥の切羽詰った最後の声が、わたしの耳からずっと離れなかった。家でご飯を食べている時も、テレビを見ている時も。図書館で仕事をしている時も、塾で板書をしている時も。わたしの心の中は、遥でいっぱいになっていた。

唯一、図書館も塾も両方仕事が入っていない週明けのうだるような暑さの日に、わたしは一泊の予定で東京に向うことになった。

次の日の夜には塾の仕事が待っているの、翌日の昼過ぎには新幹線に乗って帰らなければならない。

遥が電話でしきりに言っていた東京にもどって来いという言葉は、少なからずわたしに衝撃を与えたように思う。

それはもう、今わたしがいるこの生まれ育った町は、遥の帰るところではないと言っているようで、胸が締め付けられるほど悲しかった。

遥にしてみれば、東京が自分の終の棲家になってしまったのだら

うか。

遙に会える、ただそれだけの想いを胸に、わたしは東に向かう列車に飛び乗った。

ランチは一緒に取れそうだという彼の言葉を信じて、事務所の近くのカフェまで来ている。

今日の撮影は都内の海岸沿いの埋立地で行なわれているらしい。人通りの少ない早朝から出向いているので、昼前には事務所にもどれると聞いていた。

でも、もう午後の一時になる。撮影が延びているのだろうか。

遙からは何も連絡はない。仕事の邪魔になっではいけないと思い、メールも控えていた。

アイスカフェラテを飲みながら、なかなか鳴らないテーブルの上の携帯に痺れを切らす。

隣の席では、四人組のOLが旅行の計画を立てながらセットメニューを楽しそうに食べていた。

彼女たちが手にするパンフレットには、真夏のバカンス、南の島へ、と派手なコピーが紙面を陣取っている。

お盆休みをずらして八月の末に休暇をとって旅立つという話の流れが、彼女たちの口からにぎやかにこぼれ出す。

わたしは旅行どころか、遙と一緒にいることすら今ではままならないというのに。

彼女たちのくっつくのない笑顔が羨ましくもあった。

すると、誰かがトントンとわたしの肩を叩くのだ。

振り返った先には。

遙ではない別人の視線がこちらに注がれているのに気付く。

そこにいたのは、遥のマネージャーを務める牧田さんだった。

「お久しぶりね、柊さん」

「あつ、こ、こんにちは、牧田さん」

わたしはドキツと高鳴る心臓を押さえて、彼女をそつと見上げる。「まあ、何もそんなに驚かなくても。あたしって、そんなに怖い存在かしら？」

「そんなことは、ないです……」

もちろん、牧田さんが怖いわけではない。ただ急にここに彼女が現れたものだから、びっくりしたただけなのだ。

いや、でもやっぱり少しは怖いのかも……しれない。

何もかもが大人で、ときばきとした牧田さんの存在は、わたしにとつては憧れでもあり、雲の上の人のような存在でもある。

「柊さん。いつ見ても、あなたはかわいらしいのよね。あたしが事務所直属の人間だったら、即行あなたをスカウトしてたかも。でも堂野君が許さないわよね。いつだって、あなたにぞつこんななんだもの。俺の彼女に手を出さなつて叱られちゃうかも」

「あの、わたし、モデルとか、そういうのはちよつと……」

「うふふふ。柊さん、あなたつて、本当に純粹で素敵な女性だわ。彼があなたを手放さないのがよくわかる。それとね、あなたを見てると、あたしの若い頃を思い出しちゃうの。あなたほどかわいくはなかつたけど、でも心の中は初心で、一途で。高校の頃から知り合っただった夫への愛情をずつと友情だと勘違いしていたあの頃。堂野君と同様、あなたを放っておけないのは、あたしの昔を見ているよ。うな気がするからなのかも……。つて、あたしの話をするためにここに来たんじゃなかつたわ。堂野君がここに来なくてごめんなさいね。実は彼、まだ仕事なのよ。で、あたしが代わりにあなたに会いに来た、つてわけ」

大き目のサングラスをはずし、わたしの向かいに腰を下ろした牧田さんは、白いコットンパンツに包んだほつそりとした長い足を組

み、少し日に焼けた肌をこちらに向けて微笑んだ。

「わざわざこんなところまで来ていただいて、すみません。わたしなら、このあと別に何も予定がないので、彼の仕事が終わるのを待ってても全然平気なんです。だから牧田さんも気になさらないで下さい」

牧田さんは組んでいた足を下ろして背筋を伸ばし、急に厳しい顔つきになってわたしを見つめてきた。

「柊さん、あのね。ここに来たのは、その……。あなたにどうしても言わなくちゃならないことが、あって。で、それが……」

突如急変した牧田さんの態度に、不安を覚える。

無意識なのだろうか。彼女の右手の中で執拗に開け閉めを繰り返す携帯が、パタンパタンと店内に乾いた音を立てた。

59 悲しみのゆりかもめ

「あ、あの……。言わなければならないことって、どういったことでしょうか」

さつきから牧田さんの様子がおかしい。

いつもなら、何でもズバズバと真正面から切り出してくる彼女なのに、まるで別人のようだ。

わたしは牧田さんの目を見て、彼女の答えを待った。

「堂野遙……。彼は今月末に発売のファッション・ユーマの特集記事に載るっていうのは、周知の事実よね？」

「ええ、もちろん知っています」

「で、その後、十二月発売の月刊誌で本格的にモデルデビュー……。」
牧田さんはそこまで言って、今運ばれてきたばかりのアイスコーヒートのグラスにストローをさし、抜け殻になったストローの包みを無造作にテーブルの隅に追いやった。

そして突然わたしの顔をのぞきこみ、手で口元を隠しながら小声で何かささやくのだ。

「えっ？ あ、あの。今、何ておっしゃったのか、よく聞こえなくて……」

声が小さい上にあまりにも早口だったので、ついうっかりと牧田さんの話しを聞き逃してしまった。

牧田さんはあきれたように首を振り、しょうがないわねと言いながら、もう一度ゆっくりと話し始める。

「あのね、柊さん……。今回の雪見しぐれとの騒動は、こちらサイドにすれば、渡りに船だった……。ってわけ」

「渡りに船？」

あまりに唐突な答えに、わたしは思わず大きな声で聞き返してしまった。

その瞬間、隣のテーブルのOしが、四人一斉にこっちを見た。

わたしは大慌てで口元を手で押さえ肩をすくめた。

「そうなの。今まさにデビューしようっていう大事な時に、これほど強烈でインパクトのある記事を暴露されるってことは、自然な流れでは実際にはなかなかありえないことなのよね」

「はい……。多分そうだと思います」

わたしは牧田さんの本心を探ろうと、じつくりと一言ずつ、今までの言葉を反芻はんすうしてみた。

つまり今回の記事は遥の事務所サイドの捏造ねつぞうではなく、偶然の出来事、つまり願ってもないチャンスが勝手に降って湧いて来たと言いたいのだろう。

「で、お相手はこともあろうに、あちこちでもはやされている今最も旬な女優、雪見しぐれっていうじゃない。当然、彼女サイドで記事のつぶしにかかると思っただけで、あちらもバカじゃなかった。まんまとこの話に乗ってきちゃったのよね」

「あ、はい……」

何となく話しの流れが見えてきたような気がするが、まだ理解できない部分も多々ある。

わたしは一言も聞き逃すまいと、彼女の口元をじつと見つめて会話に集中した。

「つまり、堂野遙に思いのほか高値がついた、ってわけ。朝日万葉堂の御曹司で、おまけに城川大の現役大学生。どう？ 注目度は申し分ないでしょ？ あちら側に見れば、以前から噂されてた年上の俳優との不倫疑惑も、これで払拭するつもりなのかも」

「不倫疑惑？ し、しぐれさんが？」

初めて聞く話に、心拍数が跳ね上がる。

「そうよ。まあ実際のところはよくわからないけど、イメージはよくないでしょ？」

「はい」

「で、今回の報道。誰が見ても爽やかなカップルだし、堂野君って清潔感も充分。清純派女優雪見しぐれとしては、願ったり叶ったり

の相手だったってこと。堂野君から雪見しぐれとの関係も、二人が会っていた事情もすべて聞いたわ。あなたも良く知ってる通り、二人の間には恋愛関係は全くない。でもこの世界は、世の中の人々に、どれだけ素敵な夢を売るかが鍵なの。一見垢抜けてない、ごく普通の大学生である彼のバックグラウンドに雪見しぐれがプラスされて、おまけに伊藤小百合のネームバリューまでついてくる。こっちにしても、これ以上のおいしい話はないってことなのよね……」

牧田さんの目がわたしを捉え、ほんの少し和らいだように見えた。たしかにそうかもしれない。お互いの仕事のため、いや、彼らを動かしている組織のためにも、この記事をつまく活用していくことが今後の彼らの成功に繋がるというのだろう。

でもそれで、二人はこの後どうなるの？

あの記事を肯定したということは、つまり、遙としぐれさんが恋人同士として世間に公表されてしまったわけだ。

ならば、わたしはいつたい……。

体内にいつきに不安が駆け巡る。そして次の瞬間、体中の血が全部抜けていくような脱力感に見舞われた。

「柊さん、あのね。言いにくいんだけど……」

わたしは唇を引き結び、こくりと頷いた。牧田さんからダイレクトに伝わってくる負の波動を全身に浴びながら。

「しばらくの間、堂野君と会わないで欲しいの。あつ、でもね、電話やメールまでは辞めると言わないから。ただね、もしあなたが携帯を落とした時のために、彼の名前はわからないようにしておいて欲しいの。あなたにこんなこと言うの、正直とても辛いわ。本当に辛い」

「牧田さん……」

「堂野君にはあなたという恋人がいる。だからこんな理不尽なこと、絶対に許せないと思った。すぐに出版社の上司に掛け合って、事務所側に不服を申し立てただけ……。甘いって言われた。こんな

ことで動じていたら、この先やっていけないって諭されたの。もちろん堂野君は、あたしがあなたにこんな卑劣な申し出をしているなんて知らない。知ったらそれこそ、今やってる仕事を放っばり出してここに来るでしょう。柘さん、ごめんなさい。もう後へは戻れないのよ。このまま突き進むしかないの」

牧田さんが決意を秘めた目をして、わたしの手をぎゅっと握った。「ま、牧田さん……。それは、彼と、遥と別れるということですか？」

わたしはやつとの思いで、それだけを口にする。

「そうは言っていない。ただ、しばらくは、彼と会わないで欲しいの。もし今ここで、新たなスクープ映像を撮られでもしたら、あたしはもちろん、出版社も事務所も大変なダメージを受けることになる。今後は堂野君も個人的に記者からマークされると思うから、慎重になる必要があるの。出る杭は打たれる運命なのよ。新人を引き摺り下ろすのなんて、簡単なもの。それを狙ってるライバル誌の出版社もあるわけだから、下手な動きは禁物ってこと」

そう言って、ますます声をひそめた牧田さんが、わたしの後ろの方をそつと指差す。

「あそこに座ってるTシャツにジーンズのメガネの人。彼もそうよ。わたしを追ってきたわ。この店が満員だったおかげであんなに離れたところに座っているけど……。だから、お願い。今日はこのまま堂野君に会わずに帰って欲しいの。急用が出来たとか、何でもいから理由をつけて会えないことにしてくれない？ 私も彼にそう伝えるし、あなたからも堂野君に連絡入れてくれると助かる。それと、近いうちに堂野君には、きちんと理由を説明する。それまでは、とにかく二人で会うのは避けて欲しいの。勝手なお願いなのは百も承知だわ。柘さん。だめかしら？ あたしの願いを聞き届けてくれない？」

そ、そんな……。遥と会えないだなんて。

でも、もしわたしと一緒にのところを写真を撮られたら、いろんな

人に迷惑をかけてしまっただよね。

今だけ我慢すればいいって、牧田さんがそう言った。

電話やメールは出来るんだもの。別れると言われたわけじゃない。報道されたとおり、遙としぐれさんが恋人同士だと装っていいだけ。とにかく今はただ記者の目をごまかせばいい。

そうとわかっていても、苦しさは増すばかりだ。どうしたらいいの？ いったいどうしたら……。

わたしに重なった牧田さんの冷たい指先が、かすかに震えているのがわかった。

牧田さんも困っているのだ。わたしに全てを告げるのは苦渋の選択だったに違いない。

「わかり……ました」

テーブルの上を滑らせるようにして牧田さんから手を離し、膝に視線を落として頷いた。

「今日は……。今日だけは、このまま実家に帰ります。牧田さんのおっしゃるとおり、遙には会いません。でも、ずっとこんなのは嫌です。遙と会えないなんて、無理です」

「柊さん……」

「あの……。お願いがあります。東京で遙と会うのが許されないなら、彼を实家に帰してください。一日でいいんです。いや、半日でも」

牧田さんとして、事務所の方針に逆らえないだろうことは百も承知だ。にもかかわらず、そう聞かすにはいらなかった。

実家で会うのなら誰の目にも触れない。これくらいの願いなら聞き届けてくれるかもしれないと最後の賭けに出た。

「実家に？」

牧田さんが、あきれたように目を丸くしてわたしを見た。

「それはだめよ。記者はね、どこにだって堂野君を追ってついて行くわよ。あなたと一緒にのそころを見られでもしたらどうするの？」

「え？ でも、家の中なら見られることはないと思うんですけど……」

「堂野君が帰省したのを待ち構えていたようにあなたが彼の前に姿を現したとしたら。これって記者にとっては、願ったり叶ったりのスクープってことになりかねないわけだし……。慎重になった方がいいと思う。ちがうかしら？」

「牧田さん。もしかして、遥から何も聞いてませんか？」

「何？ それって、どういうこと？」

わたしに一筋の光が見えたような気がした。牧田さんはわたしたちが住んでいる実家の状況を正しく把握していないのでは……と思っただのだ。

「あの、実は、わたしと遥の実家はすごく近所なんです。同じ敷地内に住んでいるので、お互いがどっちの家に居ても、別に不思議でもなんでもないんです」

「そ、そうだったの？」

牧田さんの目がますますまん丸になって、大きく見開いた。

「そんなこと、全く知らなかった……。堂野君、何も言ってくれないんだもの。そっか、同じところに実家があるのね。なら話は早いわ。オフになったら彼が実家に帰るように取り計らってみるわね。」

なあ〜んだ、そうだったの。親戚同士だとは聞いていたけど、住んでるところも一緒だとは……。ねえねえ、あなたたちのご両親が兄弟なのかしら？」

「それは違います。昔の話しになるのですが、わたしたちの曾祖父が兄弟だったと聞いています」

「へえ〜。なんか代々伝わる家系図の話みたい。それに同じ敷地内って、あなたたちのご実家、どれだけ広いのかしら。東京の下町で育ったあたしには、想像もできない世界だわ。でもまあ、それはいいカモフラージュになるかも。たとえ記者がそこに乗り込んで、近所で聞き込みをすればあなたたちが親戚なのは一目瞭然なわけだし。変な噂の心配もなさそうね。御実家であなたたちが会えるよう

に、上に掛け合ってみることにするわ。お姉さんにまかせなさい！」
急にいつものように明るいテンションに戻った牧田さんが、得意げにポンと自分の胸を叩く。

私に任せておいてと言って立ち上がり、伝票を手にした彼女が颯爽と会計を済ませる。

そして再び撮影現場へと戻って行った。

わたしはバッグから携帯を取り出し、嘘のメール文を組み立てる。塾から急な呼び出しがあつて、会えなくなつた。ごめんね……と胸がぎゅつと締め付けられて、涙がこぼれそうになる。

このまま牧田さんを追いかけて、ひと目だけでも遙に会わせてとすがりつきたい気持になつた。

でも、それは出来ない。

わたしの大人気ない行動で全てを壊すことは、絶対にあつてはならないことなのだ。

送信ボタンを押し携帯の電源を切つた。

今から実家に帰りつくまで、遙との連絡を絶つべきだと本能的に思つた。

さつき新幹線で降り立つたばかりの駅を目指して再びゆりかもめに揺られ、テレビ局の社屋を窓越しにぼんやりと眺めていた。

60・夏の終わりに

「もしもし、やなっぺ？」

『柘つ！ どうしたの？ えっと、約束は明日だよな？』

わたしは新幹線に乗り込む前にやなっぺに電話をかけていた。

さっきの牧田さんの話をどこまで伝えればいいのかと迷いながらも、なつかしいやなっぺの声に耳を傾ける。

「うん、それがね……。今東京に来てるんだけど、急用が入って、すぐに帰らないとだめなの……」

『ええ？ 急用って……。それって、ホントなの？ 今夜は堂野に会うためにこっちのアパートに泊まって、明日あたしと一緒にランチする予定だったじゃない』

何も知らないやなっぺは、わたしの言動が不可解極まりないのだろつ。

そんな彼女がすんなりと引き下がるわけもなく、不信感いっぱい
の声で、ひたすら不満を訴える。

でも、もう東京にいる必要はないのだ。

遙に会えないとわかっているのにこのままここに留まれば、ますます辛くなるのは目に見えている。

やなっぺとの約束が果たせないのは申し訳ないけど、今はこうするしか方法は無い。

「ごめんね、やなっぺ。どうしても帰らなくちゃならないの。この埋め合わせは、また今度するから。本当にごめんね」

『柘つたら、そんなに謝らなくてもいいのに。埋め合わせなんて気にしなくていいからさ。急用なら仕方ないよ。じゃあ、堂野には会わなかったの？ それとも、もう会った？ ねえねえ、あの記者会見はうそなんでしょ？ ちゃんと理由聞いたの？』

「そ、それは……。もちろん、遙と別れたわけじゃないし、あの報

道は前にも言ったとおり、建前的なことなんだけど……。まあ、いろいろあって、わたしもよくわかんなくて。とにかくもう帰らなきゃ。これから新幹線の自由席で、二時間は立ちっ放しなんだから。気合を入れてホームに行くね。それじゃあ」

やなつぺの追及がこれ以上エスカレートしないうちに、大急ぎで電話を切った。

一連の騒動が報道された次の日、わたしのことを心配して電話をかけてくれたやなつぺ。

簡単に報道内容の事情は説明しておいたのだけど、詳しいことは明日ランチをしながら伝える予定だったのだ。

でももし今やなつぺに会うと、いろいろと愚痴ってしまうに決まっている。

そうすると牧田さんに言われたことも、全部話さなければならなくなる。

たとえやなつぺが真実を全部知ったとしても、誰かに触れ回ることはないと信じているのだけど……。

けれども今はまだ、わたしの心の中に留めておくべきだと思った。今日は誰にも会わず、このまま帰るのがいい。

電源をオフにした携帯を握り締め、西に向かう新幹線に急いで乗り込んだ。

その日の夜、遥から猛烈な怒りの電話がかかって来た。

どうして帰ったんだと電話口で責められた。

そんないい加減なバイトなんか、とっとと辞めてしまえとまで言われた。

塾長に直談判すると言って声を荒げる遥をなだめるのに、かなりの時間を費やしてしまった。

まだ牧田さんからは何も聞いていないのだろう。

事実を知れば、夜行バスを使ってでも実家にもどってきてしまい

そんな勢いだ。

わたしは何度も繰り返し、ごめんね、としか言えなかった。交通費は俺が出すから明日もう一度来いと無理難題を押し付ける。それが出来れば、遥に言われなくてもそうしている。

わたしだって彼に会いたい。遥のすぐそばまで行つたのに会えないまま帰って来たわたしの気持なんて、彼にわかるわけがない。携帯越しに声だけ聞いていても、ちっとも嬉しくなんかない。辛いのは遥だけではないのだ。

遥とこんなに長い間会わないのは、これまでなかったような気がする。

いや、実際初めての経験だ。

バイトをしていれば遥のことは忘れていられるなんて強がりには、彼の声を聞くと同時にあっけなく崩れ去る。

でも今は我慢。もう少しだけ待てば、遥が実家に帰れるよう牧田さんが取り計らってくれるはず。

次に休みをもらえたなら、すぐにでも遥がこっちに帰って来るって、信じているから……。

近いうちに必ずまた東京に行くからね……と当分実現する見込みのない口先だけの約束をして、怒り続ける遥をどうにかやり過ごし、電話を切った。

でもそのとたんに、また遥に会いたくなる。

どうして牧田さんに言われるがまま、帰ってきてしまったのだろう。

帰ったフリをして、こっそりアパートに戻る方法もあったはずだ。まんまと牧田さんの戦略に乗せられてしまった自分が無性に腹立たしくなる。

あるいは本田先輩に相談して、先輩の家で会うこともできたのではないかと、今更ながら後悔の念にさいなまれるのだ。

結局遙は。その後もいつまでたっても帰省することはなかった。

八月も終わりを告げる頃、やなっぺが東京から実家に戻ってきた。やなっぺの実家はわたしたちが通っていた高校の近くにある。

わたしの家からは、徒歩と電車で四十分くらいのところだ。

バイトが早く終わった時にそれぞれの家の中間地点で待ち合わせをして、何度か彼女と会った。

ところが……。気の毒なことに、やなっぺのお目当ての藤村は、バスケの合宿で長野の体育館に缶詰になっていて、まだこの町に戻ってきていないらしい。

今年になってから一度も彼に会っていないと、やなっぺの表情は曇りがちだった。

わたしも夏休み中は遙と一度も会っていないので、二人でどよんとした空気をまといながら、カフェの一角を何時間も占領するのが日課になりつつあった。

「榕。なんで堂野に会いに行かないの？もしかして、ケンカでもした？」

残り少なくなったアイスティーをストローでズズズと吸い込みながら、やなっぺがわたしを覗き込んだ。

本当のことを言うまでは帰さないわよとでも言いたげに、わたしを凝視する。

「そ、それは違うよ。ケンカはいつものことだけど、そうじゃなくて……。あのさ、わたし、バイトが忙しいし、遙も仕事が……」

「バイトが忙しい？それに、堂野の仕事のせい？そんなの理由にならないよ。現に、あたしとはこうやって時間を作るんだし。その気になれば、今からだって東京に行けるじゃん。はは〜ん。どうもおかしいよね、あんたたち。これ、あたしの推測なんだけど……」

……」

やなっぺの鼻が何かを察知したようにぴくつと動いた。

「誰かに、堂野と会うなって言われたんじゃない？」

いきなり真正面から核心を突いてきたやなっぺの言葉に、思わず椅子から飛び上がりそうになる。

「ふふん。やっぱ、凶星？ ホント、終ってわかりやすいんだから。で、誰に止められてるの？ 親？ 事務所？ それとも堂野自身？

言いなさいよ。それとも、何も言うなって口止めされてるの？」

「そ、そ、そんなわけじゃないけど、だって、あれ、あれでしょ？ なんだかんだ言っても、遙も今回デビューしたわけだし。それに、しぐれさんのこともあるし。わたしと一緒にいるところを誰かに見られたら、よくないんじゃないかと思って……」

わたしはこめかみに伝う汗をハンカチで拭い、クリームソーダのアイスを乾いた舌の上に運んだ。

「まあ、それはいえるよね。ファッション・ユ一の十月号、あれはすごかったもの。堂野ったら新人なのに、破格の扱いだったよね。あたししたら二冊も買ったんだから。うちのママだっていつの間にか買ってた、我が家には三冊もあるし。こっちに帰ってきて、同級生に会うたびにこの話題だもんね。でもさ、そいつらの話って、どれもみんな知ってることばかりでさ。あたしなんか、その裏の裏までこの目で見えて知ってるわけだから、それは違うよ誤解だよって訂正したいのを必死で我慢してる。これが辛かったらありやしない。昨日もばったり会ったクラスメイトに、うっかり口がすべりそうになつて、焦ったのなんの。堂野のホントの彼女は終だって、大声で叫びたかった。雪見しぐれがなんだって言うのよ！ あんな記者会見、誰が見たって、嘘だってわかるじゃん！ ホント、いい加減にして欲しい！」

「や、やなっぺ。声が大きいよ。他のお客さんがこっち見てるし……。やなっぺのその気持ちだけ受け取っておく。あ、ありがとね」

興奮して大声になるやなっぺをなんとかだめて、とにかくこの話を終了させた。

これ以上この話題を引きずると、牧田さんに言われたことを全て暴露しなければならなくなる。それだけはまだ何としても避けたかったのだ。

わたしは前から密かに考えていたあの計画を、やなっぺに話すことにした。

「ねえねえ、やなっぺ。長野に行ってみない？ 九月になると塾のバイトがなくなるから、休みが取りやすくなるんだ。えっと、藤村は長野のどこにいるんだっけ？」

すると、突如目を輝かせたやなっぺが、デニムバッグからこそごそと何かを取り出した。

「じゃじゃーん！ そう来ると思って、さっき買ったんだ。旅の友、信州！」

表紙の山の写真がひと際鮮やかな旅行誌をテーブルに広げ、お目当ての地域情報が載っているページを開いて見せてくれた。

「ここ、ここ。冬季オリンピックの会場として有名になったとこだよん。長野市内にホテルを予約して、観光がてらバスケの練習見学つてのは、どう？」

やなっぺときたら、ちゃっかりわたしと同じことを考えていたようだ。それならば話は早い。

わたしたちはすぐに駅ビル内の旅行代理店に駆け込み、瞬間に旅の手配を済ませた。

予算やわたしの図書館のバイトの都合で一泊二日の弾丸ツアーになってしまったけれど、話が決まってから一週間後には、意気揚々と長野市に足を踏み入れていた。

一歩ずつゆっくりと秋の気配が忍び寄って来るのを肌を感じる九月の昼下がり、長野の空は雲ひとつなく、青く高く澄み渡っていた。

61・藤村応援団、ただいま参上！

やなっぺが今でもずっと片思い中の彼……藤村は、高校時代も中学から引き続いて遥と一緒にバスケットをやっていた。

西山第一高校の男子バスケットボール部が県大会でベスト4に残ったのも、すべて藤村の活躍のおかげだったといまだに語り継がれている。

遥もメキメキと実力をつけて藤村といいコンビを組んでいたのだが、藤村には天性の素質というか、生まれ持ったバスケットのセンスがあつたのだと思う。

遥との実力差は歴然としていて、藤村のプレーが強豪バスケット部を抱える地元の体育大学の目に止まるのに、そんなに時間はかからなかった。

特別推薦枠でその大学に進学した藤村は、まだ二年生にもかかわらず先輩たちを差し置いて、学生選抜チームのメンバーに選ばれたのだ。遥が自分のことのように喜んでいたのはついこの間の出来事だったはず。

高校の時に何度か試合を見に行ったことがあつたけど、それはもう惚れ惚れするようなフットワークの連続で、そこから生み出される流れるようなシュートは、あきらかにスポーツの域を超え、芸術としか言いようがないほどの素晴らしい瞬間だった。

ボールを追っている藤村は、普段わたしたちに見せているひょうきんでのんびりしたキャラは微塵も感じさせないほどの完璧なスポーツマンに変身する。

あっ、もちろんわたしは、遥の応援のために試合会場に足を運んでいたのは言うまでもない。

ところが残念ながら遥は、藤村ほど活躍の場が与えられたわけではなかった。

いくら一般的には背の高い部類であっても、相手校の長身選手に混じれば埋もれてしまう。

身長の不足分を持ち前の瞬発力と頭脳プレイで補い、司令塔的役割を果たしていた。

それは監督も部員も皆が認めていた事実だったのだが……。

そんな遙と藤村に、中学の時とは真逆の現象が巻き起こっていた。藤村のモチっぷりがそれはそれはすごかったのだ。遙の何倍も人氣があつたように思う。

中学の時、あれほど面白キャラで売っていた遙が一転して無口で無愛想になり、一方ますます明るさを増し自信に満ち溢れた藤村が人氣者に昇格するのに、そんなに時間はかからなかった。

他校の女子高生おっかけファンの人数は、遙とは比べ物にならないほど藤村が勝っていた。

周りからちやほやされタレント並みの扱いを受けたにもかかわらず、意外にも浮き足立った様子を見せることがなかった藤村。

当時、地道にこつこつと練習に打ち込んでいた藤村がいたからこそ、今の彼があるのは誰もが認めることなただけだ。

これはやはり、夢美への一途な思いが彼をそうさせたのだろう。それに気付いていたやなつぺが、どんな気持だったのか。彼女の心中を思うたび、わたしの胸は切なさで張り裂けそうになるのだ。

やなつぺ情報によると、本日藤村の学生選抜チームは、実業団リーグのひとつと対戦するらしい。

実業団には全日本代表メンバーも含まれていて、所詮学生の寄せ集めでしかない藤村たちがツワモノを相手にどこまで食いついていくかが注目されている。

当然コテンパンにやられるだろうことは簡単に予想がついていた。

勝負に勝つことよりも、強いチームと戦うことそのものに意味があるのだろう。経験を積み、実力をつけていくのだ。

鬼ごっこやかくれんぼをして一緒に遊んでいた幼なじみが、こなにもがんばって活躍しているというのを目の当たりにするにつけ、わたしは大学生にもなって、いったい何をやってるんだろうと毎回自己嫌悪に陥る。

ただ漠然と学校に行つて淡々とした毎日を過ごし、生活のためにバイトに明け暮れる日々には不満があるわけではない。

結婚の約束をしている遥との幸せだった日常にも感謝している。けれど、自分だけがどんどん周りから取り残されていくような不安や焦りを感じるのは事実だ。

遥との些細ないざござに一喜一憂するだけの、取るに足らないとつってことのない人生に、今後何か価値を見出せるのだろうか。

これが本当にわたしが望んだ大学生活だったのだろうか、疑心暗鬼になる自分がいる。

ホテルにチェックインを済ませ荷物をフロントに預けたあと、やなつぺとわたしは足取りも軽く、体育館に向うバスに乗車した。

ところがここで、予期せぬ問題に直面することになる。

最新の設備が施され、洗練されたフォームを惜しげもなく晒す立派な体育館が、まるで要塞のように立ちはだかり、わたしたちを拒否するのだ。

「申し訳ありません。関係者以外、館内立ち入り禁止になっております」

胸に顔写真入りのIDカードをぶら下げた係員に、体育館内への入場をいとも簡単に阻止されてしまった。

「そんなあ……。せつかく遠くから来たのに。なんでだめなんです

か？」

ここまで来て、やなっぺがあっさり引き下がるわけがない。今にも泣きそうな顔になりながらも、必死で係員に食い下がる。

公式試合ではないので観覧席チケットの販売はない。なんとしてみ今ここで中に入れてもらわなければ、藤村に会えないままになってしまう。

こんなことになるなんて全く考えてなかった。突然の事態になすすべもなく、途方にくれるばかりだった。

扉の向こうからは応援の声が聞こえる。きっと、あらかじめ入館を許可されている家族や関係者がいるのだろう。

ならば、もう少し粘れば入れるのではないか。わずかばかりの期待を胸に、その場で踏みとどまった。

「お願いします。そんな固いこと言わないで下さいよ。あたしたちただの学生だし、大学バスケのファンなんですよ。ちょっとくらい入れてくれたっていいじゃないですか！」

やなっぺはひるむことなく、じりじりと距離を詰めていく。

「そんなこと言われても……。ダメなものは、ダメなんですから。許可がないとダメなんです、あなたたちを勝手に入れるわけにはいかないんですっ！」

相手も負けてはいない。こめかみに汗を滲ませながら両手を広げ、断固阻止の態度を貫いている。

選手の家族や、実業団、大学関係者、マスコミ関連の人でないと入れないのはよくわかった。

それにしてもここまで人物認証が厳しいとは思ってもみなかった。尚も押し問答を続けていると急に扉が開き、館内から選手が二人、こちらに向って歩いてくるのが見えた。

わたしもやなっぺも固唾を呑んでその二人を見守った。後方に見え隠れしているのは……。

藤村だ。藤村に違いない。

ようやくわたしたちに気付いた藤村が、ぎよえつと意味不明な声をあげ、前につんのめった。

「お、おまえら、なんでここにいるんだよ。いったい、どーしたんだ？ 何かの冗談？」

大きく目を見開いた藤村がこちらに駆け寄り、わたしたちを不思議そうに見下ろしていた。

わたし、思うんだけど……。藤村ったら、会うたびに大きくなっているような気がするんだけど。

もうすぐ二メートルを越しちゃうんじゃないかってくらいに、よきによき背が伸びているように見える。

でも一緒に歩いてきたもう一人の人も、藤村と同じか、あるいはそれ以上に大きく見えた。

すかさずやなっぺが彼らの前に一歩踏み出し、につこりと微笑んだ。

すると、さっきまで睨み合っていた係員がきよとんとした顔をして、やなっぺと藤村を交互に見ていた。

「はい。にわか仕立て、藤村私設応援団、団長の柳田と副団長の蔵城が、遠路はるばる長野までやってまいりました！」

まるで兵隊さんのように敬礼をしながら、姿勢を正しておどけてみせるやなっぺ。みるみる彼女の形相が緩んでいくのがわかる。

「藤村応援団って……。そんなもん、急に言われても……」
腕を組み首を捻る藤村が、わたしに向かって困惑の視線を投げかける。

「あ、あの……。突然来ちゃってごめんね。だけど、どうしても藤村の頑張ってる姿が見たくて、ここまで来てしまったの。でも、中

に入れてもらえないんだ。やっぱ、急にもお願いしてもダメだよ。藤村に迷惑かけられないし……。わたしたち、そろそろ帰らなきゃ。

ねえねえ、やなっぺ。今日はもう、あきらめよ……」

「おい、待てよ。せっかく来たのに、もう帰るって？」
藤村が、今にも帰ろうと踵を返したわたしを慌てて引き止めた。

「なんで前もって俺に連絡しなかったんだよ。さあさあ、二人とも遠慮せずに中に入れよ。あとでチーム役員に俺の親族として報告しておくからさ。で、蔵城。おまえ大変だったんじゃないのか？ 堂野、それにしてもすっげえよな。寮の食堂でテレビ見てたら、突然画面にあいつの顔写真が大写しになって。堂野、なんでおまえがここにいるんだー！ って俺、マジでテレビに向って叫んでたし」

「ふ、藤村……」

いきなり遥の話題に切り替わったものだから、わたしの心臓が無防備にドキッと跳ね上がった。

「そのあと、あいつの携帯はつながんねえし、連絡取れなくて苦労したわ……ってなわけで、この二人、決して怪しい者じゃないんで俺、責任持ちますんで、固いこと言わないで中に入れてやって下さい、お願いします」

藤村が係員に向かってぺこつと頭を下げた。

係員は怪訝そうな目でわたしとやなっぺ、そして藤村の顔を見たあと、なら、どうぞ……としぶしぶ了解の言葉を発し、わざと大きな靴音を響かせてその場を去って行った。

62・幸せは背中から

「で、蔵城。さっきの続きだけど」

不服そうなおーラを背中に滲ませながら去っていく係員を横目に、藤村が遥の話の話を蒸し返す。

「八月の終わりだったかな？ あいつから電話があった時、おまえとずいぶん会ってないって、堂野の奴、かなり不満そうだったぞ。あんな弱った堂野は初めてだよ。なあ、柊ちゃん。おまえさあ、こんなところに来てのんびりしてる場合じゃないよな？ あいつのところは今すぐ行ってやれよ」

「それは、そうなんだけど……。遥が休みをもらえたら、実家に帰って来るってことに……。なって……。いるんだ……。けど……」

一番触れられたくない部分なだけに、曖昧な返事しか出来ない。「おいおい、えらい自信なさげだな。休みになったらって、あいつ当分休みなんてもらえないって言ってたけどな。相当まいってるみたいだったぞ。おまえたち、一緒に暮らしてたんだろ？ なら、なんで離れ離れになつてんの？ あの会見報道のせい？」

藤村の情け容赦のない突っ込みに冷や汗が伝う。そんなプライベートなことまで、知らない人の居る前で言っただけで欲しくなかった。

なのに、藤村の隣にいる優しそうな人はゆったりと腕を組み、目を細めて話を聞いているのだ。

「あつ、ごめんごめん。おまえたちに紹介するの忘れてた。この人、同じ大学の先輩で、二ノ宮さん。いい先輩だね。それに、俺が言うのもなんだけど、これまた男が惚れるいい男で……。ねえ、先輩？」

わたしの不安な気持を察したのだろうか。藤村は自分の隣にいる大きな人について自慢げに語り始めた。

「先輩、こっちの大きい方が昔馴染みの蔵城で、俺の親友の彼女です。そして、こっちの小さい方が高校の同級生の柳田で、まあ言えば、元カノ……。みたいなもので」

藤村が照れながら、わたしとやなっぺのことを先輩に告げた。ところが……だ。やなっぺのことを元カノだと言わなかっただろうか？ いや、確かにそう言ったように聞こえたのだが。

当のやなっぺはぼかんと口を開け、驚いたように目をぱっちり見開いて藤村を凝視している。

高校時代、ほんのわずかの期間だったけど、二人が付き合っていたことは事実だ。だから嘘ではないし、元カノで異論は無い。

でもこれって、藤村の意識が今までと少し違ってきたってこと？ 少なくとも、当時はやなっぺが藤村の彼女だったと彼自身が認められているのだ。

「どうも、二ノ宮です。はじめまして」

二ノ宮さんが組んでいた腕をほどき、長身を折り曲げて律儀に会釈してくれた。わたしから遅れること三秒、やなっぺも慌ててぺこつと頭を下げる。

包容力のある人というのはこういう人のことを言うのだろうか。全身から温和で誠実そうな人柄が滲み出ている。

「いつもあなたたちのお噂は聞いていますよ。こいつが、あの堂野遙と知り合いだって自慢するんだけど、最初は信じてなかったんだよね。でもこうやってあなたたちに会って話を聞くと、もう信じないわけにはいかないですね。芸能界のことはよくわからないけど、いろいろ事情がありそうだ。今耳にしたことは僕の中で収めておくから、心配いらないよ」

二ノ宮さんが落ち着いた声でそう言った。テレビの情報と藤村の話した内容が食い違っていることに気付いたのだろうか。

雪見しぐれの恋人として報道されていたにもかかわらず、藤村が堂々とわたしが遙の恋人であると宣言してしまったのだから。

「で、こちらが柳田さん？ こいつの携帯の受信履歴で女性といえは、あなたしか見当たりませんからね。他の女性のメールは即削除ですよ。あはははっ！ そうか、この人が柳田さんか。予想通り、しっかりしててかわいらしい人だ。藤村、柳田さんに会えてよかつ

たな」

「そ、そんな、べ、別に……」

「何が別に……だ。おまえ、今日はこの後、がんばりがいがあるな。次の試合のパスはおまえを中心に回すから、遠慮なくバンバン決めるよ」

優しそうな顔をして、藤村の背中を思いっきりバシッと叩いてからかう二ノ宮さんだが……。今、とても興味深いことを耳にしたような気がする。

藤村の携帯に誰の受信履歴が残っているって言った？

「せ、先輩、勘弁してくださいよー！。今ここでそんなこと言わなくても……。先輩に見られた時、たまたまこいつのメールが残っていただけで。それに他の女性からなんて、滅多にメール来ないですから。俺はバスケ一筋だって、いつも言ってるじゃないですか。変なこと吹きこまれたら困りますよ。こいつらが誤解するじゃないですか」

「たまたま？ いや、いつ見ても、柳田さんのメールしか残っていないと思うけど。おまえがどこでも携帯を置きっぱなしにしてるから、仲間に覗かれて、冷やかされるんだろ？」

「そりゃあそうですね……。た、大変だ、時間が無い」

壁にかけてある時計を指差してわざとらしく慌てる藤村が、どことなくおかしい。

「先輩、もう行きましようよ。じゃあ、二人とも中に入って待ってるな。ちよつと事務所に寄って、また戻ってくるから。それじゃあ、応援よろしくな！」

その時、ほんの一瞬だったけど、いや、見間違いかもしれないけど。藤村の左手が、やなつぺの背中に触れたように見えた。

それと同時に、やなつぺははつと息を呑み、遠ざかっていく藤村をじつと目で追いながら、その場で棒立ちになっていた。

「やなつぺ？ 大丈夫？」

息もしていないんじゃないかと思えるくらいカチカチに固まって

藤村を見ているやなっぺの意識を確認するため、彼女の顔の前で手を上下に振ってみた。

「やなっぺ？ やーなーっぺ！」

「あ……。柊。あたし、あたし……」

我に返ったやなっぺが、深く息を吸い込んでゆっくりと吐き出した。

「今の見た？ 見たよね？ なんだか夢みたい。たった今だけど、ポンって。藤村が背中をポンってしてくれたんだよ。こんなの初めてだ。藤村からあたしに触れたの、ホントに初めてなの。昔、ほんのわずかの期間だったけど、彼と付き合ってた頃、実は手もつないだことなくて。あたしが藤村の腕にしがみついたら、やめろって振り払われた。怖い顔して、睨まれて。完全に拒絶されたんだ。それに、それに……。あの二ノ宮っていう先輩、言ってたよね？ 藤村の携帯にあたしの履歴が……」

やなっぺが声を震わせ、涙で潤ませた目をわたしに向ける。

「うんうん。やなっぺの履歴だけ残ってるって。それってやっぱ、そういうことだよな。やなっぺのこと、悪く思っていないって証拠だと思う。っていうか、気になってるのかも。藤村の気持が、やなっぺに向き始めたのかもしれないよ」

二人がメールのやり取りを頻繁に行っていたのは知っていたけど、まさかそこまで親密になっていたなんて。おまけにさっき先輩にからかわれている時の藤村は、耳まで真っ赤になって恥ずかしそうにしていた。

「やだ、柊ったら！ そんなこと言われたらあたし、その気になっちゃおうし。でもね、ぬか喜びはしないって決めてる。それに藤村のいやがることも絶対しないってね。これ以上、むやみに彼との距離を縮めたりはしないつもりなんだ。あたしもいろいろと学習したからね。高校時代は彼しか見えなかったから、なんとか振り向いて欲しくて、突っ走るやり方しか知らなかったけど……。高校卒業して東京に出て来て、いっぱい友達に囲まれて。男の人の心理とかも少

しは理解できるようになったと思う。もし今回のこの旅行で藤村に拒否されたら、きっぱりとあきらめるつもりだった。だから今、すんごく幸せだよ。だって考えてもみてよ。背中をポンってされただけだよ？　なのに、こんなに幸せな気持ちになるなんて、信じられない！　他の男友だちとは、一晩寝てもこんな気持ちにはならなかったのに」

や、やなっぺ………。いったい誰と、その、一夜を共にしたと言うの？

やなっぺのことだもの。そういった経験もあるだろうとは思っていたけれど。でも、そうだったこともさりげなく語れるやなっぺは、やっぱりすごいと思った。そして彼女の正直さが、ちょっぴりうらやましかった。

試合の結果は予想通り実業団チームの勝利で締めくくられた。でも途中、選手交代で出場した藤村は、立て続けにポイントを稼ぎ、学生チーム内の得点王になった。

たとえ負け試合であっても学生チームの健闘は誰の目にもあきらかで、監督の表情も満足げにほころんでいたのが印象的だった。

このあと、宿舎近くの体育館に移動して、まだ練習メニューが続くらしい。せつかく来てくれたのに街の案内も出来なくて悪いな……とすまなそうに謝る藤村だったが、一週間後には実家に帰るからその時にまた連絡すると言って、姿が見えなくなるまでいつまでもわたしたちを見送ってくれた。

いや、実際藤村はわたしのことなどどうでもよくて、やなっぺを見送っていたのだと思う。二人の間には、あきらかに今までとは違う風が吹き始めているように感じた。

その夜わたしとやなっぺはホテルの近くの繁華街に繰り出し、地元にもある居酒屋チエーン店に入った。

本当はガイドブックに載っている有名どころに足を運びたかったのだけど、予算が乏しい学生には残念ながらこの居酒屋がちょうどいい。

今夜は久しぶりに飲めそうな気がする。前に本田邸で飲みすぎて以来、ほとんどアルコールを口にしていないが、ちよつとハメをはずしたい気分がむくむくと湧いてくる。

「なんかね、今までの悩みがすべて吹っ切れた気分。だって今日みたいな日が来るなんて、ずっとありえないって思ってた。あたし、決めた。もう迷わないっ!」

やなっぺはいつものようにビールをぐびぐびと豪快に飲み干し、ゴンと派手な音を立ててジョッキをテーブルに置いた。

彼女の場合、あまりにも唐突に、理解の限度を超えた言動を放つことがあるのだ。決めた？ もう迷わない？ いったい何が言いたいのか。ほろ酔い気分のわたしには、彼女の心の動きがさっぱり読めない。

解読不能なまま、ついついビールの泡が付いたやなっぺの口元に視線がいつてしまう。

ペロツと泡をなめたやなっぺが、意味ありげににっと笑った。そして言ったのだ。きっぱり、はっきりと。真っ直ぐにわたしの目を見て。

「あたし、アメリカに留学する」

やなっぺのとんでもない宣言を聞いた次の瞬間、空になったチューハイのグラスがわたしの手からすんと抜け落ち、テーブルの上に氷が撒き散らされた。

63. かわいいそんな赤信号 その1

「あたし、アメリカに留学する」

それは、やなっぺの留学宣言を耳にした瞬間に起こった。

手からするつと抜け落ち、テーブルに横倒しになったグラスを慌てて真つ直ぐにする。

撒き散らした氷を寄せ集めようとおしほりを手にしたとたん、すぐに駆けつけてくれた店員さんが、大丈夫ですかと気遣いながらてきぱきと後始末をしてくれた。

元通りになったテーブルを見てホツとしたのも束の間、やなっぺと目が合ったとたん、今しがた彼女が口走った言葉が再び蘇る。あたし、アメリカに留学する……と。

そっか、やなっぺは留学するんだ、などのん気に構えている場合ではない。

留学、つまりそれは日本を離れるということ。旅行とかではなく、長期に渡って彼女と離れ離れになる、ということなのだ。

予想をはるかに越えるやなっぺの発言が、わたしの脳内をぐるぐると駆け巡った。

「アメリカに留学って、い、いったい、どういうこと？ ねえ、やなっぺ。わたしには、よくわからないんだけど。そんな話、今始めて聞いたし。ちゃんと説明して！」

慌てふためくわたしをよそに、やなっぺは少しも動じない。

「んもう、柊ったら。そんなに驚かないですよ。まあ、家族以外に打ち明けたのは柊が初めてなんだけどね。あたしさあ、前から思ってたんだけど、なんか物足りない毎日でさ……。で、デザインの勉強をもっとやりたいなあって、そう思ってた。ならば、アメリカだなと思ったんだ」

そりゃあ、アメリカとかヨーロッパとかの方が、やなつぺの目指す分野は日本より進んでいて、興味も広がるのだろう。

でも、どうして今なの？ やつと藤村ともいい感じになってきたばかりだというのに。

「ねえ、柊。藤村のことだけどさあ。あいつ、きつとこのままで終わらないよ。将来は実業団チームに入つて、日本代表メンバーを指すつもりなんだと思う」

「日本代表メンバー？ そ、そうなんだ……」

「それに、昔から言つてたNBAも視野にあるはず。だからあたしも、そんな藤村にふさわしい相手にならなきゃだめだな、つてね。ポップアートやテキスタイルデザインなんかもつと勉強したいし、だからつて、これだけを一生やりたいというわけでもないんだけどね。何を見ても何をやつても興味津々だし、手付かずの未開の部分にも踏み込んでみたいんだ。そのためにはやつぱ、留学が一番だと思つてさ。向こうで通う学校も、もう目星つけてるの」

そこまで考えていたなら、もう少し早く相談して欲しかった。

今まで何も言つてくれなかったやなつぺに対して不機嫌になる。

そんな大切なこと、どうして今まで黙つていたのと。

「あたしだつて、もつと早く柊に聞いてもらいたかった。でもね、最近の落ち込んでる柊に、こんな相談できたと思う？ あんたさあ、自分の事で相当参つてるのに、こんなぶつ飛んだ相談なんてされた日には、ますます落ち込むに決まつてるじゃない。ねえねえ、柊。」

この数ヶ月であんた、いつたい何キ口瘦せたの？ そんなことないなんて言わせないからね！ 柊と堂野のことは高校の時からずっと見てるんだし、今更こんなこと言いたかかないけどさ。もし相手が堂野じゃなかったら、とつくにあんな男とは別れるつて叫んでる。あんなたちの絆がどれほど深いかわかつてるからあたしだつていろいろ言いたいこと、我慢してるんだよ。こんなとんでもない恋愛、あたしには絶対耐えられないし、狂つてるとしか思えない。……でも、それでも好きなんでしょ？ 堂野のこと」

一気にまくし立てるやなっぺに圧倒されながらも、そのとおりだと頷くしかなかった。

そこまでわたしと遙のことを心配してくれてたやなっぺの優しさに胸が熱くなる。

彼女の言うとおり、この春から三キロも痩せた。

もともとあまり太れない体質なのか、何か心配事があるとすぐに体重が落ちてしまう。

スカートもパンツも借り物のようにブカブカしてはじめてみともないのは、とつくに気付いていた。

このままではいけないと思っっているけど、だからと言って、すぐさま解決方法が見つかるわけもなく。

「柊はこの先どうするの？ 今月末、また東京にもどるとしても、堂野とはもう一緒に暮らさないの？」

「うん。当然無理だと思う。……会つのも」「会つのも？ なんで？ 藤村も言ったじゃん。堂野がかなりまいてるって」

「そうなんだけど、会わない。会えないの……」

「やっぺおかしいよ、あんたたち……。柊、何かあったでしょ？ 事務所から何か言われた？ ねえ、いい加減白状しなさいよ。堂野と会うとか、言われたんじゃないの？ そうでしょ？ そうなん

でしょ？」

やなっぺにこれ以上隠し通すのは無理だとわかっている。

ここまで来て、やなっぺがおとなしく引き下がるとは思えない。

わたしは覚悟を決め、真実を話し始めた。

「やなっぺ、お願い。今から言うこと、遙はまだ何も知らないの。だから彼には言わないで。もちろん、藤村にも内緒にしておいて欲しい。マネージャーの牧田さんとわたしの。二人だけの、秘密なの」

「ひ、ひ、秘密？ 何それ？ 多分、そんなことだろうとは思ってたけど。で、はい、わかりましたって引き下がったの？ 何を言われたか知らないけど、ありえないっ！ それじゃあ、堂野がかわい

そつだよ。ちゃんとこれからのことを話し合つて、仕事とプライベートをきつちり分けて考えなきゃ。周りにいいように扱われて、あんたたちの心と身体はズタズタに引き裂かれてしまふよ。それでもいいの？」

やなつぺの怒りも理解できる。けれどもあの時わたしは引き下がらなかつたら、遙はあの世界に居続けることはできなかつただろう。モデルを辞めさせられることは仕方ないとしても、遙の長年の夢であるマスコミ関係の仕事に就くことさえ叶わなくなるかもしれないのだ。

彼の将来を考えれば、わたしの判断は間違つていなかつたと思つ。

64・かわいいそんな赤信号 その2

わたしは牧田さんに言われたことを全て包み隠さずやなっぺに話した。

遙が雪見しぐれと付き合っているという方向で話がまとまった本当の理由も。

「なるほど……。そうだったんだ。柊も、苦勞するね。堂野も、なんでまたそんなどろどろした世界に飛び込んだんじゃったんだろうね。あいつもバカじゃないし、きっと柊の行動を見て、それとなく真実を察してるんじゃない。それでなかったらあいつ、なりふり構わず、すぐにでもあんたのところに飛んで帰ってくるはずでしょ？ おとなしく待ってるタイプじゃない。にしても、まいったなあ……。とても素人には太刀打ちできない問題だよ。どうしよう。困った、困った」

やなっぺと藤村の恋の進展を祝って陽気に飲み明かす予定だったのに、わたしのせいで重い空気に包まれる。

続きはホテルで飲みなおそうと決め店を出た時、まだ夜の九時を回ったばかりだった。

ホテルに着くや否や、やなっぺの携帯にメールが届いた。やなっぺの顔がぱつと輝く。

明日の午後なら自由時間をもらえそうだと嬉しそうに伝えてきたのは、やっぱり藤村だった。ということとは……。

ここは友人として大いに気を利かせるところだろう。わたしの器量が試される場面でもある。

明日の朝、ホテルをチェックアウトした後、わたしだけ一人で先に家に帰ろうと密かに計画を企てる。

留学するまでに、彼女の長年の恋心が実を結ぶことを祈って……。

予定通り、やなつぺより一足早く旅行から帰って来たわたしは、次の日の朝、いつものように七時に起きて弁当を用意し、図書館のバイトに向う準備をしていた。

玄関で腰を屈めサンダルのストラップを留めていると、背後に誰かの気配を感じた。

「送ってやる」

父さんだった。ついさっきまでパジャマ姿で新聞を読んでいたはずなのに、いつの間に着替えたのだろう。

いつもより少しカジュアルな装いで身支度を整えた父さんが、ぶっきらぼうにつぶやく。

遙の口調にそっくりだった。

「送ってくれるのは、嬉しいんだけど……。でも父さん、仕事は？」

今日は平日だよ？」

父さんは市役所勤務をしている地方公務員だ。

勤務時間もきっちりしていて楽な職場の代表格のように巷では言われるけれど、あいにく父さんの部署は休みも少なく残業も多い。

人員削減の余波で日曜祝日の出勤も多く農作業も思うようにならないと、昨夜遅くに晩酌をしながら洩らしていた。

「仕事か？ それなら心配いらぬ。久しぶりに休暇を取ることにしたから。たまには休まんと。図書館の近くに用があるから、乗っていきなさい」

父さんは玄関脇にぶら下げている車のキーを素早く掴み、瞬く間にわたしの横をすりぬけて家の裏手にある車庫に向って行った。

父さんはこうと決めたら、異常に行動が早い。それに合せて周りの者もさっさと動かないと、いわれの無いとばかりを受けるのはいつものことだ。

わたしはサンダルのストラップのサイズを調整する間も与えられないまま、父さんの後を追って家を飛び出した。

同じ世代の友達が、臭いだのだらしないだのみな口をそろえて父親を非難するけれど、わたしは父さんとの関係は決して悪くないと思っていた。

学校であつたこともすべて話すし、父さんも職場のおもしろい仲間のことや自分の子供時代の話なんかを、いろいろ聞かせてくれたりした。少なくとも、東京に行く前までは、とても良好な父娘の関係だつたと思つていた。

ところが遙との一件が明るみに出て以来、父さんが寡黙になつたような気がするのだ。

夏休みになり実家に帰つて来てからも、ほとんど会話がない。まだ遙とのことを怒っているのだろうかと勘ぐつてしまつくらい、機嫌が悪い。

父さんと車の中で二人つきりになつても何も話すことはなく、気まずさだけが車内に充満してくる。

「長野はどうだつた？」

父さんの一言で、やつとのこと重圧から解放される。

「うん、まあまあ楽しかった。夜はこつちより涼しいよ」

「そうか。昔、おまえと遙と希美香を連れて、よくスキーに行ったな。梅池、白馬、志賀……。そうだ、野沢温泉にも行ったよな？」

「……そうだね」

ただ昔の話をしていて、遙の名前がひよっこり顔を覗かせただけなのに。心臓が小さく、トクンと鳴った。

顔が熱い。たったそれだけのことで落ち着きを失くし、そわそわしてしまう。

父さんがそんなわたしの様子を横目でちらりと見たあと、つけていたFMのスイッチを切った。

「なあ、柊。なんで遙はまだ帰つて来ないんだ？ 隣に電話もかけてこないそうじゃないか。綾子さんも嘆いているぞ。おまえもおま

えだ。どうして遙を東京に一人残しておくんだ。あいつのこと、見てやらんでいいのか？」

「それは、その……」

まさか父さんがそんなことを言い出すなんて思ってもみなかった。わたしが一人で実家に戻ったことが父さんの気に障ったのだろうか。わたしだけでも帰省した方が父さんも安心すると思ったのに……。

「あのね、父さん。遙と一緒にいてもよかったんだけど、一日でも早く、父さんや母さんやおばあちゃんに会いたかったし……。遙はね、多分、もうすぐしたら帰って来るはず」

「もうすぐって、いつだ？ もう九月だぞ。夏休みが終わってしまっじゃないか！」

父さんの荒々しい声が胸に刺さる。

「父さん、あ、あのね、遙だったら、急に仕事が忙しくなって。休みが取れないみたいなの。それに、わたしが一緒にいたって、邪魔になるだけでしょ？」

差しさわりのない答えを返したつもりが逆効果だった。父さんの鼻息は、ますます荒くなる一方だ。

「遙がおまえを邪魔者扱いにしたのか？ どういうことだ！ けしからん奴だな。大方、あのきれいな女優と噂されて、鼻の下でも伸ばしてるんだろう。今度こそ一発殴ってやるからな。遙の奴、覚えておけよ。……」

よりによって信号に差し掛かるたび、赤に変わっていく。何の罪もない信号には気の毒だが、しばらくの間、父さんの悪態が静まることはなかった。

65・親心 その1

「柀……。おまえ、遙とうまくいつてるのか？」

ようやく信号が青になり、車が徐々にスピードを上げる。

少し落ち着きを取り戻した父さんが、前を見たまま冷静な口調で訊ねた。

もしかして父さんは、これが聞きたいがために車を出してくれたのだろうか。

用事は口実で、わたしと二人きりで話がしたかったのかもしれない。

「父さんには、おまえたち二人がうまくいつてるようには見えないぞ。おまえの笑顔もめつきり少なくなっただし……。何かあったのか？ 母さんも心配してるぞ」

長野でやなっぺに言われたことを、そのまま父さんにも指摘されてしまった。

わたしって、そんなにもわかりやすい態度を取っていたのだろうか。

両親の前では、いつもどおりに振舞ってきたつもりだったのに、全て見抜かれていたの？

「あいつがそんな奴だったとは思いたくないが、おまえをたぶらかした拳句、用済みになって捨てた……。とかいうんじゃないだろうか？」

父さんの運転が、またもや乱暴になってきたように思う。

ハンドルにかけた指が気ぜわしく上下に動き、イライラしている様子が伝わってくる。

「それは違う！ 遙はそんな人じゃない。父さん、お願い、遙のこと信じて。確かに今は、いろいろ事情があつてしばらく会ってないけど。でもわたしたち、離れていても気持ちは繋がってる。遙はね、仕事をきちんとして、もっともっと経済力をつけて。父さんにわた

しとのこと認めてもらおうと思って、一生懸命がんばってるの。だからわたしも、多少の寂しさは我慢するつもり。そういうことだから」

わたしはきっぱりと言い切った。牧田さんに言われた内容には触れなかつたけど、嘘は言っていない。

「それは本当なのか？ あいつは本当に、おまえを大事にしているんだな。それならいいが……」

「本当だつてば」

「父さんはな、おまえにだけは、絶対に幸せになつてもらいたいと思つてるんだ」

「父さん……」

急に元気のない声になつた父さんをそつと覗き見る。

父さんは寂しそうな目をフロントガラスに向け、淡々と話し続けた。

「やつとのこと、おまえを授かつて、喜んだのも束の間。なかなか次の子が出来なくてな……。母さんには、それはそれはかわいそうな思いをさせたんだ。あれは無類の子ども好きだろ？」

確かに母さんの子ども好きは誰もが認めるところだ。

昔、保育専門学校を卒業した母さんは、保育の資格を持っている。

今は保母さんとは言わないの、保育士と言うのよ。

と笑顔で話しているのを、つい最近も聞いたばかりだ。

実際に現場に出て働くことなく父さんと結婚したので、子育てが母さんの保育士としての唯一の実践の場だったのだらう。

「父さんが子どもは柁一人で十分だよと言つても聞き入れなかつたんだ。おまえを一人っ子にさせたくない、是非とも姉妹を作つてやると言つてきかなかつた。不妊治療も受けたし、あれこれと民間療法もためした。でもとうとう、二人目の子供は授からなかつた。それ以来二人で決めたんだ。柁を大切に育てて、世界一幸せな娘にしてやろうつて。自由になる金はなくても、精一杯の愛情を注いで心豊かな人間になるように、つてな。姉妹、兄弟がいなibun、おま

えが寂しくないように、遥や希美香もひっくるめて一緒に育てようと今までやってきたんだ。それが……だ。良かったのか悪かったのか、おまえのためにも思っていてきたことが、こんな結果になって返って来るとはな。誰が何と言おうと、許せん！ 遥の野郎、よくもかわいい我が娘を手籠めにしやがって……」

涙が溢れそうになるのをどうにか堪えて、父さんの言葉をひとつひとつかみ締めて聞いたのだが。

手籠めに……は、ない。あまりにもひどすぎる。

遥は決して無理強いはしなかったし、どこまでも紳士で、わたしの気持を尊重してくれた。

ここは何としても彼の潔白を証明しなければならない。

「父さんのわたしへの気持ち、わかった。こんなに幸せな娘は、日中中探したって、そんなにいないよ。父さん、心配かけてごめんねでもね、遥のこと、あまり悪く言わないで。遥はその……。手籠めにしたり、とかは、ないから。絶対にありえないから。そうだ、父さん。もしかしたら、わたしが遥の気を引こうと色っぽく迫ったのかもしれないよ？」

きつとそうだ。自分でも気付かないうちに、女の魅力全開で遥を誘惑していたのかもしれない。

「お、おまえなあ。自分のことわかって言ってるのか？ それこそありえないだろう。母さんも綾子さんも言ってたぞ。遥がおまえのどこに女を感じたのか、今でも謎だな。おまえたちはずっと一緒にいたから、適当に近場で手を打った。他を見るチャンスがなかったんだ。結局、視野が狭いだけ……ということだ。そうだろ？ 違うとは言わせんぞ。それに父さんは、おまえが男を誘惑するようなそんなふしだらな娘に育てた覚えはない！ 誘惑なんて芸当、おまえに出来るわけないだろ！」

「た、多分……」

父さんの怒声にびくっとして、思わず肩をすぼめる。

もちろんわたしは、ふしだらな娘ではない、と思う。

でも結果は……。決して品行方正な箱入り娘のまま、今を迎えているわけではないけれど、乱れきった秩序の無い生活をしているわけでもない。

そうか、わたしが誘惑するという逆パターンは、やっぱりありえないのか……。

確かに、父さんの言うとおりだ。

遥がわたしのどこに魅力を感じているのか、未だにわたし自身もわからないままなのだから。

それにしても、ひどくない？ みんな揃いも揃って、わたしに女としての魅力がないと思ってるなんて、こんな失礼なことはない。

遥がわたしでいいって言っているのだから、外野は黙って欲しい。

東京ではこれでも、いろんな人にかわいいねって言ってもらえるんだから！

わたしは父さんに見破られないようにこっそりと頬を膨らませ、年がいもなく反抗期の子どものようにすねてみた。

66・親心 その2

次の信号を右折すると図書館が見えてくるはずだ。レンガ造りの建物が次第に目の前に迫ってくる。

おみやげは野沢菜漬。保冷剤も入っているのですっしりと重い。長野と言えば真っ先に思い浮かぶくらい、野沢菜漬はわたしの大好物だ。迷うことなくこれを選んだ。

お世話になっていている職員の人数分が入った袋を持ち、図書館の駐車場前で車を降りる。

仕事が終わったらなるべく早く帰って来いよと力なく言う父さんの横顔がどこか哀しそうで、いつまでたってもその姿がわたしの脳裏から消えることはなかった。

このところ図書館を訪れる人は激減し、午前中は貸し出し業務も随分楽になった。

八月の終わりごろには夏休みの宿題の仕上げのため、あるいは受験勉強のためか、小学生や中高生があふれんばかりに来館し、あんなに大忙しだったというのに、今は嘘のように静寂が訪れていた。

昼休みは交代で取る。休憩室で顔を合わせた人から順番に、野沢菜漬けを配った。

最後のひとつは一番世話になっている江島さんの分だ。

缶コーヒーをおいしそうに飲んでいる彼女に、どうぞと差し出した。

「ああ、ありがと。ホント、蔵城さんって、気が利くわね。あたし、野沢菜大好きなの。お酒のあてによし、ご飯によし。これがあれば他に何もいらないでしょ？ 一人暮らしにとつて、必須アイテムのひとつなのよね。にしても、蔵城さん。女友だちと行ったって、ホントなの？ 実は、彼氏と行ったんじゃない？」

わたしの言ったことを全く信用していない江島さんは、疑いのまなざしをこちらに向け、ひやかすのだ。

まあ、ムキになって言い争うようなことでもないし、携帯で撮ったやなっぺとのツーショットを見せて、どうにか信じてもらえたようだったが……。

夕方になり、学校帰りの学生たちが増えたためか、館内が少しざわつき始める。

友達同士で来ている女子高生も、ついつい気が緩んでしまうのだろう。次第に話し声が大きくなり、仲間内で盛り上がりすぎて甲高い笑い声が館内に響き渡った。

そんな時江島さんが、ささっと彼女たちの前に近寄り、静かにしてくださいと注意をするのだが、素直にごめんなさいと謝る女子高生たちに安堵すると同時に、今の若者も捨てたもんじゃないな、などと微笑ましく思ったりもする。

「あの、すみません。ちょっとお訊ねしたいんですけど」

髪を後にひとつに束ねた三十代くらいの母親が、子どもの手を引いてカウンターにやって来た。

江島さんはまだ戻ってきていない。他の職員もそれぞれの業務に忙しく、今はわたししか対応できない。

「何かお困りでしょうか？」

江島さん、早く戻ってきてと願いながら、目の前の母親に事情を聞く。

「この子と一緒に、道端の草花の名まえを調べたいのですが。何かいい植物図鑑はありませんか？」

「あちらに図鑑の書架がありますけど」

今ではすっかり本の位置を把握しているわたしは、図鑑のあるあたりを指し示した。これくらいならわたしにも対応できる。

「ああ、あそこには行ったんですけどね。どれも難しく、よくわ

からないんですよ。ひらがなが多いほうが助かるんだけど……」

母親は困ったように額に皺を寄せ、子どもと顔を見合わせた。

それならば、児童書のコーナーにも植物図鑑があったはずだと思
い出す。

わたしはその親子を誘導するため、貸し出しカウンターの席を立
った。

植物の特徴をよく捉えた手描きイラスト入りの図鑑を探し出し、
母親にそれを手渡した。すぐにページをめくる彼女に、柔らかい笑
顔が浮かぶ。

「これがいいわ。写真だと意外とわかりにくいよね。イラストの
方が特徴がよく出てて、わかりやすいわ。あつ、このツルのような
植物。ヘクソカズラっていうのね。ふふふ、おもしろい名前だわ。
いい図鑑を探してくださってどうもありがとう。もうちょっと見て
から、借りるかどうか決めるわね」

そばのテーブルで図鑑を広げ、親子で頭をつき合わせて楽しそう
に見ている。

こうやって利用者に満足してもらえると、わたしまで満たされた
気分になる。もっともっと役に立てるよう、勉強しなければとも思
う。

楽しそうに語り合う親子を残し、ひと仕事終えた気分分でカウンタ
ーに戻るうとした時だった。

江島さんがいかにも慌てているような落ち着きの無いそぶり
で、彼女の前にいる人と話していた。

どうしたのだろう。あきらかに彼女が動揺しているように見える。
カウンターからかなり離れた位置にいるわたしにも、江島さんの異
変が手に取るようにわかった。

利用者からのクレームだろうか？ 徐々にカウンターに近づくわ
たしと目が合ったとたん、江島さんが立ち上がり、大きく手を振っ
てこっちこっちと手招きする。

大声で呼べないのがもどかしいとでもいうように、オーバリア

クッションで手を振り続けるのだ。

そしてカウンター前に立っているその人もこちらに振り返った。まるでスローモーションのようにその人が身を翻し、わたしと視線を合わせる。

ゆっくりと、そして大胆に。

よく知っているその人が柀と呼んだのを、わたしは聞き逃さなかった。

67・このままとけてしまいたい その1

「ひいらぎ……」

江島さんと話していたその人が振り返り、わたしを呼んだ。

なんで？ どうして？

ここにいるはずのないその人を視界に捉えただけで、呼吸が乱れ、心臓が暴れ始める。

わたしは知っている。その人を誰よりもよく知っている。

遥……だ。

なぜ遥がここにいるの？ わたしの中で、疑問がぐるぐると渦巻く。

館内では走らないで下さい、という注意書き掲示ボードに貼ったのは、まぎれもなくこのわたしなのに、いつの間にか小走りで遥のもとに駆け寄っている自分がいた。

「蔵城さん……！ もうっ、ほんとに、どこに行ってたのよっ！」「興奮した江島さんが、叫びたいのを必死で堪えるようにして、小声でまくし立てる。

「す、すみません。お客様に頼まれて、児童書のコーナーに……」

「あー、児童書ね。急にいなくなっちゃうんだもの、びっくりする

じゃない。それはそうと、この方が、あなたに用があるっておっしゃっているんだけど……」

江島さんは、声を潜めながら遠慮がちに遙を見上げた。

どうしてあの堂野遙がここにいるの？ と、混乱しつつも説明を求めような目をして。

遙との関係はまだ何も彼女には知らせていないのだからそれも無理のないことなのだけだ。

「は、遙。どうして、こんなところにいるの？ 仕事は？ 牧田さんは？ 家には、もう帰ったの？ 来るなら来るって、なんで連絡してくれないのよ。心配してたんだよ？」

わたしだって江島さんに負けなくらい動揺している。

なぜ東京にいるはずの彼がここにいいのか、全くもって理解できないからだ。

訊きたいことがありすぎて、矢継ぎ早に質問ばかり投げつけてしまっ

「おい、柊。落ち着けよ。一度にそんなにいっぱい訊かれても、答えられない。なあ、柊。俺には時間がないんだ。今から、ちょっとだけいいか？」

突如わたしの腕を掴んだ遙が、無謀にもわたしをどこかに連れて行くこととする。

そんなことが許されるとでも思っているのだろうか。

バイトであっても仕事中には変わらない。

あと二時間は与えられた業務を遂行するため、館内から出ることが不可能なことは、遥も理解できるはずだ。

「だ、だめだって。遥、やめて、お願い。だって、ここは図書館だよ。わたしは仕事だし、みんなも、見てるし……」

さっきから感じていた複数の視線のありかを遠巻きに確認する。

カウンター近くの席についている女子高生グループが、不思議そうにこちらを見てこそこそと耳打ちしながら様子を窺っているのだ。

するとその中の一人が立ち上がり、遥に向かって指をさした。

「ねえねえ、あの人もしかして、堂野遥じゃない？ きつとそうだよ！」

それにつられて、みんなが口々に遥の名前を連呼し始めた。

「ホントだ。堂野遥、本人だ。なんでこんなところにいるんだろ。つてことは、雪見しぐれもいるのかな？」

「ええっ、どこどこ。雪見しぐれ、どこにいるの？」

俄かに館内がざわつく。

わたしから慌てて手を離れた遥が女子高生から顔をそむけたのだが、

後の祭りだ。

「さあ、二人とも、よく聞いて。ここにいたらまずいんじゃない？
奥の小会議室に移動するのはどうかしら。蔵城さん、午後の休憩、
まだ取ってないでしょ？　じゃあ、今から休憩タイムということ。
さあ、早く。こっちこっち。短い時間だけど、有効に使ってね」

機転を利かせた江島さんが、素早くわたしと遥を小会議室へと誘導
してくれた。

危機一髪だ。全国的にはまだマイナーな遥も、地元では相当その名
が知れ渡っている。

遥が雪見しぐれではない女性と一緒に、それも公共施設内で密会な
どと噂されるなどもってのほかだ。

あのテレビ報道の一件から、興味本位で騒ぎ立てる人が後を立たな
い。

どうやって調べたのか、ファンと名乗る女の子たちが遥の実家にま
で次々と押し寄せる始末なのだから。

わたしはあくまでも職員のスタンスを崩すことなく機敏に行動し、
江島さんの指図に黙って従った。

会議用の長机がコノ字型に並ぶ部屋のまん中で、立ったまま遥と向
き合った。

ここにはわたしと遙以外、誰もいない。

十人も入れれば定員いっぱいになる小さな部屋が、今日はなぜかとても広く感じた。

遙に会うのは何日ぶりだろう。久しぶりに見る恋人はまるで別人のようで、薄っすらと日に焼けたシャープな顔立ちをわたしに向ける。

連日の暑さとハードな仕事で体重が落ちたようにも見える。

「突然で悪かったな……」

いつもの声だった。低くて淡々として……。

わたしのよく知った、なつかしい彼の声が室内に響いた。

「遙ったら、何も言わずに急に図書館まで来るんだもん。ホントにびっくりした。心臓に悪いよ」

何のためらいもなくわたしをまっすぐに見つめる遙の瞳が眩しくて、つい目をそらしてしまう。

「藤村から聞いた」

「な、何を聞いたの？」

確固たる意志を持って断言する遙に、わたしは全てを見透かされているような不安を覚える。

「おまえ、俺に何か隠してるだろ？ 違うとは言わせない。なあ、

柊。事務所から、なんて言われた。牧田さんから何か言われたんだろ？」

じりじりと詰め寄る遙の気力になすすべもない。遙はもう何もかも気付いてしまったのだろうか。

藤村から聞いたと言った。だとすれば、藤村にそのことを洩らしたのは、やなっぺしかない。

やなっぺが藤村に暴露してしまったのだ。

信じていたのに。やなっぺが誰にも言わないって言ったから、だからすべてを話したのに……。

やなっぺがわたしとの約束破るなんて、今まで一度もなかった。

なのに、どうして？ わたしたちはもう、親友じゃなくなったの？

「前からおまえの態度がおかしいと思っていたんだ。今朝、牧田さんに聞いただけ。彼女、さすがだよ。とぼけるばかりで、絶対口を割らない」

「あの、わたし、別に何も言われて……ないけど」

「じゃあ、なぜもっと堂々と胸を張らない。どうしてそんなに萎縮してるんだ。俺が怖いのか？ おまえに久しぶりに会えたのに、なんでもっと嬉しそうな顔をしないんだ。俺とおまえは、こんなにも他人同士だったのか？」

「そうじゃない……けど」

「おい、ちゃんとこっちを見る。俺と会っになって、牧田さんに言われたんだろ？　なあ、そうだろ？」

68. このままとけてしまいたい その2

「そ、そんなこと、言われてない。遙はこれからますます忙しくなる予定だから、今後は、今までどおりには会えないかもって、そんな話はしたけど……。ただ、遙の仕事の邪魔になったらいけないと思っ、なるべく連絡は控えた方がいいのかなって、そう思っただけで……」

「俺の邪魔に？ おまえ、本気でそんなこと考えてたのか？ なんでおまえが俺の邪魔になるんだよ。俺はいつだっておまえのことしか考えてない。もしかして、雪見しぐれのことを怒ってるのか？ あれはちがうと言っただろ。あれから一度だつて、彼女とは会ってない。本田先輩のところへも、もう行ってない。前におまえと一緒に見に行っただろ？ あのマンションに先週移ったんだ。だから早く東京に戻って来てくれ。戻ってきて欲しい。な？ 頼む。今から一緒に東京に帰ろう」

わたしの手を引き、そのままこの部屋から出ようとする。

それが出来るのなら、とっくの昔にそうしている。

出来ないから、ここにいるのに。

遙の立場がなくなるから、東京へはもどれないのに。

「遙はもう、今までの遙じゃないの。記者もあなたに張り付いてるっていつじゃない。ここに来てるのも、すでにバレてるかもしれないのよ。わたしといるところを写真に撮られて、大ごとになったらどうするの？ しぐれさんにも迷惑がかかるんだし、遙だって仕

事を続けられなくなるかもしれないし……」

「ならそれでもいいよ。こんな仕事、こっちから辞めてやる。おまえは俺と離れ離れでも平気なのか？ 寂しくないのか？」

そんなわけ、ない。平気でいられるわけがない。

寂しくて、辛くて。何度心が消えそうになったことか。

抜け殻になってしまった自分が、ただ命を繋ぐためだけに呼吸をしている、そんな毎日だというのに。

何も考えずに、このまま遥と一緒にここを飛び出せるなら、どれだけ気持が楽になることか。

今すぐにでも東京に帰りた。遥のあのマンションで、二人だけで暮らしたい。

でもそれは叶わぬ夢。どうしてそれがわからないの？

「遥、わたしの話を聞いて。遥がもし仕事を辞めたら、遥の周りの人たちはどうなる？ 牧田さんは？ 事務所は？ それに、しぐれさんは？ もちろん、しぐれさんの事務所にも迷惑をかけてしまうよね。遥一人の問題では済まないって、それくらいのこと、あなただってわかってるでしょ？」

遥は片手で髪の毛を掻きむしり、ちつと舌を鳴らした。

思いのままに行動することがどんな結果を招くのか、遥も全てわかっているはずなのに。

どうすることも出来なくて、ここに来てしまったのだろう。

わたしに会うためだけに、姿を見せてくれたのだ。

胸が痛い。遥の苦しみがそのままわたしに突き刺さる。

涙があふれそうになるのを堪え、下を向いたままぎゅっと目を閉じた。

次の瞬間つないでいた遥の手が、わたしからすっと離れる。

そして彼の体が目の前に迫ってきたかと思うと、そのまま抱きしめられていた。

サマーニットのジャケット越しに、慣れ親しんだ遥の匂いがわたしを包む。

サングラスも帽子も着けていない無防備な姿の遥に、1ミリたりとも身動きが取れないくらい、強く抱きしめられていた。

「……………わかってるんだよ。おまえの気持ちも、俺の取るべき態度もでも、俺は……………」

ふと、わたしの背中に回った彼の腕の力が緩み、見上げたたん目が合った。

遠い昔、栗の木の下で見つめ合った時のように頬を染めた遥が、わたしを優しく見下ろしていた。

「今日はこれで帰るよ。柊、おまえ、今月末には東京に戻るんだろ？」

「うん……」

何か吹っ切れたのだろうか。笑顔まで見せる遙にどぎまぎしながらも、こくりと頷く。

「帰る時は連絡しろよ。なんとか時間を作って駅まで迎えに行くから」

「ありがとう。向こうに戻る時はちゃんと連絡する。遙の電話も……待ってる」

「ああ。俺からも電話する。ごめんな、いつも電話してやれなくて……」

「いいの。遙が忙しいってわかってるもの。メールだけでも充分なんだけど。でも、たまには声も聞きたいし」

こんなにも素直な気持になれたのは何ヶ月ぶりだろう。

これまでに心に積み重なった想いを、すらすらと伝えることが出来る。

遙の胸に顔を埋め身体を密着して、やや大胆に甘えてみた。

「……ねえ、遙？ もうこっちには帰れないの？ 夏休み、終わっちゃおうよ。おばあちゃんにもまだ会ってないんでしょ？」

「ばあちゃんにも誰にも会ってない。夏休み中は、もう帰れないかもな。俺、今日、牧田さんの目をぬすんで、移動時間に抜け出して来たんだ。気付けば、新幹線に飛び乗っていた。帰ったら大目玉食らうだろうな。この先まとまった休みも取れそうにないし、後期の大学の講義も、必要単位ギリギリしか出席できそうにない」

「そつだよね。やっぱり無理だよね。遥、忙しいのは仕方ないけど、健康にだけは注意してね。ちゃんと食べて、ちゃんと寝て……」

「おまえこそ……。いまの言葉、そのまま、おまえに返すよ。なんか、抱きごこち悪いような気がする。おまえも痩せたんじゃないのか？」

遥の手がわたしの前髪に触れ、額を掠める。

そのまま頬を撫でて下に降りてゆき、指先が唇にたどりついた。

遥の長い指が、わたしの唇をゆつくりとなぞっていく。

それがわたしであるのを確かめるかのように、執拗に繰り返されるのだ。

永遠に続くのかと思った次の瞬間、そこに彼の唇が重ねられ、再び体が軋むほど強く抱きしめられた。

ああ、このまま、とけてしまいたい。

何も考えずすべてを忘れ去って、遥の腕の中で息絶えてもいいとさえ思った。

私の中の空洞が、すべて遥の愛で満たされていく。

お互いを欲する湿り気を帯びた吐息のベールが、わたしたちをしつとりと包み込んでいった。

69・なんかあの人が好きじゃないわ その1

突如、低く唸るような振動音が二人の空間をよぎり、遙の顔がすと離れる。

「フツ。ここまでか……」

遙は上着のポケットから素早く携帯を取り出し、慣れた手つきで通話ボタンを押し耳にあてがう。

少し間をおいて、普段はあまり聞かないよそ行きの声で話し始めた。

「もしもし……。はい、堂野です……。わかりました。……はい。すぐにもどります」

相手は牧田さんのようだ。

遙とて、こうなるのはあらかじめわかっていたのだろう。

声を荒げることもなく淡々と返事をして電話を切る。

そして次の瞬間、ボタンと乱暴に携帯を閉じ、それを手に握り締めたまま、わたしを抱きしめるのだ。

さっきよりも一層強く。腕を動かすことも出来ないくらいに。

「俺な、ほんとにおまえのこと、好きだわ……。もう、どうしようもないくらい。おまえなしでは生きていけないんだよ。だから、だから、早く俺のところに戻って来て。待ってるから……」

遙はわたしの首筋に顔を埋め、くぐもった声でそんなことを言う。

時が止まった。

体内に取り込まれた酸素さえも行き場を失い、そのまま意識が遠のきそうになる。

立っていることすらままならないわたしは、返す言葉も見つけられず、ただ呆然として彼の腕の中に身を預けていた。

「俺、おまえが戻ってくるの、ずっと待ってるから」

「うん……」

こくりと頷き、見上げた遙の目は。

心なしか涙で潤んでいるように見えた。

「これ以上牧田さんに迷惑かけられないし、そろそろ行くよ。柊、じゃあな……」

ようやく抱きしめていた腕をほどいた遙は、決心したように素早く会議室のドアに向かい、外まで見送ろうとするわたしを制止する。

再びみんなが騒いで、ことが大きくなるのを回避するためだと言って譲らない。

わたしの元から遙が去っていく。

やっと会えたのに、また離れ離れになる。

「はるか……」

ドアのすき間から彼の後ろ姿しか見送ることができないわたしの頬に、涙がほんのひとすじとっつと流れ、ゆっくりと足元に滴り落ちた。

「まさか蔵城さんが、あの堂野遙の親戚だったなんて！ 本当にびっくりだわ」

閉館後の雑務を終え、帰り支度をしていた江島さんが首をすぼめて両手を広げ、まるで米国のホームドラマに登場する俳優のようなオーバーリアクションで、おどけてみせる。

「なんで今まで黙ってたの？ 教えてくれたっていいのに」

「内緒にしてるつもりはなかったんですけど。言うチャンスがなくって、その……」

江島さんに話したとしても、実は彼は恋人なんです……などと言えるわけもなく。

根掘り葉掘り訊ねられるのが怖かったというのもある。

「それにしても堂野遙……おっと、ごめんなさい。やだ、呼び捨てにしちゃった」

ペロツと舌を出し慌てる江島さんは、年上だと思えないくらい、とてもかわいい。

「いや、別に呼び捨てでもいいんです。気にしないでください」

「蔵城さんったら、まるで彼のお姉さんみたい。ホント、あなたたちって家族みたいな関係なんだね。ふふふ。えっと、堂野さん……だけど。彼、かなり慌ててたよね？ 立ち入ったこと聞いて悪いけど、お身内に何かあったんじゃないかと思って。あなたもあの後、落ち込んでたみたいだから……。一緒に帰らなくて良かったのかしら？ 急用の場合は申し出てくれれば、仕事を早めに切り上げて帰ってもらってもいいのよ。バイトだからって、遠慮しなくても……」

家族に不幸でもあったのだらうと、気遣ってくれているのだと思う。

親戚が仕事場に血相を変えて駆け込んでくる理由といえば、それが普通かもしれない。

が、しかし……だ。

残念ながら江島さんのその予想は、全くはずれていると言わざるを得ない。

ただ会いたかったからなどと真実を話せるわけもなく。

なら、どう言えばいいのだろうか？

さっき抱きしめられていた時の余韻がまだ身体中に鮮明に残っているせいだろうか。

気の利いた言い訳が思い浮かばないのだ。

「江島さん、ご心配をおかけして、すみませんでした。彼は、その、たまたまこちらの方面に、仕事で来てたらしくて、あの、その……。実家の家族の様子なんかを、知りたかっただけっていうか、まあそんなところで……。えっと、彼の両親は、モデルの仕事のことをあまり良く思っていないので、わたしが仲介に入ることが多くて、だから、その……」

もう、しどろもどろで、怪しさ満載の返答になってしまった。

冷や汗がぞわりと額を伝う。

70・なんかあの人が好きじゃないわ その2

「ふうん、そうだったの？ なら良かった。そうよね。芸能関係の仕事って、未知の部分も多いし。堂野さんのご両親もさぞかし心配でしょうね」

「ええ、まあ……」

「でも驚きだわ。あなたも彼のこと、もっと自慢して、職員中に言いふらしてくれたらよかったのに。でもあたしも鈍いわよね。あなたと彼が同じ大学に在学中だったというのに、何もピンとこなくてさ。おまけに、さっき携帯でファンサイト見てみたら、彼も西山第一高出身って載ってて。ほんと、あたしって、こういう芸能ネタには疎いのよね。ここの職員として、すべての情報にくまなく精通してなくちゃならないのに、こんなじゃ司書失格だわ。ねえ、そうでしょ？」

司書が芸能ネタに詳しくなければいけないなんて、聞いたことがない。

それもこれも、完ぺき主義、江島さんならではの回答なのだろう。

江島さん自身も西山第一高の卒業生だ。先日わたしが後輩だと知ってからは、ますます親切に仕事の指導をしてくれていた。

このあたりでは、通える高校の数もしている。

道行く人五人くらいに訊ねれば、必ず一人は同窓生にぶち当たるくらい卒業生が多く、珍しくもなんともないのだけれど。

「ああ、なんか今日は、いいことありそう。だって真正正銘、本物の堂野遙に会えたんだもの。ホントにかっこよかった。惚れ惚れしちゃったし。でもやっぱり血は争えないわね。蔵城さんと、なんとなく似てるような気がしたんだけど」

また似てるって言われた。高校の時もやなっぺの第一声がこれだった。

親戚だというと、やっぱりね、という言葉ももれなく付いてくる。

血のつながりはなくても、父さんと遥のお父さんがよく似ているので、自然とわたしたちも似てしまったのだと思う。

父さんが言うには、同じ釜の飯を食べると見かけも中身もそっくり似てしまう……ということらしい。

こうなるとメンデルの遺伝の法則も何もあつたものじゃない。

これ以上詮索されなくなかったので、そうですねと曖昧に返事をし、とにかくその場をやり過ぎすことに気持を集中する。

「彼って、少年のような危うさと大人っぽさが同居してるのよね。魅力的だわ。えーと、雪見なんかかって人と付き合ってるんじゃないかった？ 違う？ これだけは前に雑誌を見たし、テレビでも言ってたから、あたしだって知ってるのよ。もし二人が結婚なんてことになったら、あなたも式にでるのでしょ？ 雪見なんかさんと親戚になるのよね？ でも……。なんかあの人、好きじゃないわ。ツンと澄ましていて、プライド高そう！」

え、江島さん……。

もちろん、しぐれさんがそんな風に誤解を受けやすいタイプだとい
うのは、百も承知だ。

特にあの時のテレビ映りは、そのように受け止められても仕方ない
くらい、無表情で冷たい印象だった。

でも、だからと言って、何もそこまで言わなくてもいいのに、と思
ってしまふ。

江島さんはしぐれさんの本当の姿を知らないから、仕方ないのかも
しれない。

けど、本来のしぐれさんは、もっと自然体で、そしてやさしくて、
きれいで、品位もあって……。

もうこの話は終わらせた方がいいと頭ではわかっているけど、しぐれ
さんをかばう気持が勝手に溢れてくる。

「そんなことないです。しぐれさんは、しぐれさんは……。本当は、
とってもいい人で、やさしくて……」

「しぐれさん？　そうそう、思い出した。彼女、雪見しぐれって名
まえだったわね。で、蔵城さん。彼女のこと、もう知ってるの？」

江島さんの言葉にのせられて、つつい余計なことまでしゃべって
しまったみたいだ。

「あっ、はい……。東京では、その、仲良くしてもらって。今で

も時々メールしたり……。でも、ほんとにしぐれさんは普通の人なんです。テレビでは冷たい感じに見えるけど、普段は表情豊かで、とても優しい人で。料理も上手なんです」

世間一般でささやかれているツンとしてプライド高いお姫様という像は、あくまでもテレビ画面の一部を切り取られて捏造された彼女のイメージだ。

テレビに映し出された状況をそのまま受け取った江島さんに罪はない。

世間の人々は、きっと江島さんと同じ感覚を持っているのだろうと、改めて痛感する。

真実を知らない江島さんは、何のためらいもなく、遥としぐれさんが結婚するという前提で話をする。

悲しいかな、この部分を否定することは、今の私には許されていない。

苦笑いをしつつも、彼女に同意するしかないのだ。

図書館の周囲の繁みから虫の音が聞こえる。

いつの間にかすぐそこに秋が忍び寄ってきているというのに、遥と

の距離はどんどん広がって行くばかりだ。

遥が記者に尾行されていないことを祈りつつ、足早に図書館を後にした。

71・聞こえる

図書館のアルバイトもついに明日で最終日を迎える。

来週からは大学の講義が再開されるので、あさつてには東京に戻る予定だ。

やっと遥に会える。

いろいろと制約はあるけれど、全く会えないわけではない……と思
う。

図書館で出会った人たちとの別れは辛く寂しい。
でもそれよりも、遥に会える喜びの方がずっと大きい。

大急ぎで夕食をすませ、おばあちゃんの家に向かう。

日暮れが早くなった分、まだ七時だと言つのにあたりはすっかり暗
闇で、夜の帳が目の前に広がっていた。

せつかくの夏休みもバイトが忙しかったため、おばあちゃんと話を
する時間すらほとんど取れなかった。

罪滅ぼしの気持も込めて、今夜はおばあちゃんの家泊まるつもり
だ。

大学のこと、バイトのこと。もちろん遥のことも報告する。

おばあちゃんは遙の話をするととても喜ぶ。

だって遙は、おばあちゃんにとって初めての孫だものね。

わたしには、柊が生まれた時が一番嬉しかったよと言ってくれるけど、それはおばあちゃんの優しさであって、実の孫には敵わないことくらい、ちゃんと理解している。

だからこそ、わたしの愛する人がおばあちゃんの孫で本当によかったと思っっている。

蔵城と墨字の表札がかかった大きな門をくぐり、いつもおばあちゃんが過ごしている奥の居間をめざす。

おばあちゃんの住んでいる母屋は、わたしの家とほぼ同じ作りになっている。

玄関がまだすべて土間のままになっているところが、わたしの家との大きな違いだ。

うちは土間を半分つぶして板の間に改築している。

すごく広い玄関、まるで旅館みたいだね　と友だちに言われて、恥ずかしい思いをしたことも二度や三度ではない。

でも土間はとても便利だ。ぬれたくつや傘も気兼ねなく置けるし、雨の日の洗濯干しにも都合がいい。

子どもの頃、ここでままごとをしたり、なわとびをして遊んだのをふと思い出した。

そういえば、棒やスコップで穴を掘って、おばあちゃんに叱られたこともあったっけ。

これはほとんど遥の仕業だったけど、逃げ足の速い遥に置きざりにされたわたしがいつも叱られ役だった。

九月もあと少しで終わる。時折り涼しい風が吹き抜ける土間に立って、おばあちゃんと声をかけてみた。

どうしたのだろう……。

見慣れたサンダルがきちんと揃えてある。おばあちゃんが中にいるという証拠なのに、返事がない。

「おばあちゃん、来たよー！ ひいらぎだよ！」

いつもなら、にこにこしてすぐにここまで駆けてくるのに、何も反応がないのだ。

「おばあちゃん？ おばーちゃんーん！」

何度呼んでもダメだ。返事もなければ足音も聞こえない。

来る途中、通り過ぎた畑にもおばあちゃんの姿はなかった。

だからきつと、この家のどこかにいるはずなのに。

「おばあちゃん、入るよ！」

そう言ってサンダルをぬぎ、素足のまま長い廊下を歩いて、奥の居間に向った。

昼間でも薄暗い居間の電気はついていて。

けれど。やっぱりおばあちゃんはそこにいなかった。

今朝バイトに行く前に、今夜おばあちゃんちに遊びに行くからねと言っておいたのに、どうしていないの？

隣の遥の家に行ってるのかもしれない。

それとも、もしかして、入浴中なのかな？

おばあちゃんは、夕食も入浴タイムもとても早い。

わたしの就寝時刻がおばあちゃんの起床時刻ってこともよくある。

ということとは……。

台所の裏手にある風呂場にいるのかもしれない。きつとそうだ。

わたしが来るまでにすつきりと汗を流そうと思ったに違いない。

わたしは、おばあちゃんおばあちゃんと何度も呼びながら風呂場に

向かった。

何かが違う。

いつものおばあちゃんの家じゃない。

土間と違って、部屋の中はまだまだ暑い。

今日は真夏がぶり返したような一日だった。

首筋にまとわりつく髪が不快感を煽る。

ジージーと音がした。

耳鳴りだろうか？ それとも、虫の鳴き声？

さっきから確かに何かが聞こえるのだ。

それはとても低い音。扇風機のモーター音のようにも聞こえる。

それとも遠くを走る車の音？

な、なんだろう。

わたしはいつになく不安になり、廊下で立ち止まり耳をそばだてた。

足を運んだ台所にも風呂場にも、灯りは点いていなかった。

真っ暗だ。

ここにもおばあちゃんがないということとは。

やっぱり遙の家に行っているのかな。

いや、それは違う。

おばあちゃんは今までにわたしとの約束を破ったことはない。

室内の空気がおかしい。

様子が……違う。

ぽちゃんと音がした。

わたしは飛び上がるほど驚いて振り返る。

あれは、天上のしずくが湯船に落ちる音だ。

ひとつ、ふたつとしずくが落ちる……。

そして、合間にかすめる低い音。

誰かいるの？

脱衣所のカゴをまたぎ、暗い風呂場をのぞいた。

湯船に人影が浮かぶ。

誰？

おばあちゃん？

扉の横にある風呂場の電気をつけてもう一度中を確かめる。

おばあちゃんだ。

おばあちゃんがそこにいた。

湯船につかっただまま浴槽の淵を両手で掴み、そこに頭を載せて低くうめいているおばあちゃんがいた。

「おばあちゃん！ どうしたの？ ねえ、おばあちゃん！」

わたしは咄嗟に、風呂桶の栓をはずしてお湯を抜き、おばあちゃん

の肩にバスタオルを掛けた。

これで、おぼれる心配はない。

病人やけが人をむやみに動かしてはいけないとどこかで聞いたのを思い出し、おばあちゃんをそのままにしてすぐに携帯を握って母さんに電話で知らせる。

「母さん、大変。早く、早く来て！ おばあちゃんが。おばあちゃんか」

携帯を片手にもう一方の手で風呂場の窓を全開にする。

そして隣の堂野家に向かって、誰か来て、助けて、と大声で叫んだ。

母さんが呼んだ救急車がやっと到着した。

実際はそんなに時間はかかってないはずなのに、待っているのはとてつもなく長い時間だった。

おばあちゃんは救急隊員の手によって担架に乗せられ、隣町の総合病院に運び込まれた。

72・早く返事をして その1

仕事場から直接駆けつけた父さんと俊介おじさんが担当医に呼ばれて、たつた今、診察室に入ったばかりだ。

おばあちゃんは応急処置を施され、集中治療室の扉の向こうにいる。医師から親族に病状の説明があった後、息子である俊介おじさんの了承を得て緊急手術をすることになるらしい。

わたしと綾子おばさんは一緒に救急車に乗り込んでこの病院に来た。母さんは卓の世話を希美香にゆだね、戸締りをした後、自分で車を運転して少し遅れて病院にやって来た。

わたしが病院に足を踏み入れたのは、綾子おばさんが卓を出産した時以来だと思う。

消毒液のつんとした臭いと、慌しく行きかう看護師さんたちの足音だけがやけに大きく響くこの空間が、正直苦手だ。

おばあちゃんはどうしているのだろう。

痛くないのかな。寂しくないのかな。

さっきCTスキャンで頭の内部を検査したと看護師の人が言っていた。

脳内出血の疑い、というような内容を耳にしたような気もする。

もしそれが本当だとしたら、素人のわたしでも、おばあちゃんになり危険な容態だと想像がつく。

心臓がドクドクと早鐘を打ち始めた。

怖い。おばあちゃんがこのままどこか遠くの世界に旅立ってしまいうそで、胸が苦しくなる。

しばらくして、父さんが神妙な顔をして診察室から出てきた。

わたしと母さんの顔を交互に見る父さんの目は、厳しい威光を放っているようだった。

「今から緊急手術だそうだ……。俺と俊介はこのままここに残る。おまえたちは一旦家に戻れ、いいな」

父さんの低くかすれた声が、ますます緊張感をあおる。

「おい、柊。遙はどうした。遙に連絡したのか？」

「あ……。まだ、連絡してない」

そうだった。まだ彼とは何も連絡を取っていない。

ほとんど意識がないおばあちゃんを浴室で発見してから病院に運び込まれた今まで、すっかり遙のことは忘れてしまっていたのだ。

一刻を争う状況で、孫の遙に知らせていないのは確かに不手際だった。

わたしはポケットの上から携帯のありかを探った。ところがいつもの場所に見当たらない。

「おばあちゃんの家を忘れてきたのかな？」

いや、そんなはずはない。確かにポケットにいれたはずだ。

「お兄さん、そのことなんだけど……」

なかなか見つからない携帯を探って焦るわたしをよそに、綾子おばさんが疲れきった顔をして父さんに言った。

「さつき電話してみたの。もしたら、あの子、ちっとも電話に出てくれなくて。仕事だか何だか知らないけど、何のための携帯電話なのか。あの子に限って、どういうわけかいつも携帯が用をなさないのでね。柊ちゃん、お願い。あなたから連絡してくれないかな？ その方が、あの子の反応が早いと思うの」

わたしはようやく探り当てた携帯を取り出し、こくりと頷く。

「まったく、あいつときたら。何やってるんだ……。じゃあ柎。早く連絡しろ。おばあちゃんの症状はくも膜下出血だ。脳動脈瘤が破裂したらしい。今夜緊急手術だから、至急帰って来いとあいつに伝えるんだ」

「わ、わかった」

くも膜下出血？

聞いたことはあるけど、詳しいことはわからない。

さっき耳にした脳内出血のことだろうか？

わたしはエレベーターホール横の談話室に急遽移動し、携帯使用許可の張り紙を確認して、遙に電話をかけてみた。

ところが……。

やはり、出ない。撮影が立て込んでると言っていたので、今夜もきつと手が離せないのだろう。

さっき父さんに言われたとおりの内容をメールにしたためて送信ボタンを押す。

これで完了だ。仕事の合間にもメールを確認してくれば、こちらの状況が伝わるはず。

強がってみるけれど、平気な顔をして待つなんて、到底出来っこな

い。

遙、早く。早く返事を頂戴。

遙の声が聞きたい。

一緒におばあちゃんの快復を祈って欲しい。

何も返ってこない携帯を見つめ、わたしは静かにそれを閉じた。

さっき診察室から出てきた父さんと俊介おじさんは、ありえないほど顔色が悪かった。

血の気を失って、真っ青だったのだ。

もしかして、おばあちゃん。命が危ないの？

いや、そんなはずはない。

今日の朝はあんなに元気だったじゃない。

おばあちゃんに限って、そんなことはない。

大丈夫、大丈夫と自分に言い聞かせているのに体中が震える。

足がガクガクして立っているのが辛い。

集中治療室前の廊下で、目を真っ赤にした俊介おじさんが泣き崩れている綾子おばさんの背中をさすっているのが見えた。

そして父さんと母さんが呆然としてその場に立ち竦んでいる。

その光景が、昔なつかしいセピア色の写真のように、わたしの目の前にぼんやりと写し出されていた。

やっぱりそうだったんだ。

おばあちゃんが、ほんとうに危険な状態なんだと、改めて気付かされた。

ああ、遙、お願い。早く返事をして。

このままだと、おばあちゃんが、おばあちゃんが。

天国にいつてしまう……。。

廊下の隅でうずくまり、零れ落ちる涙を何度も何度も指でぬぐった。

73・早く返事をして その2

何かあったらすぐに連絡をしてもらおうという約束で、わたしと母さんは家にもどった。

わたしは自分の着替えと携帯を持って、希美香と卓の待っているところへ向かった。

何も知らない卓はいつもどおり機嫌よくお風呂に入って、さっき寝たところだという。

おばあちゃんの病状を希美香に伝え、卓を真ん中にして、三人で川の字になって横になった。

「お姉ちゃん……。おばあちゃん、大丈夫なのかな？」

希美香も不安なのだろう。

真実を知るのが怖いのか、それを最後に堅く口を閉ざしてしまった。

「大丈夫だよ。おばあちゃんは、絶対に大丈夫。希美ちゃんは、何も心配しなくてもいいんだからね。卓はうちの母さんに預けて、明日、朝一番に病院に行こうね。学校を休めるように、おばあちゃんが先生に連絡してくれるって」

何の保障もないけれど、今はただ大丈夫だよと言うしかない。

希美香が枕に頭を預けながらうんと深く頷き、そのまま目を閉じた。

まだ遥からは何も連絡がない。

いったいどうしたのだろう。あれからもう何時間も経つ。

休憩も取らずに働き続けているのだろうか。

おばさんの言うとおりだ。これでは携帯を持つてる意味がない。

卓がもそもそと寝返りを打った時、枕元に置いてある携帯が、わたしの不安な気持を逆なでするかのようになり、妙に場違いな軽やかなメロディーを奏でた。

遥だ。

大急ぎで携帯を耳にあて、彼を確認する。

「もしもし、はるか？」

『ああ、そつだ。柊か？』

間違いない。遙の声だ。

安堵するのも束の間、怒りがふつふつと湧いてくる。

「遙、待ってたんだよ。どうしてこんなに遅くなったの？ ずっとずっと、待ってたのに」

『ごめん、こつちもいろいろあつて。で、ばあちゃん、手術だった？ いったいどうしたんだよ、何があつたんだ？』

「遙のバカ！ 今何時だと思ってるのよ。こんな夜中まで、何やってたの？」

隣に卓と希美香が寝ているのも忘れて、つい大声になる。

携帯を耳に当てたまま立ち上がり、足音を忍ばせて、そつと廊下に出た。

『何やってたつて、そりゃあ仕事に決まってるだろ？ 連日の撮影で、今、家に帰る途中。携帯を入れたカバンを牧田さんに預けっ放しだったから、連絡取れなかったんだよ』

「そんなあ……。ちゃんと携帯見てくれなきゃ、取り返しがつかないことになっちゃうよ。おばあちゃん、くも膜下出血で、今夜手術してるの。もしかしたらもう終わってるかもしれない。だから。とにかくすぐに帰って来て！ おばあちゃん、危ないの。このまま出血が止まらなかつたら、命の保障はないんだつて。それに、手術が

成功しても、今までどおりのおばあちゃんに戻れるかどうかかわからないって……。お願い、早く帰って来て。今すぐ。遙のおじちゃんも、おばちゃんも、元気なくしちゃって、とても見てられないのだから、だから。お願い。今すぐ……。帰って……。来て」

『柊、泣くなよ。わかった。すぐにそっちに帰る。朝イチの新幹線で帰るよ。また連絡するから』

希美香と卓の前では泣かないって決めていたのに、遙の声を聞いたとたん、涙があふれて止まらなくなってしまった。

遙、お願い。

一分でも一秒でもいいから、早く帰って来て。

電話を切った後も、おばあちゃんが元気だった頃の笑顔が何度も何度も脳裏をよぎる。

中学生の時、夏祭りで青い帯を締めてくれた時のおばあちゃんは、まるで少女みたいにはにかんだ笑顔で、おじいちゃんとの思い出を語ってくれた。

わたしと遙が結婚の約束をしていると知った時も、大喜びして、わたしたちの味方になると言って励ましてくれたよね。

受験の時もずっと見守ってくれた。

なのに、もうおじいちゃんが迎えに来ただなんて言わないで。
そんなのため。絶対にため。

どうか、どうかおじいちゃん……。

おばあちゃんをおじいちゃんのところ連れて行かないで。

まだおばあちゃんに聞いてもらいたいことがいっぱいある。

見てもらいたいことも、そして教えてもらいたいことも、まだまだ
いっぱいあるのに……。

このまま永遠の別れが訪れるなんて信じないから。

手術が成功しますように。

そして、おばあちゃん的笑顔が、もう一度見られますように。

わたしはひんやりとしたフローリングの廊下で膝を抱え、一番鳥が
朝を告げるまで、ただひたすらおばあちゃんの無事を祈り続けた。

74・許し その1

手術は成功した。

出血も思ったほど多くなく、ほぼ予定通りの時間で手術を終え、集中治療室に移されたと父さんから聞いた。

夕べ家に帰らなかった父さんと俊介おじさんは、そのまま病院から仕事場に向かい、綾子おばさんはおばあちゃんにずっと付き添っていた。

最近の麻酔は醒めるのも早いらしく、術後すぐに目覚める場合もあるけど、眠ったままの状態が数日続くこともあると言われた。

長引いた場合、付き添う人の疲労が心配だと、医師も看護師も気遣ってくれる。

完全看護なので絶対に付き添う必要性はないけれど、おばあちゃん意識が戻るまでは予断を許さない。

何が起こるかわからない今は、おばあちゃんを一人にしておくことは出来ないのだ。

ならば、おばあちゃんの着替えを取りに帰るついでに、少しでも身体を休めた方がいいと言って、ためらうおばさんを無理やり卓の待つ自宅に帰した。

綾子おばさんとバトンタッチをしたわたしと希美香は、ベッドの脇でいつ目覚めるともわからないおばあちゃんの寝顔をじっと見ていた。

おばあちゃんは体中に管を付けられ、頭は包帯でぐるぐる巻きにされている。

顔は赤味を失い、頭の傷のせいだろうか、まぶたも頬もむくんで腫れているように見えた。

時々苦しそうに、うつつ、とうめくけれど、目覚める気配はなかった。

希美香と交代で病院内にあるレストランで食事を取ることにした。

朝イチでこっちに来ると言った遙。

なのに、まだ彼は姿を見せてくれない。

まさか、今朝も仕事に行っているなんてことはないよね。苦しんでいるおばあちゃんよりも仕事が大事だとでも？

いつもなら食べきれる量のレディースランチも、半分も食べないうち箸が止まる。

今朝はこの秋一番の涼しさで、変わりゆく季節を実感するが、日中はまだまだ夏のように暑い。

一口も飲んでいないグラスの水の中の氷も、いつの間にか融けてなくなっていた。

おばあちゃんが目覚めないまま、時間だけが過ぎていく。

最後に出てきたコーヒーの苦さが喉にしみた。

会計を済ませ、おばあちゃんのところにもどろつとレストランを出た瞬間、握り締めていた携帯が振るえた。

遥からのメールに違いない。

もうすぐこっちに着くという知らせだろうか。

わたしははやる胸を抑え、大きく深呼吸をして携帯を開いた。

今日の仕事はキャンセルできなくなった。

終わり次第病院に向うので、みんなにそう伝えてくれ。

おばあちゃん手術、成功したそうだな。

よかった。気になって朝から上の空で叱られてばかりだ。

すぐにそっちに行けなくてごめん。

家族のこと、よろしく頼む。

わたしはあきらめのため息と共に、携帯を元通りに閉じた。

なんとなく、そんな気がしていたのだ。

俳優さんが舞台でお芝居をしている時、親の死に目にも会えないというようなことを、何かの番組で聞いたのを思い出す。

祖母が倒れたと言っても、聞き入れてもらえないのだろうか。

いや、そうじゃなくて。

遙のことだ。回りの様子を窺いながら、言い出すタイミングを待っているのかもしれない。

この調子だと、永遠に遙は帰って来ない予感がする。

「柊ちゃん、希美香、今日は朝早くから来てくれてありがとう。今度は私の番よ。さあ、あなたたちはもう帰りなさい」

少し元気を取り戻した綾子おばさんが、おばあちゃんの衣類や身の回りの物を抱えて再びやって来た。

「でも……。まだおばあちゃんが起きないし、それに……」

わたしが口ごもっていると、察しのいいおばさんがにこっと笑みを浮かべた。

「ふふふ。わかった。あの子を待ってくれてるのでしょ？ ホントに情けないわね。仕事だかなんだか知らないけど、緊急事態が起きても身動きが取れないだなんて、困った息子だわ」

笑顔から突如不快感を露わにした顔つきになり、おばさんの眉間にくつきりと皺が刻まれる。

わたしの部屋で気まずい鉢合わせをして以来、遥とおばさんの関係は最悪だ。

「希美香、あなたはもう帰りなさい」

「ええ？　なんで？　あたしだってお姉ちゃんと一緒にここにいたいのに」

頭ごなしに帰れと言われた希美香はさも不服そうに頬を膨らませる。

「いけません。学校があるでしょ？　明日は行かなきゃダメよ。おばあちゃんは大丈夫だから、希美香は家にもどって、卓と留守番しててね。ね、お願い」

まだおばあちゃんの側に居たそうだったけど、おばさんの言い分を
理解した希美香は、重い腰を上げ、しぶしぶ家に帰って行った。

75・許し その2

相変わらずおばあちゃんは眠ったままだ。

看護師さんが熱を測りに来て、記録用紙に書き込む。

血圧も脈も異常はなく、何かあったらすぐに呼んでくださいとだけ言っただけと部屋を出て行く。

さつきも救急車のサイレンが病院の裏玄関の方から聞こえていた。

新たな患者が運び込まれたのだろう。

看護師さんたちは、休む暇も無く次の患者さんの元に駆けつけるのかもしれない。

集中治療室の周辺は常に緊迫した空気と背中合わせだ。

この病室の隣には、特別集中治療室という部屋がある。

おばあちゃんよりももっと危険な状態の人が、そこで治療を受けている。

そこに入らなかったということは、おばあちゃんの容態は、思っているほど悪くないのかもしれない。

「柊ちゃん、このたびはいろいろと助けてくれてありがとう。あな

たがいなかったら、おばあちゃん、あのままお風呂場で冷たくなつてたかもしれない。救急隊の人も医者さまも、あなたの行動を褒めて下さったのよ。発見が早かったのと、おばあちゃんの身体を無理やり動かさなかったことが、出血を最小限にとどめた理由かもしれないって」

おばあちゃんの手を握り締めている綾子おばさんが顔を近づけ、小さな声でわたしにそう言った。

「おばちゃん。わたし、あの時ね、おばあちゃんの声が聞こえたよ。うな気がしたの。確かに聞こえたのよ。それでお風呂場に行つて……。で、後はもう無我夢中で、何をどうやったかなんて覚えてない。とにかくみんなに知らせなきゃと思つて、気付いたら、遥の家に向かつて叫んでた」

あの時のことなんて、ほとんど何も覚えていない。

おばあちゃんとうな垂れた姿を見たその瞬間から、病院に着くまでの数十分は、記憶がごっそりと抜け落ちていて、憶えている部分も、まるで自分が遠くから自分自身を見ているような奇妙な感覚しかない。

「台所の窓を開けてたから、柊ちゃんの声がよく聞こえたわ。でもすぐ隣に住んでいながら、何も気付かなかった私は、俊介さんの妻としては、到底失格よね。いつも元気なおばあちゃんが、まさか倒れるだなんて思つてもみなかった。あの時、柊ちゃんが来なかったらと思うと……。今でも体が震えてしまう。柊ちゃん、あのね……」

おばさんはまだ眠っているおばあちゃんの手をそつとさすりながら話を続けた。

「私が俊介さんと結婚する時、おばあちゃんはとても複雑な気持ちだったと思うの。大切な一人息子なのに、養子に出す、なんてことになったんだものね。私だって夫の姓を名乗るあこがれはあったのよ。蔵城家の一員になれることをどれだけ夢見たか……。でも、私の親がそれを許さなかった。ならば家を出て、俊介さんと駆け落ちしようと思って決心してたのに、おばあちゃん……。いやお義母さんが、駆け落ちなんてする必要ない、それならどうぞ息子を養子に……。と言って承諾してくれたの。お義母さん自身も、当時としてはめずらしい恋愛結婚だったらしくて、いろいろ困難を乗り越えて今があるって聞かされて……」

おばさんから直接こんな話を聞くのは初めてだ。

遥や希美香、卓の母親としてのおばさんしか知らないわたしは、駆け落ちなんて言葉をさらりと言っただけのけることに、驚きを隠せない。

「駆け落ちって、なんだかドラマみたいだね。でも、おじちゃんとおばちゃんが、ちゃんと結婚してくれて良かった。だって、そうじゃなきゃ、遥と会えなかったかもしれないし……」

「おや、まあ。柊ちゃんだったら……。遥も幸せ者だわね、こんなにあなたに想われて。ということは、わたしも幸せ者なのかもね。だってあなたが嫁さんなら、何の苦労もないでしょ？ ほら、嫁姑問題とか、ちまたではよくもめてるじゃない。大学卒業したら、式を挙げてきちんとしましょね。今なら私もお義母さんの気持ちがよくわかるの。遥が蔵城姓になっても、もう何も言わない。親ならば誰だって、子どもの幸せを願うものよね？」

おばあちゃんがこんな状態の時に不謹慎かもしれないけど、おばさ

んはわたしたちのこと、許してくれたんだ。

おばあちゃんも喜んでくれるだろうな。

そうと決まれば、なんとしてもおばあちゃんに元気になってもらわないとだめだ。

わたしの花嫁姿を絶対にみてもらいたい。

そして、おばあちゃんの自慢の孫の、立派な花婿姿も……。

その時だった。たった今、おばあちゃんの左手の指先が、シーツを掴むような動きを見せたのだ。

思わずおばさんと顔を見合わせた。

「柊ちゃん、見た？」

「うん、見た。動いた。おばあちゃんの手が、動いた！」

おばあちゃんが少しだけ頭を左右に動かし、かすかに口を開く。

「んんんん……。しゅん……。す……。け。いたい、いたい……。よ

「お義母さん、お義母さん。大丈夫？　しっかりして。柊ちゃん、ナースコール！」

突如病室に響くおばさんの大声にびっくりしながらも、コールボタ

ンを押した。

一度押せば充分なのに、何度も何度も押してしまった。

すぐに看護師さん二人がやってきて、おばあちゃんの手首を取り脈を確認している。

「蔵城さん、蔵城さん、わかりますか？ 声が聞こえますか？」

おばあちゃんは看護師さんの声に気付いたのか、小さく頷いた。

ようやく開いたまぶたから、焦点の定まらない瞳が覗き、ゆらゆらと空をさまよう。

そしてゆっくり口元が動いた。

「ひいあい……ひいあい？」

「何？ おばあちゃん、どうしたの？」

はっきりと聞き取れなかったが、多分わたしを呼んだのだろう。

「おばあちゃん、おばあちゃん！ わたしだよ、柊だよ！」

ああ……。おばあちゃん。目を醒ましてくれたんだね。

そしてわたしの名前を呼んでくれた。

おばあちゃんの意識が戻ったことが何よりも嬉しくて、ついつい大声で叫んでしまったのだ。

「他の患者さんもいますから、お静かになさって下さいね」

看護師さんが苦笑いを浮かべ、やんわりとわたしの言動を諷めた。

76・意地とぬくもりと

おばあちゃんの意識がもどってから一週間経つ。

けれどまだわたしは、おばあちゃんのそばにいる。実家と病院を往復するだけの生活が続いていた。

大学の方は、もうすでに後期の授業が始まっているのだけど、寂しがるおばあちゃんを置いて東京に帰る決心がつかなかった。

遥は結局病院に姿を見せることはなく、わたしはもちろんのこと、家族誰一人として彼に会った者はいない。

しきりに遥のことを気にかけているおばあちゃんを見るたび、家族に見向きもしない彼の行動が許せなくなる。

術後の経過は良好で、あと一週間程で退院可能だと担当医から説明を受けた。

が、しかし。術後のおばあちゃんの身体に深刻な症状が出てしまった。半身麻痺と、言語障害だ。

頭部の傷口の治療と並行して、リハビリも組み込んでいきましょうと言われている。

食事や排泄の介護、退院したあとのリハビリの付き添いなど、今後の課題が山積みといった状況なのだ。

父さんやおじさんも仕事を休んで協力すると言っているけれど、女性でないと理解し合えないデリケートな部分もあるので、どうしても綾子おばさんと母さんに負担がかかってしまう。

綾子おばさんには小さい卓もいる。高三の受験生もいるのだ。

おまけに母さんには、数日後に稲刈りや他の農作物の収穫、果樹の手入れといった作業が待っている。

今までおばあちゃんが取り仕切っていた数々の農作業を一人でこなしていかないといけないのだ。

そんな中、じゃあわたし、これで帰ります……と言って、このころ東京に戻っている場合ではない。

こんなわたしでもよければ、何でも手伝う覚悟は出来ている。

おばあちゃんのためなら、大学なんてどうでもいいとまで思ってしまう。

幸い、十月いっぱい大学を欠席したとしても、単位の方は大丈夫だ。

ただ、ハンバーガーショップのアルバイトの方は、厳しい現実がある。

これ以上迷惑をかけられないので、店長に電話で事情を話し、辞める方向で受理してもらった。

でも、わたしが東京に戻らない本当の理由は……。

その最大の理由は……。

遙。

その人が原因のもとだったりする。

仕事が終わったたら病院に行くと言ってからもう一週間以上経つ。

電話もメールも途切れがちで、おばあちゃんに声すら聞かせてあげられない状態が続いているのだ。

こうなったら、彼がここに来るまでは絶対に東京に戻ってやるものか！ と意地になっている自分がある。

そんな薄情な男のことはさておき、なかなか東京に戻ってこないわたしを一番心配してくれたのは、やなっぺだった。

おばあちゃんの看病にかかりつきりなのを知っている彼女が忙しい時間を割いて夕べ電話をくれた。

やなっぺは今月末にアメリカに発ってしまっらしい。

それまでには是非会いたいから、一日でも早く東京に戻って来てと懇願された。

こんなに早くアメリカに行ってしまうだなんて……。

まだまだずっと先のことだと思っていたから、聞いたとたん心臓が止まりそうになった。

ということは、長野で留学の話になった時、もうすでに全ての段取りが整っていたということになる。

成田からシカゴまで、たったの十一時間だよ……なんて、まるで国内旅行にでも行くような軽いノリで明るくふるまっていたやなっぺ。

そっか、シカゴはアメリカのいち都市だったんだ……。

わたしの知識なんてそれくらいのもの。

地図上のシカゴの位置も正確に指し示すことは出来ないくらい地理には疎い。

英語だつてうまく話せるの？ 本当に大丈夫？

そんなに急がなくてもいいじゃない。来年からじゃだめなの？

彼女を励まし、その旅立ちを心から祝ってあげなければいけないのに、やっぱり行かないでと引き止めてしまう。

まるで駄々っ子だ。わたしときたら、やなっぺを困らせることしか出来ない。

『そんなもん、大丈夫だよ。心だよ、こころ』

何も見えないけど、電話の向こうでポンと軽やかに胸を叩く彼女の姿が目に見えかぶようだった。

『同じ志を抱く者同士、言葉なんて通じなくても分かり合えるって信じてる。それに去年からラジオの英語講座、結構まじめに聞いているんだ。多分、日常会話くらいなら、聞き取れると思う。これでも英検は二級ゲットしてるし、TOEICだって六百点越え達成してるもん。そりゃあ、英語が得意な終には敵わないけどさ。会話なんて、向こうでなんとかなるって。だって、小さな子どもだって、べらべら英語しゃべってるんだよ?』

やなっぺが言うと、本当に簡単に誰でも留学できそうな気分になる。現地で語学学校に通いながら、やなっぺが現在在籍している美大の提携校であるシカゴの美術系の大学に行くらしい。

その大学には世界でも有名な美術館が併設されていて、いや、美術館が大学を併設しているのかな？

とにかくそこは、日本では考えられないほど壮大なスケールの学校で、念願がなつて、やなっぺはそこでデザインの勉強に打ち込むのだ。

びっくりするほど壮大な計画をいともたやすく実行に移すやなっぺは、やっぱりすごい。

ところが、藤村に留学の日程を知らせたのかと聞くと、急に黙り込む。

それまでの高揚した声の主は、もうどこにも見当たらなかった。

彼に真実を告げるタイミングが見つからないんだ……とボソッとつぶやく。

今わたしは藤村と同じ街にいるわけだから、彼に直接伝えてあげようかと提案してみた。

が、やなっぺの返事は予想通りのものだった。

その時がくれば自分の口から藤村に言う。だから他言無用だ、と。

こういう潔さが実にやなっぺらしい。

遥がまだ一度もおばあちゃんに会いに来ないとこぼすと、マジ？ありえない！と怒りを露わにする。

たちまちいつものやなっぺに舞い戻る。

最近の堂野はどうかしてる、終に安心しきっていて最低なやつ！と、ものの見事にこき下ろしてくれた。

二人の歴史を何も知らない人に遥のことを悪く言われると、さすがに腹立たしくて静観してられないだろうけど、全てを知っているやなっぺならば、何を言われても平気だし、逆にスカッとするくらい爽快な気分になる。

遥自身もやなっぺには一目置いているところがあるから、彼女の怒りは、わたしと遥のふらふらした恋路の軌道修正をもってこいな

だ。

そんなやなつぺとのやり取りを思い出しながら、病室でおばあちゃん
の寝顔を眺めていたはずだった。

それなのに、誰かが頭を撫でてくれているような気がするのだ。

優しい温かい手で、そつと、静かに。

上からゆっくりと下りていく手の動きに身を任せ、うつとりとまど
ろんでいた。

でも。

誰？

ここは病室で、おばあちゃんのベッドのそばで。

わたしとおばあちゃんと、他の三人の患者さん以外は誰もいないは
ず。

……誰なの？

わたしの意識は徐々に輪郭を形作り、鮮明になっていく。

目の前に白いカーバーのかかった掛け布団。そして少し皺の寄ったおばあちゃんの小さな手。

やはりここは病院。そしていつの間にか椅子に座ったまま眠ってしまっていたのだろう。

じゃあ、今頭を撫でてくれたのはおばあちゃん？

わたしの目の前にあるおばあちゃんの右手は、手術以降あまり動かなくなっている。

ということは反対の左手で撫でてくれたのかもしれない。

でも左手は、布団の中で微動だにしない。もしかして、おばあちゃんの右手が自由に動くようになったの？

これは一大事だ。一刻も早く、看護師さんに知らせなければいけない。

どんなに小さな変化でも見落とすのしないようにと言われている。

腕を伸ばし、おばあちゃんの枕元にあるコールボタンを手にしたその時だった。

背後から突然、全身を覆い尽くすように誰かに抱きしめられた。

身動きの取れなくなったわたしは、声も出せないまま、ぬくもりに包み込まれていった。

77・おかえり……

首筋にかかる熱い吐息がわたしの心をざわつかせる。

けれど、肩にかかる彼の重みが次第に心地よく感じられるのだ。

胸元で合わさった見慣れた大きな手を見れば、その人が誰であるかなんて一目瞭然。

これは夢ではない。本当のこと。

心を落ち着かせるため、大きく息を吸い込み、ゆっくりと吐き出した。

「ただいま……」

その声を聞くや否や、わたしは彼の手を胸元で抱え込むようにして両手できつく握り締めた。

いくらベッドの周りをカーテンが取り囲んでいるとはいえ、ここは病室。

他の患者さんにこの状況が知れたらどうしようと不安になる。

でもようやく会えた彼を振り払うことなど出来るはずもなく。

ますますその人を離すまいと、握る手に力をこめる。

「遥、おかえり……」

彼の指先にそつと唇を押し当てながら、そう言った。

遥がどんな顔をしてここにいるのか確かめたくて、後ろを振り向こうとしてみたけれど。

想像以上に彼の身体がわたしの背中に密着していて動けなかった。

ただなつかしい遥のぬくもりだけが、背中越しにじわじわと伝わってくる。

「柊、ごめんな。すぐに帰って……来れなく……て……」

吐息と共に遥の低い声がぼつぼつと零れ落ちる。

そうだった。おばあちゃんが大変な状態になったというのに、遥ときたら、今日まで一切顔を見せることはなかったのだ。

どうして今まで帰ってこなかったの？

わたしは真剣に怒っている。遥がこんなに薄情な人だったなんて、今回おばあちゃんがこんな事態になるまで知らなかったのだから。

ところが……。ついさっきまであんなに怒っていたはずなのに、絶対に許せないと思っていたあの激しい感情が跡形もなく消えてしまっていることに気付く。

遥が帰って来てくれた事実にも、ただただ安心してほっとしている自分がいるのだ。

彼のぬくもりが嬉しくて、肩から背中にかかる重みが愛おしくて……。

「うっ……くっ……」

嗚咽が微かに漏れ聞こえる。体も小刻みに震えているのがわかった。

遥。もしかして、泣いてるの？

「終、ごめん。ちょっとだけ。あともう少し、このままで……いさせて」

遥の涙がわたしの首筋をぬらしていく。

遥だって本当はおばあちゃんのことか心配でたまらなかったんだね。個人的な事情で仕事を放棄するわけにもいかず、どんなに帰りたくても、ずっと我慢してきたのだろう。

なかなか帰ってこない彼を疎ましく思い、心の中でなじったこともあった。

それは孫に会えないおばあちゃんを不憫に思つてというよりも、わたしに会いに来てくれない遥に嫉妬して、醜い意地を張っていたのかも知れない。

わがままなのはこのわたしだったのだ。

今更ながら、彼を疑った自分が恥ずかしい。後悔の念に押しつぶされそうだ。

なんで遥をもっと信じてあげなかったのだろう。

小学生以降、彼の泣いている姿を見たことがない。

どんなに悲しくても悔しくても、人前で涙を見せなかった遥が、今わたしの肩で泣いているのだ。

気の済むまで泣けばいい。

わたしたちの大切なおばあちゃんはここにいる。命をつないで、ちやんとここにいます。

遥の腕をさすりながら、時が過ぎるのをじっと待った。

「……………はつか？……………はつかなのかい？」

おばあちゃんの声だ。目を覚ましたおばあちゃんがこちらを見て、遥を呼んでいる。

遥が慌てて顔をあげ、わたしに預けていた体を起して立ち上がった。

「はづか、やっとひてうえたんだね。……へんきだったかい？」

泣きはらした目で驚いたようにおばあちゃんを見つめる遙をベッドの前に座らせ、今度はわたしが遙の背後に立った。

「遙、やっと来てくれたんだね、元気だったかい、って、おばあちゃんと言ってるよ」

何も言わない遙に、念のため、おばあちゃんの話の内容をもう一度伝える。

言葉がうまく話せないことはメールでも知らせたし、彼の両親からも事実を聞かされているはずだ。

でも目の前で実際にそんなおばあちゃんの変わり果てた姿を見た遙は、きつとシヨックだったのだろう。

歯を食いしばり気丈に振舞おうとするものの、またもや遙の目から次々と涙が溢れ、おばあちゃんの動かない右手にも雫がしたたり落ちた。

「はづか、もうあくんじゃあいよ……」

遙、もう泣くんじゃないよと言って、おばあちゃんがもう一方の自由にかく手で遙の頭を撫でようと腕を伸ばしている。

身も心も、誰にも負けないくらい大きく育った遙だけど、おばあちゃんにとってはいつまでも小さい頃の遙のままなのだろう。

よしよしとうな垂れる遙の頭を撫で続ける。

おばあちゃんが身体を動かしやすいように、リモコンを操作してベッドの上半分を起こしてみた。

座るような姿勢になったおばあちゃんが、手術以降見たことないような血色の良さで、遥を見ながらにっこりと微笑んだ。

口元がおぼつかないけど、それでも嬉しそうに笑っているおばあちゃん。

遥は下を向いたまま、うんうんと頷くばかりだった。

わたしはこの時、何か目に見えない不思議な力を感じ取り、おばあちゃんは絶対に元気になると確信した。

しばらくして、綾子おばさんが家から病院に戻ってきた。

「お義母さん、大丈夫ですか？ 遥がやっと帰ってきましたよ。本当に、この子ったら。今まで何してたのやら……」

「ああ……ああ……」

遥に対して不満を露わにするおばさんをよそに、おばあちゃんが満足そうに返事をしている。

「柊ちゃん、今日はありがとう。助かったわ。さあ、交代しましょ」

もう夜の泊り込みはいらないとおばあちゃんも言っているのだけど、おばさんの抱えてきた荷物を見る限りでは、今夜もここに泊まるつもりなのは明らかだ。

「そうそう、お義母さん。遙ったら、うちに帰ってくるなり玄関先で、柵はどこ？ って大騒ぎ。おばあちゃんのところよと言ったら、家の中に入りもせず、そのまま病院に飛んで行ったのよ」

イタズラっぽい目で遙をちらつと見たおばさんは、日頃の彼に対するうつつぶんを晴らすかのように、ここぞとばかりに厭味たつぷりにおばあちゃんに言いつけているのだ。

「さあさあ、二人ともいつまでここにいる気なの？ 他の患者さんにも迷惑よ。ホント、邪魔だわ。後は私が引き受けたから、どこへでもいつてらっしゃい。おばあちゃんのこととは私に任せて。今夜はここへ泊まるつもりだから。そうだわ、あのね、お父さんも出張で家にいないのよ。卓はお姉さんに見てもらってるからいいとして、希美香ひとりだけでは母屋の方が心配だわ……。遙、今夜はこっちにいるんでしょ？」

「ああ。明日の最終便で東京に戻る」

遙は泣き顔を見られたくなかったのか、おばさんから顔を叛けたまま、早口で答えた。

「じゃあ……。二人に母屋の留守番、お願いしてもいいかしら？ 客間は掃除しておいたから、そこで休むといいわ。寒かったら、離れの二階に毛布もあるし。まあ、寒いわけないわね、あなたたち二人に限っては……」

おばさんのとんでもなく前向きな提案に、わたしも遙も驚きのあまり、しばしその場で固まってしまった。

78・二人の帰り道 その1

病院前からバスに乗り、村の入り口付近のバス停で降りた。

家まではそこから歩いて十五分くらいかかる。

遥と肩を並べて歩くのは、母さんとおばさんに二人の関係がばれたあの日以来だ。

けれど、まるで付き合い始めたばかりの恋人同士のように何もしゃべらず、たっぷりと二人の間をあけたままゆっくりと坂を上っていく。

重なった二人の長い影だけが、歩くのと同じスピードで、ずっとわたしの右側についてきた。

まだ十月に入ったばかりだというのに、日が沈みかけた夕刻の道は薄手のジャケットだけでは寒く感じる。

知らぬ間に秋が深まっているのだ。

道端の土手には、セイタカアワダチソウの葉が規則正しく生え揃い、このあと黄色い花を咲かせる前にどんどん背丈をのばしていくのだろう。

「なあ、柊。明日、一緒に東京に帰ろうか……」

前を向いたまま、遥がぼそつと言った。

ふいに沈黙が破られると、あるうことか心臓がドキッとはねた。

なんだろう、これでは本当に付き合いたてのカップルみたいではないか。

彼の一言一句に反応してしまう自分が気恥ずかしく思える。

顔がかーっと熱くなった。ちらりと盗み見た遥の頬も、ほんの少し色づいているように見える。

すると、突然歩みを止めた遥が、冷たくなったわたしの手を奪い取るように乱暴に握ってきた。

「はるか……」

彼の真横に引き寄せられ、あっと言う間に腕がくつついた。

ようやくいつもの二人の距離が戻ってきたのだ。

「帰ろう。俺と一緒に帰って欲しい」

はっとして彼を見上げてみたけれど。

わたしはふるふると小さく首を横に振ることしか出来ない。

この状況で遥と一緒に帰れるわけがないからだ。

「だめだよ。まだ東京には戻れない」

そう言いながらも、本当は遙と一緒に今すぐにも東京に戻りたかったのかもしれない。

その証拠に返事とは裏腹に、遙の手を力いっぱい握り返してしまっ

た。

もう絶対に離れたくないと言わんばかりに。

「ひいらぎ……。おまえの本心は、俺と一緒に帰りたいんだろ？
な、そうなんだろ？」

「ち、ちがう。だめなの。今はまだ……」

「なんでだめなんだ？ 大学だつてもう始まつてるぞ？」

「そんなこと、わかつてる。……でも、おばあちゃんがまだ入院し
てるんだよ。退院して落ち着くまでは、こっちに居ようと思うの。

もうすぐ稲刈りも始まるし、うちの方も人手がいる。だから、まだ
……」

「そうか……。そうだよな」

深いため息と共に、遙の視線が宙を彷徨う。

「無理言つてごめん。本当なら、俺だつてもっとばあちゃんのため
に、協力しないとイケないのにな」

突然つないでいた手を離れたかと思えば、今度はわたしの頭をすっ
ぱりと抱え込んだ。

やおら遙の顔が近付き、彼の頬がわたしの額に触れる。

「は、はるか。そんなことしたらだめだよ。誰かに見られたら……」

「大丈夫。こんなところまで誰も追ってこないよ。見る、誰もいないぞ」

遙の腕に頭の部分ががっしりと挟みこまれるようになっていたので、そこから無理やり脱出しない限りは後方を確認することは不可能だ。自分だけ周りを見渡し、誰もいないぞと勝ち誇ったように言った遙の頬が、再びわたしの額にぴっとりと貼り付く。

こんなに密着したまま歩くのも至難の業だ。

遙の腰に手を回してしがみつきながらよたよたと足を進める。

でも考えようによつたら、あまりにもくつつきすぎているため、逆に個人を特定することが難しいかもしれない。

まさかあの堂野遙が、女性を腕で抱え込むような大胆な行動を起すなどとは誰も考えないだろう。

そんな傍若無人な二人を目の当たりにした方も、あまりのバカバカしさに目を背けるはずだ。

ここは、遙の腕に全てを委ねてしまってもいいような気がした。

「遙、いろいろ大変なのに、こうやって病院まで来てくれて……。今日は本当に嬉しかった」

口びるが今にも遙の頬に触れそうになるぎりぎりのところで、今の正直な気持を伝える。

一瞬、彼の腕に力がこもり、ますますそばに引き寄せられる。

身動きが取れなくなったわたしは、遙と共に街路樹の下で立ち止まった。

「遙が……来てくれた……おかげで、おばあちゃん……だって、あんなに……喜んで……いたしね」

遙の腕の中で苦し紛れに話を続けるけれど、声がこもってしまい、うまく伝わらない。

「柊ごめん。おまえを離したくなくて、つい力が入ってしまった」

ようやく遙の腕が解き放たれ、自由が戻ってきた。

「ぶっつ……」

大きく息を吐き一呼吸つくと、今度は遙の目を見ながら話しを続ける。

「遙、あのね。この調子でいくと、来週末にはおばあちゃん、退院できるかもしれないって先生が言った。頭の手術痕も比較的小さくてすんだみたいだしね」

「へえ、そうなのか？」

「うん。それにおばあちゃんったら、早く家に帰りたい一心で、先生や看護師さんの言うことを何から何までちゃんと守る優等生なんだ」

79・二人の帰り道 その2

おばあちゃんはまだ六十八歳だ。

農作業や日頃からの規則正しい生活が健康維持によい結果をもたらしたのだろう。

今回の病状以外に具合の悪いところは見つからず、術後の経過も驚くほど良好で、医師からも患者さんのお手本のような人と太鼓判を押されていたのだ。

少し高めの血圧と、働きすぎに気をつけるようにと言われただけで、退院後はリハビリのために病院に通えば、以前と変わらない生活に戻れると励まされている。

驚いたことに、手術のあとでも出来るだけ早期に身体を起き上がらせ、自分の足で歩くように指導される。

多少痛みがあっても、ふらふらしても、おかまいなしだ。

看護師さんの優しい言葉がけのおかげで、おばあちゃんのやる気は日に日に向上している。

今日遙に会ったことで、ますます快方に向かって加速度が付きそうな勢いなのだ。

「優等生か。ばあちゃんらしいな。柊、俺の分も、ばあちゃんのと頼むな」

「わかってる。遙の分も、いっぱい頑張るから。だからこれからは、大学と仕事のことだけ考えてね」

「ありがとう。力になれなくて、ごめんな」

「いいよ、そんなこと。今までおばあちゃんに、あんなにかわいがってもらったんだよ。おばあちゃんが元気になるんだったら、わたし、何でもする。だっておばあちゃんは、遥だけのおばあちゃんじゃないんだよ。みんなのおばあちゃんだから」

「そうだな。おまえと俺と、そして希美香と卓のばあちゃんだ。俺たちは、生まれた時からあちゃんに見守られて、ずっと今まで生きて来れたんだ」

「うん……」

向かい合って、こくりと頷く。

「それと、おふくろのことだけど……。なんか、今までと雰囲気が違うように感じたんだが。気のせいかな？」

わたしの顔をのぞき込むようにして遙が訊ねる。

「やっぱり遙もそう思う？ わたしも同じように思ってた。それに、フッフ……」

ひとりでに頬が緩み、笑い声がもれてしまった。

「あっ、柊。おまえ、今笑っただろ？ 俺に何か隠してるのか？
おい、何があったんだ。どういうことなんだよ」

遥がわたしの肩をつかみ前後に揺する。むきになって責め立ててるのだ。

「遥、ちょっと待って。そんなに揺すらないで」

「わかったから。早く言えよ」

それでもまだ、わたしを揺さぶる手を緩めなかった。

「揺つたら、ほんと、しょうがないんだから。おばちゃんのこと、そんなに知りたい？」

なぜだろう。意地悪な気分がむくむくと湧き上がって来る。

このまますんなり教えてしまつのが、もったいないような気がするのだ。

「こいつ……。もったいぶらずに、さつさと教えるよ。おふくろのこと、何か知ってるんだろ？」

思いがけない遥の真剣な眼差しに、背筋がぞくつとする。

世の中のすべてを見抜くような、真っ直ぐで一途な彼の目が、わたしを捉えて離さない。

これ以上の駆け引きはわたしにはもう無理だ。彼の迫力にこのまま負けてしまつのだろうか。

「わかったって。ちゃんと言うから。その前にお願ひ。その手を離

して」

さっきからずっと肩の上のしかかっている彼の手に目をやった。

「あ、ご、ごめん。つい、力が入ってしまっ……」

遥がきまり悪そうにわたしの肩から手を滑らせるようにして下に降りした。

「あのね、綾子おばちゃんんだけど……。結婚する前に、おじちやんと駆け落ち寸前だったんだって」

この前病室で綾子おばさんから聞かされた話をほんの少し伝える。

あの日を境に、確かにおばさんの様子が変わったように思う。

わたしと遥のことを許し、何もかも受け入れてくれたような気がするのだ。

「駆け落ち？ 俺のおふくろが？ あのおやじと？」

遥が怪訝そうな顔をして首を捻った。

遥の気持がわからないこともない。

自分の親が駆け落ちするほどの覚悟を持って恋愛していただなんて、想像できないのが普通だと思う。

「うん、そう」

「あの二人が、駆け落ちなんてするか？ あははは、冗談はやめてくれよ」

「冗談なんかじゃないってば。本当なんだから！」

「とてもそんな風には思えないな、ってか、ありえないだろ？ で、それとおふくろの態度の変化と、どんな関係があるんだ？」

「それは、ひ、み、つ！ 遙には教えない。わたしとおばちゃん、二人だけの秘密だもん！」

「秘密？ なんだよ、それ。そこまで言っつて、内緒にする気か？ 早く言えよ。なあ、柊」

言えるのはここまで。綾子おばさんだっつてこれ以上は息子に知られたくないかもしれない。

おばあちゃんの青い帯の思い出といい、おばさんの駆け落ちといい。

夫婦の数だけロマンスがあるということが、よくわかった。

いつも遙に振り回されているのだ。これくらい彼を困らせたところで、罰が当たることもないだろう。

わたしはえへへと笑ってごまかし、その場をかわそうとしたのだが。

「そつちがその気なら、こつちにも考えがある。言わないのなら、こつするまでだ……」

その後の彼の行動はすこぶる早かった。

わたしに逃げる隙を与える間もなく、いきなり彼の顔が迫ってくる。瞬く間に口びるが合わさり、そのまま動けなくなってしまった。

ここが外で。おまけに家のすぐそばで。もしかしたら記者がついて来ているかもしれないという、危険極まりない状況であるにもかかわらず……だ。

お互い触れ合っているのはその部分だけで、わたしは両手を横にだらりと垂らしたまま、ただ呆然として、そこに突っ立っているのだ。

少し前かがみになった遙の柔らかい唇を受け止めながら、次第に心が落ち着いてきて……。

ゆっくりと目を閉じる。

彼の胸に手を添え、じっと遙の心だけを感じていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0342d/>

続こんぺいとう

2011年1月28日18時55分発行